ISSN 1883-7719

彩の国
埼玉県

埼玉県立史跡の博物館紀要
第10号

Contents

屋内祭祀の舞台
－赤砂・小砂利の「祭壇状遺構」－　石坂俊郎

前組羽根倉遺跡出土珠文鏡について　中井　歩

埼玉古墳群の成立　関　義則

将軍山古墳の新発見資料について
山田琴子・瀧瀬芳之・荒木臣紀・宮田将寛

伝・将軍山古墳出土の朝鮮三国時代加耶系陶質土器について
－明治大学博物館所蔵資料の紹介－　高久健二・佐藤康二

カマドの支脚利用にみられる集落内のグループ
－古墳時代後期の埼玉県の遺跡を中心に－　末木啓介

企画展「埼玉の古墳１－比企・入間－」の開催について
鈴木秀雄

中学校社会科歴史的分野の学習におけるさきたま史跡の博物館の役割
向井隆盛

博物館における学芸員育成の実践
－博物館実習と子供講座からの考察－　石田智美・頓所詩織

武士の本拠の成立について
－考古学的資料をとおして－　浅野晴樹

平沢寺跡出土経筒の銘文について　水口由紀子

はじめに

埼玉県には、「さきたま」・「嵐山」の二つの「史跡の博物館」がございます。

「さきたま史跡の博物館」は埼玉古墳群、「嵐山史跡の博物館」は比企城館跡群菅谷館跡と、共に国指定史跡を擁する特徴を活かしながら、新たな博物館づくりを目指して様々な事業を展開しております。

本年度も「さきたま史跡の博物館」においては、埼玉古墳群の保存整備のほか、企画展「埼玉の古墳１　比企・入間」、テーマ展「弥生の空間」、埼玉考古学会、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団との共催による最新出土品展「地中からのメッセージ」などを開催し、埋蔵文化財の活用をとおして、わかりやすい考古学の情報発信に努めてまいりました。

さらに、さきたま体験工房の運営や各種の講座・体験学習事業、小学校への出前授業などの事業をとおして、親しみやすい博物館づくりをめざしております。

一方、「嵐山史跡の博物館」では、企画展「戦国を生き抜いた武将たち」、ロビー展などを開催してまいりました。

さらに、企画展関連シンポジウム・歴史講座・文化財めぐりなどの事業を実施し、親しみやすい中世史の情報発信を心がけているところです。

本誌は、職員が日ごろの調査研究を踏まえ、自己研鑽に努めた成果を発表したものです。本誌が各地の博物館・図書館等で広く活用され、多くの方々にとって、史跡や考古・歴史資料をご理解いただくための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査や執筆にあたり御協力いただいた方々に対し深く感謝を申し上げると共に、今後ともより一層の御支援と御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成29年３月

埼玉県立さきたま史跡の博物館

埼玉県立嵐山史跡の博物館

埼玉県立史跡の博物館紀要

第 10 号

目　次

屋内祭祀の舞台　－赤砂・小砂利の「祭壇状遺構」－ …… 石坂俊郎 （1）

前組羽根倉遺跡出土珠文鏡について …… 中井　歩 （13）

埼玉古墳群の成立 …… 関　義則 （21）

将軍山古墳の新発見資料について
…… 山田琴子・瀧瀬芳之・荒木臣紀・宮田将寛 （43）

《資料紹介》伝・将軍山古墳出土の朝鮮三国時代加耶系陶質土器について
－明治大学博物館所蔵資料の紹介－ …… 高久健二・佐藤康二 （67）

カマドの支脚利用にみられる集落内のグループ
－古墳時代後期の埼玉県の遺跡を中心に－ …… 末木啓介 （79）

《事業報告》企画展「埼玉の古墳１－比企・入間－」の開催について … 鈴木秀雄 （111）

中学校社会科歴史的分野の学習におけるさきたま史跡の博物館の役割 向井隆盛 （115）

博物館における学芸員育成の実践　－博物館実習と子供講座からの考察－
…… 石田智美・頓所詩織 （121）

武士の本拠の成立について　－考古学的資料をとおして－ …… 浅野晴樹 （127）

平沢寺（へいたくじ）跡出土経筒の銘文について …… 水口由紀子 （143）

屋内祭祀の舞台

―赤砂・小砂利の「祭壇状遺構」―

石坂俊郎

はじめに

大宮台地及びその周辺地域で発掘された弥生・古墳時代の竪穴住居跡に、赤みがかった砂や粘質土、小砂利(＝小礫)の集積が見出されることがある。小倉均は、それを住居内に設置された「祭壇状遺構」と評価した(小倉1988・1990)。以下、この名称を使用する。

その特徴は、素材や配置に共通性を示す一方、検出時の形状は一定でなく、有意な遺構であるのか判断つきかねる、あるいは存在自体見落とされかねない場合もあるらしい。「らしい」というのは、率直なところ筆者はそれを実見したことがない。そして報告の記述には「斯く斯くの物質(＝素材)があった」に止められたものが多く、詳細の確認には隔靴掻痒の感が否めない。しかし見落とされるか無為の産物と見做されていれば、記録にも留められなかっただろう。

屋内祭祀の遺構と評価されてから四半世紀余りが経ち、事例の報告は増えた。がほかに目立った進展はなさそうだ。意識されずに消滅している場合が今もあるとすれば、住生活における祭祀行為を示す遺構として、集落研究の手掛かりと思えば何とも惜しい。ここではふたたび諸例を通観し、見えるものをあらためて整理する。小倉の仕事との重複を顧みず現時点の里程標を立て、注目をリフレッシュさせたいというのが起稿の動機である。今後にどうつながるか、それについては後述したい。

1　遺構のあらまし

砂や小砂利から成る「祭壇状遺構」は、現状ではさいたま市域を主体とする大宮台地南部に多く見出されるが、川越市、板橋・世田谷区、八王子・日野・横浜市など武蔵野・下末吉台地地域にも点在する。とりわけ八王子市神谷原遺跡(文75・76)では、全面調査された集落跡で検出された169軒余の竪穴住居跡のうち55軒、およそ三分の一で確認されており、分布域の中でも件数の多さと率の高さで突出した存在となっている。その点からしても、視野を大宮台地に絞り込むことは片手落ちのそしりを免れないが、本稿では次の機会を期して暫定的にそうさせていただく。

確認できる存続期間は、弥生時代中期宮ノ台式期～古墳時代前期で、量的には弥生後期後半から古墳前期前半が主体である。大宮台地地域では、弥生中期集落は存在感が希薄で、小規模集落が点在するにとどまる様相を示している。しかしその状況下で７遺跡に例が認められる点に注目すれば、宮ノ台式期から萌芽的というより既に主流といえる存在にも見える。当該期の集落は、いずれも部分的な調査だが、大北遺跡(文７・22)では11軒中６軒で確認されており、率では同遺跡の後期集落を凌ぐ観がある。一方、古墳前期では、集落分布はやはり低調であるが、柱状脚高杯と小型丸底坩が供献土器群の主体となる段階には例がなく、同期の中に下限があることを示唆している。

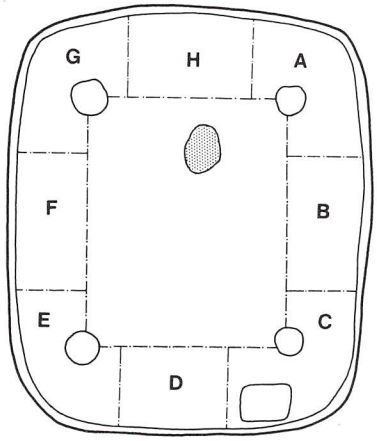
形状と配置について、小倉のまとめを借りて概述する(前掲小倉1990)。

①「小礫、砂、粘土などを褐色土と混ぜ合わせたようにみえる」土を、「床面に数cm～10cm程盛り上げ、壇状にしている」もの。これが大部分を占める。

②「小礫などを含む褐色土」と床面の間に「それらをほとんど含まない褐色土」が挟まる、すなわち床面に盛られた(ただし突き固められてはいない)後者の上に前者が載せられているもの

③「台状遺構と呼ばれる一段高くなった上に小礫などを含む褐色土がみられ」るもの

④そして「浅いくぼみ上のピットの上に小礫などを含む褐色土などを盛り上げている」ものがある。



第１図　住居内区分図
(小倉1990)

出土位置には、顕著な傾向がある。小倉の区分(第１図)を用いれば、建物内縁辺のＣ空間すなわち主軸方向で炉が寄る壁面(多くは短辺側)の対面、炉に向いて右手コーナー付近(図右下)に集中する。炉の対面Ｄ空間に出入口を想定すれば、Ｃは梯子等の昇降用装置と建物主柱によって中央と区分された空間であり、「貯蔵穴」とされるピットとそこに同居するのが通例である。ほかに少数だがＡ・Ｄ・Ｅ空間に位置する場合が認められる。

1　今日的描写

ここで扱う件数は、大宮台地地域では52遺跡183件である(表１・２(1))。他地域のものとして、神谷原遺跡の52件をこれに加える(表３)。

(１)形状

平面規模は、径10～150cm以上にわたり、ばらつきが大きいが、概ね50～100cmが分布の中心となるようだ(2)。報告された形状は、「堆積」・「盛られた」などある程度の厚みを思わせるものと、「散布」・「敷かれた」などそれを感じさせない場合がある。厚みの数値は30余例報告があり、10cm以下が８割強を占める一方、20cmに及ぶものが３例ある。それらのうち下野田稲荷原遺跡114住(文64・第２図１)、三崎台遺跡52住(文49・第２図２)、同19住(第３図３)、同28住(同前４)例のような、壁に接合する略方形壇状のあり方は、本来的容姿の一類型と見做される。一方、床に撒き敷いたような薄い広がりも同様か、あるいは盛り上げられた「砂山」が崩壊拡散した結果なのか。可塑性に乏しい砂の材質からして、後者の蓋然性が優勢なように思える。しかしそれが前者だとすれば、いきなり神祇との付会は唐突に過ぎるかもしれないが、砂と砂利の広がりは「神迎えの場」としてのダブルイメージを禁じ得ない(3)。ともあれ複数の姿があった可能性を、ここでは留保しておきたい。

(2)素材と立体構造

既述の通り、素材の基本は砂、小砂利である。土(砂質土、粘質土、粘土)の存在は、報告からは読み取れない場合が多い。際立った特徴がなければ遺構覆土と識別しがたいためだろうが、それが加わる場合、前章①のように三者が混和されるものと、同②のように層状に重合する場合がある。両者の折衷型(混和層と純層の重合)もあるだろう。

小砂利の大きさは、報告されたものでは径1～1.5cmが概ね上限となるようだ。小倉によれば、表面が滑らかに摩耗したものが多いことから、河川から採取された可能性が高く、そして馬場北遺跡では荒川水系由来のチャートや硬砂岩が多いという(前掲小倉1990)。ほかに報告例を知らないが、これが当地の一般的状況ではなかろうか。なお宮前遺跡(文11)で「軽石」、行谷遺跡(文33)で「貝巣穴痕泥岩数点」(いずれも大きさ不詳)の報告がある。

一遺構あたりの小砂利の使用量は、札の辻遺跡72住(文73)で約500ｇ、稲荷台遺跡51住(文74)で432ｇと報告されている。「祭壇状遺構」と離れた空間では、戸塚５丁目遺跡５次調査３住(文70)で炉から28粒、同４住では土壙中から148粒が出土している。稲荷台遺跡48・49住でも炉からの出土が報告されており、炉との関連を意識すれば加熱処理、土壙中のまとまりからは貯蔵の可能性が想起される。

なおこれら主要構成材のほかに、神谷原遺跡では「灰」の混和が６件指摘されている。

一部既出だが、立体構造の詳細が知られる稲荷台51住例をあらためて掲げる。

「本住居跡では、貯蔵穴～東隅間の床面の小礫集中部分の状況が明瞭に検出された。約70cm×50cmの楕円形の範囲に、３～４cm程度の高さでロームブロック混じりの暗褐色土を盛り、更にその上を直径１～３cm程度の多量(総量432ｇ)の小礫で覆うもので、室内祭祀等との関連も考えられた。なお、同様の小礫は炉床上面でも少量検出されている。」(文77)

またＣ－26号遺跡１住(文45・第２図４)では、砂・小砂利の範囲の端に径２～３cmの灰白色粘土塊が10×20cmの範囲に分布している。峰岸北遺跡21住(文51)例では、堆積の底部に径30cmの円形小砂利層が認められる。このように、ほかにも特徴的な構造が存在するようだ。遺構の平面規模には、径30cm以下の例が20弱ほどあるのは前節で見たところである。それらは小規模ながら全容を示しているか、あるいは断片化したものともいえそうだが、遺構の核的な部分(いわば卵黄のような)のみ残存していた可能性も考えられる。

(3)赤の演出

赤い発色は、この遺構の際立った特徴である。存在が認識され始めた頃、ゆえに焼土と見做された例もある。赤色の効果が、古来精神生活上多大な影響力を持ち得たことは論をまたない。もっとも検出時における発色の度合いにはばらつきが大きく、赤味について言及のない報告も多い。神谷原遺跡では、豊富な事例にもかかわらずそれがほとんどない。本来着色されていても、砂利や砂の性質からしてそれが定着しにくく、条件によっては脱色したのか。あるいは赤彩が必須要件ではなかった可能性も残される。

どう赤くしたのか。具体例として、大崎北久保遺跡２住(文28)で酸化第二鉄(弁柄:ベンガラ)の使用が確認されており、御蔵山中遺跡14住(文50)、横根野方遺跡３住(文66)でもその可能性が指摘されている。またＡ－146号遺跡８住(文48)では、小砂利の堆積上に焼土が載せられて

遺跡名	調査	遺構	時期	位置	貯蔵穴	位置関係	規模（cm）	構成材	特記事項	遺物関連事項	文献
下野田稲荷原	1次	1	後	C	有	土堤脇	90 × 80	砂質土・小砂利	砂質土赤褐色	端から小型壺片	1
		2	後	C	有	土堤脇・上	100 × 110	砂質土・小砂利	砂質土赤褐色・礫混和	—	
	7次	57	後	C	有	脇、土堤上	104 × 88	小砂利	高8cm	—	62
		58	後	C	有	上・脇	120 × 70	小砂利	貯蔵穴脇の浅い掘り込み上、貯蔵穴にかかる	—	
	11次	100	後	C	有	脇	50 × 43	小砂利	—	—	64
		112	後	C	有	土堤脇	75 × 60	小砂利	浅い掘り込み上	大型壺口縁破片	
		114	後	C	有	脇	62 × 50	小砂利	台形状の堆積、厚4cm	炉内から小砂利	
		115	後	C	有	脇、土堤上	90 × 82	小砂利	厚3～6cm	—	
本太5丁目	1次	1	後	C	有	上？・脇	—	砂・小砂利	砂、小砂利混和、厚10cm	—	2
井沼方	22地点	49	後	C	有	土堤端	150 × 130	小砂利・土	—	—	3
	25地点	90	後	E	有	別コーナー	25 × 15	小砂利か	図示のみ	—	4
	26地点	95	後	C	有	土堤脇	45 × 40	砂・小砂利	—	—	
	12次	40	後	B？	—	—	80 × 40	砂・小砂利	堆積ややまばら	—	25
		41	後	C？	有	脇	50 × 40	砂・小砂利	堆積ややまばら	—	
		53	後	CかA	有	脇	20 × 10	小砂利	—	—	
	16次	79	古	C	有	脇	100 × 60	小砂利・砂	—	—	30
	13～	59	後	D	有	脇、中寄り	20 × 15	小砂利	—	—	31
	15次	64	後	C	有	土堤端	35 × 35	砂・小砂利	—	—	
井沼方南	4地点	12	後	C	有	土堤端・上	90 × 35	砂・小砂利	厚数cm	—	4
	3地点	9	後	？	—	—	20 × 20	小砂利か	浅い掘り込み上、図示のみ	付近から小型台付甕	
		10	後	A	—	—	12 × 10	小砂利か	図示のみ	—	
		13	後	？	—	—	65 × 45	砂・小砂利	厚数cm	甕破片	
	1地点	4	後	C	有	土堤端	60 × 30	砂・小砂利	—	—	31
別所子野上	1次	1	後	C	有	脇	90 × 50	砂・小砂利など	厚5～10cm	—	5
	4次	8	後	C	有	土堤脇	110 × 70	小砂利・砂	—	—	23
		10	後	C	有	土堤端	80 × 50	小砂利・砂	厚7cm	—	
	9次	16	後	C	2	貯蔵穴間	86 × 56	小砂利	径0.2～0.8cm、厚10cm	—	35
馬場北		15	後	C	有	柱穴上	70 × 50	—	図示のみ	—	6
		21B	後	F	有	ピット脇	90 × 60	砂・小砂利	厚10cm、貯蔵穴とは別のピット脇	—	
		24	後	C	有	土堤端・上	100 × 90	砂・小砂利	厚15cm	—	
		37	後	C	有	土堤脇	80 × 60	砂・小砂利	厚20cm	—	
		43	後	C	有	やや離れる	36 × 26	砂・小砂利	厚5～8cm	—	
馬場北		66	後	C	無	—	90 × 40	砂・小砂利	厚5cm、砂赤褐色	—	11
馬場北		79	後	CD	無	土堤周囲	50 × 50	砂質土・小砂利	砂質土赤色	—	13
		81	後	C	有	土堤脇	60 × 60	砂質土・小砂利	2～3cm灰白色粘土粒が20×10cm程に分布、砂質土赤色	貯蔵穴周辺土器多	
		96	後	D	有	土堤周囲	—	砂質土・小砂利	砂質土赤色	—	
		102	後	C	有	土堤周囲	—	砂質土・小砂利	砂質土赤色	—	
馬場北	15次	141	後	D	有	土堤脇	25 × 25	小砂利	径0.5～1.5cm、少量	—	37
		143	後	C	無	—	50 × 50	小砂利	厚3cm	小型台付甕	
		134	後	BC	有	やや離れ	50 × 50	粘土・小砂利	厚2～3cm	付近に大型磨製石斧	
		138	後	C	有	土堤端	100 × 60	小砂利	小砂利径5mm前後多、最大1.5cmほど、ピット上	—	
西谷	5区	2	後	C	有	脇	60 × 35	小砂利・砂	小砂利径0.2～0.5cm、砂と混和。赤み帯びる。敷いた状態	—	7
		3	後	C	無	—	100 × 55	小砂利・砂	小砂利と砂混和、敷いた状態	—	
大北	12～14区	2	中	C	有	脇	85 × 65	小砂利・砂	小砂利径0.5～1cm、敷いた状態	甕破片2	7
		3	中	C	有	脇	90 × 55	小砂利・砂	小砂利径0.5～1cm、敷いた状態	—	
		4	中	C	有	脇	55 × 30	小砂利・砂	小砂利径0.5～1cm、敷いた状態	—	
		5	中	C	有	脇	55 × 30	小砂利・砂	小砂利径0.5～1cm、敷いた状態	—	
		6	中	C	有	やや離れ	85 × 40	小砂利・砂	小砂利径0.5～1.1cm。砂と混和、敷いた状態。	—	
	6次	2	中	C	有	土堤脇	80 × 70	砂	砂赤色	上に壺・甕各1、壺中砂充満	22
善前南	1次	4	後	C	有	内側脇	63 × 54	砂・小砂利	小砂利径0.5～1cm多	貯蔵穴上層から小型台付甕	8
		5	後	C	有	脇	45 × 35	砂・小砂利	小砂利径0.5cm前後多、厚約1cm、赤褐色帯びる	—	
	2次	6	後	C	有	脇	50 × 45	小砂利	厚2cm。浅い掘り込み上	—	58
宮前	1次	1	後	C？	—	—	42 × 30	小砂利・軽石	厚2～5cm、軽石若干、土は赤褐色	—	9
		2	後	C	—	—	62 × 48	小砂利・軽石	厚さ約2～5cm、軽石若干、土は赤褐色	—	
		3	後	C？	有？	ピット脇	40 × 36	小砂利・軽石	厚1～2cm、軽石若干、土は赤褐色	—	
		4	後	C	有	脇	60 × 50 30 × 26	小砂利・軽石	厚2～5cm、軽石若干、土は赤褐色	—	
	3次	1	後	C	有	土堤脇	15 × 15	小砂利	コーナーの一段高い部分からまとまって検出	付近から高坏脚片	12
梅所	1次	3	後	C	有	脇	85 × 75	砂・小砂利	厚約1cm、敷いた状態	—	10
上野田西台	3次	3	後	C	有	土堤脇	100 × 80	小砂利・砂	小砂利径0.7cm前後、厚約1cm、砂赤褐色	—	14
		8	後	C	有	脇	—	小砂利・砂	撹乱のため詳細不明	—	
		13	後	C	有	脇	50 × 30	小砂利・砂	厚6cm	—	
		18	後	C	有	脇	145 × 75	砂・小砂利	—	付近から甕3個	
北宿		54	中	C	有	やや離れ	40 × 20	小砂利	床面よりわずかに浮く	—	15
上野田西台	4次	22	中	E	有	？	—	小砂利・砂	小砂利赤色	—	16
		24	後	C	有	脇	45 × 30	小砂利・砂	小砂利赤み帯びる	—	
大間木会ノ谷	2次	8	古	C	有	脇	100 × 70	小砂利・砂	—	貯蔵穴周辺土器多	17
		11	後	C	有	土堤端	60 × 40	小砂利・砂	—	北東コーナーに壺、小型台付甕	
	3次	15	古	C	有	土堤脇	83 × 53	小砂利・砂	—	貯蔵穴に土器4	20
谷ノ前	1次	1	中	中央	—	—	12 × 12	小石と土器片	構成材14点かたまって出土	—	18
本杢	3地点	9	古	C	有	土堤端	160 × 110	砂・小砂利	小砂利少量	甕、椀	19
北宿	17次	76	後	C	有	脇	60 × 60	小砂利・砂	15cm程度の掘り込みを埋める	小砂利上に小型台付甕	21
		88	後	A	2	覆土中	50 × 35	小砂利	北側貯蔵穴覆土中	—	
		93	後	C	有	土堤間、ピット上	100 × 85	小砂利	柱穴を覆う	—	
		94	後	C	有	脇	85 × 55	小砂利	—	—	
		97	後	C	有	土堤端	40 × 25	小砂利か	図示のみ	—	
		98	後	C	有	脇・上	63 × 63	小砂利	円形状の分布	—	
		99	後	C	有	土堤脇	140 × 120	小砂利	—	—	
		107	後	C	無	—	90 × 45	小砂利	半円形状の分布	—	
中原後	2次	7	古	C	有	脇	50 × 30	小砂利	—	土器は東角、砂利は南角に多	24
上ノ宮	1次	1	後	C	無	—	30 × 20	小砂利	わずかに赤み帯びる	—	26
		3	後	D	—	炉跡正面含む	—	小砂利	—	—	
	3次	2	後	CD	有	土堤端	44 × 28	小砂利	浅い掘り込み上	—	57
大久保領家片町	5地点	30	古	C	無	コーナー接合	110 × 50	小砂利	径1cmほど	—	27
				C		内寄り	70 × 60	小砂利	径1cmほど	—	
大崎北久保	1次	2	後	C	2	脇	70 × 55	砂・小砂利	呼称「赤砂利堆積施設」、色素は酸化第2鉄	—	28
東　裏	3次	2	後	C	有	上	85 × 60	小砂利・土	小砂利と土混和	—	29
		3	後	C	有	上	140 × 115	小砂利・土	—	土器片一括	
太田窪貝塚	1次	2	中	C	有	脇	70 × —	砂・小砂利	堆積ややまばら	貯蔵穴に太型蛤刃石斧	32
		13	中	C	有	脇	140 × —	砂・小砂利	—	—	
		1	古	C	有	脇	95 × 85	砂・小砂利	厚10cmの台状	周囲に壺・甕・高杯	
		14	古	C	有	脇	95 × 60	砂・小砂利	貯蔵穴上に少しかかる	上に胴部穿孔小型壺2	
		15	古	C	有	脇	40 × 30	砂・小砂利	—	—	

表1「祭壇状遺構」一覧（1）

時期：弥生中・後期、古墳前期
位置：第1図に準拠

遺跡名	調査	遺構	時期	位置	貯蔵穴	位置関係	規模（cm）	構成材	特記事項	遺物関連事項	文献
行　谷	2次	3	後	C	有	脇	80 × 80	砂・小砂利	厚5cm	少量の土器	33
		4	後	C	有	上・土堤・脇	150 × 100	砂・小砂利	堆積多量、厚15cm	少量の土器	
		6	後	C	有	土堤端	50 × 30	砂・小砂利	深9cmの掘り込み上。貝巣穴痕泥岩数点	—	
		8	後	C	有	土堤端	85 × 50	砂・小砂利	厚7cm	—	
東浦西	2次	4	後	C	有	脇やや離れ	128 × 68	小砂利	深8cmの掘り込み上	上に壺上半と甑	34
松木北	3次	6	後	C	有	土堤端・上	120 × 60	小砂利・砂	—	—	36
染谷遺跡群		S-17	古	C	有	脇	90 × 50	焼土？	—	—	38
鎌倉公園	1次	25	後	A	無	無	70 × 65	砂・小砂利	本文参照	—	39
		27	後	C	有	土堤脇	—	小砂利	—	—	
深作東部遺跡群		A-16	後	C？	有	脇	130 × 75	白色粒子・小砂利	—	上に壺	40
北袋	1次	5	後	C	有	土堤脇	65 × 25	小砂利	床面直上	上に台付甕脚部	41
		28	後	C	有	土堤端	100 × 65	小砂利	—	—	
A-61	1次	1	後	C	有	脇	50 × 35	砂・小砂利	小砂利径3～10mm	—	42
		3	後	C	有	脇	90 × 60	砂	—	小坩	
			後	D		上	60 × 45	小砂利	小砂利径3～10mm	—	
		6	後	C	有	土堤脇	30 × 20	砂	—	—	
		7	後	C	有	脇	55 × 30	砂・小砂利	小砂利径3～10mm	—	
			後	中		やや内寄り	35 × 20	砂・小砂利	小砂利径3～10mm	—	
		8	後	C	有	脇	85 × 70	砂・小砂利	小砂利径3～10mm	—	
	2次	11	後	C	有	脇	110 × 30	小砂利	小砂利径3～10mm	台付甕など集中出土	52
		13	後	D	有	脇	55 × 55	粘土・小砂利	小砂利径3～10mm、小砂利混じる土の上に粘土	土器まとまる	
		14	後	C	有	脇	60 × 45	粘土・小砂利	小砂利径3～10mm	高杯・器台などまとまる	
		17	後	C	有	脇	30 × 20	小砂利	小砂利径3～10mm	—	
		19	後	BC	有	脇	100 × 30	小砂利	小砂利径3～10mm	—	
		23	後	C	有	脇	90 × 70	小砂利	小砂利径3～10mm	—	
		24	後	D	有	脇	70 × 30	小砂利	小砂利径3～10mm	周辺に土器まとまる	
三崎台〈A－239〉	2次	8	後	B	有	別のピット上	40 × 35	小砂利	—	—	43
	3次	19	後	C	有	土堤脇	120 × 80	赤褐色砂質土・小砂利	砂質土は赤褐色	小型高杯埋置	49
		28	後	C	有	土堤脇	50 × 25	土・小砂利	土赤褐色	—	
			後	C		土堤基部上	60 × 70	土・小砂利	土赤褐色	小型鉢埋置	
		37	後	C	有	脇	130 × 100	土・小砂利	土赤褐色	中に土製品	
		52	後	C	有	脇	30 × 50	土・小砂利	土赤褐色	—	
B－7	1次	2	後	C	有	土堤脇	110 × 50	小砂利・土	土暗赤褐色、ピット覆う	—	44
		3	後	C	有	脇	90 × 60	小砂利	ピット覆う	—	
		11	後	BC	有	脇	160 × 50	小砂利・土	土暗赤褐色、壁側面から床面上に堆積	—	
C－26	1次	1	古	C	有	貯蔵穴覆う	100 × 50	砂・小砂利	2～3cmの灰白色粘土粒が20×10cm程に分布	—	45
		4	古	C	有	脇	70 × 55	砂・小砂利	焼土とロームを僅かに含む暗褐色土中から多数まとまって出土	—	
深作稲荷台	2・3次	13	後	C	有	離れ	— × 70	山砂・小砂利	砂、礫混和、敷かれた状態、中央に焼土	砂中から台付甕脚部	46
		17	後	C	無	—	70 × 45	小砂利・山砂	礫、砂混和、敷かれた状態、厚20cm	中に土器破片多	
		26	古	C	有	上	55 × 40	砂	—	完形土器まとまる	
土屋下	1次	1	後	？	有	—	—	小砂利	記述のみ	—	47
		2	後	C	有	脇中寄り	60 × 30	小砂利	—	—	
		30	後	BC	有	脇	180 × 130	小砂利	—	—	
		40	後	BC	有	やや離れ	20 × 15	小砂利	—	—	
			後	CD		やや離れ	30 × 20	小砂利	—	—	
		45	後	？	有	別の壁面	50 × —	小砂利	炉無く位置区分不能、壁際	—	
A—146	1次	8	後	C？	有	脇	170 × 90	小砂利・焼土	小砂利上に焼土？	—	48
御蔵山中	3次	14	古	C	有	脇	90 × 70	小砂利	2～10mm赤色・白色小砂利・白色砂粒とベンガラらしい赤色粒子	—	50
		15	古	C	有	脇	45 × 30	小砂利	高7cm	—	
峰岸北	1次	11	古	C	有	脇	140 × 75	小砂利	75×80cmの浅い窪み上	—	51
		21	古	C	有	脇	120 × 90	小砂利	堆積底部に径30cmの円形小砂利層か？	—	
大和田本村北	2次	10	中	C	有	脇	35 × 40	小砂利	貯蔵穴脇を一段低く掘り込み、埋め固めた上に盛り上げ	付近に土器まとまる	53
				C		脇・やや離れ	60 × 50	小砂利	コーナー接して盛り上げ	付近に土器まとまる	
中里	3次	1	後	C	有	脇	40 × 35	砂	浅い掘り込み上	—	54
中里前原北	1次	2	後	C	有	脇	60 × 50	小砂利	小砂利多数、やや浮く	—	55
		3	後	CD	2	脇	20 × 10	小砂利	小砂利多数、やや浮く、周辺の土赤み	—	
	3次	2	後	C	有	土堤脇	50 × 40	砂・小砂利	厚7cm	—	61
側ヶ谷戸貝塚	4次	1	古	C	有	脇	100 × 90	小砂利	—	—	56
大谷場小池下	1次	12	後	C	有	脇	135 × 55	砂	柱穴を覆う、覆土下層には至らず、砂は暗赤褐色	甕破片散在	59
		13	後	C	有	脇	150 × 110	小砂利	多量の小砂利に覆われる	—	
		14	後	C	有	土堤脇	80 × 45	小砂利	貯蔵穴には入らず	—	
		17	後	C	有	土堤上・脇	90 × 40	小砂利	ピットに小石	—	
		18	後	C	有	土堤脇	40 × 30	小砂利	—	—	
札の辻3号	4次	12	古	C	有	土堤端	50 × 45	小砂利	うっすら赤い、微細な小砂利のため検出困難	—	60
下野田本村	5次	25	中	C	有	脇やや離れ	70 × 40	小砂利	扇形、厚さ4cm	—	63
立葉	2次	4	後	C	有	脇、一部重なる	98 × 33	小砂利	厚10cm、浅い掘り込み上	—	65
		8	後	C	有	土堤脇	130 × 80	小砂利	浅い掘り込み上	脇から小型坩1	
		9	後	C	有	脇	90 × 70	小砂利	—	—	
		15	後	C	有	脇	100 × 50	小砂利	浅い掘り込み上	—	
		16	後	C	有	脇	130 × 80	小砂利	一部貯蔵穴にかかる	—	
		17	後	C	有	脇やや離れ	80 × 70	小砂利	2個の小ピットを覆う	—	
横根野方	1次	3	後	C	有	脇	40 × 25	ベンガラか	赤色物質はベンガラの可能性	壺破片、上部に舟形土製品	66
日向北	4・5次	15	後	C	有	土堤脇	90 × 60	小砂利	—	—	67
		20	後	C	有	土堤端	100 × 40	小砂利	—	—	
		22	後	C	有	土堤脇	80 × 50	小砂利	—	—	
		43	後	C	有	土堤脇	60 × 40	小砂利	—	—	
		49	後	C	有	土堤端	60 × 45	小砂利	—	貯蔵穴から鉢	
		51	後	C	有	土堤脇・上	50 × 40	小砂利	—	—	
木曽呂北	1次	4	後	C	有	脇	55 × 55	小砂利	—	付近に壺、台付甕、甑	68
戸塚5丁目	2・4次	4	後	C	2	近接	—	小砂利・砂	貯蔵穴周辺	北東側の貯蔵穴に集中	69
	5次	3	後	中	有	炉	70 × 40	小砂利	小砂利炉から28点集中出土	—	70
		4	後	C	有	脇	—	小砂利	ピットから小砂利多量に出土	—	
	6次	1	後	C	有	土堤脇	60 × 40	小砂利か	図示のみ	—	72
		2	後	C	有	上	100 × 60	小砂利か	図示のみ	—	
小谷場貝塚	6次	2	後	C	有	脇	95 × 45	砂・小砂利	—	—	71
		10	後	—	無	—	— × 47	砂・小砂利	厚約8cm	—	
	9次	30	後	覆土	—	—	—	小砂利	覆土中からまとまって検出。径1cm以下	—	
札の辻	1次	72	後	C	有	土堤端	90 × 50	細砂粒・小砂利	小砂利径0.1～1cm、総量約　500g	—	73
稲荷台	B区	48	古	C	有	やや離れ	100 × 80	小砂利	径1～3cm、範囲不明瞭、炉からも出土	—	74
		49	古	C	有	脇	105 × 70	小砂利	径1～4cm、範囲不明瞭、炉からも出土	—	
		50	古	覆土	有	—	—	小砂利	覆土中	—	
		51	古	C	有	脇	70 × 50	小砂利	本文参照	—	
		53	古	C	有	脇	55 × 55	小砂利	径1～3cm、範囲は不明瞭	—	
		54	古	覆土	有	—	—	小砂利	覆土中	—	

表2「祭壇状遺構」一覧（2）

遺構	時期	位置	貯蔵穴	位置関係	規模（cm）	構成材	特記事項
3	Ⅰ	C	有	脇・離	180 × 60	小砂利、砂	
6	Ⅱ	C	有	土堤端	100 × 60	砂、小砂利、粘土粒	
		D		土堤脇	100 × 60	砂、小砂利、粘土粒	
7	Ⅱ	CD	有	柱穴脇	90 × 60	砂、小砂利	
8	Ⅱ	CD	有	柱穴脇	220 × 100	砂、小砂利、粘土粒・灰など	
9	Ⅱ	C	無	—	80 × 50	砂、小砂利	
13	Ⅲ	CD	有	脇・離	80 × 40	砂、小砂利	
16	Ⅲ	A	有	脇・離	80 × 60	砂、小砂利	貯蔵穴ともA、遺物集中
21	Ⅱ	C	無	—	120 × 50	砂	
30	Ⅱ	C	有	脇	180 × 100	—	遺物集中
31	Ⅱ	A	有	別コーナー	60 × 40	灰、小砂利	
		C		上	130 × 70	灰、小砂利	貯蔵穴覆土上層に混入
32	Ⅱ	C	有	土堤脇	160 × 100	砂、小砂利	柱穴含む
37	Ⅲ	C	無	離	110 × 70	砂、小砂利	出入口ピットのみ
49	Ⅲ	D	無	脇	90 × 60	小砂利	出入口ピットのみ
50	Ⅱ	C	無	—	90 × 60	砂、小砂利	
58	Ⅱ	C	有	土堤端	100 × 90	小砂利、灰を含む砂質	柱穴含む
61	Ⅱ	C	有	脇	90 × 40	灰が若干混じった砂質	
63	—	C	有	脇	80 × 50	砂の層	
71	Ⅱ	C	有	土堤端	120 × 90	—	
73	Ⅱ	C	無	脇	200 × 150	小石、砂	出入口ピットのみ
74	Ⅱ	CD	有	土堤付近	—	砂、小砂利	図示による
78	Ⅲ	CD	有	脇	140 × 100	砂、小砂利	
79	Ⅲ	C	有	土堤上・脇	160 × 70	砂、小砂利	
80	Ⅱ	C	有	上・脇	90 × 90	砂、小砂利	
82	Ⅲ	C	有	土堤端	100 × 90	砂、小砂利	
				やや離れ	130 × 90	砂、小砂利	
86	Ⅲ	C	有	脇	110 × 70	砂、小砂利	
87	Ⅲ	C	有	上	120 × 60	—	上に台付甕2
92	Ⅲ	C	有	脇	120 × 40	砂、小砂利	
98	Ⅲ	C	有	脇	90 × 60	—	
102	Ⅲ	C	有	脇	55 × 35	砂	
105	Ⅱ	C	有	やや離れ	140 × 80	砂、灰混じりの層	
108	Ⅱ	C	有	脇	120 × 55	砂、小砂利	
115	Ⅱ	C	有	上・脇	160 × 110	砂、小砂利	台付甕、ミニチュア
124	Ⅱ	C	有	やや離れ	130 × 80	砂、小砂利	壺、台付甕、小型台付甕
128	Ⅱ	C	有	土堤端	90 × 45	砂、小砂利	
133	Ⅱ	C	有	土堤端	150 × 50	—	
136	Ⅲ	C	有	脇	120 × 90	砂、小砂利	構築前から含有
137	Ⅲ	C	有	脇	110 × 70	砂、小砂利	浅い掘り込み上
138	Ⅱ	C	有	土堤上・脇	200 × 90	砂、小砂利	
139	Ⅱ	CD	有	上	160 × 60	砂、小砂利	
156	Ⅱ	C	有	やや離れ	60 × 40	砂、小砂利	
163	Ⅱ	CD	有	上・脇	320 × 120	砂、小砂利	粘土粒分布近接
164	Ⅱ	CD	無	—	160 × 70	砂、小砂利	
166	Ⅱ	C	有	上・土堤脇	170 × 70	砂、小砂利	
168	Ⅱ	C	有	上・脇	200 × 110	砂、小砂利	
173	Ⅱ	C	有	上・土堤上	140 × 120	砂、小砂利	柱穴含む
174	Ⅱ	C	有	土堤端	110 × 80	砂、小砂利	台付甕等集中
184	Ⅱ	C	無	土堤端	240 × 80	砂、小砂利	
186	Ⅱ	C	有	土堤上・脇	180 × 80	砂、小砂利	
188	Ⅱ	A	有	上・脇	120 × 120	砂、小砂利	貯蔵穴ともA
196	Ⅱ	C	有	脇	140 × 60	砂、小砂利	
197	Ⅱ	C	有	脇	30 × 20	砂、小砂利	
200	Ⅱ	D	有	脇	100 × 60	砂、小砂利	

表３　神谷原遺跡「祭壇状遺構」一覧

時期：神谷原編年Ⅰ～Ⅲ期
位置：第1図に準拠

いる。一方、前出の御蔵山中遺跡３住では赤白２色の小砂利と「白色粒子」、同じくC－26号遺跡１住で白色粘土塊の使用が報告されており、赤に加え白色の効果も加味されたようだ。いずれも施設の特殊性を強調する効果が期待されたのだろう。

（４）下部構造

遺構が設置された床面とその下層の状況から以下のとおり分類される。

①平板な床面上に展開するもの（第２図２、第３図）

②床面の浅い窪みを埋め立てる、もしくはその中に落ち込んでいるもの（第２図５）

③深く明瞭なピット（「貯蔵穴」を含む）と重複するもの（第２図４・６）

④「貯蔵穴」を囲む土堤状の盛り上がり（以下「土堤」）に近接・重複するもの（第２図７）

またこれらの複数が重なる例（③・④など）もある。

①は、状況が特記されていないものの多くがこれに属するとみられる。②は、窪みの存在が遺構に対応しており、その設置を前提に用意された一体の構造といえる。それが住居の建設時に遡る、つまり当初の設計図に載せられていたものか、あるいは居住の過程で二次的に付加されたのかは確認を要する。この問題は、次の③にも共有される。③は、一概に重複しているとは言えても、報告の記述が不十分で、状況が正確に把握できない場合が多い。平面図からは、ア：ピットが遺構を貫通している、イ：開口したピットに遺構の構成材が流れ込んでいる、ウ：既に埋め立てられ平坦化したピットの上面に遺構が載っている、いずれなのか特定が難しい。ではあるが、重複する例は複数確認できる。戸塚５丁目遺跡５次調査２住（第２図６）では、断面図から「祭壇状遺構」（１～５層）が、６・７層土で埋まった直下のピットを覆うように設置されている状況が判る。C－26号遺跡１住も同様な例だろう。A－61号遺跡３住（文42・第２図３）では、砂層と小砂利層が平面上ずれて分布し、小砂利層が、埋まったピット上面にやや窪んで載っている。

③の詳細が知られる鎌倉公園遺跡25住（文39）例を掲げる。

「Ｐ２の上層には、壁と床面の間にテラス状の壇があり、上面は床面同様に硬い。さらに下層には砂質上の堆積が認められた。また周辺には砂・小砂利が散布していた。それらを取り除くとＰ２の落ち込みが現われた。これらを考えると住居居住時はＰ２は埋没しており壁下にテラス状の高まりが存在していたことになる。」（Ｐ２は深64.0cm）

④については、「土堤」対「祭壇状遺構」の関係を考えるより、「貯蔵穴」対「祭壇状遺構」の間に、前者の付属施設としての「土堤」が割り込んだと捉えるべきかもしれない。距離を置く、接触する、一部被る、完全に載る、と、些細ながら位置関係には数パタンがある。

下部構造に関しては、以上と別になるが、神谷原遺跡136住（文75）の報告が注目される。「東隅に小砂利、砂の分布する範囲が認められた」この住居跡は、「掘り方を調査した際、貼り床、掘り方の底面にも同じく、小砂利、砂が観察され、貼り床を築く前にすでにこれらを混ぜていたと考えられる。」とされる。これら構成材が、上部構造での使用にとどまらず、住居建設段階で使用されたことが指摘されており、分布範囲が不明なのは惜しまれるが、「祭壇状遺構」と住居本体の関係を示す重要な知見である。

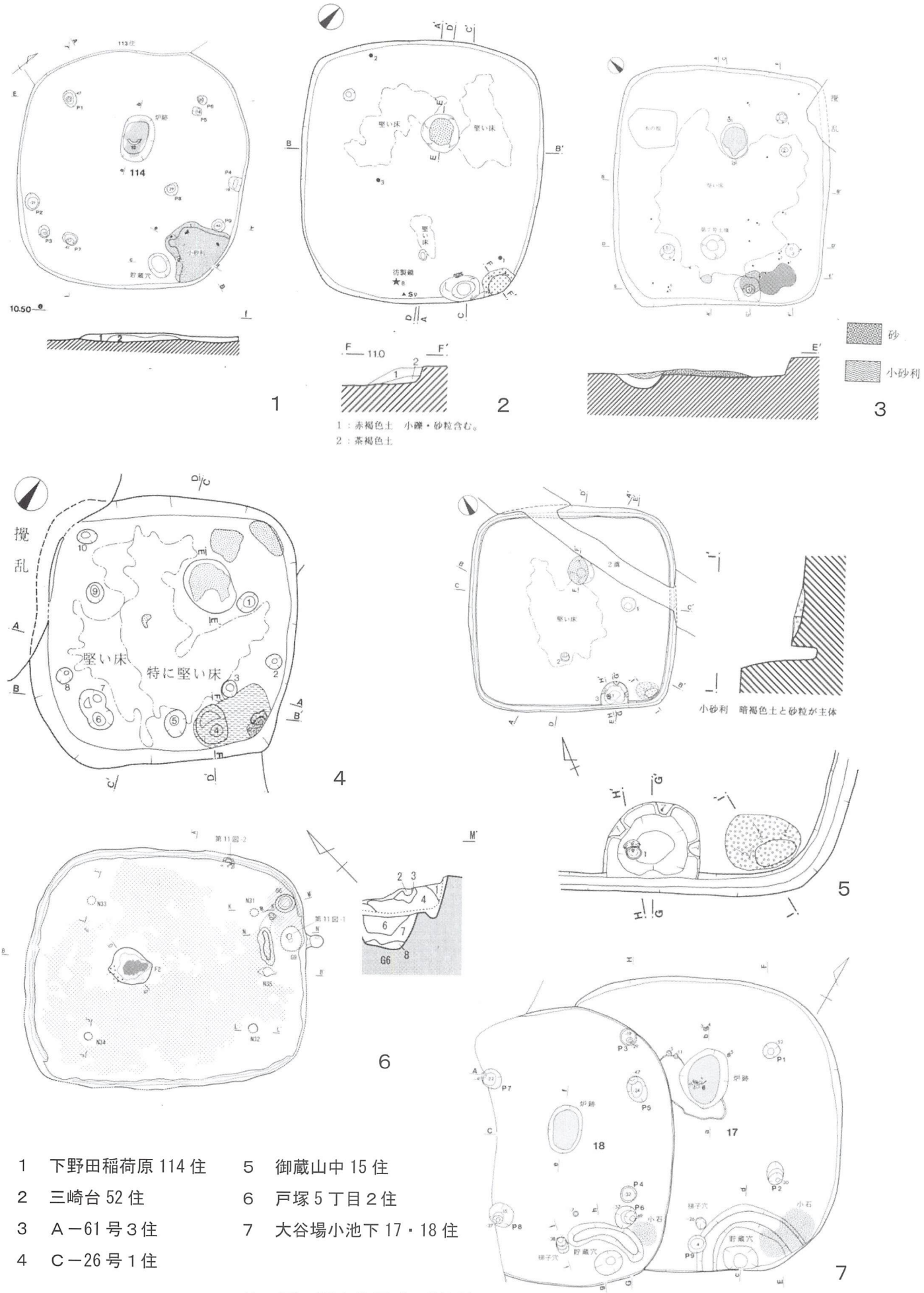
（５）「貯蔵穴」と「祭壇状遺構」

先述の通り「貯蔵穴」は、住居内のＣ空間で「祭壇状遺構」と同居するのがほぼ通例である。そこから両者の親縁性は容易に窺われる。先に触れた第２図３・４・６もそうである。そこに見られる、埋め殺された「貯蔵穴」を「祭壇状遺構」が覆う状況は、「貯蔵穴」が本来的機能の喪失を経て「祭壇状遺構」と結合したのか、あるいはもとより実用的な貯蔵機能とは無縁な、「埋め立てられてこそ」のピットだったということか。小倉は、火災住居における例を引いて、「貯蔵穴と呼ばれるピット」が「住居埋没以前に埋没していた可能性」を念頭に、「床下収納庫的なものではなく祭祀のための施設」との見方を示している（小倉前掲ｐ.120）。重要な指摘である。

少なくとも「貯蔵穴」が、住空間の中で、「床下収納庫」ではなく「祭壇状遺構」に関連する施設であった可能性が認められる。両者の関係には、前節④とした「土堤」の存在も絡む。三者を視野に状況を再整理した上で、それらを含む屋内祭祀の場の広がりを確認する必要がある。「貯蔵穴」の再検討は、「祭壇状遺構」の精査と対になる課題といえるだろう。

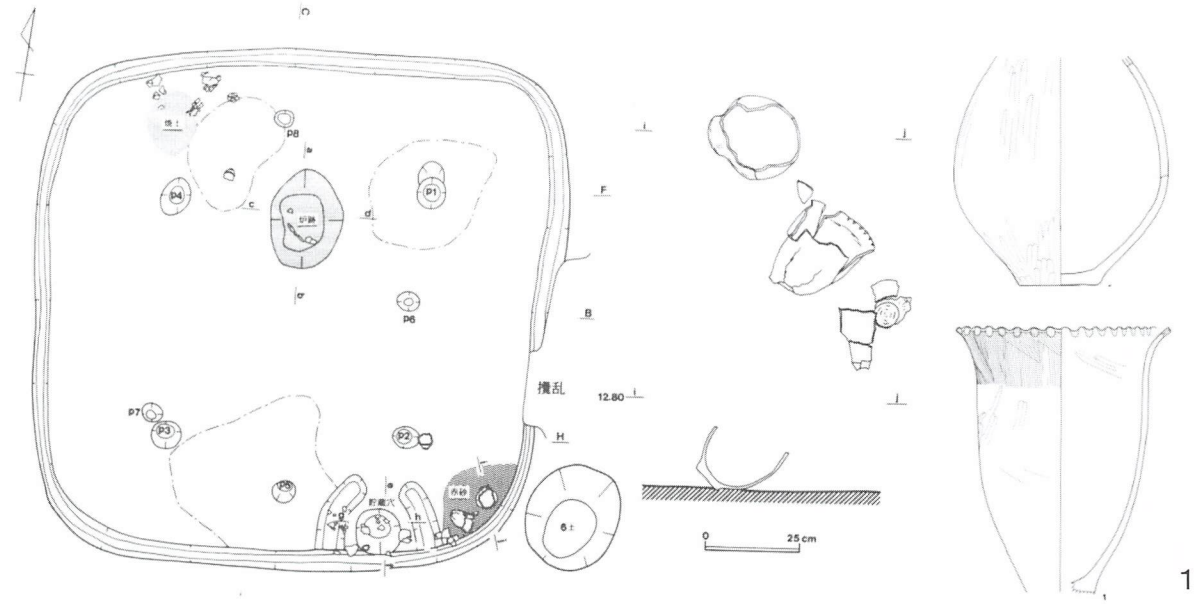
（６）遺物との関わり

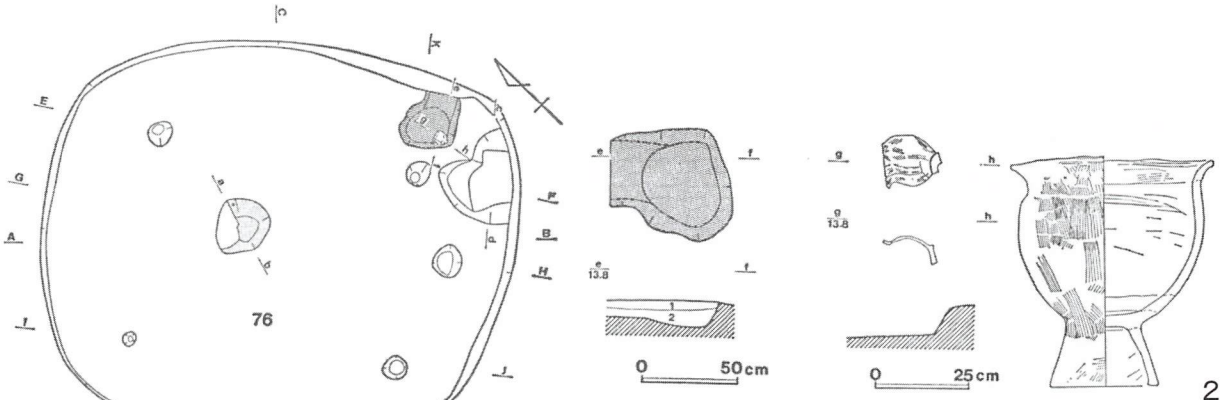
「祭壇状遺構」からは、そこを舞台とした祭祀行為の遺留品とみられる土器が出土している。弥生中期大北遺跡６次２住（文22・第３図２）では、遺構上で壺と甕各１個体がセットとになり、壺の内部には砂が充満していた。同じく中期大和田本村北遺跡10住（文53）では、「貯蔵穴」上面から「遺構」周辺にかけて土器がまとまって出土した。「祭壇状遺構」に土器を置くスタイルは、このように中期から例が確認される。後期では、北宿遺跡76住（文21・第３図２）で小型台付甕、太田窪貝塚14住（文32）では胴部を穿孔された小型壺２個体があるなど、日常用形式から祭器に特化したとみられる土器との関連が見出される。また土器が遺構と一体化した例がある。深作稲荷台遺跡17住（文46）では、破砕された土器が構成材に混ぜられていた。三崎台遺跡19住では小型高杯（出土は脚部のみ）、28住では赤彩された小型椀が遺構にほぼ正立して「埋置」されていた（第３図３・４）。断面図からは、遺構の上層に埋め込まれている状況が読み取れる。以上の事例から、土器と「祭壇状遺構」の関係が、供献から融合へと進化した、あるいは日常生活から

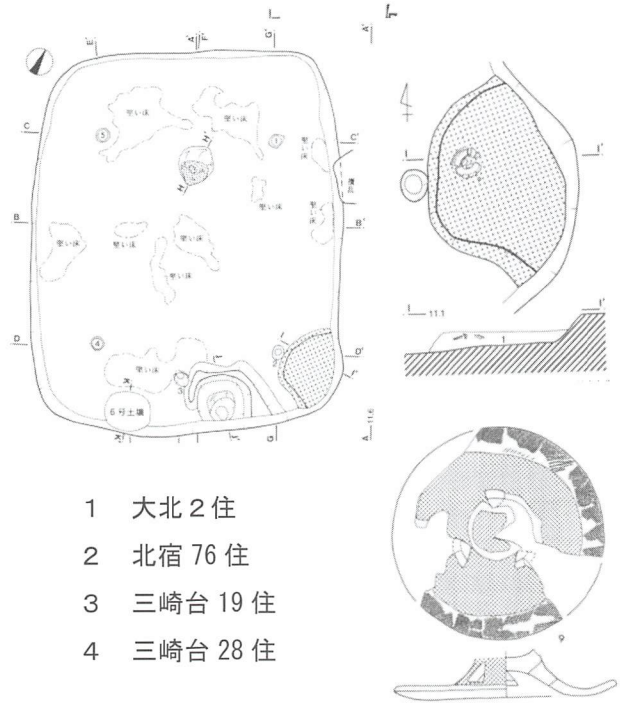


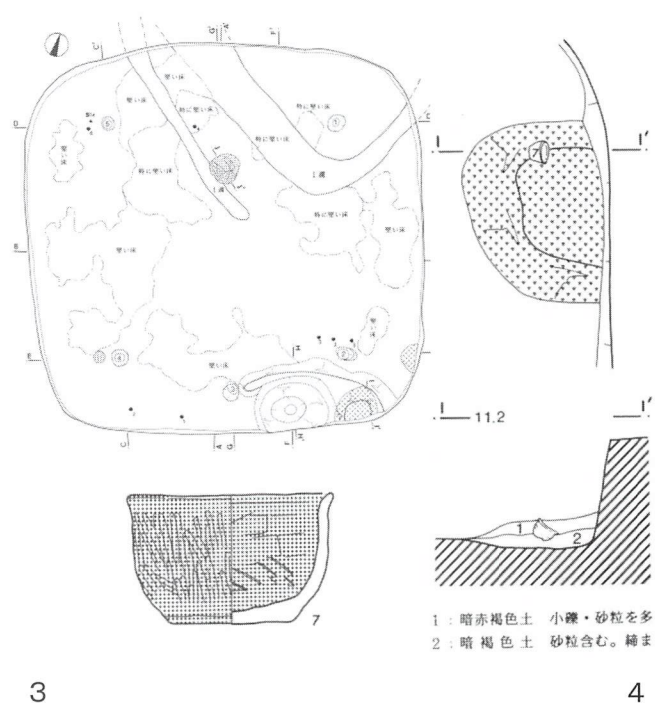
1　下野田稲荷原 114 住
2　三崎台 52 住
3　A－61 号 3 住
4　C－26 号 1 住
5　御蔵山中 15 住
6　戸塚 5 丁目 2 住
7　大谷場小池下 17・18 住

第 2 図　竪穴住居跡の「祭壇状遺構」（縮尺不同）









1　大北２住
2　北宿 76 住
3　三崎台 19 住
4　三崎台 28 住

第３図　「祭壇状遺構」と出土土器　（縮尺不同）

祭祀のスタイルを独自化させていったとここで強弁するつもりはない。遺物を伴わない場合も多く、また祭祀用とみられる土器は、そこに限って出土するものでもない。炉辺に類似の土器が遺留された例もある。ともあれ弥生時代から古墳時代への推移を追うに当たり、屋内のいずれであれ祭祀の舞台に土器がどうかかわったは重要な視点である。

おわりに

考古資料には、意匠が際立つほど「呪術」や「祭祀」が付きまとう。弥生時代から古墳時代にかけて、祭祀は個人単位の精神生活を越え、集団を規制する社会的装置として整備されていく。ところで住居跡出土の土器は、生活必需品としての実用性と、それに反する非合理性を示す二面の顔を持つ。後者が祭器としての顔なら、プライベート空間でのマツリにおいて、それは共に豊穣を願う家族の絆の象徴か、あるいは外部と繋がる社会的装置の端末であったか。

土器研究から見た古墳時代の到来において、丸底坩・鉢・器台・高杯からなる小型精製土器群の進出は、画期的事象と認められてきた。一方それ以前に見出される小型土器群の存在は、少なくとも南関東においては、むしろ等閑視されているように思える。その系譜が在来の後期弥生土器に遡るのであれ他地域に連なるものであれ、小型精製土器群が、先行する小型土器群の存在意義を継承したのか一新させたか、あるいは両面を折衷したか。いずれにせよ両者の関係を時間軸上で整理し紡ぐ作業は、今なお課題といえる(4)。

砂と小砂利の赤い「祭壇状遺構」は、注目すべき空間標識である。屋内祭祀の舞台装置としてそれはどう機能したか。具体像を明らかにする作業は、土器研究において「弥生時代から古墳時代へ」の叙述を試みる上でも重要な位置を占めると思う。

本稿では、空間(＝舞台装置)の描写にほぼ終始した。そこで土器はいかなるあり方を示しているのか。住居内全体に視野を広げつつ、その追求を次なる課題としたい。

《註》

(1)表1・2の「時期」欄では、「弥生時代後期終末」・「古墳時代初頭」の区分を用いなかった。両者を截然と区分する労苦をひとまず回避したためである。表の「後」は、それらの大半を含んでいる。

(2)遺構の範囲を示す数値は、報告に明記されているものと、それがないことから、掲載図の計測によったものがある。多くは、後者である。多様な平面形に敢えて長・短径を求めたもので、ごく大まかな目安と見ていただきたい。また素材のうち小岩石類は、「小砂利」のほか「小礫」、「砂利」、「小石」などと報告されているが「小砂利」に統一した。

(3)「後世のごとく社殿の構築されない段階では、まず祭神の降臨する祭場を設定するため山麓や丘陵など樹木の繁茂する神聖な地域を清掃し、海や川から採ってきた小石や砂を敷く。そして榊・檜・松・杉などの常盤木を立て、神霊の憑着する依り代とする。」桜井徳太郎「まつり【祭】」『国史大辞典』(吉川弘文館)1992

(4)この点西川修一の仕事は、先駆的存在として示唆に富む(西川1992)。

《参考・引用文献》

小倉　均　1988　「弥生時代から古墳時代にかけての小礫などが散布する住居跡について」『浦和市史研究』第3号　浦和市

同　　1990　「弥生時代から古墳時代にかけてみられる祭壇状遺構の研究」『埼玉考古』第27号

西川修一　1992　「特殊壺になれなかった壺」『古代』第94号

報告書

浦和市内遺跡発掘調査報告書　発行　浦和市教育委員会

1　『大古里遺跡（第９・10・11・12地点）　稲荷原遺跡』第15集　1991
2　『本太５丁目遺跡　宮本遺跡』第21集　1994
3　『井沼方遺跡・井沼方南遺跡』第25集　1997
4　『大古里遺跡・井沼方遺跡・井沼方南遺跡』第26集　1998

浦和市遺跡調査会報告書　発行　浦和市遺跡調査会

5　『別所子野上遺跡発掘調査報告書』第22集　1982
6　『北宿、馬場北、馬場東、馬場・小室山遺跡発掘調査報告書』第24集　1983
7　『西谷・和田南・大北・大間木内谷遺跡発掘調査報告書』第25集　1983
8　『善前南遺跡発掘調査報告書』第30集　1983
9　『吉場、西谷、宮前、大間木内谷、和田西遺跡発掘調査報告書』第34集　1984
10　『梅所遺跡発掘調査報告書』第43集　1984
11　『馬場北・馬場小室山遺跡発掘調査報告書』第50集　1985
12　『和田南、宮前、西谷、和田西、大間木内谷、吉場遺跡発掘調査報告書』第58集　1986
13　『北宿・馬場北・馬場小室山遺跡発掘調査報告書』第62集　1986
14　『上野田西台遺跡発掘調査報告書』第73集　1987
15　『北宿遺跡発掘調査報告書』第99集　1988
16　『上野田西台遺跡（第４次）発掘調査報告書』第108集　1988
17　『会ノ谷遺跡発掘調査報告書（第２次）』第110集　1989
18　『谷ノ前遺跡発掘調査報告書』第115集　1989
19　『本杢遺跡発掘調査報告書（第３地点）』第122集　1989
20　『会ノ谷遺跡発掘調査報告書（第３次）』第145集　1991
21　『北宿遺跡発掘調査報告書（第17次）』第151集　1992
22　『大北遺跡発掘調査報告書（第６次）』第156集　1992
23　『子野上遺跡発掘調査報告書（第４次）』第159集　1992
24　『中原後遺跡発掘調査報告書（第７次）』第177集　1994
25　『井沼方遺跡発掘調査報告書（第12次）』第185集　1994
26　『上ノ宮遺跡発掘調査報告書』第186集　1994
27　『大久保領家片町遺跡（第13地点）』第215集　1996
28　『大崎東新井遺跡（第２次）、大崎北久保遺跡（第１次、第２次）、鶴巻西遺跡（第２次）発掘調査報告書』第216集　1996
29　『東裏遺跡発掘調査報告書（第３次）』第217集　1996
30　『井沼方遺跡発掘調査報告書（第16次）』第231集　1997
31　『井沼方遺跡（第13・14・15次）・井沼方南遺跡発掘調査報告書』第241集　1998
32　『太田窪貝塚発掘調査報告書』第255集　1999
33　『椚谷遺跡（第７次）・南方上台遺跡（第１次）・行谷遺跡（第２次）発掘調査報告書』第274集　2000
34　『東裏西遺跡（第２次）・東浦遺跡（第４次）・下野田稲荷原遺跡（第３次）・大門西裏南遺跡（第２次）発掘調査報告書』第277集　2000
35　『別所子野上遺跡発掘調査報告書（第９次）』第286集　2000

浦和市東部遺跡群発掘調査報告書　発行　浦和市教育委員会・浦和市遺跡調査会

36　『馬場北遺跡（第６次）　北宿遺跡（第10次）　松木北遺跡（第３次）　松木遺跡（第５次）』第８集　1987
37　『馬場北遺跡（第15次）　松木遺跡（第12次）』第14集　1990

大宮市文化財調査報告　発行　大宮市教育委員会

38　『染谷遺跡群発掘調査報告』第20集　1986

大宮市遺跡調査会報告　発行　大宮市遺跡調査会

39 『鎌倉公園遺跡』第９集　1984
40 『深作東部遺跡群発掘調査報告』第10集　1984
41 『北袋遺跡』第19集　1987
42 『Ｂ－92号・Ａ－230号・Ａ－61号遺跡』第20集　1987
43 『Ａ－239号遺跡』第27集　1989
44 『Ｂ－101号遺跡　Ｂ－7号遺跡』第28集　1989
45 『Ｃ－26号遺跡』第41集　1993
46 『深作稲荷台遺跡－第２・３次調査－　Ａ－137号遺跡』第44集　1994
47 『土屋下遺跡』第47集　1994
48 『丸ヶ崎遺跡群－Ⅰ－』第50集　1995
49 『三崎台遺跡－第３次調査－』第56集　1996
50 『御蔵山中遺跡－第３次調査－』第57集　1996
51 『峰岸北遺跡』第59集　1998
52 『Ａ－61号遺跡－第２次調査－』第62集　1998
53 『大和田本村北遺跡－第２次調査－』第64集　1998
54 『中里遺跡－第３次調査－』第68集　2000

与野市文化財調査報告書　発行　与野市教育委員会

55 『中里前原北遺跡　上太寺遺跡』第13集　1988

さいたま市遺跡調査会報告書　発行　さいたま市遺跡調査会

56 『側ヶ谷戸貝塚－第４次調査－』第９集　2002
57 『下大久保新田遺跡（第５次）　西堀上ノ宮遺跡（第３次）』第31集　2004
58 『善前南遺跡（第２次）』第35集　2004
59 『大谷場小池下遺跡』第42集　2005
60 『札之辻３号遺跡（第３・４・５・６次）　今宮２号遺跡（第14次）』第48集　2006
61 『本杢遺跡（第９地点）　中里前原北遺跡（第３次）』第51集　2006
62 『下野田稲荷原遺跡（第７次・第８次）　下野田本村遺跡（第３次）』第57集　2007
63 『下野田稲荷原遺跡（第10次）　下野田本村遺跡（第４～６次）　中野田堀ノ内遺跡（第１次）』第107集　2010
64 『中野田堀ノ内遺跡（第２・３次）　下野田稲荷原遺跡（第11次）　下野田本村遺跡（第７次）』第115集　2011
65 『立葉遺跡（第２次）』第132集　2015
66 『横根野方遺跡』第157集　2014
67 『日向北遺跡（第４・５次）』第160集　2014

川口市遺跡調査会報告　発行　川口市遺跡調査会

68 『篠八ツ・木曽呂北・木曽呂』第14集　1991
69 『行衛往還通・戸塚５丁目遺跡』第26集　2004
70 『戸塚５丁目遺跡』第34集　2005
71 『小谷場貝塚』第40集　2011
72 『戸塚５丁目遺跡』第41集　2012

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　発行　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

73 『札之辻・小井戸』第55集　1986
74 『稲荷台遺跡』第139集　1994

八王子市椚田遺跡調査会

75 『神谷原Ⅰ』　1981
76 『神谷原Ⅲ』　1982

前組羽根倉遺跡出土珠文鏡について

中井　歩

1．はじめに

古墳時代の日本列島では多くの銅鏡が古墳に副葬された。その生産や流通には政治的な動向が関係していたとされ、当時の日本列島の社会動態を明らかにするために多くの研究が重ねられている。

埼玉県内では古墳時代の銅鏡が約40面確認されている（東松山市教育委員会2015）。全国的にみると出土数は決して多くないが、稲荷山古墳出土の画文帯環状乳神獣鏡や東松山市の三角縁神獣鏡など、埼玉県の古墳時代を考えるうえで非常に重要な資料が含まれている。そのなかで本稿では埼玉県児玉郡神川町に所在する前組羽根倉遺跡で採集された鏡を対象に、その生産と流通について若干の考察を行う。また、出土地等の詳細は不明ながら、前組羽根倉鏡と類似する銅鏡が埼玉県立歴史と民俗の博物館に所蔵されている。この鏡についても合わせて報告したい。

2．前組羽根倉遺跡出土鏡（第１図左）

前組羽根倉遺跡は1981年５月に坂本和俊氏によって珠文鏡１面と管玉２点が表採されたのを契機に発掘調査が実施された。その結果、６基の方形周溝墓が発見され、珠文鏡は第２号方形周溝墓の上部から表採されたことが判明した。第２号方形周溝墓は7.94m×7.08mで、断面U字形の溝によって周りを囲まれている。方台部の中央に埋葬主体部があるが、副葬品は見つからなかった。また、周溝には３つの長楕円形の土壙が存在する。珠文鏡の表採地点はその土壙のひとつの上方であった。珠文鏡の採集状況からこれらの遺構との関係性を断言することは難しいが、隣接する第１号方形周溝墓の周溝内土壙から勾玉と管玉の破片が出土していることを考慮すると、珠文鏡も第２号方形周溝墓の土壙に伴う可能性が想定される（前組遺跡発掘調査団1986）。

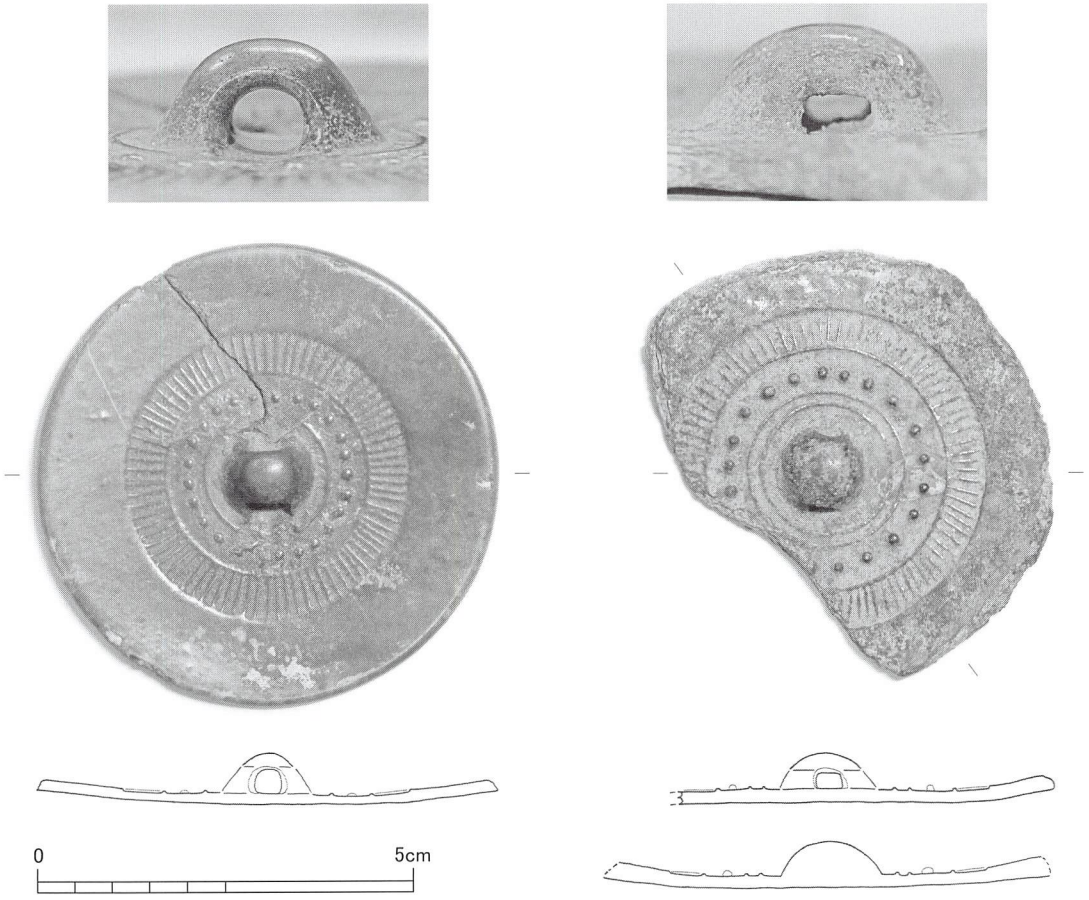
珠文鏡の観察所見は『前組羽根倉遺跡発掘調査報告』（以下、報告書）で詳しく記述され、その後塩野博氏によっても紹介されており（塩野2002）、重複する部分も多いが今回筆者が実見することで得られた所見を以下に記す。

一部に外区から内区にかけて大きなひびが入っているものの、ほぼ完形であり、文様も明瞭に確認できる。鏡面・鏡背ともに深緑色を呈しており当時の色調は不明だが、銅質・鋳上がりは良好である。面径は6.1cm、厚さは内区が1.0㎜、外区は1.5㎜である。外区は平縁で、縁部は丸みを帯びている。外区の反りは1.5㎜程度で顕著ではないが、凸面鏡である。鈕は径1.25cm、鏡背面からの高さが0.5cmの半球形で、鈕座はない。鈕孔は底部の幅3.5㎜、高さ3.0㎜の円形を呈し、鈕孔設置面は鏡背面と同一の高さである。

無文の外区の内側に幅5.5㎜の櫛歯文帯がめぐり、内区には径が約1.5㎜の珠文が一列に25個施文されている。珠文の並びはあまり整然としておらず、特に写真下側の鈕孔周辺の珠文は円

が崩れ、右隣との間隔が広くなっている。珠文の内側には円圏がめぐり、その内部に半球形の鈕が設置される。両方の鈕孔付近で円圏に鋳崩れが認められる。

鏡面と鏡背面の凸部は丁寧に研磨されており、現在も鈍い光沢を放つ。鏡背面に赤色顔料が付着しており、特に櫛歯文帯に顕著である。



第１図　前組羽根倉遺跡出土鏡（左）と歴史と民俗の博物館所蔵鏡（右）（S=1/1）

３．歴民と民俗の博物館所蔵鏡(第１図右)

約４分の１が欠損しており、鏡面・鏡背面・破断面に錆が生じている。しかしながら、文様は非常に鮮明であり、錆に覆われていない箇所では銀白色の金属面を確認することができ、銅質・鋳上がりは良好である。復元面径は5.9cmである。錆のため精度に欠けるが、推定の厚さは内区が1.5～2.0㎜、外区は2.0㎜である。外区は平縁で、縁部の形態は錆のため観察できない。外区の反りは1.0㎜程度で顕著ではないが、凸面鏡であると判断できる。鈕は径1.3cm、鏡背面からの高さが0.5cmの半球形で、鈕座はない。鈕孔は底部の幅3.5㎜、高さ2.0㎜の方形を呈し、鈕孔設置面は鏡背面と同一の高さである。

無文の外区の内側に幅4.5㎜の櫛歯文帯がめぐり、内区には径約2.0㎜の非常に立体的な珠文が一列に施文されている。配列はあまり整然としておらず､珠文の間隔にバラつきがみられる。珠文の内側には２重の円圏がめぐり、その内部に半球形の鈕が設置される。

錆に覆われていない箇所では光沢が確認され、鏡面・鏡背面の凸部は研磨で仕上げられたと考えられる。

4．前組羽根倉遺跡出土珠文鏡の位置づけ

前組羽根倉鏡と歴民所蔵鏡のように珠文が内区の主要な文様となっている鏡は「珠文鏡」と呼ばれる。では、前組羽根倉遺跡の珠文鏡はいつ、どこで作られ、どのような経緯でこの地にもたらされたのだろうか。以下では、珠文鏡に関する先行研究を整理し、それを踏まえ類例を検討することで、この問いについて考えていきたい。

(1)珠文鏡に関する研究史

内区に珠文が施される鏡を「珠文鏡」と呼ぶが、一口に「珠文鏡」と言ってもすべてが同じ文様をしているわけではなく、珠文の配列や外区文様にはいくつもの種類があり、それらが組み合わさって多様な様相を示している。また、全国から出土しておりその量は非常に多い。面径は多くが10cm以下に留まり、古墳時代の鏡のなかでも最も小さい系列のひとつである。

では、珠文鏡はいつ作られたのだろうか。かつて古墳から出土する小さな鏡は、大きな鏡が時を経て簡略化されたものであり、古墳時代のなかでも新しい時期に位置づけられてきた。したがって、珠文鏡も古墳時代中期以降に位置づけられてきたのである(小林行雄1965、樋口1979など)。しかし、出土遺構の時期を検討することにより、従来の変遷観よりも古い時期から面径の小さな鏡も出現している可能性が指摘されるようになった(森1970、小林三郎1979、東中川1975、今井1991など)。現在は、珠文鏡を含む小型鏡が古墳時代前期から存在していたという見解が共通となっている(森下1991、林2005、脇山2013、岩本2014など)。加えて、珠文鏡の出現が古墳時代前期でもより古い時期に遡る可能性も指摘されており、研究の進展によって珠文鏡の年代観は大きく変わったといえよう。

以上、見てきたように珠文鏡は古墳時代前期に出現し後期まで継続する長期的な系列である。そのような時期幅の広さが、先述した珠文鏡の多様性に反映されているのであろう。そこで、珠文鏡のなかでの前後関係を明らかにするために、各研究者によって分類・編年が検討されるようになった。各研究者で若干の相違はあるが、珠文が一列・二列、あるいは外区が無文・鋸歯文の珠文鏡が古墳時代前期に位置づけられる。さらに、古墳時代前期のなかでも、外区が無文のものが最も古く、その後に鋸歯文をもつ珠文鏡が出現するといった前後関係も指摘されている(森下1991、脇山2013、岩本2014)。

前組羽根倉遺跡の報告書が刊行されたのは1986年である。まさに、従来の変遷観が根強い中で、小さな鏡の出土時期が遡ることが明らかとなってきた時代であった。珠文鏡を表採した坂本氏はその年代を決めるにあたり、森氏(森1970)や東中川氏(東中川1975)の論稿に触れ、珠文鏡が古墳時代前期に遡ることは明らかであるとの見解を示している。そして、前組羽根倉鏡の類例として千葉県新皇塚古墳や福岡県宮ノ本遺跡出土鏡をあげ、それらと近似する年代を与えている(前組遺跡発掘調査団1986)。外区が無文で一列の珠文をもつ前組羽根倉鏡を古墳時代前期に位置づける坂本氏の見解は、現在の編年案でも矛盾をきたさない。一方で、研究の進展に伴い新たな問題も生じている。それは、前組羽根倉鏡のような珠文鏡が古墳時代前期のなかで

もどこまで遡りうるのか、という問題である。

では次に、珠文鏡はどこで作られたのだろうか。古墳時代の鏡には、日本列島で作られたものと、中国大陸で作られ日本列島に持ち込まれたものがある。珠文鏡は一部が韓半島から出土するが、その大半は列島内であり日本で作られた鏡(以下、倭製鏡)であると考えられている。倭製鏡の生産は古墳時代前期に始まり、40cmを超えるものから10cm以下ものまで多様な面径・デザインの鏡が作られる。それらは文様や高い鋳造技術の共有から、限定的な生産体制が想定されており、分布のあり方からその管理主体は近畿中央政権であったというのが現在の共通見解となっている。しかし、珠文鏡のような非常に小さな鏡群については見解が分かれるところである。ひとつは、他の倭製鏡と同様に近畿中央政権の管理下での限定的な生産体制を想定する見解である(今井1991、脇山2013)。もうひとつは、限定的な生産体制ではあるが、近畿中央政権以外の管理主体を想定する見解である(小林三郎1979、楠元1993)。最後は、各地での分散的な生産を想定する見解であり(林2005)、議論が続いている。

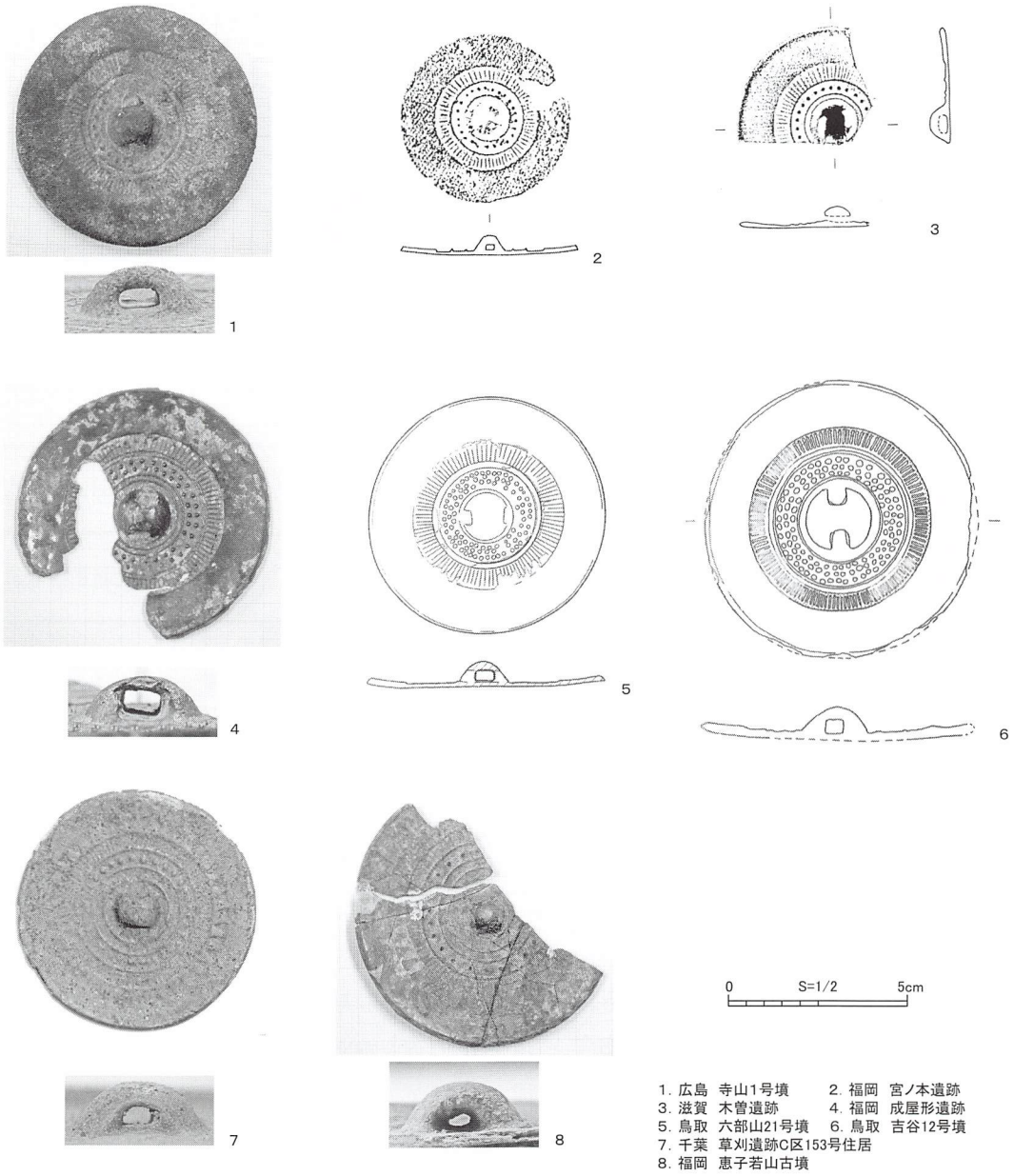
(2)前組羽根倉鏡の類例と前期珠文鏡

前組羽根倉鏡や歴民所蔵鏡と同様に一列の珠文で外区が無文の珠文鏡を図2の1～3に示した。全国では24面確認されている。これらは文様構成だけではなく、鈕孔形態や銅質・鋳上がりといった技術的な属性にも共通点がみられる。倭製鏡の鈕孔形態は方形と円形・半円形に大別されるが、一列の珠文で外区が無文の珠文鏡の鈕孔形態は大半が方形である。前組羽根倉鏡のような円形鈕孔は例外的であり、現在確認しているなかでは千葉県花前Ⅱ-1遺跡出土鏡と合わせて2面のみである(1)。また、銅質や鋳上りは原材料の配合比や鋳造技術に起因する属性である。正確な分析には理化学的な手法が必要とされるが、色調などの観察による良・不良の判別も一定の有効性はあると考える。一列の珠文で外区が無文の珠文鏡は、色調が黒鉛色や銀白色を呈し銅質が良好な資料が多い。さらに、文様は明瞭に鋳出され、鋳造技術の精巧さがうかがえる。特に、歴民所蔵鏡は錆で覆われているにもかかわらず文様は立体的に鋳出されており、金属面が露出している箇所では銀白色の輝きが確認できる。

次に、外区は無文であるが珠文が二列以上ものを第2図4～6に提示した。全国で17面を確認している。前組羽根倉鏡や歴民所蔵鏡とは珠文の配列が異なるが、鈕孔形態は確認できるすべてで方形であり、銅質や鋳上がりも良好な資料が多い。つまり、外区が無文の珠文鏡は珠文の列数に関わらず共通の技術的特徴を有していると言える。

一方で、前組羽根倉鏡と同時期の古墳時代前期には外区に鋸歯文をもつ珠文鏡もある(第2図7・8)。ここから、古墳時代前期において外区が無文の珠文鏡をA群(第2図1～6)、鋸歯文のものをB群(第2図7・8)とし、これまで着目してきた鈕孔形態と銅質・鋳上がりについて両者を比較したい。A群は41面、B群は27面を集成している。まず、鈕孔形態であるが、A群では方形鈕孔が大半であるのに対し、B群は円形・半円形が多い傾向にある(第3図)。また、銅質や鋳上りは、A群が良好な資料が大半であるのに対し、B群では濁った黄緑色を呈し非常にもろい資料が多い。ただし、B群でも銀白色を呈する良好な資料が確認でき、多様な様相を示している。

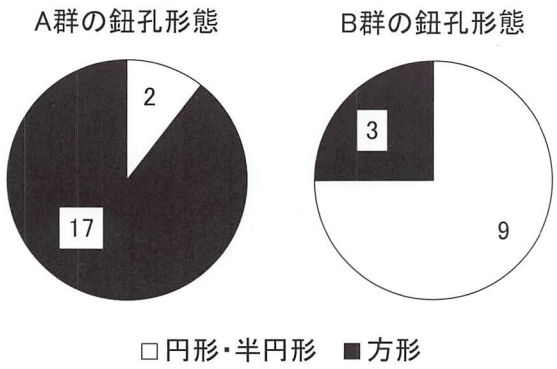
以上から、外区が無文の珠文鏡(A群)と鋸歯文をもつ珠文鏡(B群)は文様だけではなく製作



第２図　前期珠文鏡 (2)

技術においても異なる傾向を示すことが分かった。そして、先行研究では外区が無文のものが鋸歯文をもつものよりも古い可能性が指摘されている(森下1991、脇山2013)。改めて、A群とB群の出現時期を出土遺構の時期から検討したところ、A群では京都府馬場遺跡出土例が古墳時代初頭で最も古い。他にも、鳥取県六部山21号墳出土鏡など古墳時代前期前半の遺構から出土する事例が散見される。前組羽根倉鏡は前述した採集の状況より出土遺構を確定させることは難しいが、方形周溝墓からは古墳時代前期前半の土器が出土しており、鏡の時期を考える参考になる。一方で、B群では東京都砧中学校７号墳など古墳時代前期後半からの出土例が最も古く、A群のように古墳時代初頭まで遡る資料はみられない。このようなA群とB群の出現時期の違いは先行研究の指摘を追認する結果となった。

ここまでの比較結果を第４図にまとめた。様々な相違点をもつA群とB群の関係については、珠文鏡以外の前期倭製鏡全体を踏まえて検討する必要がある。それは別稿に譲り、ここからは前組羽根倉鏡を含むA群に限定して考察を進めたい。



第３図　鈕孔形態比較

	外区	鈕孔形態	銅質・鋳上がり	出現時期
珠文鏡A群	無文	方形主体	良好	古墳時代初頭
珠文鏡B群	鋸歯文	円形・半円形主体	良好／不良	古墳時代前期後半

第４図　前期珠文鏡A群とB群

（３）前期珠文鏡Ａ群の生産と流通

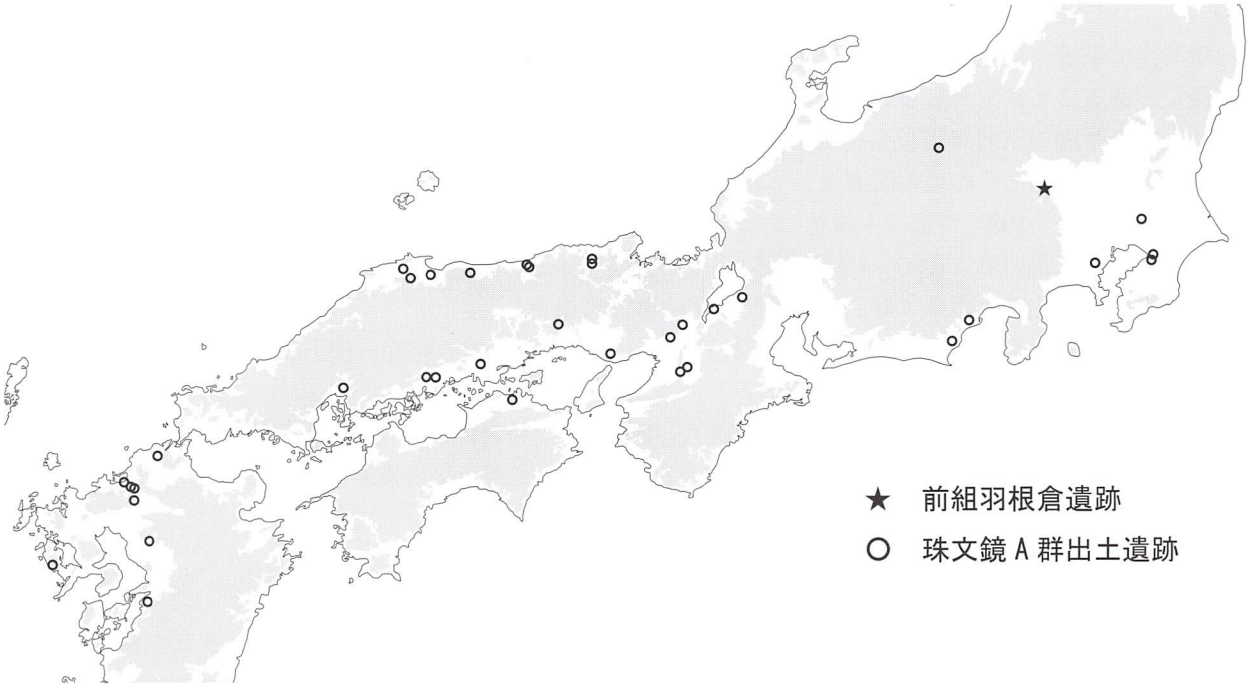
A群の出現時期は前述したとおり古墳時代初頭である。さらに、古墳時代前期前半の遺構からの出土が多いことや古墳時代中期以降に下る資料がほとんどないことから、製作時期の主体は古墳時代前期前半にあり、少なくとも前期のうちに生産は終了したと考えられる。

また、前項で見たような鈕孔形態や銅質・鋳上がりといった技術的属性の共通性から、各地域でそれぞれ製作するような分散的な生産体制ではなく、一定の管理下のもとで製作された限定的な生産体制が想定される。また、第５図に珠文鏡A群の分布図を示した。分布は九州から関東までの広域に及んでおり、各地域が、珠文鏡A群の生産・流通に関与していた地域との関係のなかで鏡を入手した状況を想定することができる。

具体的な製作地は、鋳型が発見されていないため当時の銅鏡・青銅器生産のあり方との関係から考察しなければならない。今回取り上げた前組羽根倉遺跡は、現在の考古資料の状況からは近隣で銅鏡を生産した可能性は考え難い。また、第５図で示した分布からも前組羽根倉遺跡周辺が珠文鏡A群の製作地であった可能性は低く、遠隔地との関係のなかで入手したものと考えられる。

５．おわりに

ここまで、前組羽根倉鏡と歴民所蔵鏡を紹介し、古墳時代前期の珠文鏡の生産と流通について若干の考察を行った。前組羽根倉鏡と歴民所蔵鏡を含む珠文鏡A群は古墳時代初頭から製作が開始され、列島各地に分布する。その生産は各地で分散的に行われたのではなく、ある限定



第5図　前期珠文鏡A群の分布

的な地域で生産され各地に流通したと考えられる。前組羽根倉遺跡で方形周溝墓を営んだ人々も、他地域との関係のなかで銅鏡といった希少な器物を入手したのであろう。珠文鏡A群の生産が開始される時期は、近畿地方を中心に大型の前方後円墳が作られ始める時期であり、それ以前の地域間関係や器物の流通のあり方が大きく変容する時期である。そのなかで、珠文鏡A群が製作された意義を改めて考える必要がある。そのためには、当時列島で流通していた他の銅鏡の動向や銅鏡以外の器物、それらが媒介となる地域間関係の動態と合わせて考察しなければならず、今後の大きな課題としたい。

埼玉県では古墳時代の銅鏡の出土数が他県に比べて多くはない。さらに、大型の鏡はあまり見られず、小型の鏡が多い。しかしながら、今回取り上げた２面のように面径が10cm以下の小型鏡でも、当時の社会を考えるうえで非常に重要な考古資料である。筆者の力不足から多くの論点を残してしまったが、これからも資料の観察と集成を継続しその成果を公表していきたい。

本稿は、平成27年度九州史学会大会考古部会にて口頭発表を行った内容の一部をもとに執筆したものである。また、資料の調査や掲載につきまして、下記の諸機関に便宜を図っていただきました。ここに記して、厚く御礼申し上げます。

九州大学考古学研究室、埼玉県立歴史と民俗の博物館、千葉県教育委員会、広島県府中市教育委員会

《註》

（1）現時点で筆者が鈕孔形態を確認できていない資料もあり、今後増加する可能性も考えられるが、方形が優位であることは変わらないと考える。

（2）1（広島県府中市教育委員会所蔵）、4・8（九州大学考古学研究室所蔵）、7（千葉県教育委員会所蔵）は筆者撮影。その他の図面は、下記の報告書から引用した。

2　山本信夫　1980『宮ノ本遺跡』太宰府町の文化財第3集　太宰府町教育委員会

3　堀真人・重岡卓　1999『木曽遺跡Ⅲ』ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書　滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会

5　高田健一・東方仁史　2013『古郡家1号墳・六部山3号墳の研究－出土品再整理報告書－』鳥取県立公文書館県史編さん室

6　濵隆造・下江健太・大川泰広・浜田真人　2003『吉谷遺跡群』一般国道180号道路改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ　鳥取県教育文化財団調査報告書84　財団法人鳥取県教育文化財団・鳥取県埋蔵文化財センター

《参考文献》　※紙面の都合上、報告書は割愛させていただきました。

今井堯　1991「中・四国地方古墳出土素文・重圏文・珠文鏡－小形倭鏡の再検討Ⅰ－」『古代吉備13

岩本崇　2014「銅鏡副葬と山陰の後・終末期古墳」『兵庫県香美町村岡文堂古墳』大手前大学史学研究所・香美町教育委員会編

楠元哲夫　1993「古墳時代仿製鏡製作年代試考」『大和宇陀地域における古墳の研究』

小林三郎　1979「古墳時代倣製鏡の一側面－重圏文鏡と珠文鏡－」『駿台史学』46

小林行雄　1965『古鏡』

塩野博　2002「埼玉県出土の銅鏡－古墳時代を中心として－」『埼玉県立博物館紀要』27

林正憲　2005「小型倭鏡の系譜と社会的意義」『待兼山考古学論集』

東松山市教育委員会　2015『三角縁神獣鏡と3～4世紀の東松山発表要旨資料』

東中川忠美　1975「珠文鏡について」『恵子若山遺跡』

樋口隆康　1979『古鏡』

前組遺跡発掘調査団　1986『前組羽根倉遺跡発掘調査報告』

森浩一　1970「古墳出土の小型内行花文鏡の再吟味」『日本古文化論攷』

森下章司　1991「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』74-6

脇山佳奈　2013「珠文鏡の研究」『史學研究』279

埼玉古墳群の成立

関　義則

はじめに

埼玉県行田市に所在する埼玉古墳群が、大型の前方後円墳・円墳・方墳から構成され、その密集度と造営の長期継続性という点で古墳時代後期における東国屈指の古墳群であることに異論は無いであろう。

墳丘長120mの前方後円墳である埼玉稲荷山古墳がこの古墳群で最初に造営された大型古墳であり、その時期は出土遺物からおおむねＴＫ23～47型式期と考えられる(1)。稲荷山古墳の造営以前には、さきたま地域周辺はもとより旧埼玉郡や大里郡域においてもほとんど古墳の存在を認めることができず、そのため埼玉古墳群成立の契機や被葬者の系譜を巡っては、これまでも多くの議論が展開されてきた。

古くは甘粕健氏が南武蔵地域と北武蔵地域の古墳の消長を対比的にとらえ、『日本書紀』安閑天皇の条にある武蔵国造の乱の記事と結びつけ、毛野地域の勢力や畿内勢力との関係性をも踏まえてダイナミックに論を展開したことは、のちに記事の信憑性に係る議論が提起されたことや両地域の古墳編年の確立に伴い両者の間にはかなりの時間的懸隔が存在することが判明した今日に至ってもなお埼玉古墳群の性格付けに関わる議論に大きな影響を与えて続けている（甘粕1970）。

1990年代に入って、国道建設や大規模公園整備事業等に伴う発掘調査によって、埼玉古墳群の北側に広がる妻沼低地においては5世紀後半頃から集落が急増する傾向が確認されるようになり、そうした事象を背景に埼玉古墳群被葬者の出自について、利根川中流域にあたる妻沼低地の開発に成功した豪族が勢力を伸張して埼玉古墳群を築いたとするいわば在地首長の自律的な発展説が提唱された（吉川1998・中村1999）。確かに古墳被葬者の経済基盤を考える上で、集落の動向と古墳の成立を関連づける議論は重要であるが、言うまでもなく古墳の造営やその規模は、在地の豪族の農業生産力の多寡にのみ依拠しているわけでなく、畿内王権との政治的な関係性が深く関わっているのであって、集落増を根拠とした農業生産力の向上をひとつの内在的な要因とすることは出来ても、古墳造営の契機となるか否かについては慎重な判断が必要である。この地域における大型古墳の寡占的な状況は、経済基盤を耕地に求めるだけでは十分な説明がつかず、むしろ多様な生産基盤を想定する必要がある（田中1989、関2014）。

1978年に稲荷山古墳から出土した鉄剣から辛亥年で始まる銘文が発見されて以降は、銘文の解釈のひとつとして鉄剣とともに埋葬された被葬者を中央豪族とする立場から、被葬者について畿内からの派遣将軍説も提示されるようになった（飯塚1986　清水1995など）。地政学的な視点から、埼玉古墳群の性格を独立性が強く強大な勢力を保持していた毛野地域に対する畿内王権の橋頭堡とする発想は、『日本書紀』にある武蔵国造の乱に依拠した甘粕氏以来の通説とも言えるものであり、それに銘文の解釈をうまく整合させたということであろう。

しかしながら、既に白石太一郎氏をはじめとして多くの指摘があるように銘文鉄剣が副葬されていた礫槨は追葬であって稲荷山古墳の主たる埋葬主体部ではない可能性が極めて高いことから、遺構の状況から判断する限り埼玉古墳群の成立そのものに畿内からの派遣豪族説を採用することはやや無理があるように思う。

最近では、金井塚良一氏が行った甘粕説批判を踏まえ、埼玉稲荷山古墳に比企地域産の埴輪が用いられていることなどを根拠として比企地域に本貫地をもつ勢力によるさきたまの地への移動説が提起されている(城倉2009)。確かに比企地域のうち高坂台地と吉見丘陵に挟まれた地域は、古墳時代前期には北武蔵地域の中でも極めて高度な地域社会が形成されたと考えられる地域であり有力な古墳が多数造営されていることから、比企地域からさきたま地域への首長の移動は妥当なようにみえる。しかしながら、近年の研究成果に拠れば墳丘長115mと推定される比企地域最大の前方後円墳である野本将軍塚古墳は従来の５世紀中頃もしくは後半ではなく４世紀末から降っても５世紀初頭に位置付けることが妥当であり、それに従えば比企地域では遅くとも中期初頭の時期には大型古墳の造営は一旦停止し、中期段階には見るべき古墳が造営されておらず、埼玉古墳群の最初の大型古墳である稲荷山古墳とは時間的な懸隔が大きい(2)。

また、坂本和俊氏は、木棺の構造と被葬者の出自は関連するとの前提のもと、千葉県市原市山王山古墳の粘土槨・舟形木棺に注目するとともに、同じ千葉県姉ヶ崎二子塚古墳と埼玉稲荷山古墳の墳丘や周堀形態が一致するなどの考古学事実に加えて、『国造本紀』における无邪志(武蔵)国造と上海上国造とが同祖同族関係にあるとする記述、さらには武蔵国造の子が菊間国造になったといった記事をもとに両地域の豪族間には強い結びつきが認められるとし、「稲荷山古墳は、東京湾東岸の姉ヶ崎古墳群を形成した勢力の一派が、膳氏や大王の配下として、埼玉地域に進出して築造した」と述べ、文献と考古資料を駆使して説得力のある論を展開している(坂本2001)。

一般に、墓誌の存在しない日本列島の古墳被葬者の出自を特定することは、文献資料が残されていない限り考古学資料のみで追究することは極めて困難である。埼玉古墳群に関しては、『日本書紀』の記事や鉄剣の銘文といった他の古墳とは異なる稀有な文献史料が残されているとはいえ、それらも複数の解釈の余地があり、また文献ごとに異なった解釈が成り立つことから、参考にはなっても決め手にはなり難い。さらに、副葬品や埴輪の系譜、古墳形態の類似性が被葬者の出自を示すものか否かについては、なお検討を要する課題である。

このような諸説に対して、白石太一郎氏は、埼玉稲荷山古墳が造営された時期は他地域においても新たに有力な前方後円墳が出現した時期であり、こうした現象は東日本とりわけ関東全域で広範に認められる現象であるとして、埼玉古墳群の出現もまた汎列島的な動向の中で理解すべきであることを示唆し、ともすると個別的な事情にとらわれがちな古墳群出現の契機に関する議論に注意を促した(白石2001)。

埼玉古墳群の各古墳の施設には、古墳群の成立期から存在している二重周堀や中堤造出し、人物埴輪を含む形象埴輪群など他の古墳との関連性を確認できる要素もあり、そうした古墳の諸要素の追究は直接的な被葬者の系譜には直接は繋がらないかもしれないが、古墳造営の契機を追究する鍵となるものと考える。

そこで本稿では、古墳そのものや遺構の構造など考古学的な分析から埼玉古墳群成立の事情について検討することにしたい。

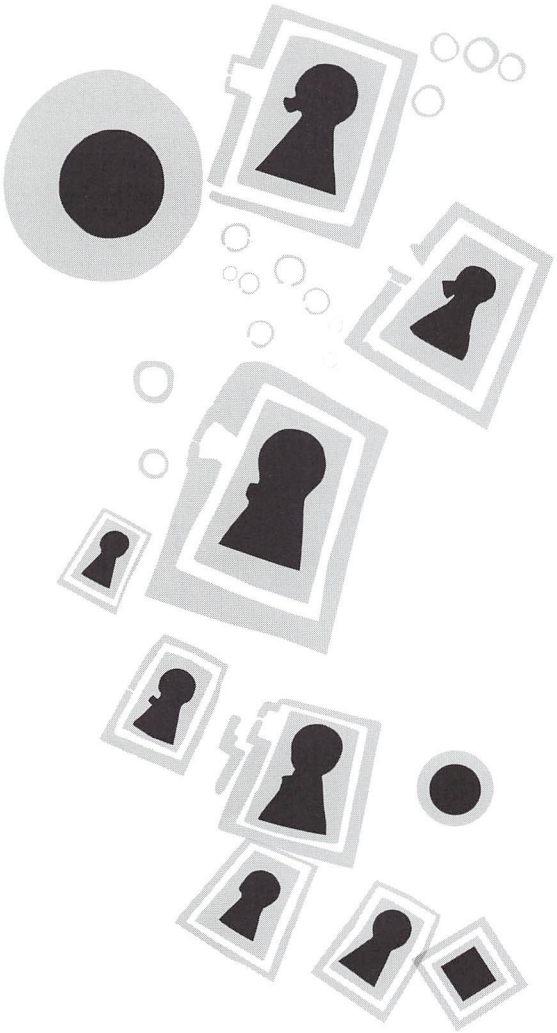
1　埼玉古墳群の特徴と系譜

(1)埼玉古墳群における周堀

埼玉古墳群では、全ての前方後円墳と方墳において周堀は全周するものと推定され、また中堤を挟み内堀と外堀の分かれる、いわゆる二重周堀となっている(3)。

なお、鉄砲山古墳ではトレンチ調査の所見ではあるものの、古墳西側の調査において外堀の外側にさらに周堀が確認されており、中堤造出しのある古墳の西側には三重目の堀が巡る可能性が大きい。今のところ埼玉古墳群の前方後円墳で三重の周堀が確認されているのは鉄砲山古墳のみであるが、部分的に三重の周堀となる事例としては、群馬県七輿山古墳や福岡県塚堂古墳などでも確認されており、数は少ないながらも類例は存在する。ここでは、以下二重および三重の周堀を含め、多重周堀と呼ぶこととする。

一方で埼玉古墳群では外堤の存在は確認されていない。この付近は関東造盆地運動と呼ばれる構造的な沈降作用によって地盤沈降が進行しており、また後世に広く水田化が進められたため、小円墳など低位の構造物はほとんど耕作によって削平されてしまっていることから、仮に外堤が巡っていたとしてもその痕跡はとどめていない可能性も考慮に入れる必要がある。ただ、現状を観察する限り各古墳は周堀を接するように造営されていて、外堤を造成する余地がないことも事実であり、古い地籍図等においても外堤の痕跡は認めることができないことから、もともと外堤は存在しなかった可能性が大きい。この点については湛水する濠に外堤を備えている古墳と異なり、さきたま古墳群の周堀は、その当初から堀に滞水していなかったことと関係するのかもしれない。



第１図　埼玉古墳群配置図

二重周堀の形態については、全ての前方後円墳において、後円部側の隅が墳丘の弧と並行せずに角をもって巡る長方形の周堀となっており、この古墳群の際立った特徴の一つとなっている(4)。実際には、周堀の形態は後円部側が前方部側と比べ辺の長さが短く、台形もしくは矩形を呈

しているが、ここでは従前に従い「方形周堀」と呼称することとする。

各古墳の周堀形態は方形を基調とするものの細部にはかなり違いが認められる。稲荷山古墳の周堀は、外堀外線についてはほぼ均整のとれた左右対称形であるが、中堤が歪んで造作されているため、内堀と外堀の幅は場所によって広狭が認められる。

二子山古墳の周堀は昭和40年代の整備工事によって後円部側の隅がやや丸みを帯びた形態に復元されていたが、平成28年度に内堀隅部の調査を実施したところ明確に角に曲がることが確認された。この古墳では外堀西側の辺長が東側よりも長く、平面形で見ると大きく歪曲した形態となっている。このような歪みは、西側に大きな中堤造出しを設けたことが理由の一つと考えられるが、西側から古墳を眺望した際により大きく荘厳に見せる工夫でもあったと推測している(関2014)。鉄砲山古墳においても、正面に当たる西側の外堀に比べ東側の外堀は相対的に貧弱であり、かつ西側のみに三重に堀を巡らせているなど、西側からの古墳正面観を重視した造作となっている。

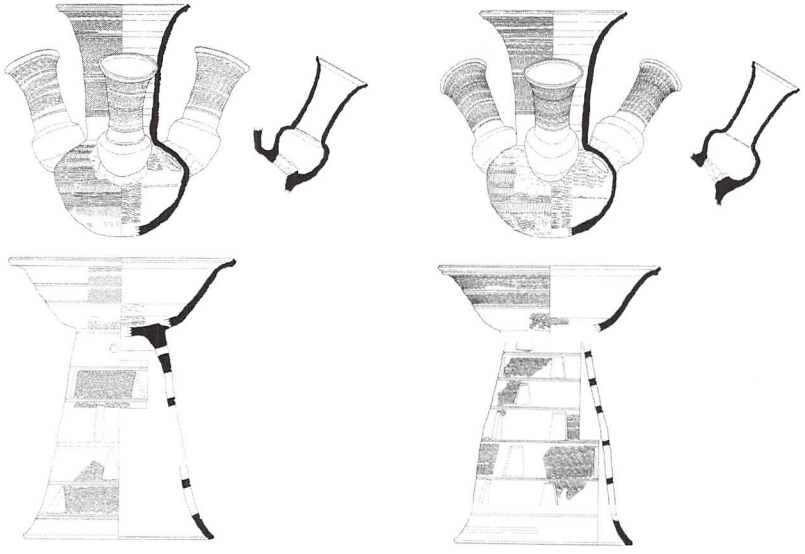
周堀の歪みは瓦塚古墳においても認められる。同古墳では前方部ラインが主軸に直交していないことから剣菱形に復元されたこともあったが、むしろ墳丘や周堀の歪みによってと左右非対称となったととらえるほうが妥当である。

奥の山古墳は、他の古墳と異なり西側の側辺が東側と比べ著しく短く後円部側の周堀が矩形となっている。北側で隣接する鉄砲山古墳の前方部側周堀も他の辺と比べ幅が狭くなっていることから、互いに周堀が交錯しないよう配慮したためにこのような歪みが生じたものと推測される。

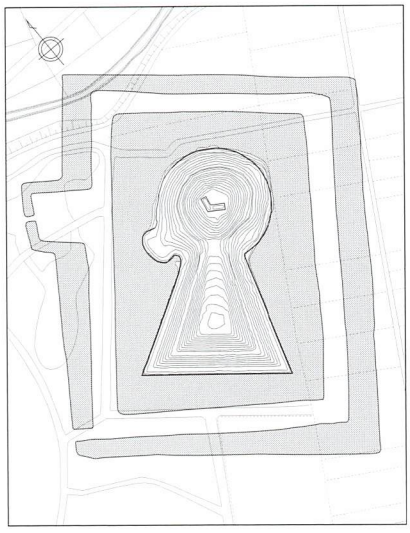
愛宕山古墳や中の山古墳は部分的な調査であるが周堀の側辺がやや内側に湾曲している状況が確認されている。調査範囲が限定されているため全体の形状を正確に復元することはできないものの、これらも意図的な屈曲というよりも施工時の歪みの範囲内ととらえておきたい。

(2)二重堀に関連する付帯要素

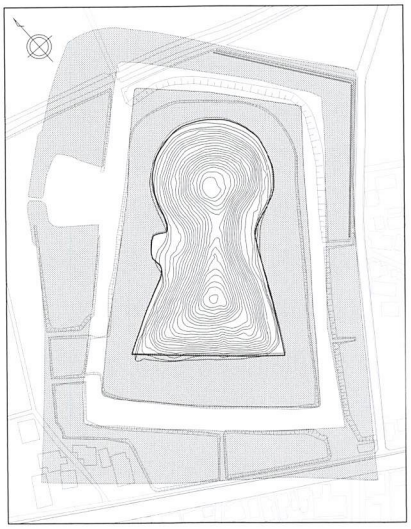
これまで述べたように埼玉古墳群の前方後円墳は全て二重(鉄砲山古墳は一部三重)の周堀を備えている。言うまでもなく周堀は単独で存在しているわけではなく、墳丘を取り巻き墳丘と密接に関連する施設であることから規模や形状について墳丘に規定される部分も多い。また、周堀には土橋などの付帯施設が設けられることがあり、さらに内堀と外堀を分かつ中堤上では張出部を設けたり各種儀礼が執行された痕跡も認められるなど、単に墳丘の視覚的な効果を高め



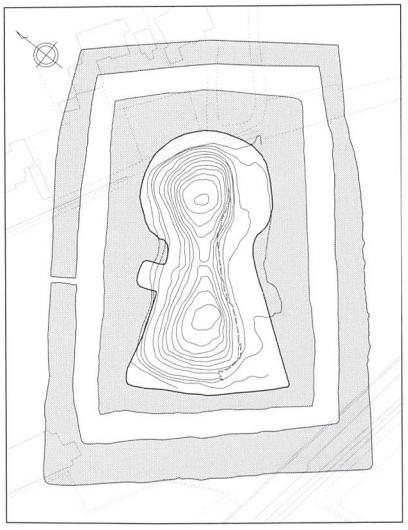
第2図　奥の山古墳墳丘造出し出土須恵器



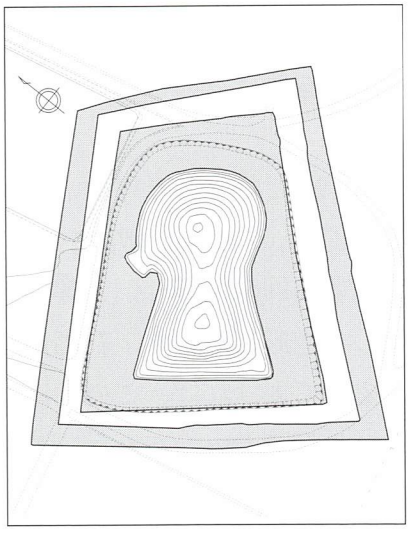
稲荷山古墳



二子山古墳



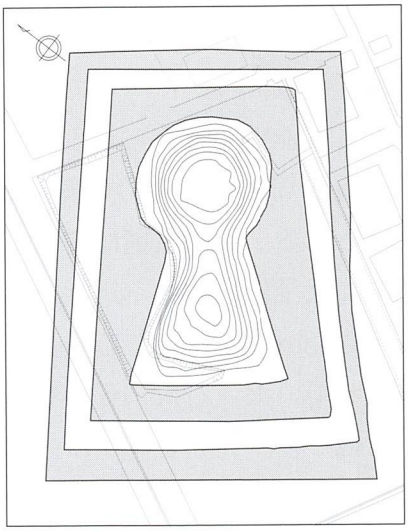
瓦塚古墳



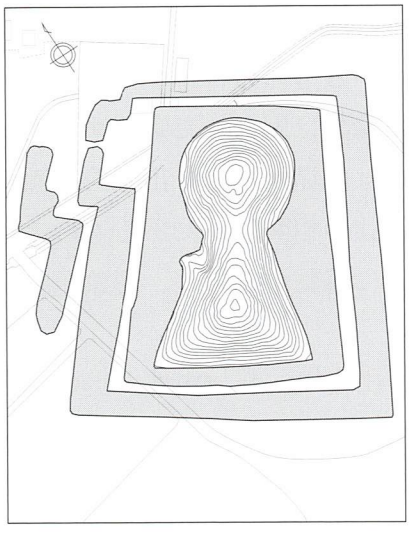
奥の山古墳



将軍山古墳



愛宕山古墳



鉄砲山古墳



中の山古墳

第 3 図　埼玉古墳群の多重周堀

たり墳丘への物理的な進入を遮断したりする機能を超えて、墳丘と一体となって、葬送儀礼を執行する場としての機能を果たしていたと考えられる。ここでは、周堀と強い相関を示すと考えられる遺構について簡単に整理しておくことにする。

既に別稿で指摘したとおり、稲荷山古墳、二子山古墳、将軍山古墳の3基の古墳では、墳丘の造出しと別に中堤の一角に外堀に向けて張出部を設けている(関2014)。それらをここでは中堤造出しと呼ぶ。詳述は控えるが、中堤造り出しは人物埴輪を中心とした形象埴輪群を設置する場所として成立したもので、代表的な例としては真の継体天皇陵とされる大阪府高槻市の今城塚古墳があげられる。この古墳では中堤の外堀寄りに長大な張出部が設けられ、形象埴輪群が配置されていることが調査によって判明している。ただし、群馬県保渡田古墳群の八幡塚古墳や埼玉古墳群の瓦塚古墳のように造出し状の張出部を設けずに中堤上に形象埴輪群を配置している事例も存在する。

これに関連して、極めて初期の人物埴輪(女子頭部)が大山古墳(伝仁徳天皇陵古墳)の内堀と外堀を隔てる堤上付近から出土したとする伝承が注目される。この伝承に従えば大山古墳においてもまた人物埴輪が中堤上に置かれていた可能性が大きい。そうすると人物埴輪を含む形象埴輪群の設置場所については、中堤上が本来の設置場所であり張出部を設けるのはその派生形である可能性も考えられる。

一重の周堀で周堀の外側に張り出しを設ける事例としては、福岡県八女市の岩戸山古墳が挙げられる。この古墳は6世紀前半の築造と考えられている墳丘長135mの前方後円墳であり、記紀に反乱伝承のある筑紫君磐井の墓と推定されている。周堀の北東隅外側に「別区」と呼ばれる一辺43mの巨大な方形区画が設けられ、阿蘇溶結凝灰岩を加工して造形した石人・石馬が配置されていた。石人・石馬を人物埴輪や馬形埴輪と同種のものと認めてよければ、この別区もまた他の多重周堀を有する古墳の中堤造出しと同じ機能をもつものとみてよいであろう。しかしながら、このような多重周堀とならない古墳における別区は極めて特殊な存在であり、やはり形象埴輪群を何らかの区画内に配置するという意識のもとに外堀の内側に設置するというのが、本来の姿であったとみてよいであろう。一重の周堀とされる宮崎県の百足塚古墳では、周堀の外側で外堤上付近から人物埴輪を含む形象埴輪群が出土しているものの、外堤の外側に外周溝が存在している。このようにみると、人物埴輪を含む形象埴輪群は周堀を二重化するための中堤の造作と同時期に成立した可能性が大きく、中堤上あるいは中堤から張り出した区画上に形象埴輪群が主に設置されていることから、両者は二重周堀と強い相関関係にあるものといえる。形象埴輪群が時代が下がるとともに墳丘裾や中段テラス等に移動するのは、形象埴輪祭祀の変容を示すものとの指摘が既になされている(小浜2008)。

また、埼玉古墳群の8基の前方後円墳のうち稲荷山古墳・二子山古墳・瓦塚古墳・奥の山古墳・鉄砲山古墳・将軍山古墳の6基の古墳において、墳丘に造出しが付設されている。北武蔵地域において、現状で確認できる限り明確に墳丘造出しを伴うのは埼玉古墳群中の各前方後円墳だけであり、また各古墳の造出しの設置場所は、南北方向を墳丘の主軸方位とみた場合、中堤造出しと同一方向である西側に限られている。

墳丘造出しについては、いずれの造出しからも大型器台や器台に乗る子持ち装飾付壺、壺、

高坏などの須恵器が集中して出土しており、ここが飲食供献儀礼の場所として機能したものであったことは疑いない。時期が新しくなると墳丘造出しからも形象埴輪等が出土するようになるが、それも時期の下降に伴う変容であると思われ、本来は飲食供献儀礼の場所として、同一方向に設けられた形象埴輪群を設置する中堤造出しと対になり古墳祭儀の機能分担をしていたと考えられる。このことから、墳丘造出しもまた中堤造出しを介して、多重周堀と相関をもつと言ってよいであろう。なお、他地域で認められる島状遺構も多重周堀を強い相関を示すと考えられるが、埼玉古墳群では現在までのところ確認されていない。

このように多重周堀は単に古墳を加飾するためや結界性を高めるために周堀を重ねたというだけでなく、人物埴輪を含む形象埴輪群の設置場所としての中堤や中堤造出しと飲食物供献儀礼を執り行う墳丘造出しとによって一体的に古墳の祭儀を執行する空間を形成していたのである。

2　多重周堀の系譜

多重周堀は、全国的にみてどの程度の古墳で採用されており、それらの古墳にはどのような特徴が認められるのであろうか。以下、多重周堀を有する前方後円墳を集成の上、その時期や特徴を検討する(5)。

(1)多重周堀の類例

多重周堀を有する前方後円墳は表1のとおりである。畿内地域の大型前方後円墳の場合には、堀に水を湛えていることが多いため一般に「周濠」の用語が用いられているが、ここでは表記上の統一を図るため基本的に周堀と呼称する。また、古墳の名称及び時期は特に明記したものを除き、前方後円墳集成に従っている。

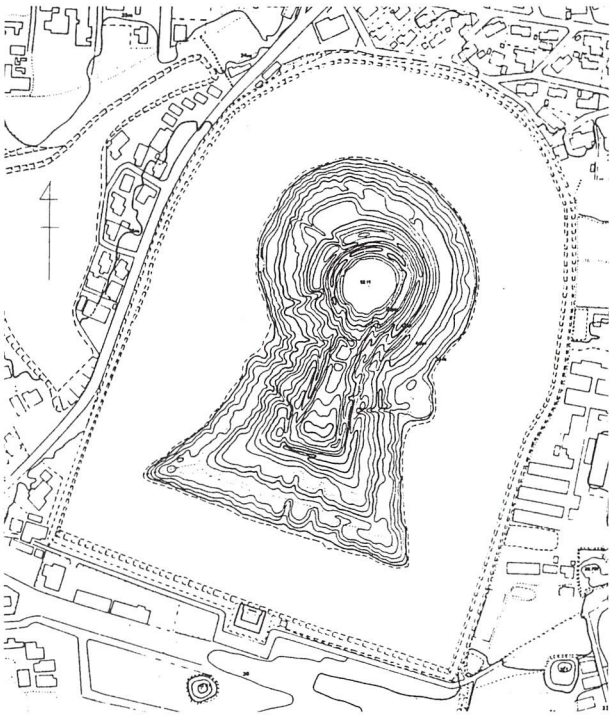
畿内地域では、多重周堀は百舌鳥古墳群では5期の百舌鳥陵山古墳(360m)及び7期の百舌鳥御廟山古墳(186m)、大山古墳(486m)、田出井山古墳(146m)、土師ニサンザイ古墳(290m)の5基の大型古墳において採用されている。古市古墳群では4期の津堂城山古墳(208m)に始まり、5期の仲津山古墳(290m)、6期の誉田御廟山古墳(425m)、7期の市野山古墳(230m)というように各期にわたって4基の大型古墳で採用されている。両古墳群ともに大王墓に比定されるおおむね墳丘長が200mを超える巨大な前方後円墳に採用されていることがみてとれる。このうち百舌鳥御廟山古墳と田出井山古墳の2基の古墳は200mに達しない規模であるが、田出井山古墳は規模は小さいものの反正天皇陵に比定されている古墳であり、百舌鳥御廟山古墳は百舌鳥古墳群の3基の大古墳に次ぐ第4位の規模を有する古墳である。また、年代的には、百舌鳥古墳群では4基の古墳が7期に含まれつつも各々時間差をもって造営されており、連続する時間的な序列の中で当該期の最大規模の古墳であることに変わりはない。

さて、両古墳群ともに8期に至ると多重周堀が消滅する。百舌鳥古墳群では8期には大型の前方後円墳そのものが造営されなくなり、古市古墳群では岡ミサンザイ古墳(242m)が前期の市野山古墳に匹敵する規模の前方後円墳として造営されてはいるものの多重周堀は採用されず周濠幅50mに及ぶ幅広の周濠を伴っている。岡ミサンザイ古墳はかなり墳丘が改変されているものの盾形周濠は本来の形を留めているものと思われ、そうすると幅広い周濠は多重周濠の名

所在	古墳名	墳丘規模	時期	摘要
京都府	宇治二子塚古墳	112m	8期	
大阪府	津堂城山古墳	208m	4期	古市古墳群　周濠内に方形の島状遺構
大阪府	牧野車塚古墳	107.5m	5期	西側で外濠ありとされ、部分的に二重か
大阪府	仲津山古墳	290m	5期	古市古墳群
大阪府	百舌鳥陵山古墳	360m	5期	百舌鳥古墳群
大阪府	誉田御廟山古墳	425m	6期	古市古墳群
大阪府	市野山古墳	230m	7期	古市古墳群
大阪府	百舌鳥御廟山古墳	186m	7期	百舌鳥古墳群
大阪府	大山古墳	486m	7期	百舌鳥古墳群
大阪府	田出井山古墳	148m	7期	百舌鳥古墳群
大阪府	土師ニサンザイ古墳	290m	7期	百舌鳥古墳群
大阪府	淡輪ニサンザイ古墳	180m	7期	
大阪府	今城塚古墳	190m	8期	中堤造出し
奈良県	市庭古墳	250m	5期	佐紀古墳群
奈良県	ヒシアゲ古墳	219m	5期	佐紀古墳群
奈良県	ウワナベ古墳	270m	6期	佐紀古墳群
奈良県	星塚2号墳	40m	9期	馬蹄形周堀
奈良県	西乗鞍古墳	118m	8期	
奈良県	四条古墳	38m	8期	前方後方形
福岡県	月岡古墳	95m	8期	部分的に三重
福岡県	塚堂古墳	91m	9期	部分的に二重か
福岡県	東光寺剣塚古墳	75m	9期	三重目は幅狭、後円部東側中堤に張出
福岡県	御塚古墳	78m	9期	三重　帆立貝形
福岡県	今宿大塚古墳	64m	9期	部分的に二重
熊本県	花見塚古墳	46m	8期	外堀は幅狭く外周溝に近いか
宮崎県	男狭穂塚古墳	167m	4期	馬蹄形
岡山県	十六夜山古墳	60m	8期	
長野県	塚原二子塚古墳	67.5m	8期	
長野県	正清寺古墳 （久保田1号墳）	60m	9期	中堤造出しあり、外堀は幅狭、中堤造出し
岐阜県	琴塚古墳	115m	7期	
愛知県	小幡長塚古墳	81m	9期	
群馬県	太田天神山古墳	210m	5期	
群馬県	岩鼻二子山古墳	115m	7期	
群馬県	古海松塚1号墳	47m	8期	帆立貝形

群馬県	正円寺古墳	73m	9期	
群馬県	綿貫観音山古墳	97m	10期	
群馬県	七輿山古墳	146m	8期	前方部側のみ三重
群馬県	薬師塚古墳	105m	8期	保渡田古墳群
群馬県	八幡塚古墳	102m	8期	保渡田古墳群
群馬県	井出二子山古墳	108m	8期	保渡田古墳群
群馬県	上並榎稲荷山古墳	122m	8期	
栃木県	笹塚古墳	102m	6期	
栃木県	摩利支天塚古墳	120m	8期	
栃木県	琵琶塚古墳	123m	9期	
埼玉県	稲荷山古墳	120m	8期	埼玉古墳群　方形周堀　中堤造出し
埼玉県	二子山古墳	132m	9期	埼玉古墳群　方形周堀　中堤造出し
埼玉県	瓦塚古墳	78m	9期	埼玉古墳群　方形周堀
埼玉県	奥の山古墳	66m	10期	埼玉古墳群　方形周堀
埼玉県	愛宕山古墳	53m	10期	埼玉古墳群　方形周堀
埼玉県	将軍山古墳	91m	10期	埼玉古墳群　方形周堀　中堤造出し
埼玉県	鉄砲山古墳	109m	10期	埼玉古墳群　方形周堀　中堤造出し　一部三重
埼玉県	中の山古墳	78m	10期	埼玉古墳群　方形周堀
埼玉県	真名板高山古墳	128m	10期	推定二重
千葉県	九条塚古墳	103m	9期	内裏塚古墳群
千葉県	船塚古墳 （天王・船塚1号墳）	86m	9期	前方後方墳　部分的に二重か
千葉県	舟塚古墳	37m	10期	
千葉県	三条塚古墳	122m	10期	内裏塚古墳群
千葉県	稲荷山古墳	106m	10期	内裏塚古墳群
千葉県	西ノ台古墳	90m	10期	
千葉県	朝日ケ岡古墳	71m	10期	
千葉県	殿塚古墳	88m	10期	芝山古墳群　方形周堀
千葉県	中台姫塚古墳	59m	10期	芝山古墳群　方形周堀
千葉県	大堤権現塚古墳	117m	10期	三重
千葉県	根崎12号墳 （胡麻手台16号墳）	86m	10期	
千葉県	南羽鳥高野1号墳	44m	10期	

表1　多重周堀の前方後円（方）墳一覧



第４図　岡ミサンザイ古墳

残りの可能性とも考えられる。いずれにしても、大王墓における多重周堀は７期をもって終焉したとみてよいであろう。このように多重周堀及びそれに付帯する施設や外部表飾は、４期に畿内中枢の大王墓において成立し、５～７期にかけて大王墓に比定される大型前方後円墳で採用された形制であったとして良いであろう。なお、８期に位置づけられ真の継体天皇陵とみなされている大阪府高槻市の今城塚古墳においても二重の周堀の存在が確認されているが、それについては後述する。また、両古墳群以外では、７期に位置づけられる大阪府の淡輪ニサンザイ古墳(180m)や先に取り上げた８期の今城塚古墳(190m)、京都府では８期の宇治二子塚古墳(112m)、奈良県では５期の市庭古墳(250m)やヒシアゲ古墳(219m)に続いて６期のウワナベ古墳(270m)の他、８期の西乗鞍古墳(118m)においても多重周堀が採用されている。このうち、佐紀古墳群の３基の古墳は、規模も大きくまた時期的にも百舌鳥・古市古墳群と並行する時期の古墳である。

時期的にみると最も古い４期に位置づけられる古市古墳群中の津堂城山古墳と同時期の佐紀古墳群では二重周堀は採用されておらず、次期にあたる市庭古墳やヒシアゲ古墳で初めて採用されている状況からみて、多重周堀が古市古墳群で始まり、後に百舌鳥古墳群や佐紀古墳群に波及した可能性が大きい。

また、淡輪ニサンザイ古墳はやや古く７期に位置づけられているものの、宇治二子塚古墳は８期に位置づけられ、天理市に所在する西乗鞍古墳も最近の調査で８期の古墳であることが判明しているように、百舌鳥・古市古墳群・佐紀古墳群以外の地域では、それら３古墳群で多重周堀が終焉した後の８期に至って、100m級の古墳において多重周堀が採用されるようになったことが窺える。

畿内地域を除く地域では、まず西日本では月岡古墳(95m)８期、塚堂古墳(91m)９期、東光寺剣塚古墳(75m)９期など福岡県にやや集中している傾向がみられる。また、三重となる古墳が多いのもこの地域の特徴のひとつである。同じ九州地域では、宮崎県の男狭穂塚古墳(167m)を前方後円墳と見れば４期という極めて古い時期を示す。そのほかの地域では熊本県の花見塚古墳(46.2m)8期や岡山県の十六夜山古墳(60m)８期が認められる程度であり、類例が少ない上にいずれも規模が小さい前方後円墳にとどまっている。

このように男狭穂塚古墳を別とすれば、畿内地域以外の西日本地域においては、多重周堀は８期に始まり９期まで継続している様子がみてとれる。また、福岡県地域にやや突出している傾向がみられ、その他に地域では極めて希薄な状況にある。



第５図　多重周堀を有する古市・百舌鳥・佐紀古墳群の古墳

東日本では、表１のように、６期の栃木県の笹塚古墳(102m)、岐阜県で７期に位置づけられている琴塚古墳(115m)がやや先行するものの、それを除けば多重周堀は８期以降の古墳に集中している。とりわけ、関東では、栃木県の思川･姿川流域で８期の摩利支天塚古墳(120m)、９期の琵琶塚古墳(123m)、群馬県の保渡田古墳群中のともに８期の薬師塚古墳(105m)、八幡塚古墳(102m)、井出二子山(108m)、千葉県では、小糸川流域の９期の九条塚古墳(104m)以降、10期の稲荷山古墳(106m)、金鈴塚古墳(95m)、三条塚古墳(122m)、木戸・作田川流域の殿塚古墳(88m)、朝日ノ岡古墳(70m)、大堤権現山古墳(115m)というように、８～10期までの前方後円墳に連綿と採用され続けている。千葉県の小糸川流域では９期から、小櫃川流域では10期から、また東上総にあたる木戸・作田川流域でも10期から出現しているが、これらの地域ではそもそも８期や９期には大型の前方後円墳が希薄な地域であって当該期にならないと規模の大きい前方後円墳が出現しないという事情がある。

このように、東日本においてもやはり百舌鳥・古市古墳群・佐紀古墳群で多重周堀が終焉し

た８期以降に100m級の前方後円墳において多重周堀が採用されていることがみてとれる。ただし、畿内地域がおおむね8期で途絶えるのに対して、関東地方では前方後円墳が終焉する10期まで多重周堀が採用され続けているのが大きな特徴である(6)。

全国的にみると、多重周堀は50数基の古墳で確認されており、5000基を超えると言われる前方後円墳の中でもその比率は１％程度にすぎない。墳丘と比べ周堀の場合には未調査の古墳も多く、また遺構が地下に埋没しているため把握しづらいので実数はこれより増加することは確実であるとしても、なお多重周堀が極めて限られた前方後円墳のみに採用された施設であることは確かであろう。

繰り返しになるが、多重周堀は、まず古市古墳群において出現し、百舌鳥・古市・佐紀の各古墳群において４期もしくは５期から７期にかけて大王墓もしくはそれに準じる規模の大型の前方後円墳で採用された一方で、畿内のその他の地域を含む九州から関東までの畿外地域においては、一部の古墳を除いて畿内中枢で多重周堀が終焉した８期以降になって多重周堀が採用されるようになる傾向がみてとれる。それらの古墳においても、概ね100mを前後するような規模の大きい前方後円墳に採用されていることが多いが、40～50m級の中規模の前方後円墳に採用されている例も少ないながらも存在する。

また、埼玉古墳群や保渡田古墳群、内裏塚古墳群のようにいったん多重周堀が採用されると、同一古墳群内で後続する古墳に継続的に多重周堀が採用されていることも大きな特徴であり、そのような古墳群の場合、墳丘企画が替わることがあっても多重周堀の採用とは連動していない。このことは、多重周堀が特定の墳丘企画と結び付きをもたずに、それと別に採用される基準が存在したことを示している。

さて、例外的なのは４期とされる宮崎県西都原古墳群の男狭穂塚古墳(167m)と５期の群馬県太田市の太田天神山古墳(210m)の２古墳である(7)。男狭穂塚古墳(167m)は集成では４期に位置付けられているが、根拠に乏しく５期に下がる可能性もある。男狭穂塚古墳は前方部が極端に低く短い形態であり、周堀も全周せず後円部にのみ巡らせているようにも見えるなど前方後円墳としてはやや問題を残すもので、他の多重周堀の前方後円墳とは同列には論じられないかもしれない。太田天神山古墳は群馬県伊勢崎市に所在する御富士山古墳とともに、主体部に畿内の大型古墳で使われているものと同巧の長持型石棺が使用されており、畿内の大王の石棺を製作していた工人が派遣されてその製作にあたったものと想定されている(白石2001)。大王権の象徴である長持型石棺を同時共有していることで、東国の有力豪族と畿内の大王との同盟関係を物語る有力な証とされている。太田天神山古墳は関東地区で、男狭穂塚古墳は九州地区でともに最大規模の古墳であり、上記した８期前後に各地に成立した古墳よりも遥かに規模が大きい点に特徴がある。宮崎県や群馬県は、畿内以外の地域で前方後円墳が減少する時期に岡山県と並んで大型古墳が造営された特別な地域と考えられており、これら２基の古墳の多重周堀もまた畿内との関わりの中で特別に採用されたものと考えられる。

(２)多重周堀の成立とその意義

一瀬和夫氏は、古墳に巡らされた周堀について、墳丘本体の付加的要素として成立した濠が、やがて定型的な盾形周濠へと発展したとし、その過程を４段階に整理して説明した(一瀬

1992)。それによれば、まず、箸墓古墳が造営された段階では「周濠」は成立していなかったが、やがて墳丘本体周囲の整備発展形の一つとして「周濠」が成立する。成立当初の周濠は、墳丘が丘陵斜面を利用していたため周濠内の傾斜が大きく、滞水させるために各部分で土堤を設けて水平面を維持していた(階段状周濠)。この段階の古墳は周濠の形状が谷地形の輪郭に影響を受けることが多いため周濠幅は均一になり難く、また平面形では前方後円墳の墳丘本体に沿って巡る。その後、墳丘本体の付随物から離れ、独自の形態をもった施設として日葉酸媛陵古墳のような盾形周濠が出現した段階を第3段階とし、次の第4段階に至って、津堂城山古墳にみられるように、墳丘の斉一化、盾形周濠の前方部隅の直角化、周濠幅の拡大、二重周濠の出現、渡り土手を切断したような島状遺構の出現、造出しの安定化が図られたとした。そして、さらにその次の段階では、周濠・外堤を含めた一定のスタイルの古墳が地方拡散したとして、茨城県舟塚山古墳、千葉県内裏塚古墳、群馬県太田天神山古墳、高崎市浅間山古墳、岡山県両宮山古墳、宮崎県女狭穂塚古墳などを例示した。しかしながら、津堂城山古墳では二重周堀が採用されているものの、畿外地域では例示された古墳のうち太田天神山古墳を除けば基本的には二重周堀は採用されず、一重の周堀にとどまっている。またそれらの古墳では盾形周濠の前方部隅の直角化や島状遺構の出現、造出しの安定化も明確ではなく、畿内中枢で成立した形制がそのまま地方の古墳に用いられたわけではないようである。

さて、古墳における多重周堀は前期末頃に古市古墳群の津堂城山古墳において二重周濠として初めて出現する。一瀬氏が整理したように、単に周堀が二重になっただけではなく、前代と比べ周堀の幅を大きく広げ定型化した盾形の周堀を形成しているため、墳丘長208mにもかかわらず、周堀を含めた全長は436mと巨大な規模になっている。また、この古墳では周堀内に島状の遺構を設置し、墳丘造出しを括れ部から前方部側に移動させているなど、多重周堀化に伴う外部施設の新たな創設や改変も行われている。地形学的に見れば、奈良盆地から大阪平野に大王墓が移動したことで立地的に十分な平面空間が確保されたことにより初めてこうした外部施設の造作が可能になったものといえる。さらにはこの古墳では、従来に比べ円筒埴輪も多段多条化傾向を示しており、古墳を囲繞する円筒埴輪の大型化もまた外部施設の造作と同時に進められたことが窺える。


第6図　津堂城山古墳

百舌鳥・古市古墳群の大型古墳の大半は陵墓もしくは陵墓参考地に選定されていることから外部施設や外部表飾についても詳細については不明な点が多い。しかしながら、かつて誉田御廟山古墳の周堀内から大量の水鳥形埴輪が検出されたことから、同古墳に中島が存在したことが推測されているように(小浜2006)、大型古墳ではそうした施設を伴って

いた可能性が大きい。

言うまでもなく、人物埴輪群の創設や中島の造成と水鳥埴輪の設置等の外部施設や外部表飾は、葬送観念を具象化した葬送儀礼と不可分の関係にある。その一方で多重周濠の採用が、人物埴輪群の創設、中島の造成と水鳥埴輪の設置、括れ部における造出しの安定化、円筒埴輪の大型化などと相前後して進められたものとすれば、それは単に葬送儀礼の変容に伴って各施設が個々に創出されたのではなく、一定の目的のために各施設・付帯設備が考案された、と考えるほうが妥当であろう。そして、このような古墳施設の相互に関連する整備拡充の目的は、葬送観念の変化を背景としつつも各個の内容からみて古墳の視覚的な荘厳化を推進するための一連の措置とみなして良いと考えられる。

津堂城山古墳における二重周堀などの諸施設の成立や整備拡充以降に、百舌鳥・古市古墳群において古墳の規模そのものが急速に巨大化してゆく動向も、このような点を踏まえれば古墳の荘厳化の一連の動きのひとつと捉えることが可能であり、換言すれば、墳丘の巨大化指向は、古墳そのものの視覚的な荘厳化の一環に過ぎないとみることもできる。

それでは、なぜ、この時期に特定の前方後円墳の荘厳化が著しく推進されるようになったのであろうか。

百舌鳥古墳群中の大型古墳が、信太山台地(百舌鳥台地)の西端に沿うように海浜近傍に立地し、その側面を海岸側に向けて造営されており、堺大津や住吉の津に出入港する船舶からの眺望性を強く意識して造営されていることは夙に指摘されているところである(十河2003ほか)。一方、古市古墳群は、やや内陸に入り羽曳野丘陵北端から国府台地上で海岸線からは距離があるものの、大和川と石川が合流する付近に立地しており、奈良盆地への主要な航路であった大和川を航行する船舶からの眺望性に優れた地点に立地している。また、両川の分岐点付近は大津と呼ばれ、かつて大規模な川津が存在したことが指摘されており、交通の要衝でもあった。津のような港湾施設は水上交通の拠点というだけでなく陸上交通のターミナルでもあり、古市・百舌鳥古墳群でも難波大道や後に長尾街道と呼ばれる「大津の道」など主要街道が津と結びついて縦横に走っていたことが明らかにされている。陸上交通路と海上・内水面交通路、さらにその結節点や中継点としての津、これらの交通体系の整備は当然のことながら不可分の関係にあり、一体的に計画されたものである(水野2008)。そして、古墳もまた単に航行する船舶からの眺望にとどまらず、津などの近傍を選んで造営されていることからみて、そのような都市計画の一部に組み込まれていたに違いない。

このように、百舌鳥・古市古墳群の大型古墳は、計画性をもって交通の要衝の近傍で往来する人々からの眺望性に優れた地点に造墓地を選択していることに大きな特質がある。眺望性を意識した古墳造墓地の選定は、たとえば神奈川県逗子市の長柄桜山古墳群のように既に前期段階から認められているものの、この時期に至って、それまで奈良盆地の東南部や北部の丘陵裾に選地していた大王墓が平坦面が広く交通の要衝近傍に位置する地点に造墓地の移動を選択したことは、小高い丘陵上に立地するようなランドマーク的な機能をもつ古墳と異なり、大規模な物流の拠点や人々が往来する場所が明確に意識されたもので、古墳そのものに対する意識が大きな変化したことが窺える。

この時期には、『宋書』に記載されているとおり、倭王権が朝鮮半島の権益を巡って中国南朝と積極的な外交を行っていた時期に当たり、倭国への外交使節の往来も活発であったことが想定されている。巨大古墳は倭国の政治勢力を誇示するモニュメントとして航行する海外使節団からの眺望を強く意識して造営されているとする想定もある(上田2008)。瀬戸内海航路に接続していた大阪湾に臨む港津や奈良盆地への主要な交通路である大和川の川津近傍に古墳の正面に当たる側面を向けるように百舌鳥・古市古墳群の大型古墳が造営されている事実は、少なくとも共同体内部構成員からの眺望性を超えて、大王墓がより広範な人々からの眺望を強く意識して造営されたことを示しているとみてよいであろう。

一般に、墳丘の巨大化については、５世紀の倭国王が各地の首長たちと倭国首長連合を形成し盟主としての立場を得たことによってより強大な権力が発生したためとする理解が通説化していたが、最近では多様な解釈が試みられている(福永2014、松木2015)。古墳の規模が一定の階層性を有し権力の大きさを反映していることをもちろん否定するものではないが、権力のより強大化に比例して墳丘の巨大化が進展したとする考えは、大王権が専制化傾向を示す５世紀末にかえって墳丘規模が縮小する状況ともうまく符合しない。前後の時期と比べ特に５世紀に極大化する前方後円墳には、むしろ特殊な事情が反映されていたとみるべきであろう。

広瀬和雄氏は、巨大前方後円墳を目で見る王権としてとらえ、「大和政権の政治的秩序」を内外の人々に対して視覚的に訴える装置とみる(広瀬2004ほか)。巨大人工構造物としての古墳が広瀬氏の指摘のとおり視覚的な機能を意識したものであることは疑いのない事実であると思うが、問題はこの時期の巨大な前方後円墳が主として誰を対象とした装置なのかということである。

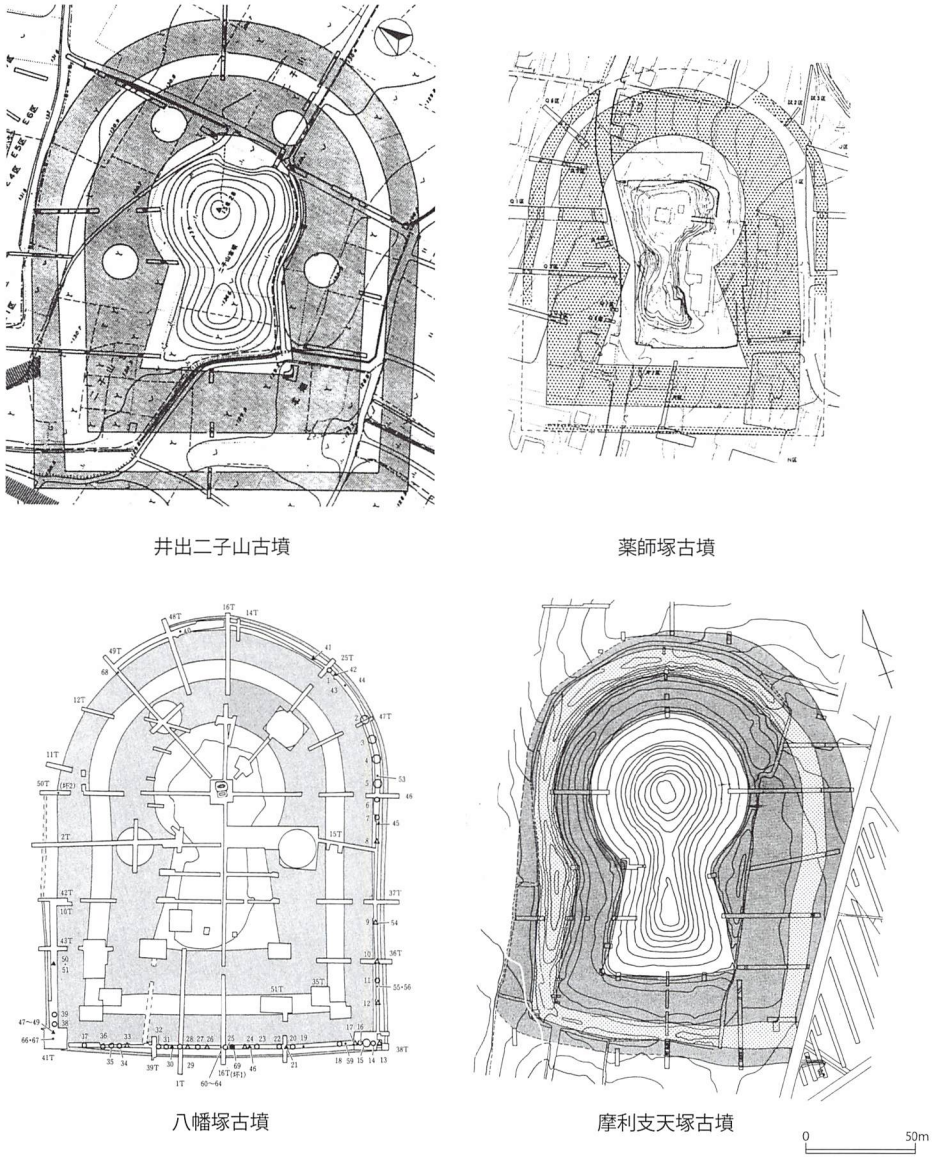
この時期における交通の要衝近隣へ眺望性を求めて大王墓を移動させるとともに古墳そのものを荘厳化・巨大化へ向かわせる動機は、中国王朝への朝貢や当時の朝鮮半島を含む社会情勢を踏まえれば、支配共同体内部というよりも倭国へ往来する使節団など共同体の外部に対して、倭王権の威勢をことさら可視的に示す必要性が生じたためであり、王権内部における権力構造の変化というよりも対外的に王権を誇示するために装置というこの時期の社会的な要請にもとづいて、極端な墳丘の巨大化と荘厳化が推進されたものと考えられる。

３　東国における多重周堀の導入とその意義

(１)東国の古墳

埼玉県北部に当たる北武蔵地域では埼玉稲荷山古墳の造営とともに多重周堀が出現しており、同様に栃木県の摩利支天塚古墳、群馬県の保渡田古墳群中の薬師塚古墳、八幡塚古墳、井出二子山古墳というように、稲荷山古墳と同時期の８期に至って、関東地域では一斉に多重周堀が出現するようになる。千葉県では９期に至って内裏塚古墳群中の九条塚古墳で多重周堀が出現するというように他地域よりもやや遅れるものの、以後は同様の展開を示す。このような斉一性は、前方後円墳における多重周堀が地域的な傾斜に従って段階的に各地に波及したものではなく、ある段階に至って計画的・意識的に導入されたものであることを暗示している。

しかも、井出二子山古墳では中堤上に形象埴輪群を置き堀内には中島を築き、埼玉稲荷山古墳では中堤に張り出しを設けて形象埴輪群をこの地域で初めて配置しているというように、単



第７図　８期の二重周堀をもつ関東地方の前方後円墳

に多重という周堀形態が導入されただけでなく、これまで述べた畿内地域で成立した多重周堀に伴う各種構成要素もまた同時に持ち込まれていることが認められる。さらに、古墳に設置された円筒埴輪を見ると、埼玉稲荷山古墳では、最大７条８段で器高90cmと多段多条の大型の円筒埴輪が３条４段の円筒埴輪に混じって採用されており、このような大型の円筒埴輪の設置は次の埼玉二子山古墳と引き継がれている。井出二子山古墳も従来群馬県域において主体であった３条４段構成の円筒埴輪に替わって５条６段構成の器高80cm～100cmと大型化した円筒埴輪が突如として採用されており、保渡田八幡塚古墳でも樹立された円筒埴輪の中に４条５段構成の器高65cmほどの大型品を含んでいる。摩利支天古墳では４条５段構成であるもののやはり前段階とは飛躍的に大型化した器高80cmの円筒埴輪が採用され、続く琵琶塚古墳にもそれが継承されている。このように多段多条化した大型の円筒埴輪は、この時期の関東地方の大型前方後円墳に突如として一斉に出現するものであり、同時期の小型の古墳には採用されておらず、明確に格差が認められる。この時期に多重周堀が採用された関東地方の特定の前方後円墳には、

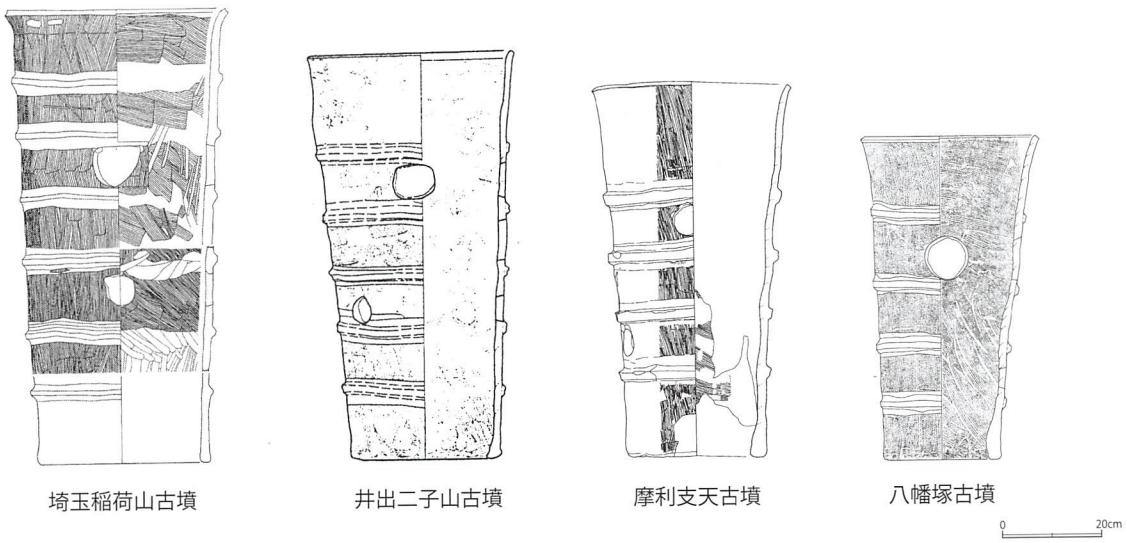
古墳に樹立する円筒埴輪も含めて、畿内地域で成立した多重周堀の伴う古墳荘厳化の諸要素が一括して導入されているのである。

この段階で持ち込まれた各要素の在り方は、埼玉古墳群における方形周堀や中堤における造出し状の張り出し、保渡田古墳群における盾形周堀と中島状遺構、さらには張り出し部の形状の違いなど古墳群単位でかなり個性が認められることも事実であるが、人物埴輪を含む形象埴輪群や多段多条の大型円筒埴輪の導入については、工人の往来を含む技術供与など先行する地域からの積極的な関与が無ければ現実には困難であったと思われる。

一方、古墳の規模という点においても、各地で最初に造営された古墳が、美濃で琴塚古墳(115m)、埼玉県の北武蔵地域で埼玉稲荷山古墳(120m)、群馬県地域で薬師塚古墳(105m)、井出二子山古墳(108)m、栃木県地域で摩利支天塚古墳(117m)、琵琶塚古墳(124m)、千葉県上総地域で九条塚古墳(104m)というように、前方後円墳の規模が100m～120mていどの間で収まる点は注目される。この規模は、その当時東国で出現した前方後円墳としては極めて巨大な規模であるとともに、概ね同時期の大王墓とされる岡ミサンザイ古墳のほぼ二分の一の規模を示している(9)。このことは、新たに前方後円墳の造営が承認されるに際し各古墳の規模の決定に際して一定の秩序が存在したことを想起させるものであり、畿内王権の強い関与のもと、統一的な規範に基づいて古墳の造営が承認された可能性が大きいことをも示している。

そして、その時期は先に述べたとおり、百舌鳥・古市古墳群で大王墓に多重周堀が採用されなくなった８期を境として導入されていることは注目される。これ以前の段階では、太田天神山古墳における長持型石棺の使用のように畿内の大王墓の棺制と同時共有関係にあったが、この段階では大王墓における古墳の荘厳化の停止と入れ替わるように百舌鳥・古市古墳群以外の各地とりわけ関東地方に中心に多重周堀が出現しているのであり、そこには自らが使用しなくなったモデルを地方豪族に許容している状況が読み取れるのであって、何ら共有関係は認められないのである。

なお、継体天皇陵とみなされている今城塚古墳は８期に位置づけられる古墳であるが、二重



第８図　関東地方の8期の大型円筒埴輪

周堀を巡らし中堤に長大な張り出しを設けて、多彩な形象埴輪群を設置している。岡ミサンザイ古墳を挟んで６世紀前半とされる大王墓にこのような形制が復活していることは、７期の終わりを境として大王墓の形制が地方豪族の古墳へと転換したとする先の説明と矛盾するかもしれない。しかしながら、記紀によればのちに継体天皇と呼ばれるヲホドは応神天皇五世の子孫としてもともと地方豪族であった人物で、入婿の形で王権を継承した経緯があり、このことが古墳の形制と深く関わっていると考えられる。ヲホドにとっては外から入って大王権を継承するに当たり、復古的に前代の大王墓と同じ形制の古墳を敢えて選択する必要があったものと推測されるのである。

（２）二重堀導入の歴史的意義

集成８期から９期にかけて、前段階での前方後円墳の減少から転じて再び各地で前方後円墳の造営が活発化するが、特に東国において100mを超える前方後円墳が多数造営される傾向がみられる（白石1991）。中でも注意されるのは、埼玉古墳群に代表されるように前・中期に古墳が造営されていない場所に突如として100mを超える前方後円墳が出現することであり、そうした現象については既にいくつかの見解が示されている。

例えば、白石太一郎氏は５世紀中葉から後半以前の段階には畿内の大和や河内の大首長を中心に列島各地の首長が政治連合を形成していたが、雄略朝を境として大王権力が専制化し、畿内の大王に服属する地方豪族という形が次第に明確になると述べ、この時期に出現する地方の前方後円墳を畿内王権と新たな服属関係を結んだ豪族の墳墓ととらえている（白石2001）。

また一方で、集成８期に突如として多段多条の大型円筒埴輪が各地の大型墳で出現する状況について、それらの地域において埴輪の有無だけで序列を示していた段階から埴輪の規模によって序列を示す段階へと変化し、墳丘規模と樹立埴輪の器高の二つの要素によって地域内の古墳秩序を示すようになったものと評価されている（山田2009）。この時期に地域再編が起こり、新たな秩序が組み立てられたことを示唆するものであるが、これまでの議論に引きつけて言えば、この時期に多段多条の大型円筒埴輪が採用されるようになった直接的な要因は、多段多条の大型円筒埴輪もまた古墳荘厳化のひとつの要素であり、畿内地域で成立した多重周堀の伴う古墳荘厳化の諸要素が一括して特定の古墳に導入されたためと考えられる。

文献の立場からは、５世紀後半に畿内王権の頂点にいた、のちに雄略天皇と呼ばれたワカタケル大王は、一般に宋書倭国伝にみえる最後の倭王武に比定されている。武は、倭王讃に始まる南朝の権威を背景に半島運営を主導する朝貢外交を継承して478年には南朝の宋に入貢し、使持節都督をはじめとする叙正を求めたが自ら要求した爵位を得ることができなかった。またこの時期には朝鮮半島においても百済の熊津への遷都など劇的な情勢の変化が認められた。そこで、中国の冊封体制を梃とした外交政策からの方針転換を行い、「治天下大王」の称号を創出するとともに、列島各地の豪族に独自の権威を付与するなど、新たな国内体制の整備拡充に向かったと考えられている。さらに、この時期には葛城氏や吉備氏などの旧来の有力豪族の没落し、伴造系の物部氏や大伴氏が台頭するようになるなど畿内王権内部の政治構造にも変化が生じたことが指摘されている（熊谷2003）。

先にみたように、中国王朝からの冊封を前提に外交上の示威活動としての性格が強かった５

世紀の古墳の巨大化・荘厳化は、倭国が冊封体制から離脱して独自の歩みを始め、国内政策重視に転換したことでその意味を半ば喪失し、本来の大王墓の標準的な規模である200m級の墳丘規模に縮小するとともに、多重周堀などの極端な加飾化も廃されたのでないかと考えられる。その一方で、畿内王権は構造改革によって新たに再編した地方豪族に対し独自の権威を付与するため、それまで大王墓で採用していた古墳の形制を彼らに許容したものと考えられる。それらの古墳が交通の要衝に立地していることが多いこともまた百舌鳥・古市古墳群で用いられた古墳選地の考え方を踏襲したものであろう。

このような政策の展開は地方豪族に限らず、畿内地域の豪族にも及んだようである。京都府の宇治二子塚古墳(112m)や奈良県の西乗鞍古墳(118m)はともに８期に位置づけられる前方後円墳であり、墳丘長100mを凌駕することから、時期的にも規模的にもこの段階に関東地域で成立する前方後円墳と非常に共通する規模の前方後円墳である。地方豪族のみならず畿内の豪族もまた再編成の対象となったと考えられる。畿内を含む列島各地に、この時期に多重周堀をもつ100m級の前方後円墳が一斉に出現する現象は、畿内王権内部の政治構造の変化や外交政策の転換に伴う国内体制の整備が背景にあったと考えると理解しやすい。

ただ、福岡県を除けばこのような形制の古墳は限定的であり、やはり関東地方に集中していることは、この政策が主に対東国政策の側面が強かったことを示している。このような対東国政策の推進が６世紀に東国とりわけ関東地方で100mを超える大型前方後円墳が多出するようになる端緒となったと考えられる。

埼玉古墳群は、５世紀末における畿内政権による外交政策の転換と内政の改革、とりわけ対東国政策の展開という歴史上の非常に大きな画期を背景として出現したものと考えられる。

おわりに

集成４期から７期にかけておよそ100年あまりの間、古市・百舌鳥・佐紀古墳群の大王墓を中心とした大型古墳にほぼ独占的に採用されていた多重周堀が、それらの古墳群で採用を停止する時期と入れ替わるように畿内地域を挟んで西日本と東日本、とりわけ北部九州と関東の各地の古墳でほぼ同時に採用されるようになる現象をどのように理解したらよいのか。古墳が権威や権力を誇示する道具立てであるのと同時に優れて政治的な産物であり、造営に当たって規模や形制に規制や承認という一定の制約が存在するとすれば、多重周堀もまた単なる文化的な伝播などではなく規制や承認等と何等かの関わりをもち、その在り方も列島規模の政策の転換や政治的な枠組みの改変を反映しているものとみてよいのではないか。本論はそうした立場に立ち、５世紀代の巨大化する古墳の意味を踏まえつつ、埼玉古墳群の成立事情について考察を加えた。

埼玉古墳群について、一旦文献を脇に置いて、遺構や遺物といった考古学なデータからどこまで分析することが可能なのか、ここしばらく同じテーマに取り組んでいる。ただ、今回は十分な検討時間が無くなり、論証が不十分で日頃思い描いていることの素描に近い形となった。一地域の古墳の動向に注視していると、どうしても個別の事情を問いたくなる。しかし、広い視野で俯瞰するとまた異なった風景が広がることを白石氏が教えてくれた。論証し残した部分は多々あるが、それについては稿を改めて再論することにしたい。

《註》

（1）埼玉稲荷山古墳の造営時期については、既に筆者の立場は明らかにしているが、別にTK208型式期とする意見やMT15型式の古い段階とする意見などもある。

（2）比企地域からさきたま地域への移動は、野本将軍塚古墳の年代を5世紀中頃に置く立場を前提にしているが、筆者は、野本将軍塚古墳を4世紀末から5世紀初頭と位置づける立場から、両地域の古墳の年代には大きな時間的懸隔があると考えており、比企地域からさきたま地域への豪族の移行についてもなお慎重な立場に立つ。

（3）用語としては周濠・周堀・周溝が存在する。畿内の大王墓は一般に周濠が用いられているが、埼玉古墳群など東国の古墳では滞水していたことが確認できないので周濠を使用するのは一般的ではない。ここでは従前の例に従い周堀を用いることとする。

（4）奈良県コナベ古墳や千葉県内裏塚古墳のように外堤の外側に外周溝と呼ばれる幅狭の溝を持つ古墳が存在する。内裏塚古墳では外周溝は幅１ｍほどで明確に二重周堀と区別することができる。同様の外周溝とみなされるものに千葉県の江子田金環塚古墳、金鈴塚古墳などが存在する。外周溝を伴う古墳の中には二重周堀として報告されている事例もあるが、それらはこの表からは除外した。また、京都府舞塚1号墳(39m)などの規模の小さい古墳においても外堀が幅狭いものは外周溝として除外した。ただし埼玉県女塚1号墳(37m)のように規模の小さい古墳の場合、もともと周堀幅がそれほど広くないため二重周堀か否かの判断が難しい古墳もある。一方で、周堀を全面発掘された事例は少なく、全周するか否かは実際には判断できないため、部分的に外堀が認められた古墳についてもここに取り上げた。

（5）奈良県星塚古墳など規模の小さい前方後円墳や前方後方墳でも二重周堀が採用されている場合については、大型前方後円墳とは同列に論じられず、別に検討する必要があると考える。また、千葉県龍角寺101号墳のように円墳で二重の周堀も持つものも存在する。それらも特別の規模の大きな円墳に限るというわけではないので大型前方後円墳とは同列に論じられない。

（6）周堀の平面形については埼玉古墳群では全て長方形になっており、盾形周堀を基本形とする他の古墳と際立った差異を示している。埼玉古墳群と同様の長方形周堀の古墳は、千葉県の殿塚古墳・姫塚古墳・舟塚原古墳・御前鬼塚古墳など上総の木戸・作田川流域の古墳に類例が知られているのみである。年代的にみるとそれらの古墳はいずれも６世紀中頃以降に位置づけられるものであり、埼玉地域から上総地域に影響を与えたものと評価されている(橋本2003)。従って埼玉古墳群の長方形周堀成立とは結びつけることはできない。むしろ、これらの古墳の成立には埼玉古墳群が影響を与えた可能性も指摘されている。

（7）４期に位置づけられている群馬県高崎市の浅間山古墳(171m)において高崎市教委によるトレンチ調査の結果、二重周堀の可能性が指摘されている(徳江1999)。しかしながら、内堀幅がおおむね30mであるのに対して想定される外堀の幅が56～65mと内堀の倍以上の幅であることや内堀に比べ形状が浅く不明確であること、中堤外側法面(外堀内側立ち上がり)には貼石が認められるのに対して、外堀の外側立ち上がりは貼石もなく緩やかに立ち上げること、さらに西側から南西側にかけては地形的に河川の浸食谷と重複していることなど、多くの疑問点があり、この古墳が二重周堀か否かの判断は保留しておきたい。

（8）前方後円墳消滅後の終末期の大型方墳にも二重周堀が採用されている古墳は多い。しかしながら、前方後円墳から大型円墳を経て方墳に移行している地域の場合、円墳に二重周堀が認められないことから、前方後円墳から方墳に周堀形態がスムーズに継承されたものとは思えない。方墳の二重周堀については、畿内で成立した方墳の形制が新た導入されたものと理解するべきであろう。

（9）岡ミサンザイ古墳については、陵墓となっており正確な測量値が無いが概ね墳丘長237m～242mの規模とされている。なお、ここに取り上げた古墳については、同一の基準尺が用いられている可能性が大きいがそれについては別稿を用意している。

《引用・参考文献》

甘粕　健　1970「武蔵国造の反乱」『古代の日本』第７巻　関東　角川書店
甘粕　健　1995「「武蔵国造の反乱」再検討」『大田区立博物館　武蔵国造の乱』東京美術
天野末喜他 2014「仲哀天皇陵古墳－古市古墳群の調査研究報告Ⅴ－」藤井寺市文化財調査報告第38集　藤井寺市教育委員会
飯塚卓二　1986「埼玉古墳群の出現と毛野地域政権」『研究紀要３』群馬県埋蔵文化財調査事業団
一瀬和夫　1992「３外部施設　１周濠」『古墳時代の研究』第７巻　雄山閣
上田正昭　2008「河内王朝と百舌鳥古墳群」『東アジアの巨大古墳』大和書房
太田博之　2007「武蔵北部の首長墓」『武蔵と相模の古墳』季刊考古学別冊15　雄山閣
太田博之　2007「北武蔵のおける後期古墳の動向」考古学リーダー12『関東の後期古墳』六一書房
岡本健一　1997「将軍山古墳」史跡埼玉古墳群整備事業報告書　埼玉県教育委員会
小沢　洋　2013「千葉県富津市　内裏塚古墳群総括報告書」富津市教育委員会
小浜　成　2006「応神陵古墳の年代観と被葬者像」『応神大王の時代』大阪府立近つ飛鳥博物館
小浜　成　2008「古墳における儀礼の場の変遷過程と倭王権」『埴輪群像の考古学』大阪府立近つ飛鳥博物館編　青木書店
堅田　直　1971「前方後円墳の立地と周濠構造」『歴史研究』７－８
金井塚良一 1979「稲荷山古墳と武蔵国造の争乱」『歴史と人物』第６号　中央公論社
熊谷公男　2003「大王から天皇へ」日本の歴史　第３巻　講談社
近藤義郎編 1992『前方後円墳集成　近畿編』山川出版社
近藤義郎編 1994『前方後円墳集成　東北・関東編』山川出版社
齋藤忠他　1980『埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会
齋藤忠・大塚初重　1980『稲荷山古墳と埼玉古墳群』三一書房
坂本和俊　1981「埼玉の前方後円墳」『歴史手帳』第９巻第５号
坂本和俊　1996「埼玉古墳群と无耶志国造」『群馬考古学手帳６』群馬県土器観会
坂本和俊　2001「考古学からみた稲荷山古墳の出自」『稲荷山古墳の鉄剣を見直す』学生社
塩野　博　2004『埼玉の古墳　北埼玉・南埼玉・北葛飾』さきたま出版会
清水久男　1995『武蔵国造の乱－考古学で読む日本歴史－』東京美術
白石太一郎 2009「百舌鳥・古市大古墳群展－巨大古墳の時代」『特別展図録』大阪府立近つ飛鳥博物館
白石太一郎 1983「古墳の周濠」『角田文衛博士古希記念　古代学論叢』
白石太一郎 1991「関東の後期大型前方後円墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集　創設十周年記念論文集　国立歴史民俗博物館
白石太一郎 2001「５世紀の前方後円墳の動向と稲荷山古墳」『稲荷山古墳の鉄剣と見直す』金井塚良一編　学生社
城倉正祥　2009「埴輪生産と地域社会」学生社
城倉正祥　2011「武蔵国造争乱－研究の現状と課題－」史観第165冊　早稲田史学会
末永雅雄　1962「古墳の周庭帯と陪冢」『書陵部紀要』第13号　宮内庁書陵部
杉崎茂樹　1985「鉄砲山古墳」埼玉古墳群発掘調査報告書　第２集　埼玉県教育委員会
杉崎茂樹　1985「愛宕山古墳」埼玉古墳群発掘調査報告書　第３集　埼玉県教育委員会
杉崎茂樹　1986「瓦塚古墳」埼玉古墳群発掘調査報告書　第４集　埼玉県教育委員会
杉崎茂樹　1987「二子山古墳」埼玉古墳群発掘調査報告書　第５集　埼玉県教育委員会
杉崎茂樹　1988「丸墓山古墳・埼玉１～７号墳・将軍山古墳」埼玉古墳群発掘調査報告書　第６集　埼玉県教育委員会
鈴木一男他 1983「摩利支天塚古墳」小山市文化財調査報告書　第14集　小山市教育委員会
関　義則　2014「埼玉古墳群の構成原理」埼玉県立史跡の博物館紀要第６号　埼玉県立さきたま史跡の博物館

関　義則　2015「埼玉古墳群の構造変遷」埼玉県立史跡の博物館紀要第7号　埼玉県立さきたま史跡の博物館
田中広明　1989「緑泥片岩を運んだ道－変容する在地首長と労働差発権－」『土曜考古』第14号　土曜考古学研究会
十河良和　2003「百舌鳥古墳群の立地に関する基礎的考察」『関西大学考古学研究室開設五拾周年記念　考古学論叢　上巻』関西大学考古学研究室開設五拾周年記念考古学論叢刊行会
高橋一夫　2005「墳丘造り出しと中堤張り出し」『考古学資料館紀要』第21輯　國學院大學考古学資料館
高橋克壽　2007「家・器財埴輪が語る墳丘の思想」『埴輪の構造と機能』第12回東北・関東前方後円墳研究会発表要旨資料　東北・関東前方後円墳研究会
徳江秀夫　1999「浅間山古墳」『新編　高崎市史資料編１　原始古代１』高崎市
利根川章彦 2003「武蔵国造の乱」はあったか」『調査研究報告』第16号　埼玉県立さきたま資料館
橋本博文　2003「東国における埼玉稲荷山古墳の位置づけ」『ワカタケル大王とその時代－埼玉稲荷山古墳』山川出版社
広瀬和雄　2003「前方後円墳国家」角川選書355　角川書店
広瀬和雄　2004「１　前方後円(方)墳とはなにか」『古墳時代の政治構造』青木書店
広瀬和雄　2010「前方後円墳の世界」岩波新書
広瀬和雄　2011「１　前方後円墳とは何か」『講座日本の考古学７　古墳時代(上)』青木書店
福永伸哉　2014「古墳時代と国家形成」一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編『古墳時代の考古学９　21世紀の古墳時代像』同成社
中村倉司　1999「妻沼低地(岡部町・深谷市)の古墳時代集落と埼玉古墳群」『岡部条里/戸森前』埼玉県埋蔵調査事業団報告　第217集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
松本武彦　2015「前方後円墳の巨大性　－日本列島の境墓はなぜ大きいのか？」季刊考古学別冊22『中期古墳とその時代』雄山閣
三沢正善　1994「琵琶塚古墳発掘調査報告書」小山市文化財調査報告書　第30集　小山市教育委員会
山田俊輔　2009「井出二子山古墳の埴輪」『史跡保渡田古墳群　井出二子山古墳史跡整備事業報告書』高崎市文化財調査報告書第231集　高崎市教育委員会
吉川國男　1998「雄略朝所載の武蔵直丁と稲荷山古墳鉄剣銘について」『調査研究報告』第11集　埼玉県立さきたま資料館
若狭　徹　2009「井出二子山古墳の歴史的意義」「史跡保渡田古墳群　井出二子山古墳史跡整備事業報告書」高崎市文化財調査報告書第231集　高崎市教育委員会
若松良一　1993「二子山古墳・瓦塚古墳」埼玉古墳群発掘調査報告書　第８集　埼玉県教育委員会
若松良一他 2007「武蔵埼玉稲荷山古墳」　史跡埼玉古墳群　稲荷山古墳発掘調査・保存整備事業報告書埼玉県教育委員会

将軍山古墳の新発見資料について

山田琴子・瀧瀬芳之*・荒木臣紀**・宮田将寛**
*公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団　**独立行政法人　国立文化財機構　東京国立博物館

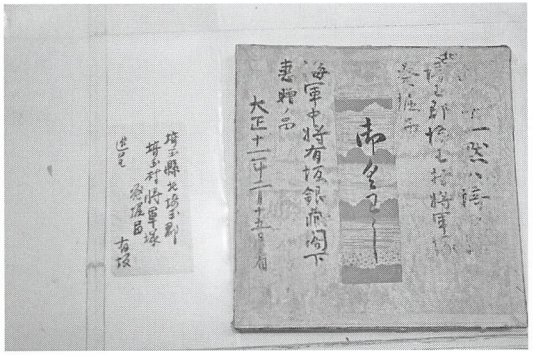
1　これまでの経緯

将軍山古墳は明治27年に地元の有志によって発掘調査が行われた。その際に出土した資料は現在、東京国立博物館、東京大学総合研究博物館、本庄市教育委員会、埼玉県立歴史と民俗の博物館、埼玉県立さきたま史跡の博物館(以下、さきたま史跡の博物館)、個人(さきたま史跡の博物館に寄託)の６か所に分散して所蔵されている。これらの資料の所在と所有者の変遷については、岡本健一によって詳細が述べられている(岡本1997)。

将軍山古墳出土品のうち、これまで所在不明とされていた資料について、個人が所蔵しているとの新たな情報がさきたま史跡の博物館に寄せられた。これを受けてさきたま史跡の博物館では平成24年６月に所在調査を行い、その資料の重要性から所蔵者に寄託を申し入れた所、快諾を得た。その後、平成24年７月よりさきたま史跡の博物館に於いて新発見資料を寄託資料として保管することとなった。

発見時、資料は薄葉紙で包まれ、メモ書きと共に紙製の箱に納められていた。メモ書きには「埼玉縣　北埼玉郡　埼玉村将軍塚　発掘品　進呈　有坂」と書かれている。また、箱には一部が判然としないが「北埼玉郡埼玉将軍塚発掘品　海軍中将有坂銀蔵閣下　恵贈ノ品　大正十一年二月十五日」と記されている。

なお、これらの資料についてはさきたま史跡の博物館に於いて、平成25年度企画展「古代の豪族～将軍山古墳とその時代～」の中で展示品として公開された。


第１図　資料の入っていた箱とメモ書き

また、平成24年に資料を受託するに当たってX線写真を撮影した際に、円頭柄頭に象嵌が施されていることが判明した。X線写真では図像の詳細が把握できないため、独立行政法人東京国立博物館の協力を得てX線ＣＴスキャンの画像撮影を行った。また、象嵌の材質を確認するために蛍光X線分析も併せて行った。

X線ＣＴスキャンの画像撮影、及び蛍光X線による分析の成果については、第５章、第６章でそれぞれ紹介されている。また、X線ＣＴスキャンの画像撮影によって明らかとなった象嵌の紋様については、第３章で詳しく触れている。本稿の執筆分担は以下の通りである。
第１章・第４章　山田、第２章　山田・瀧瀬、第３章　瀧瀬、第５章　宮田、第６章　荒木

2　資料の詳細

新たに発見された資料は以下の通りである。

武器	円頭大刀柄頭	1点
	八窓鐔	1点
	無窓鐔	1点
	責金物	1点
	鉄刀刀身片	2点
	鉄鏃	7点
武具	挂甲小札	一括
馬具	三葉文心葉形杏葉	1点
装身具	切子玉	1点
	耳環	2点

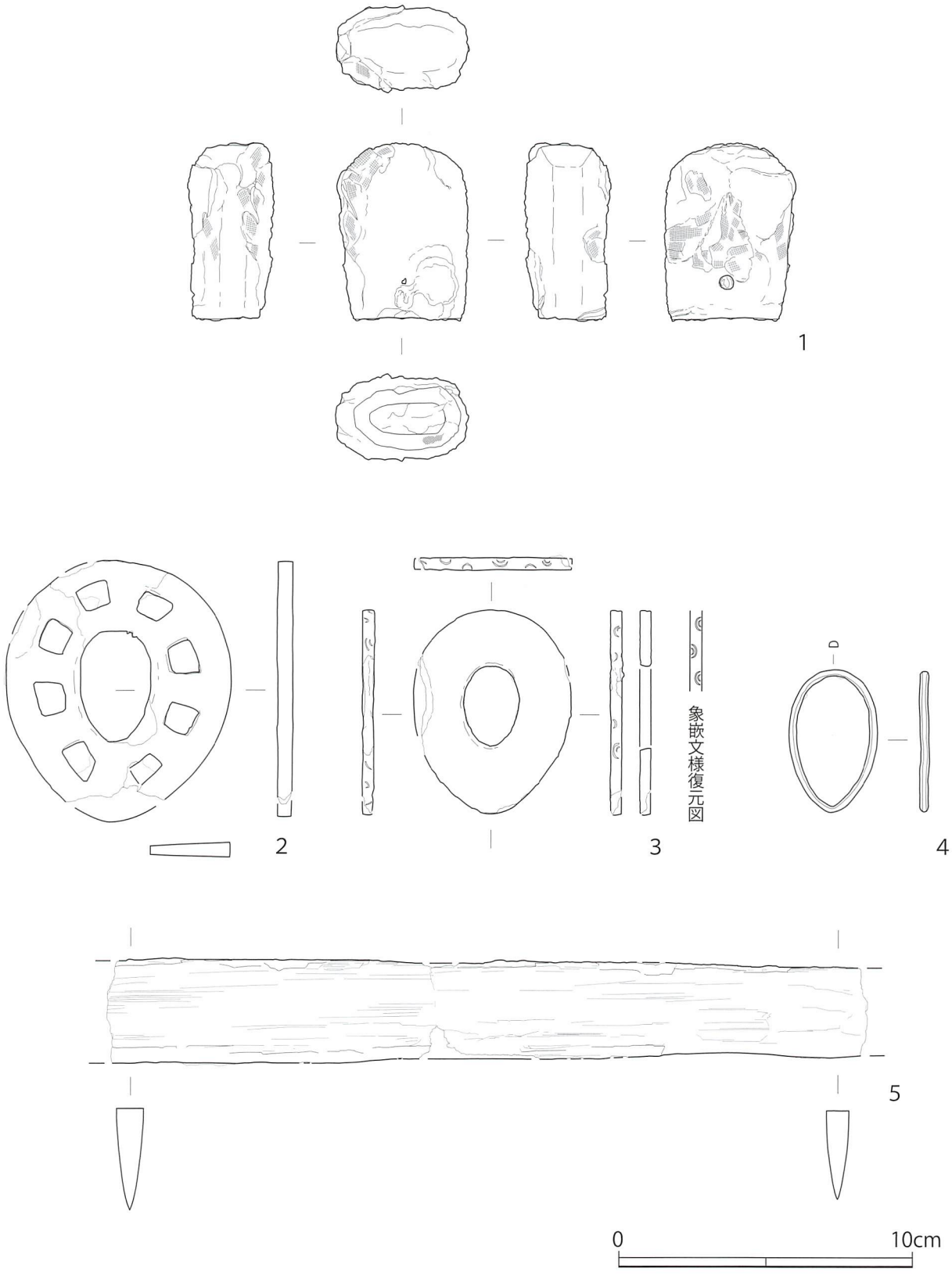
これらの資料のうち、円頭大刀柄頭、八窓鐔、無窓鐔、責金物、鉄刀刀身片については瀧瀬が、それ以外の資料については山田が報告を行った。

円頭大刀柄頭（第2図1）

鉄製で、全面に線象嵌による文様が密に施されている。蛍光X線分析により、象嵌の材質は銀と判明した。現状での大きさは、長さ5.8cm、幅は最大で4.3×2.8cm、縁部で3.6×2.6cm、重さは150ｇである。全面が錆に覆われており、一部に亀裂や錆化による隆起が認められるが、遺存状態は比較的安定している。表面を覆う錆の厚さは、X線ＣＴスキャン画像の解析から、最大で3.4㎜あることが判明しており、錆化する以前の大きさは、長さ5.5cm、最大幅3.6×2.1cm程度になると思われる。柄頭の平面形はほぼ左右対称で、稜を有し、縁小口面の形状は緩やかな八角形を呈している。

錆表面には部分的に無機質化した繊維（布）が付着しており、副葬時に布にくるまれていた可能性が指摘できる。懸通孔は径5.0㎜で、佩表側は錆により塞がれており、錆瘤が剥落した跡が接している。縁金具が接する小口面の一部には緑青が付着している（網伏せ部分）ため、銅もしくは金銅製の縁金具が装着されていた可能性が高い。柄頭の内部には柄木が残存しており、有機質の目釘により固定した目釘留式の柄頭と考えられる(1)。X線ＣＴスキャン画像によると、懸通孔の空洞部分にコイル状？の物質が確認できる。目釘に関連する装具かもしれないが、その実体はよくわからない。柄木はおそらく2枚合わせのものと推定される。

この柄頭は、その形状の特徴からみると、鉄製円頭大刀の中でも比較的古く、大谷編年のⅠ段階後半（ＴＫ43型式期）に属するものと考えられる（大谷2011）。



第２図　円頭大刀柄頭（１）・鐔（２・３）・責金物（４）・刀身片（５）

八窓鐸(第２図２)

方形の透かしが８ヶ所に配される鉄製の矩形八窓鐸である。包まれていた和紙には「寶珠鍔一」と墨書きされている。一部欠損しており、径は推定で8.8×7.6cm、茎孔径は3.7×2.4cm、厚さは0.3～0.5cmで、耳部に向けて次第に厚みを増す。重さは剥落した錆片を含めて85.3ｇである。象嵌は認められない。遺存状態は柄頭などと比較すると悪く、錆化が進行中である。

透かしの配置が鐸の中心線を挟んで左右対称ではなく、形状が正円形に近く幅広となるため、八窓鐸のなかでも新しく、ＴＫ209型式期以降のものと推定される。

無窓鐸(第２図３)

鉄製の無窓鐸で、耳にのみ象嵌文様が施されている。象嵌はおそらく銀線であろう。遺存状態はあまり良好でなく、部分的に錆化が進行し、欠損や表面の剥落が認められる。径は6.9×推定5.3cm、茎孔径は2.5×1.8cm、厚さは0.4cmで、全体はほとんど同じ厚さである。重さは54.4ｇである。

耳の象嵌文様は、二重の半円が交互に連続する「交互重半円文」である。部分的に剥落し、12単位が確認できる。実測図はＸ線透過画像より推定したものである。この文様はＴＫ209型式期の後半段階のものと考えられ(瀧瀬・野中1996)、円頭柄頭と一具をなす可能性は低い。

責金物(第２図４)

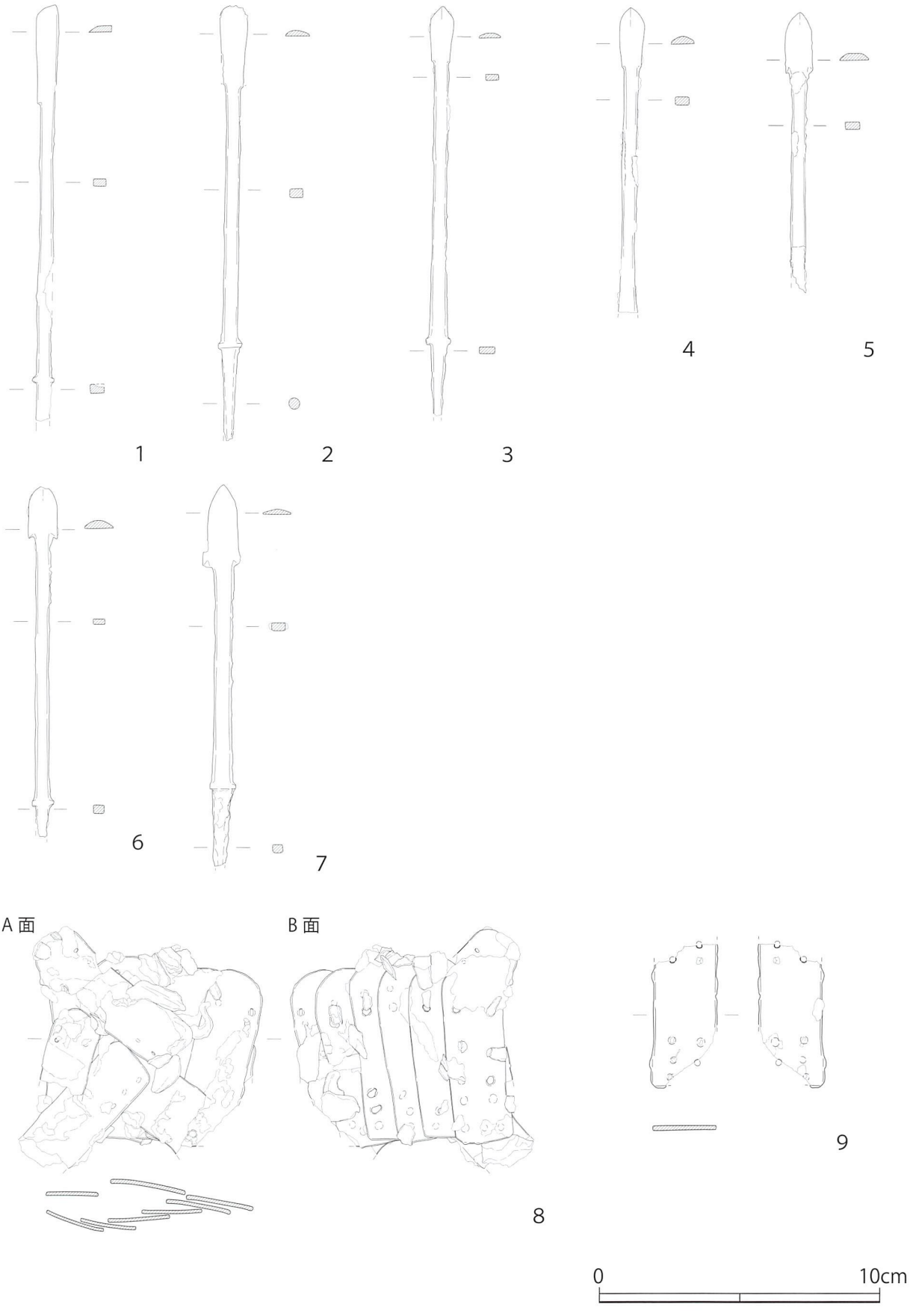
金銅製の責金物である。大きさは、径4.8×2.0cm、厚さ0.2×0.3cm、重さは3.9ｇである。断面は蒲鉾形を呈する。若干ゆがみがあり、鍍金は部分的に剥落している。責金物としては通有のタイプで、時期を絞り込むことは困難である。

鉄刀刀身片(第２図５)

平造りの鉄刀の一部である。２片が接合し、現存長は25.8cm、刃幅3.0～3.5cm、背幅0.8～1.0cm、重さは220.2ｇである。鞘木が付着して残っている。鞘木の表面には、部分的に銀色の付着物が認められるため、銀を用いた鞘金具が装着されていた可能性がある。

鉄鏃(第３図１～７)

７本の鉄鏃が確認されている。１は片切刃造、それ以外は全て片丸造の長頸鏃である。１は長さ14.4cm、茎部の先を欠損している。鏃身は片刃形であり、棘状関を有する。２は長さ15.0cm、鏃身は無関の柳葉形であり、棘状関を有する。茎部の先に木質が付着している。３は長さ14.2cm、茎部の先を欠損している。鏃身は無関の柳葉形であり、棘状関を有する。４は長さ10.2cm、茎部を欠損している。鏃身は無関の柳葉形である。５は長さ9.7cm、頸部の途中から先を欠損している。鏃身は無関の柳葉形である。６は長さ12.1cm、茎部の先端を欠損している。鏃身は腸抉のある柳葉形であり、棘状関を有する。７は長さ13.0cm、茎部の先端を欠損している。鏃身は腸抉のある柳葉形であり、棘状関を有する。



第 3 図　鉄鏃（1 ～ 7）・挂甲片（8）・小札（9）

挂甲小札（第３図８・９）

８は計10枚の小札が錆着した挂甲の破片である。表裏で小札の見え方が異なるため、Ａ面、Ｂ面として報告する。Ａ面には幅2.2～2.3cmの小札３枚と、幅1.8cmの小札が１枚の計４枚の小札が錆着している。小札は全て円頭形であり、縅孔は２列である。小札の大きさは幅2.2cm、長さ6.3～6.4cmの規格でほぼ統一されている。小札同士の結合には革紐を用いている。Ｂ面には６枚の小札が各段縅の手法を用いて結合された状態で錆着している。将軍山古墳には２領の挂甲が副葬されていたことが過去の調査から判明している（岡本1997、内山2013）。ここで報告する小札は革紐と組紐が付着していることから挂甲Ｂを構成していたものと考えられる。また、Ａ面の１枚だけ幅の狭い小札は、1997年の報告において長さ4.3cm、幅約2.0cmの大きさで下搦孔が無いとされた一群の小札と規格が近いことから、胄の頬当を構成していたものであろう。９は小札の破片である。長さ5.2cm、幅2.3cmをはかり、湾曲せず平坦である。第３縅孔が無く、縅孔周辺には革紐が確認されることから、挂甲Ｂの草摺を構成していた小札である可能性が高い。

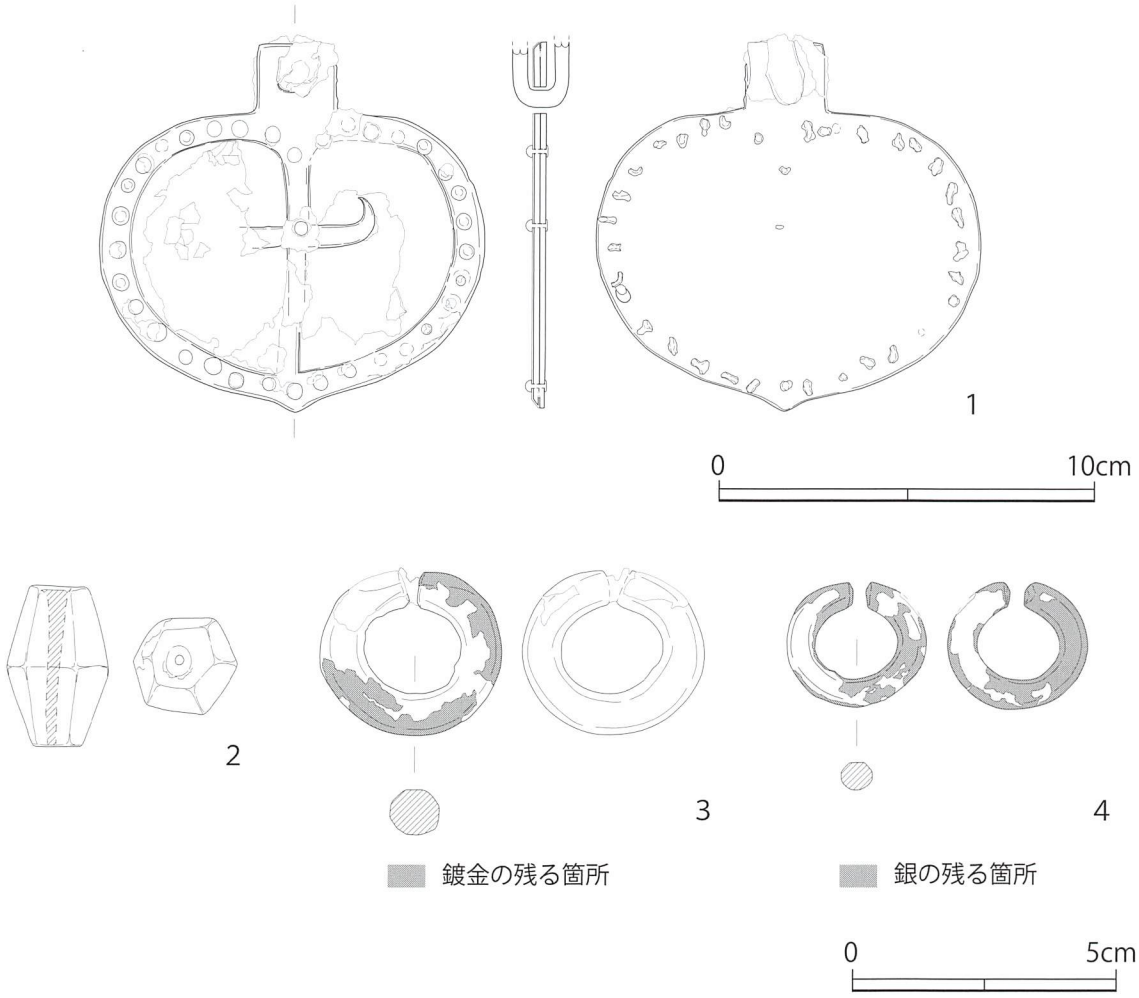
三葉文心葉形杏葉（第４図１）

立聞の先端から心葉形の先まで9.5cm、横幅は10.1cmを測る。鉄製の地板の上に縁板を載せ、上から金銅板を被せて、さらにその上から鋲留めしている。鋲頭の直径は0.4cmであり、0.3～0.4cmの間隔で34箇所、及び三葉文の中央１箇所、計35箇所を留めている。裏面には鋲の脚を潰して、地板と縁板をかしめている様子が確認できる。金銅板は縁板周辺では残りが良いが、三葉文の周辺では割れて大部分が欠損している。立聞の部分には吊金具の足の部分が錆着しているが、本来は鉄地金銅張の方形の吊金具が伴っていたと考えられる。

将軍山古墳からは今回報告の形式の杏葉の出土はこれまでに確認されていない。轡と輪鐙が２種類ずつ出土していることから、馬具は本来２セットが副葬されていたものと考えられる。２つの轡のうち、より手の込んだ作りである金銅製十字文楕円形鏡板付轡には奢侈品としての性格が強い棘葉形杏葉が組み合わさり、環状鏡板付轡には今回報告の資料が組み合わさったのであろう（内山2012、宮代2013）。国内で製作された三葉文心葉形杏葉はTK43型式期から現れるが、埼玉県一夜塚古墳出土品のように鋲が密に打たれたものと、奈良県牧野古墳出土のように鋲が疎らに打たれたものとがある。今回報告の資料は鋲の間隔は密であり一夜塚古墳例に近い。

装身具（第４図２～４）

２は水晶製の切子玉である。長さ2.9cm、最大径1.9cmである。14面体に加工されており、小口は六角形を呈する。両小口とも、孔の周辺には瑕があり、稜線は磨滅している。紐を通して他の玉と共に使用されていた痕跡であろうか。３、４は耳環である。２は最大長3.2cm、径0.8～0.9cmを計る。銅芯に鍍金を施している。３は最大長2.6cm、径0.6cmを計る。銅芯に銀板を張っている。



第４図　三葉文心葉形杏葉（１）・装身具（２～４）

３　円頭大刀柄頭に施された象嵌文様について

円頭柄頭に施された象嵌文様を第５図に示した。Ｘ線ＣＴスキャン画像をもとに起こしたものであり、表面の錆層を除いた本来の柄頭の大きさに近い。実測図ではないため、懸通孔や象嵌の配置の整合性は必ずしもとれていない。

（１）象嵌文様の詳細

佩表

七葉のパルメットを中心に向き合う鳳凰を施している。他の対向双鳳文と異なり、鳳凰の胴体が細く伸びてパルメットを丸く囲っているのが特徴である。中心のパルメットの上には蔓のようなものが長く延びている。鳳凰の頭部は丸く小さく、先端が延びて嘴となり閉じていない。小さく短い線で目が表現される。冠毛は五葉のパルメットとなり、その後ろにたてがみをあしらう。それぞれの胴体の中ほどからは片翼が、双鳳の胴体が接する近くからはもう一方の片翼が広がっている。下位の翼の下には先が二つに分かれた蕨手文が見られるが、これは脚を表現しているのであろうか。全体としてその表現は稚拙ではあるものの、まるで宙を舞って羽ばた

いているような躍動感がある。双鳳の直下には、横位の逆Ｓ字文が配されている。

懸通孔の周囲には花弁を配し、孔を花托と見立てれば蓮華を表した蓮華文といえよう。花弁には一筋の花脈がある。現在六弁が確認されるが、剥落した間隔から、八弁であったと推定される。花の下の左右対称に開いた蕨手文は、花柄と葉を表しているのかもしれない。対向双鳳文と蓮華文の周囲は、左右隅に配された五葉のパルメット(右側は一部剥落)の根元から延びる半パルメットの波状唐草文でアーチ状に充填される。施文範囲の制約からか、背側の一部は半パルメットではなく連続する蕨手文となっている。

佩裏

中央に円が描かれ、内側に二重の内行花文(連弧文)が９単位めぐる。その中に兎と考えられる獣が左向きに配される。長い耳や丸い眼、小さい口元は、一目で兎とわかるほど表現は巧みである。しかしその一方、ほかの部分は写実性を欠き、胴体は芋虫のように曲がり３本の節を有する。肢を表現しているものか、背中から１本、腹から２本の線が延びている。頭部のそばには並んで単葉状の文様がある。頭部以外は兎とは似ても似つかないが、もしこの獣が兎を表しているとするならば、円は月を表し、玉兎を描いた月像図と考えられる。月の頂部には七葉のパルメットが配されている。

懸通孔には佩表と同様に花弁が巡るが、花弁には花脈はなく、枚数も九弁となり、佩表よりも１枚多い。月との境に半円文が一単位配される。その右隣を起点として、花文を波状唐草文が巡っている。さらに全体を、佩表と同様に半パルメットの波状唐草文がアーチ状に充填される。ここでも一部の半パルメットは省略化されている。

背側・刃側・頂部

背側には４単位、刃側には３単位の半パルメット波状唐草文が配される。ともに頂部よりの１単位は逆方向を向いている。背側のパルメットは省略化されることなくきちんと表現され、刃側は施文範囲が狭いためか、真中のパルメットには乱れがみられる。

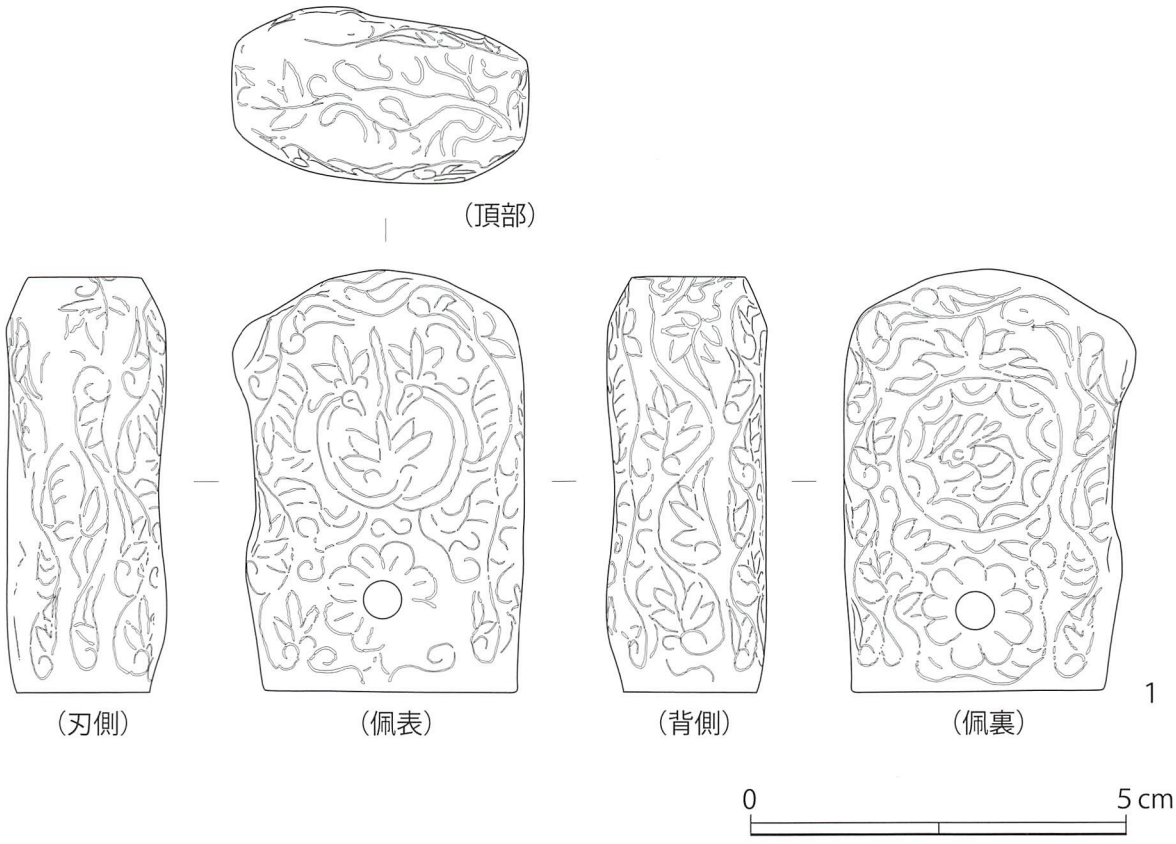
頂部の象嵌文様は、何を表現しているのかよくわからない。刃側寄りにパルメット文？が配されるが、両側面に施された波状唐草文とは明確に区別されている。

(２)文様の図像

双鳳文

パルメット対向双鳳文は、象嵌円頭大刀では亀甲繋文の内部に施されている例がある。奈良県星塚２号墳例(第６図１)は、逆向きの三葉のパルメットを中心として、鶏のとさかのような冠羽のある横向きの鳳凰が対向する。島根県岡田山１号墳例(第６図２)もおそらく同様のモチーフをなぞらえたものと考えられるが、文様は乱れて本来の意味は失われている。

本例を含め、これらのパルメット対向双鳳文の系譜は、列島内では奈良県藤ノ木古墳出土の棘葉形杏葉(第６図３)の透彫り文様に求められよう。藤ノ木古墳例では、上方から垂れた蔓から中央のパルメットが構成されるが、本例の中央のパルメットの直上にある蔓状の表現はそれ



第５図　円頭大刀柄頭の象嵌文様

を模したものと捉えることができる。この双鳳文は、北朝系で仏教芸術色が濃く、６世紀20・30年代の所産と位置付けられている（蘇1990）。単純に比較することはできないが、少なくとも本例にはそれに次ぐ年代を与えるべきであり、先に触れたＴＫ43型式期の年代観を裏付ける根拠になると考えられる。

月像図

玉兎が描かれた月像図は、古墳時代の出土品には類例がなく、兎そのものの図像も、藤ノ木古墳出土の鞍金具の透彫り亀甲繋文内の一つに見いだせるに過ぎない（第６図４）。日月像は、同時期の中国大陸や朝鮮半島においては、南北朝墳墓の壁画や画像石、高句麗古墳の壁画などに見ることができる。

現在、最も古い日月像図と考えられているのは、中国湖南省の長沙馬王堆漢墓（前漢初期）出土の彩絵帛画に描かれたものである。日像に踆烏（三足の烏）が、月像は三日月に、蟾蜍（ヒキガエル）と兎が描かれている（第７図１）。蟾蜍と兎が月に棲んでいるという説は、前漢時代にはすでに広まっていたもので、武帝統治末期に西王母信仰が盛んになると、西王母から夫に授けられた不老不死の仙薬を盗んで飲んでしまった妻の恒娥が、月に逃げ込んで蟾蜍になったという神話が生まれ、兎は、西王母の従者である羽人と混同され、仙薬を搗く姿に変化していったという（小川2003）。

高句麗壁画古墳における月像には、蟾蜍が表されていることが多い。蟾蜍のみの月像は５世紀初頭に出現し、６世紀後半まで見ることができる。５世紀後半になると蟾蜍に兎が加わるようになり、さらにそれらが月に生えるという桂樹と組み合わさる画像は、５世紀末から６世紀初めに現れるという（東2004）。蟾蜍と兎が描かれた高句麗古墳には、中国吉林省集安市長川１号墳（第７図２）、平安南道大同郡徳花里２号墳（第７図３）、平壌市真坡里１号墳・鎧馬塚（第７図４）・内里１号墳などがある。

管見の限りではあるが、月像に兎のみが描かれた月像は、５・６世紀の朝鮮半島や中国大陸には見当たらない。日本国内では、７世紀の遺品の中に存在する。著名なのは、奈良県中宮寺所蔵の天寿国繍帳残闕に見られる月像図で、薬壺で仙薬を搗く兎と桂樹が描かれている（第７図６）。この繍帳には622年に聖徳太子妃の橘大郎女が、聖徳太子の死を悼んで縫わせたという由来がある（松本1997）。また、飛鳥時代の作とされている奈良県法隆寺の玉虫厨子の須弥座背面図の中に月像があり、あまり判然としないが、兎と桂樹？が描かれている（第７図７）。さらに、法隆寺献納宝物の一つである金銅灌頂幡の天蓋の毛彫文様の中に、兎を描いた月像がみられる。施文範囲の制約から半円となっているが、兎の上半身と壺、桂樹が表されている（第７図８）。施文方法が、線象嵌と技法的に共通する毛彫で施文されているために、兎の表情は本例と通じるものがある。この灌頂幡は、７世紀後半の作と考えられている（加藤2001）。

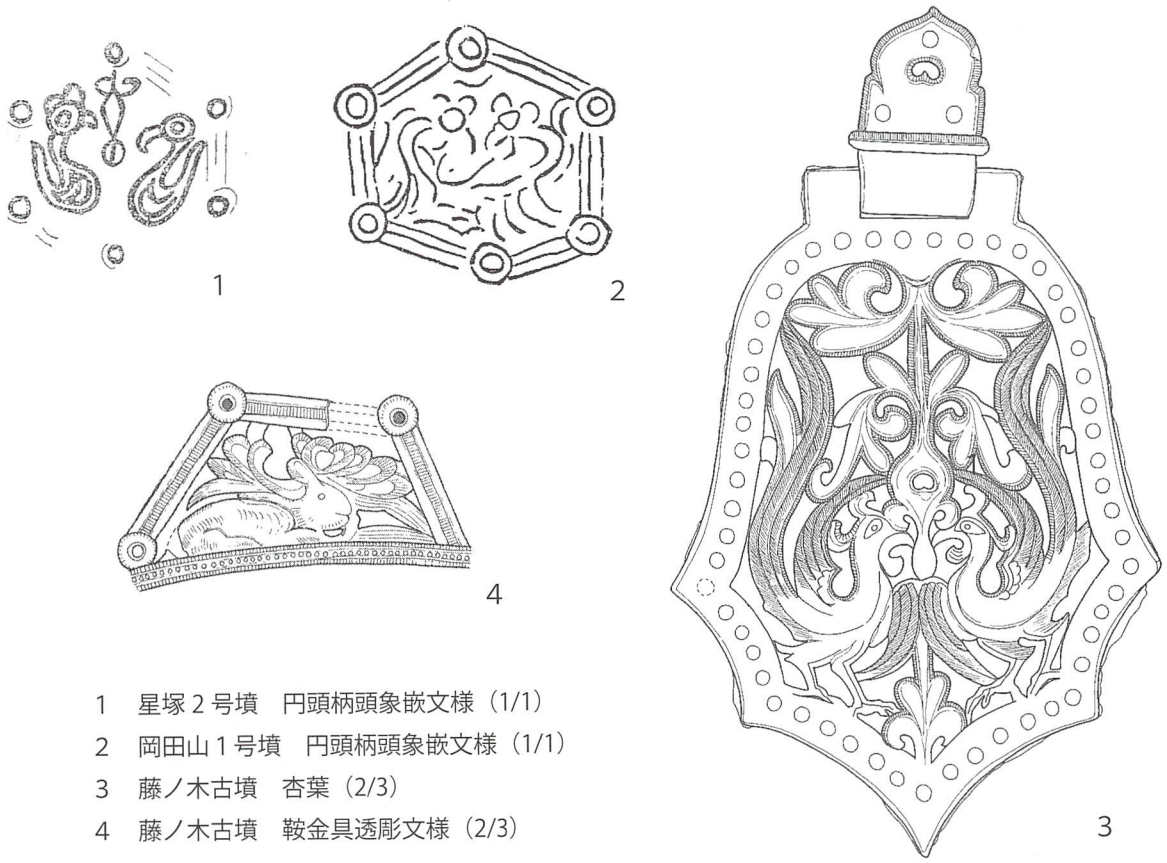
時期が下るにつれて月像図に兎だけが描かれることが多くなったのは、帝釈天の仏教説話（老人に身をやつして食べ物を乞うた帝釈天に、なにも差し出せなかった兎が自らの肉を食してもらおうと火中に身を投じた。哀れに思った帝釈天は、兎の亡骸を月中に納めた。）の側面が強くなったためという（今橋2002）。

続く国内の８世紀の資料では、756～758年に、光明皇后が聖武天皇の冥福を祈願して東大寺に献納した宝物（正倉院宝物）中の楽器、桑木阮咸に描かれた例がある（第７図９）。ここに至って、再び蟾蜍が加わり、桂樹と薬壺を挟んで兎と対峙するという画像になっている。

（３）発見の意義

以上のように月像図の変遷を見てきたが、本例（第７図５）は、柄頭の形状等から推定される６世紀後半という年代観が正鵠を得たものであるならば、日本国内で発見された最も古い月像図と位置づけられる。兎のみの画像であることや、先に触れた双鳳文の系譜から、仏教色の濃い文様であるといえよう。ただし、頭部以外は兎の体をなしておらず、また、ほかの月像には表現されない内行花文をアレンジに加えていることから、この象嵌を彫った工人が、月像（玉兎）を意図していたとは考えにくい。その反対面（佩表）が日像（踆烏）ではなく、（「円」を意識しているとはいえ、）当時流行していたパルメット対向双鳳文であることも、それを裏付ける根拠になると考えられる。

本例の特異さは、列島内や朝鮮半島に類例のない象嵌文様をもつ刀装具であることにある。その製作地を考えるにあたっては、その文様の特異性そのものや、形骸化の度合いを理由にして、倭の工房の製品であるという仮説も成り立つ。その一方、この柄頭をもつ円頭大刀は、その柄頭のサイズや形状の特徴から、呑口式で足金物をもたない吊手佩用の大刀と考えられる。



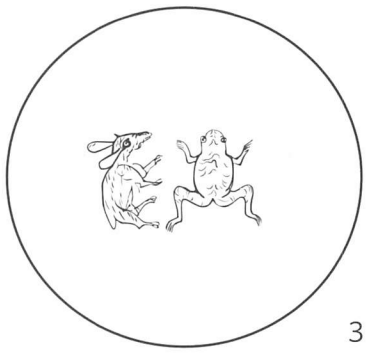
1　星塚２号墳　円頭柄頭象嵌文様（1/1）
2　岡田山１号墳　円頭柄頭象嵌文様（1/1）
3　藤ノ木古墳　杏葉（2/3）
4　藤ノ木古墳　鞍金具透彫文様（2/3）

第６図　双鳳文と兎の図像の類例

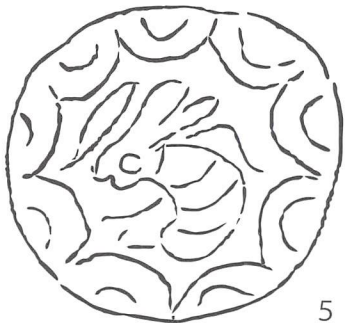
吊手佩用の円頭大刀は、将軍山古墳の他の副葬品である馬冑などと同様に、朝鮮半島系の遺物であるため、それを理由に本例を朝鮮半島製とみなすことも可能である。いずれにしろ決め手に欠けており、比較資料の乏しい現段階ではその判断は保留にせざるを得ない。今後の類例資料の増加に期待したい。


1


2


3


4


5


6


7


8


9

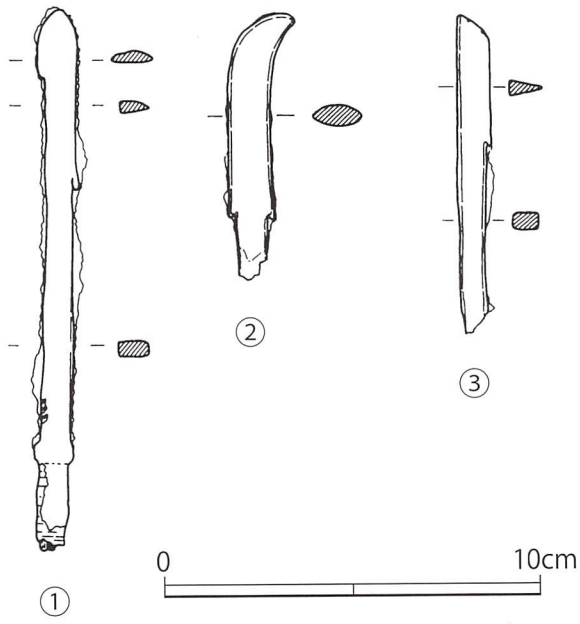
1　長沙馬王堆１号漢墓
2　長川１号墳
3　徳花里２号墳
4　鎧馬塚
5　埼玉将軍山古墳
6　天寿国繍帳
7　玉虫厨子
8　灌頂幡
9　桑木阮咸

第７図　兎のいる月像図（縮尺不同）

4　将軍山古墳副葬品の年代について

(1)鉄鏃の形式について

1894年に出土した資料や、平成３年の発掘調査で将軍山古墳出土として確認されている鉄鏃の形式は、長頸の①段違い関鏃、②反刃鏃、③片刃鏃の３種類である。これらの鉄鏃のうち、段違い関鏃、反刃鏃は共に、古墳時代後期以降、日本列島の有力な前方後円墳から出土している。こうしたことから、これらの鉄鏃は畿内政権から日本列島の有力階層に配布された威信財としての性格が強いものであったと指摘されている(鈴木2003)。鈴木の分類では、将軍山古墳の段違い関鏃は両側の逆刺の深さがほぼ同じⅡ類とされるものであり、古墳時代後期初頭から後葉にかけて出土が確認されている。一方、反刃鏃は鏃身関が両関で頸部に特別な造作がないⅠ類とされているものであり、古墳時代後期前半に副葬品として出土する。なお、片刃鏃は古墳の規模に関わらず、古墳時代中期中葉から後期末にかけて、倭全域の古墳から副葬品として確認されている形式の鉄鏃である。段違い関鏃Ⅱ類、反刃鏃Ⅰ類がセットとなって出土していることから、古墳時代後期中葉頃、MT85型式期に副葬された可能性が高いと言えよう。



第８図　将軍山古墳から出土した鉄鏃の各形式

今回、新発見資料として報告した鉄鏃は全て長頸鏃であるが、これまでに確認されていた形式と共通するのは片刃鏃(第３図１)のみであり、他は将軍山古墳の出土品としては新しく確認されたものとなる。中でも第３図６・７は腸抉鏃であり、この形式の鉄鏃はTK209型式期に出現して関東・東海地域を中心に分布することから、倭全域に共有される片刃鏃などの共有型式に対して、地域型式と称される(内山2003)。共有形式の鉄鏃も地域型式の鉄鏃も共に古墳に副葬されるようになるが、共有型式のものが大型古墳や前方後円墳で豊富に副葬されるのに対し、中小古墳では地域型式の腸抉鏃を保有する割合が高くなる。

上記をまとめると、TK85型式期に副葬品とされたのが段違い関族と反刃鏃、TK209型式期に副葬品とされたのが腸抉鏃となる。その他の形式の鉄鏃については、棘関のものはTK43型式期以降のものであるが、詳細については今後の検討課題としたい。

(2)他の副葬品との組み合わせについて

本稿第２章の刀装具の報告によれば、円頭柄頭はTK43型式期、八窓鐔、無窓鐔は共にTK209型式期以降のものである。これまでに出土した刀装具の検討から、将軍山古墳からは環付楔形柄頭大刀、金銅装三葉環頭大刀、折衷系円頭大刀もしくは頭椎大刀、象嵌装円頭大刀、象嵌装大刀の５振りの装飾付大刀が副葬されていたことが判明している(瀧瀬2013)。どのような組み合

わせで副葬されたのは不明だが、概ねTK43～TK209型式期におさまることが考えられる。

馬具については第２章で述べた通り、将軍山古墳には２組の馬装群が副葬されていた可能性が高い。金銅製心葉形鏡板付轡・金銅製雲珠・辻金具・金銅製棘葉形杏葉を組み合わせた外来系の「金銅製」の馬装群と、鉄製環状鏡板付轡・鉄地銀張鞍金具・鉄地銀張飾金具を組み合わせた倭系の「鉄地銀装」の馬装群であり、今回報告の三葉文心葉形杏葉は鉄地銀装の馬装群と組み合わさる可能性が高い。宮代栄一はTK43～TK209型式期の間のわずかな時期差で、初めに外来系の馬装を保有していた被葬者が葬られ、続いて倭系の馬装の保有者が葬られたという２回の埋葬を想定している（宮代2013）。

なお、将軍山古墳からは横穴式石室内からTK43型式期に位置づけられる須恵器高坏が、また、墳丘西側の造出しからはMT85型式期の須恵器甕が出土している（酒井2014）。

将軍山古墳から出土した副葬品のうち、年代が求められるものをまとめると表のようになる。

MT85	鉄鏃（段違い関鏃・反刃鏃）・須恵器甕（造出し出土）
TK43	馬具（金銅製心葉形鏡板付轡・金銅製雲珠・辻金具・金銅製棘葉形杏葉）・円頭柄頭・須恵器高坏（石室内出土）
TK209	馬具（環状鏡板付轡・鉄地銀張鞍金具・鉄地銀張飾金具・心葉形三葉文杏葉）・八窓鐔・無窓鐔・鉄鏃（腸抉鏃）

３時期に分けられるが、これらが埋葬の単位を示す可能性が考えられる。将軍山古墳からは、他にも衝角付冑、方形板革綴冑、挂甲２領、馬冑、蛇行状鉄器、銅鋺、金属製玉類などが出土しているが、それぞれの資料の型式学的研究が深まることでさらに詳細な年代観が明らかとなるであろう。今後の課題としたい。

《註》

（１）当初肉眼による観察により、内部に残っている物質を茎部と誤認し、茎目釘留式の柄頭と推定したが（瀧瀬2013）、ここに訂正するものである。

《引用・参考文献》

赤田光男　1997「ウサギの信仰史」『ウサギの日本文化史』　世界思想社　pp37-70

東　潮　2004「高句麗壁画の風景―山水・日月・狩猟画像―」『青丘学術論集』第24集　財団法人韓国文化研究振興財団　pp5-44

足立　康　1939「玉兎の話」『史迹と美術』第７輯ノ１　史迹美術同攷会　pp1-4

有光教一ほか　1937『昭和十一年度古蹟調査報告』　朝鮮古蹟研究会

今橋理子　2001「〈月の兎〉の図像と思考（上）」『学習院女子大学紀要』第３号　学習院女子大学　pp1-22

今橋理子　2002「〈月の兎〉の図像と思考（下）」『学習院女子大学紀要』第４号　学習院女子大学　pp1-31

林永周　1981「動物文様Ⅳ　韓国の装飾文様15」『月刊韓国文化』第３巻第12号（通巻27号）　自由社　pp36-38

上原　和　1991「絵画意匠より見た玉虫厨子の様式年代」『玉虫厨子　飛鳥白鳳美術様式史論』　吉川弘文館　pp275-304

内山敏行　2003「古墳時代終末期の長頸鏃　－東日本における棘関腸抉鏃の評価－」『七世紀研究会シンポ

ジウム　武器生産と流通の諸画期』　七世紀研究会　pp27-42
2011　「後期・終末期古墳出土の鉄鏃　－東日本の場合－」『考古学ジャーナル616号』　ニューサイエンス社　pp19-22
2012　「６．装飾付武器・馬具の受容と展開」『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第120集　馬越長火塚古墳群』　豊橋市教育委員会　pp313-324
2013　「論考編１　将軍山古墳の武器・武具」『平成25年度企画展　古代の豪族～将軍山古墳とその時代～』　埼玉県立さきたま史跡の博物館　pp16-19
江上　綏　1983　『日本文様の源流』　日本経済新聞社
大場磐雄　1975　「卯(兎)の考古学」『日本歴史』第320号　吉川弘文館　pp52-55
大谷宏治　2011　「象嵌装大刀の変遷～円頭・頭椎・圭頭大刀を中心に～」『月刊考古学ジャーナル』№616　ニューサイエンス社　pp13-18
岡本健一編　1997　『将軍山古墳　《史跡埼玉古墳群整備事業報告書》　－史跡等活用特別事業－　確認調査編・付編』埼玉県教育委員会
小川博章　2003　「玉兎考―月の兎はどこから来たか」『書学文化』第５号　淑徳大学書学文化センター　pp5-22
折原　覚　2007　「関東地方の古墳出土の特殊鉄鏃について－6世紀を中心に－」『駒澤考古』32　駒澤大学考古学研究室　pp1-15
加藤真二　2011　「古代の天文」『星々と日月の考古学』　飛鳥資料館　pp11-21
加藤　勝　2001　「金銅灌頂幡」『日本の国宝』週刊朝日百科001　朝日新聞社　pp72-73
勝部明生・鈴木　勉　2003　「藤ノ木古墳出土馬具の源流を辿る」『橿原考古学研究所論集』第14　創立65周年記念　八木書店　pp373-406
門脇俊彦ほか　1987　『出雲岡田山古墳』　島根県教育委員会
吉林省文物工作隊・集安県文物保管所　1982　「集安長川一号壁画墓」『東北考古与歴史』第１輯　文物出版社　pp154-173
蔵田　蔵　1958　「金銅幡の装飾文様について」『ＭＵＳＥＵＭ』85号　美術出版社　pp2-6
小泉顕夫　1986　『朝鮮古代遺跡の遍歴―発掘調査三十年の回想―』　六興出版
小島俊次　1955　「星塚古墳」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』第７輯　奈良県教育委員会
湖南省博物館・中国科学院考古研究所　1976　『長沙馬王堆一号漢墓』　平凡社
斎藤　忠　2005　「私の見た高句麗古墳壁画」『高句麗壁画古墳』　共同通信社　pp29-43
早乙女雅博監修　2005　『高句麗壁画古墳』　共同通信社
酒井清治　2014　「古墳と須恵器」『シンポジウム　埼玉古墳群の謎　～東国を治めた古代豪族～』さきたま魅力アップ委員会　pp36-40
鈴木一有　2003　「後期古墳に副葬される特殊鉄鏃の系譜」『静岡県埋蔵文化財研究所　研究紀要　第10号』　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　pp217-236
関野　貞ほか　1930　『高句麗時代之遺蹟　図版下冊』古蹟調査特別報告第５冊　朝鮮総督府
蘇　哲　1990　「馬具文様(１)禽獣文」『斑鳩藤ノ木古墳　第一次調査報告書』　斑鳩町・斑鳩町教育委員会　pp426-431
瀧瀬芳之・野中　仁　1996　「埼玉県内出土象嵌遺物の研究―埼玉県の象嵌装大刀―」『研究紀要』第12号　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　pp37-94
瀧瀬芳之　2013　「将軍山古墳の装飾付大刀」『平成25年度企画展　古代の豪族～将軍山古墳とその時代～』　埼玉県立さきたま史跡の博物館　pp20-23
奈良県立橿原考古学研究所編　1990　『斑鳩藤ノ木古墳　第一次調査報告書』　斑鳩町・斑鳩町教育委員会
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館　1987　『特別展　唐草文の世界―西域からきた聖なる文様―』
西川明彦　1992　「桑木阮咸の満月部画像〔南倉一二五－一〕」『正倉院年報』第14號　宮内庁正倉院事務所　(口絵解題)

西川明彦　1994　「日像・月像の変遷」『正倉院年報』第16號　宮内庁正倉院事務所　pp27-54
松本包夫　1997　「天寿国繍帳残闕」『日本の国宝』週刊朝日百科004　朝日新聞社　pp110-111
宮代栄一　2013　「論考編３　将軍山古墳出土の馬具とその馬装」『平成25年度企画展　古代の豪族～将軍山古墳とその時代～』　埼玉県立さきたま史跡の博物館　pp24-27
山本忠尚ほか　1996　『唐草文』日本の美術第358号　至文堂
渡辺智恵美　1997　「耳環小考　－製作技法、材質からみた分類－」『元興寺文化財研究所創立30周年記念誌』　元興寺文化財研究所　pp73-83

《図版出典》

第６図

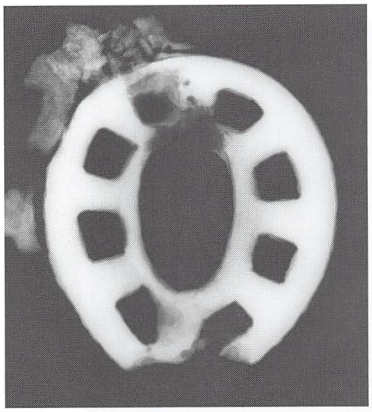
１　小島1955より転載
２　門脇ほか1987より転載
３・４　奈良県立橿原考古学研究所編1990より転載

第７図

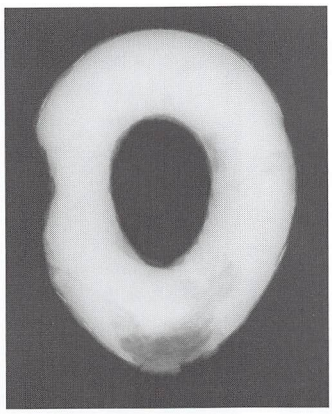
１　湖南省博物館・中国科学院考古研究所1976掲載図をもとに瀧瀬作図
２　吉林省文物工作隊・集安県文物保管所1982掲載図をもとに瀧瀬作図
３　早乙女2005掲載図版をもとに瀧瀬作図
４　有光ほか1937掲載図版をもとに瀧瀬作図
６　松本1997掲載図版をもとに瀧瀬作図
７　上原1991掲載図版をもとに瀧瀬作図
８　蔵田1958掲載図版をもとに瀧瀬作図
９　西川1992掲載図・図版をもとに瀧瀬作図

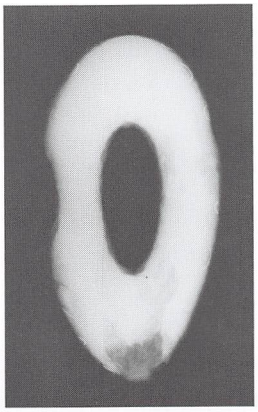
第８図

１～３　岡本1997より転載

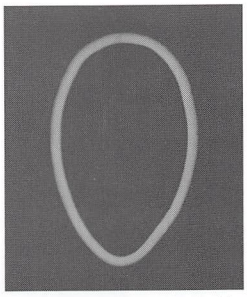


八窓鐔

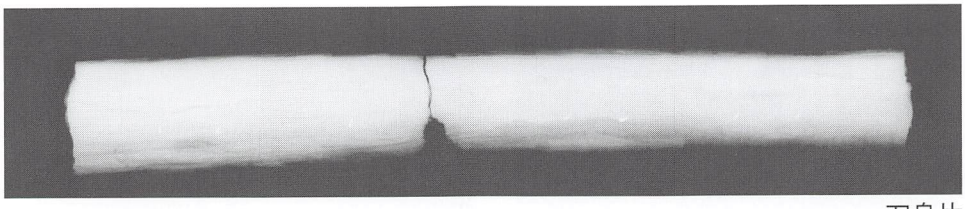




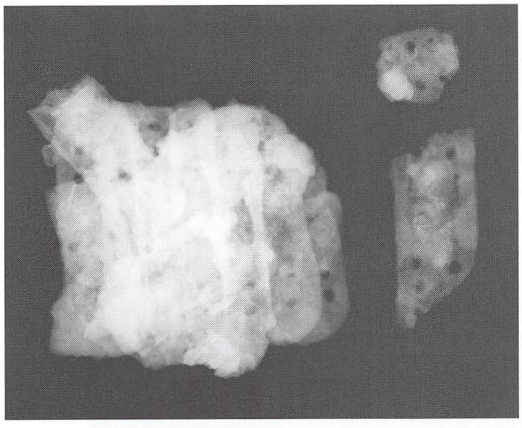
無窓鐔



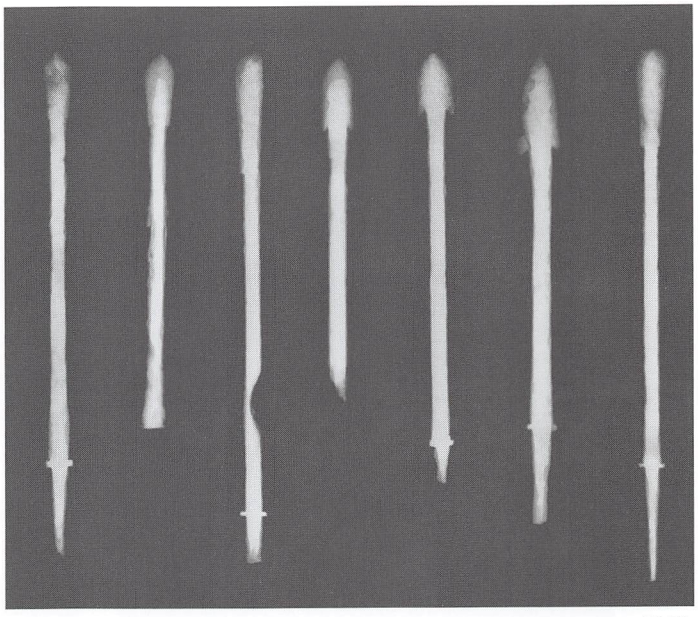
責金物



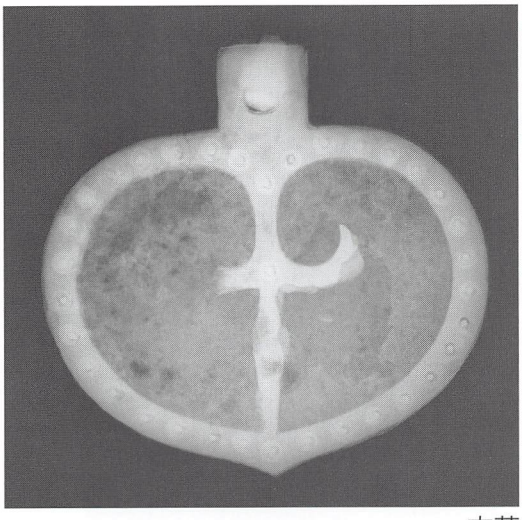
刀身片



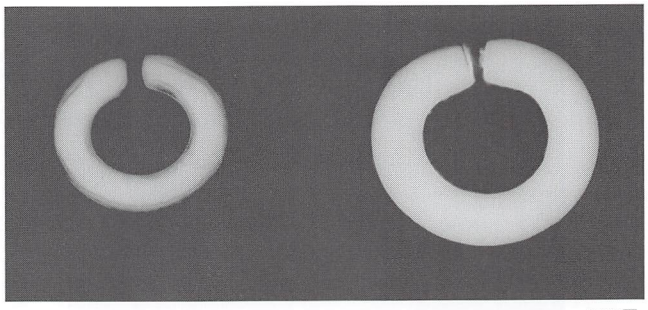
小札



鉄鏃

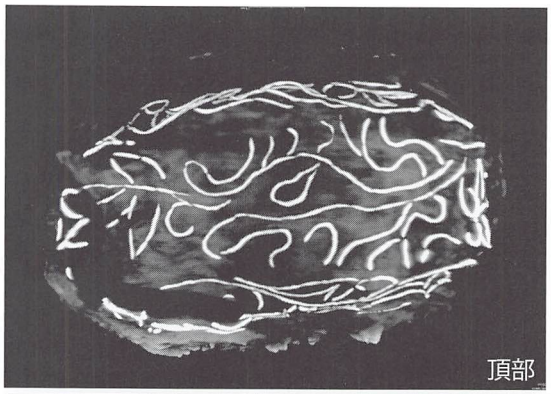


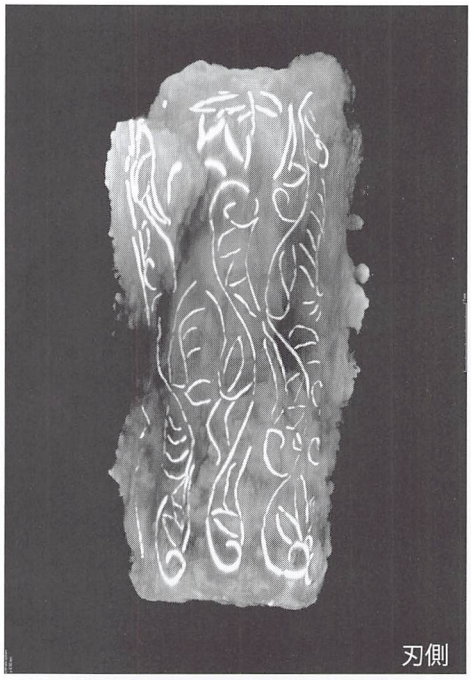
杏葉



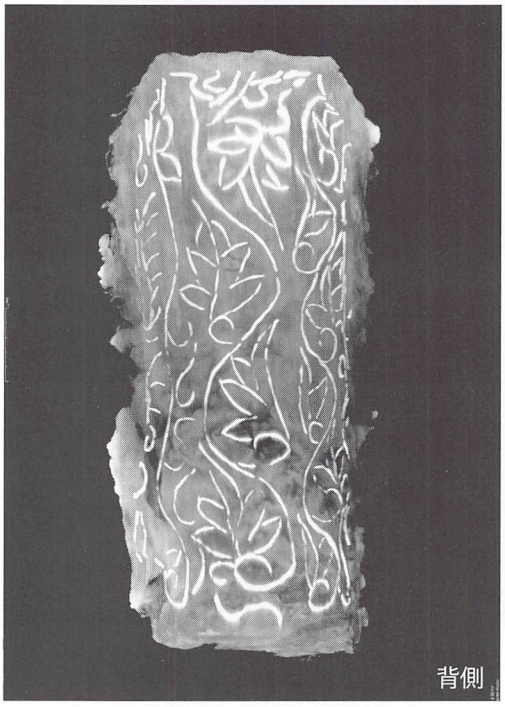
耳環

写真1　X線透過画像









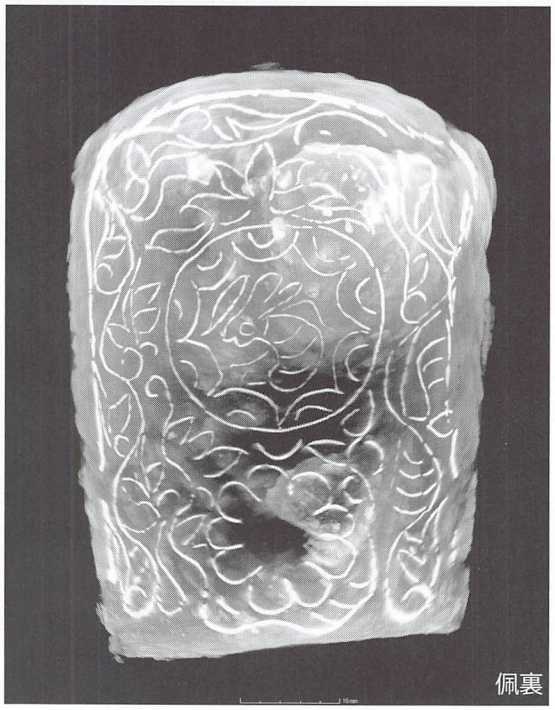


写真2　Ｘ線ＣＴスキャン画像

5　伝埼玉将軍山古墳出土象嵌円頭大刀柄頭のＸ線ＣＴ調査について

(1)目的

「伝埼玉将軍山古墳出土象嵌円頭大刀柄頭」は、全体が金属の錆びで覆われている。事前のＸ線透過調査によって、内側に肉眼で観察することができない象嵌が施されている事が判明した。この度、東京国立博物館のＸ線ＣＴ撮影装置を用いて柄頭各面の象嵌部の意匠をより詳細に把握することを目的とした調査を行った。

(2)Ｘ線ＣＴとは

Ｘ線ＣＴ撮影は、Ｘ線を用いたレントゲン撮影を発展させたものである。レントゲン撮影では、空間を圧縮した１枚の画像しか得ることができないが、Ｘ線ＣＴ撮影は撮影対象を様々な方向から複数回撮影して得られたデータをコンピュータ上で合成する事で、断面を特定して観察する事や立体視化が出来る。

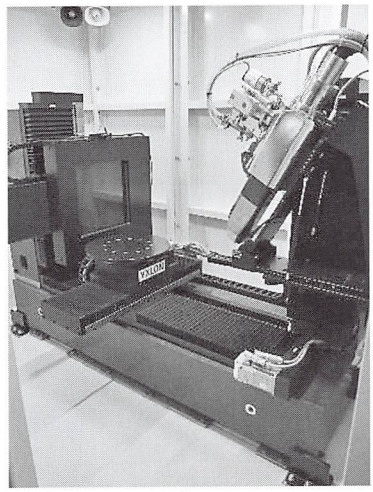


写真３　Ｘ線ＣＴ撮影装置

(3)調査方法

調査に使用した装置と撮影条件は以下のとおりである。

○エクスロン社製 プレシジョンＣＴ撮影装置、電圧225[kV]、電流0.4[mA]、管球～受光部間距離1055[㎜]、管球～撮影対象間距離236[㎜]、インテグレーションタイム550[ms]、ビニング数６、プロジェクション数1260。

(4)撮影画像

①象嵌部意匠

Ｘ線は基本的に質量が大きく密度の高いものほど透過しづらく、質量が小さく密度の低いものほど透過しやすい。ここでの画像は、白色に近い程Ｘ線の透過しにくい物質、黒色に近い程透過しやすい物質として表示している。象嵌部は周りの物質より白く映っているため、主な材質である鉄よりＸ線を透過しにくい物質であることを表している。図３左上と図５右上で顕著であるが、鉄部の錆による膨張により、象嵌部も移動しており、意匠が崩れていることが確認できる。

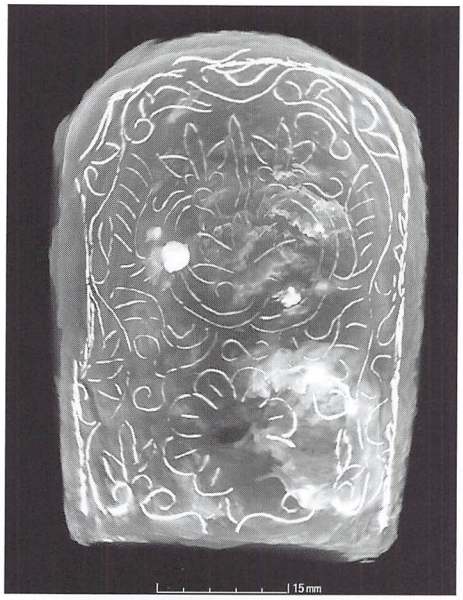


図１.Ａ面側透過画像

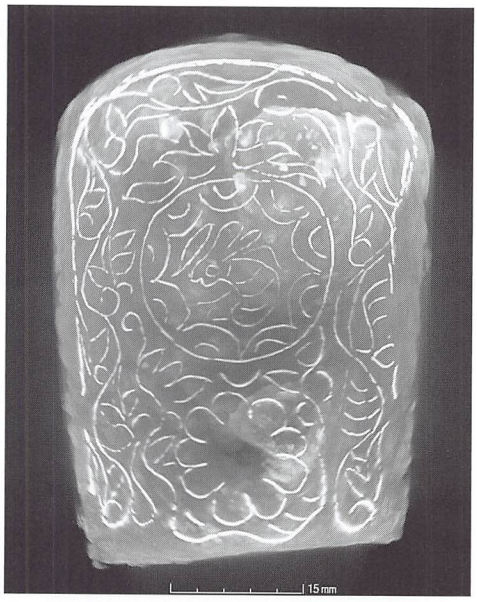


図２.Ｂ面側透過画像



図３.側面透過画像（図１左側）

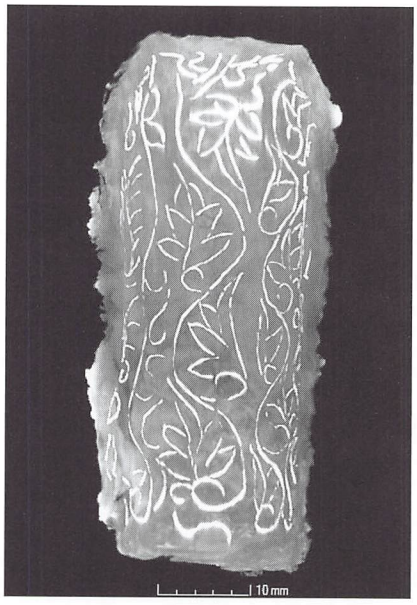


図４.側面透過画像（図１右側）

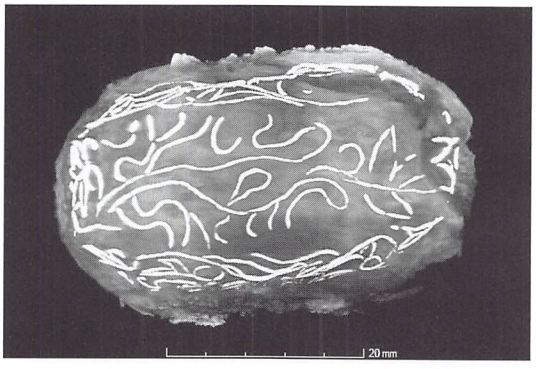


図５.上面透過画像（画面上がＡ面）

②断面観察

ＣＴ撮影断面画像を見ると、表面の約２㎜内側に白く点状の模様が確認できるが、この部分が象嵌である(図６・７・８)。また、内部にはひび割れや空洞が多数確認できる。柄の主材が残されていると思われる中央部分は、鉄部よりもＸ線の透過しやすい素材である事が確認でき、年輪と考えられる縞模様からおそらく木材と考えられる。また、下部に確認できる丸い空洞は柄と柄頭を固定するために開けられた穴と考えられ、現在は殻状のものが詰まっている(図６・７)。木と推測できる部分と鉄部の間には若干の隙間がみられるが、ほぼ密着しているため錆びの進行により固着していると考えられる。

柄頭の輪切り断面画像を観察していくと、金属部分に層状の模様や隙間が薄く確認できる(図８)。これはおそらく段階的な腐蝕による膨張に起因していると考えられる。

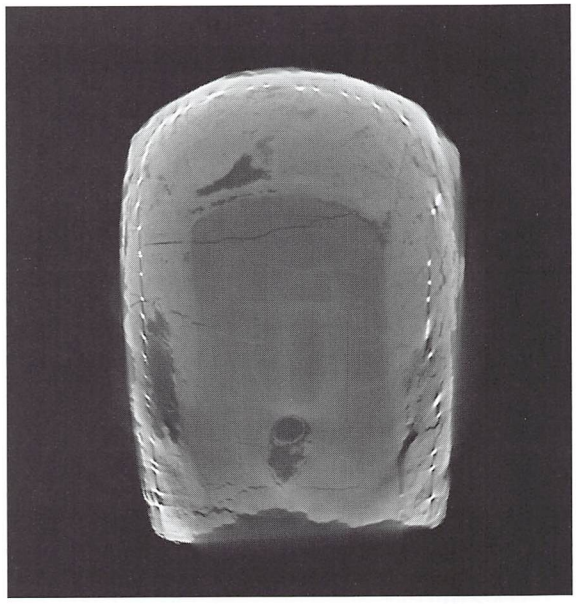


図６.ＣＴ断面画像１

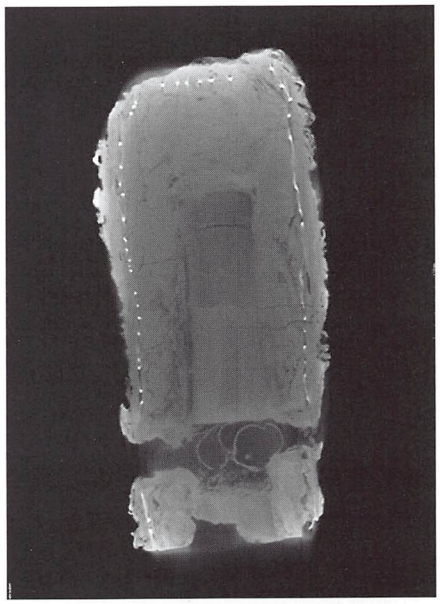


図７.ＣＴ断面画像２

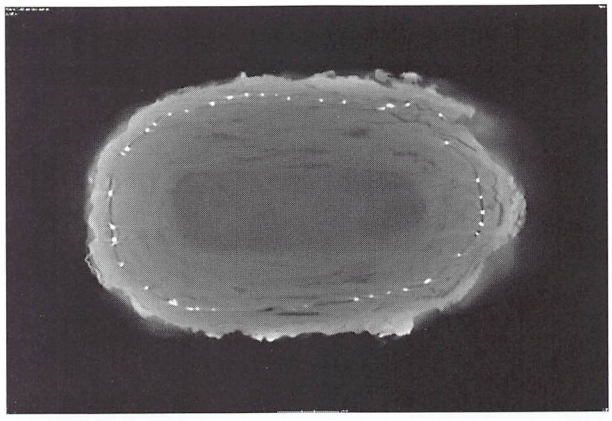


図８.ＣＴ断面画像３

6　伝将軍山古墳出土象嵌円頭柄頭　蛍光X線分析報告

(1)目的

伝将軍山古墳出土象嵌円頭柄頭の象嵌部分の材質特定を目的とした蛍光X線分析を行った。

(2)調査日時と調査場所

2016年11月29日、東京国立博物館資料館地下２Ｆにて。

(3)測定

測定資料の形状から可搬型蛍光X線分析装置を採用した。

表１　測定機器

測定機器	オリンパス社　蛍光X線分析装置　DELTA		
使用X線管	タンタル(Ｔａ)		
測定方法	非接触、距離：約2～４[㎜]、Soilモード		
使用各ビームの管電圧とフィルター			
Soil	Beam 1	Beam2	Beam3
管電圧[kV]	40	40	15
フィルター[μm]	Cu　150	Al 2000	Al 100
解析ソフトウェア	Innov-X Delta PC Software 2.5.0		

表２　測定個所と測定条件

測定箇所	測定番号	測定モード	使用Beam	測定時間	測定回数
①銀線部分	#4	soil	1,2,3	各180秒	3
②金色部分	#6	soil	1,2,3	各60秒	1
②金色部分	#7	soil	1,2,3	各60秒	1
③鉄部分１	#8	soil	1,2,3	各120秒	1
④鉄部分２	#9	soil	1,2,3	各120秒	1



図１．蛍光X線分析装置

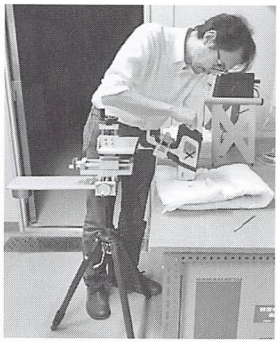


図２．測定方法

(4)測定箇所

肉眼観察から銀象嵌推測する部分、金色に見える部分、地金の部分の測定を行った。詳細は図3、4に示す。

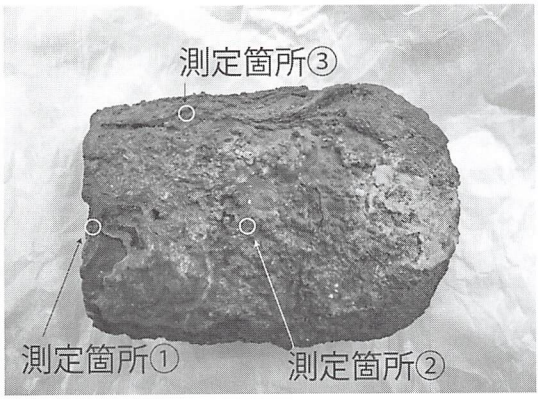


図3．測定箇所（A面）

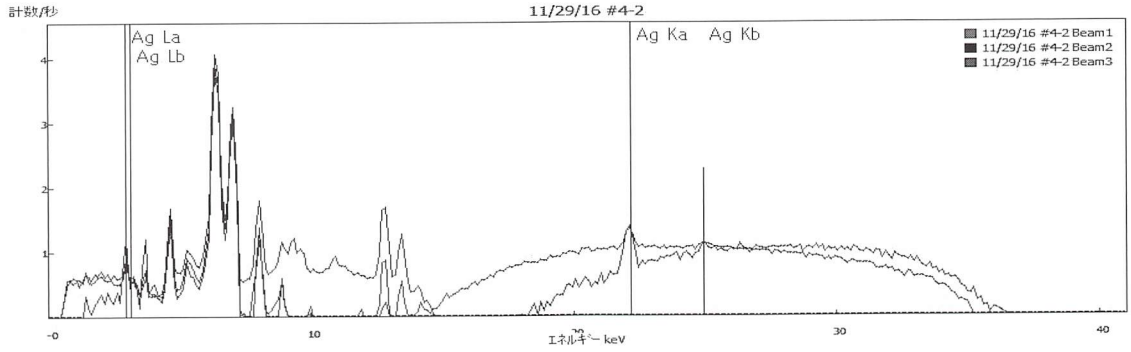


図4．測定箇所（B面）

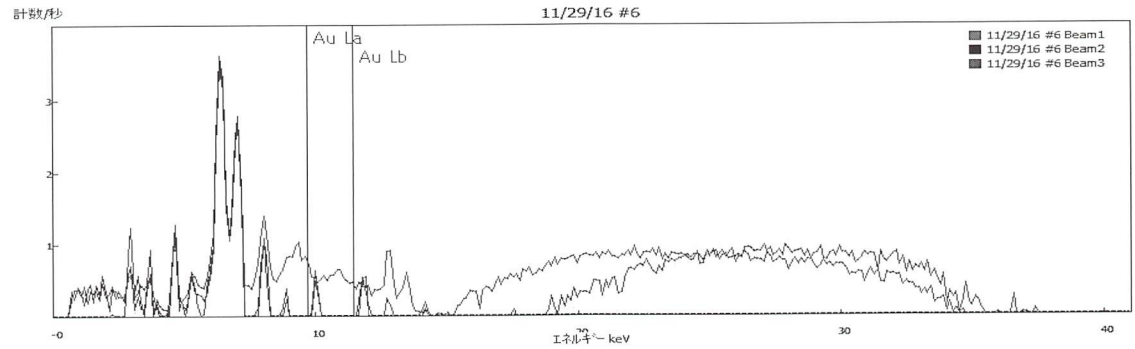
(5)結果

表3　測定結果一覧

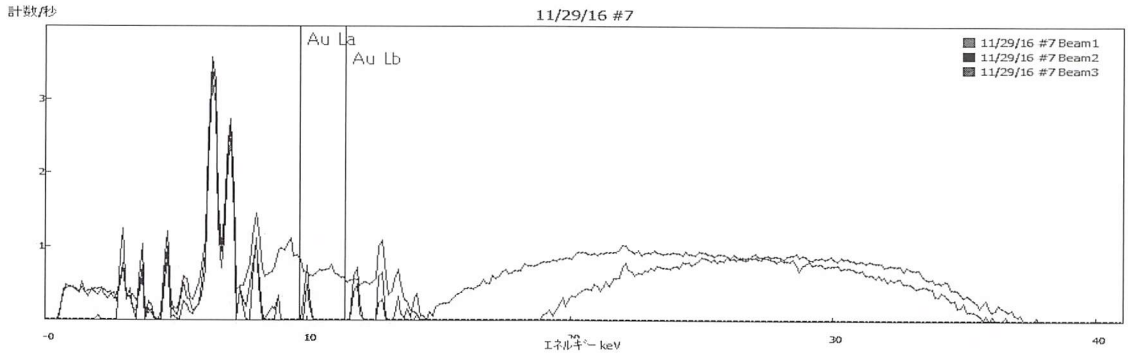
測定箇所	主な検出元素			
①銀線部分	鉄	銅	銀	
②金色部分	鉄	銅	水銀	
②金色部分	鉄	銅	水銀	
③鉄部分1	鉄	銅	銀	
④鉄部分2	鉄	銅	銀	水銀



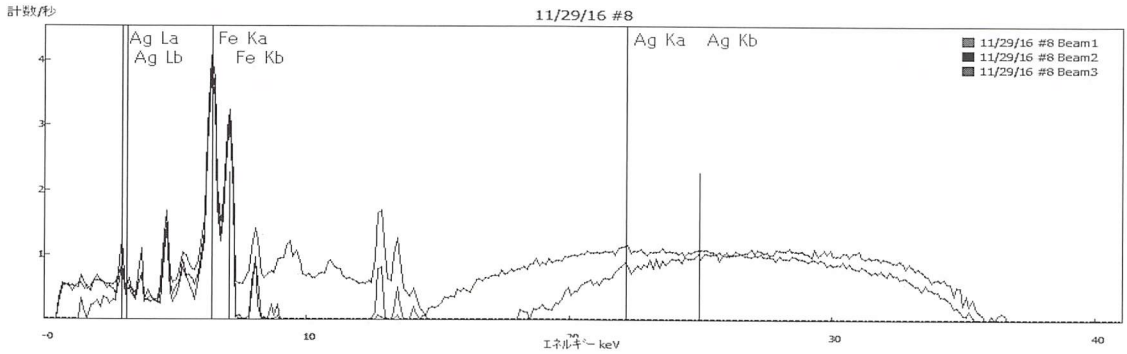
グラフ1．　測定箇所①のスペクトル（logスケール）



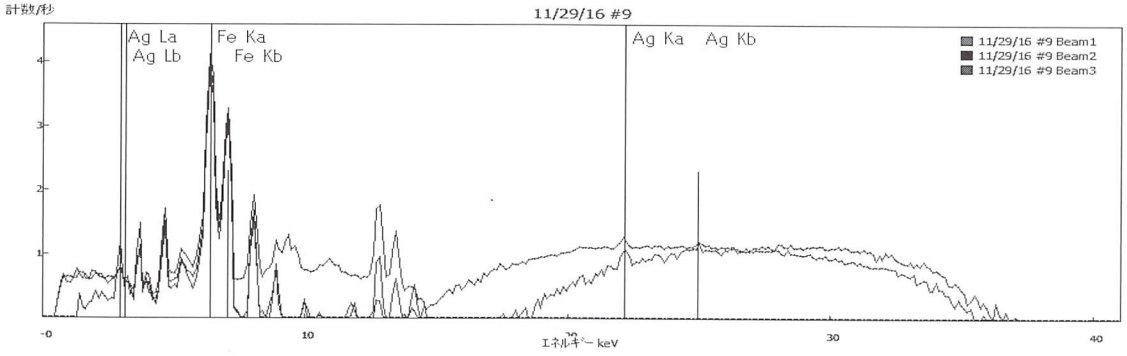
グラフ2．　測定箇所②のスペクトル（logスケール）



グラフ３．　測定箇所②のスペクトル（logスケール、大口径）



グラフ４．　測定箇所③のスペクトル（logスケール）



グラフ５．　測定箇所④のスペクトル（logスケール）

(６)所見

主成分は鉄である。銀線とおぼしき部分からは銀の存在を示す蛍光X線のピークが検出されている。しかし、金色と推定した部分から金の存在を示すような蛍光X線のピークは検出されていない。また、全ての測定個所から銅の蛍光X線も検出されているが、その強度は積極的に銅象嵌の可能性を示すようなピーク強度ではなく、より精度の高い分析と考古学的知見から総合的に存在理由を判断する必要があると考える。



杏葉



挂甲小札



鐔・責金物



切子玉・耳環



鉄鏃



円頭柄頭・刀身片

将軍山古墳新発見資料

《資料紹介》

伝・将軍山古墳出土の朝鮮三国時代加耶系陶質土器について

―明治大学博物館所蔵資料の紹介―

高久健二*・佐藤康二

*専修大学・史跡埼玉古墳群総括報告書刊行委員会委員

はじめに

埼玉県立さきたま史跡の博物館では、2015年度(平成27年度)から、『史跡埼玉古墳群総括報告書Ⅰ』の刊行作業を進めている。この報告書は1968年度(昭和43年度)の稲荷山古墳の発掘調査から、およそ半世紀を迎えた現在、埼玉古墳群の多くの調査・研究成果を今日的な視点で取りまとめ、今後の教育、学術研究に資することを目的としたものである。

さて、その一環として埼玉古墳群出土資料の再点検を行っている中、明治大学博物館に伝・将軍山古墳出土資料が存在することが判明した。結果的には将軍山古墳出土と断定する確証は得られなかったが、本資料は、寄贈間もないことから今までほとんど知られておらず、さらには、朝鮮三国時代の貴重な資料であることから、今回資料紹介を行うこととした。

なお、本資料紹介については、所蔵している明治大学博物館に快く御承諾を頂き、合わせて図化、撮影等につきましても全面的な御協力を頂いたことを記して感謝いたします。

1　資料の由来

2010年(平成22年)、前場幸治氏から明治大学に一大コレクションが寄贈された。この総数1万点におよぶ瓦を中心とした資料群の中に、瓦以外の考古資料が約1千点あり、縄文時代の土器、石器から近代陶磁器まで多岐に渡っている。その中に「伝埼玉県将軍塚古墳」の長頸壺が含まれていた(森本・忽那・山路2014)。

この資料は瓦資料などとともに氏がコレクションを公開していた厚木市の前場資料館でも展示されていたとのことである。なお関連する付属品や出所を示す注記等の手掛かりはまったくなかった。前場幸治氏は2011年(平成23年)に他界されており、入手時期・方法等の詳細はわらないのが残念である。

2　記録に残る将軍山古墳出土品について

将軍山古墳は1894年(明治27年)に地元有志により石室内の発掘調査が行われた(1)。発掘調査から11年後に地元関係者に聞き取り調査を行った記録が残っている。それについては、既に詳しく論じられており(埼玉県教委1997)、本紀要に掲載の別資料紹介でも詳細に触れているので、ここでは土器についてのみ、触れておく。

「高坏は(中略)。土器は此物の他には何物の存せざりしとの事なり。」(柴田1905)

また、同論文の遺物一覧表にも「祝部高坏　1」と記述されている。この高坏とは、現在東京国立博物館が所蔵する長脚二段三方透かしの須恵器高坏で、TK43型式相当と比定されている。なお本資料は口縁部の欠損した部分が、1991年度(平成3年度)の石室調査で出土した破片と接

合したことからも、将軍山古墳に帰属することは確実である。

ちなみに将軍山古墳の墳丘くびれ部からは、計４点の瑯が出土しているが、高坏より古相であり須恵器編年のTK10型式新段階まで遡るものとして、多くの研究者が指摘している（酒井2014）。したがって、瑯が初葬時、高坏が追葬時のものとも推定されている。ただし、初葬時に土器を石室内に持ち込まず、追葬時にのみ副葬することへの疑問も呈されている（藤野2016）。

なお本古墳の名称は、もっとも古いもので1829年（文政12年）の『新編武蔵風土記稿』の「忍城之図」では「将軍塚古墳」と記される。前掲柴田論文では「将軍塚は一に将軍山とも称し」、（柴田1905）、1907年（明治40年）は「将軍塚」（清水1905）、1936年（昭和11年）は埼玉村長から埼玉県への文書の中とでは「将軍山」とされるように両呼称が使用されているが、1938年（昭和13年）の国史跡に指定される際の名称が「将軍山古墳」となったことにより、公式な名称として認知された。

したがって、古墳名称から指摘できることとしては、本資料は「将軍塚古墳」と呼称された時期に収集家や古物商等が入手した下限だとすると、1938年以前に世に出た可能性がある(2)。

3　伝・将軍山古墳出土の長頸壺（第１図）

口縁部径12.7cm、胴部最大径27.6cm、器高37cmの完形品である。色調は褐灰色から黒褐色であり、肩部の自然釉部分には光沢がある。器形はごくわずかに内傾して立ち上がる筒状の頸部から、くの字に屈曲する口縁部からなる。口唇部端面はやや丸みを帯びる。胴部は最大径を中位にもち球状となる。底部中央は２㎜ほどくぼむが、安定して自立する（第１図５）。口縁部は内傾し、口縁部から頸部下端までを突帯により３帯に区画する。突帯は上から１、２、２、１条で構成され、各区画帯には櫛描波状文が施文される（第１図３）。櫛歯状工具は６歯／１cmであり、俯瞰した場合、反時計回りの施文である。第１帯は上下に２回施文、第２帯は１回施文、第３帯は２回施文である。波状のピッチは狭い部分が多く、施文が不鮮明な部分も多い。全体的にやや粗い施文ともいえる。

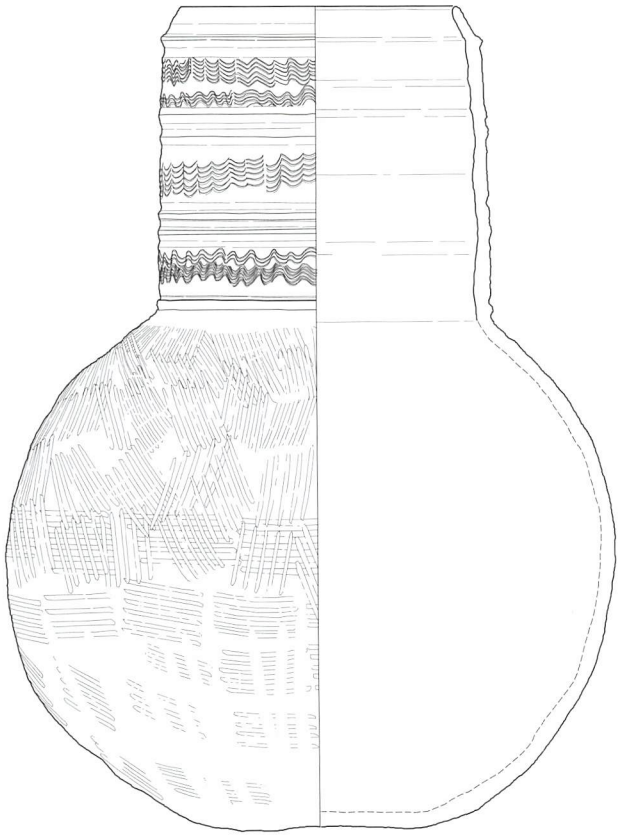
胴部調整は、平行タタキ目が残る（第１図４）。肩部最上位は、ほぼ縦位のタタキ目が残るが、その直下から胴部最大径までは原則右下がりのタタキ目となる。胴部最大径付近からは横位のタタキ目が、上位の縦位タタキ目の下に観察された。また、胴部下位には、指頭あるいは布等により幅５㎜程度の縦位のナデがやや間隔をあけて施されている。底部はナデ調整で仕上げられている。

胴部内面は実測道具が入らず破線としたが、キャリパー計測の数値からは、器壁は１cm未満で、頸部から胴部上位は概ね５～７㎜と薄く仕上げられている。

胎土には半透明の黒色粒子が少量、透明黒色粒子が微量、半透明白色粒子が少量観察されたが、完形品のため、胎土内の含有物は外面観察のみの所見である。

4　伝・将軍山古墳出土長頸壺の類例

伝・将軍山古墳出土の長頸壺は朝鮮三国時代の陶質土器であり、そのなかでもとくに半島南部を中心に展開した加耶諸国の土器と関連するものと考えられる。加耶諸国は原三国時代の弁



1.実測図



3.頸部波状文写真





4.胴部タタキ目写真



2.全体写真



5.底部写真

第１図　伝・将軍山古墳出土長頸壺

韓諸国をその前身とし、洛東江流域から蟾津江流域にかけて小国が分立していた。これら加耶諸国は、３～４世紀代は洛東江下流域の金官加耶を中心に展開し、５世紀以降は洛東江中流域の大加耶が勢力を拡大していく。伝・将軍山古墳出土長頸壺はその特長からみて、加耶諸国のなかでも大加耶の土器と類似する。大加耶の中心地は、現在の韓国・慶尚北道高霊郡であり、池山洞古墳群は大加耶の中心古墳群(王墓群)であると考えられている。大加耶系土器は高霊地域を中心に分布するが、大加耶の勢力拡大にともなって半島西南部にも拡大し、在地の土器と融合して変容した形態も存在する。

伝・将軍山古墳出土の長頸壺の特徴をあらためて整理してみると、以下のとおりである。

①口縁部下に受け部をもつ、いわゆる有蓋長頸壺であるが、受け部は突帯状に形骸化し、蓋もともなわない。

②頸部は直線的に立ち上がり、わずかに内傾する。

③頸部は低い突帯によって３段に区画され、各区画に粗い波状文を施文する。

④胴部は球形を呈し、胴部最大径は中位にある。

⑤胴部は平行タタキによって調整され、タタキ目が残る。

⑥底部はやや内側にくぼんでいる。

⑦色調は褐灰色から黒褐色であり、肩部には自然釉がかかる。

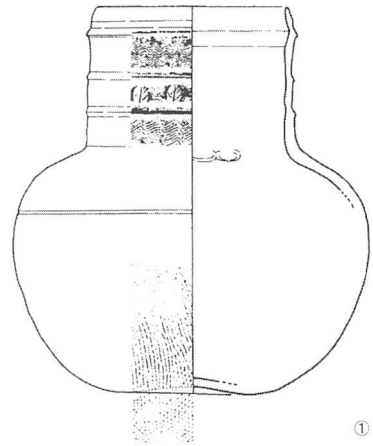
以下では、伝・将軍山古墳出土の長頸壺と形態的に類似するものをとりあげて、出土古墳の概要と土器の特徴を整理したうえで、比較・検討してみる。

校洞３号墳(慶尚南道昌寧郡)は円墳(直径25m)であり、埋葬主体部は加耶地域で初期段階の横口式石室(長さ720cm、幅130cm、深さ220cm)である(シムボングンほか1992)。石室内は盗掘を受けていたが、装身具類、鉄製武器・農工具類、甲冑、馬具類、土器類など多くの副葬品が残されていた。有蓋長頸壺は５点が出土しており、そのうちの１点は頸部が垂直に立ち上がり、内傾する口縁部の直下に受け部がつく(第２図１)。頸部はシャープな突帯によって３区画に分けられ、波状文が施文されている。胴部は球形を呈し、表面はナデ調整されているが、タタキ目が若干残っている。色調は黒灰色を呈し、焼成は極めて良好で表面にはメタル光沢をもつ典型的な昌寧系土器の特徴を有する。器高は25.3cm、口縁部径は9.5cmである。

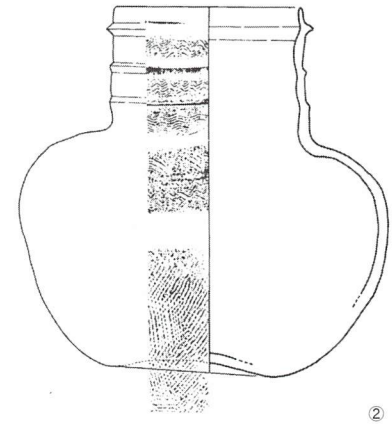
末屹里１号墳(慶尚南道居昌郡)は竪穴式石槨墓(現長470cm、幅97cm、深さ140cm)であり、鉄鏃、鉄刀子、鉄鎌、鉄斧などの鉄器類と土器類が副葬されていた(国立晋州博物館1985、リュチャンファンほか2012)。長頸壺は７点が副葬されていたが、そのうちの１点は、頸部がほぼ垂直に立ち上がり、二条の突帯によって３区画に分けられ、上段と下段には波状文を、中段には葉文を施文している(第２図２①)。胴部は扁球形を呈し、上部には１条の沈線をめぐらし、下部には平行タタキが残る。底部は内側にくぼんでいる。色調は暗灰褐色であり、胎土には砂粒が多く混入されている。器高は25.8cm、口縁部径12.4cmである。もう１点も頸部が直線的に立ち上がり、二条の突帯によって３区画に分けられ、各区画に波状文を施文する(第２図２②)。胴部は最大径が上部にあり、胴下部には平行タタキがみられる。底部は内側にくぼんでいる。色調は淡灰紫色であり、胎土には砂粒を多く含んでいる。器高は24.6cm、口縁部径は12.2cmである(3)。



1.慶尚南道昌寧郡　校洞3号墳



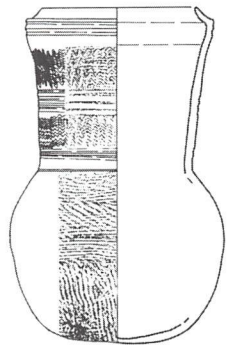
①



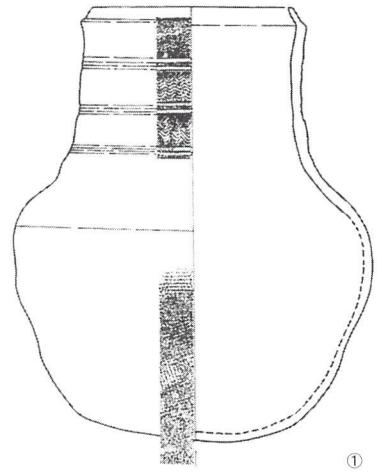
②

2.慶尚南道居昌郡　末屹里1号墳

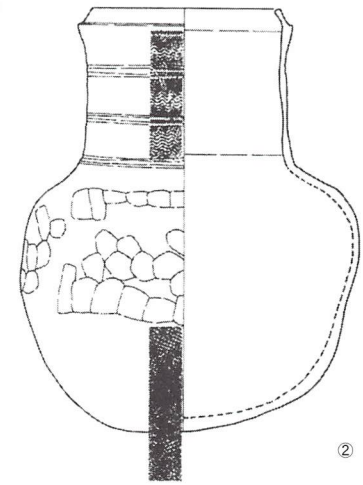
0　10cm



3.慶尚南道山清郡　明洞Ⅱ地区22号墳



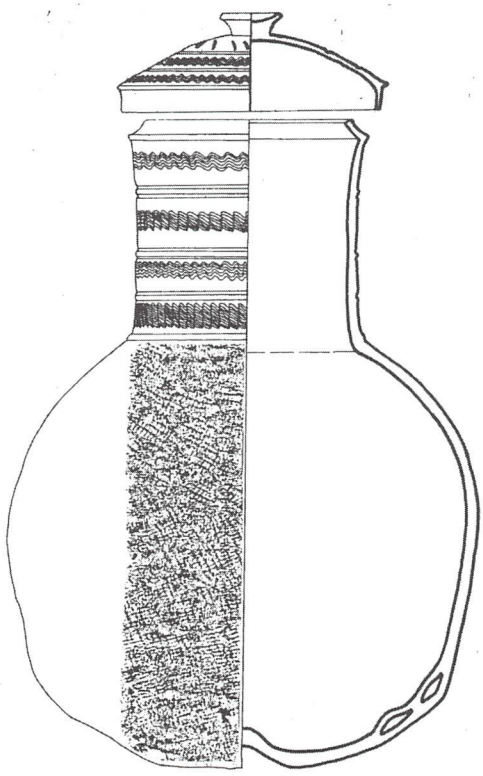
①



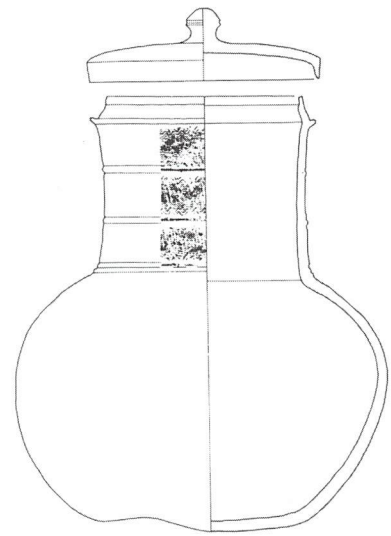
②

4.全羅南道順天市　雲坪里M1号墳

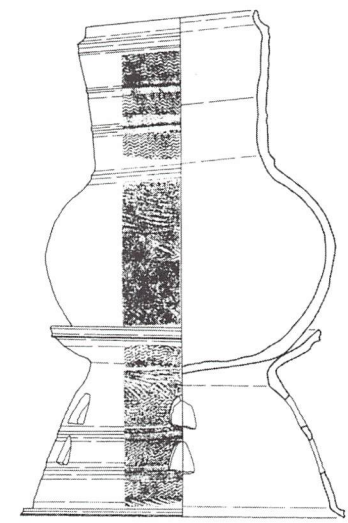
0　10cm



5.全羅北道南原市　月山里M1号墳



6.全羅北道南原市　斗洛里3号墳



7.慶尚南道山清郡　坪村里61号墳

0　10cm

第２図　大加耶系長頸壺

明洞Ⅱ地区22号墳(慶尚南道山清郡)は竪穴式石槨墓(長さ310cm、幅75cm、深さ85cm)であり、鉄鎌、有蓋高坏、長頸壺が副葬されていた(イヨンジュほか2004)。長頸壺は３点が副葬されていたが、そのうちの１点は頸部が直線状を呈し、上部にあがるにつれ若干広がっている(第２図３)。頸部は低い突帯によって２段に分けられ、波状文を施文する。胴部は球形を呈し、上部にはカキ目をめぐらすが、下部には平行タタキが残る。色調は灰青色であり、胎土には小砂粒が少量混入されている。器高は22.5cm、口縁部径は10.4cmである。

坪村里61号墳(慶尚南道山清郡)は竪穴式石槨墓(長さ340cm、幅65cm、深さ94cm)であり、鉄鎌や鉄斧などの鉄器類と蓋坏、短頸壺、長頸壺、器台などの土器類が出土した(パクサンオンほか2007)。長頸壺は３点あり、そのうちの１点は器台とセットをなす(図２－７)。頸部は直線的であり、突帯によって３区画に分けられ、波状文が付されている。胴部は扁球形を呈し、平行タタキが残る。色調は灰黒色である。器高は24.4cm、口縁部径は11.5cmである。

雲坪里Ｍ１号墳(全羅南道順天市)は円墳(直径9m)で、埋葬主体部は中央に主槨(竪穴式石槨:長さ430cm、幅80cm、深さ90cm)があり、その周囲に４基の小石槨がめぐっている(イドンヒほか2008)。主槨内には、鉄斧、鉄鎌、鉄刀子、鉄鏃などの鉄器類と短頸壺、平底鉢、長頸壺、器台、高坏などの土器類が副葬されていた。長頸壺は５点が出土しており、４点は器台とセットをなしている。そのうちの１点は、頸部が若干湾曲しながら内傾して立ち上がり、突帯によって３区画に分けられ、各区画に波状文が施文されている(第２図４①)。突帯は極めて低く、二条の沈線状を呈している。胴部は最大径が上部にあり、下部から底部にかけて格子目タタキが残存する。色調は灰青色であり、胎土には砂粒が混じる。器高は29.4cm、口縁部径は15.3cmである。もう１点は頸部がほぼ垂直に立ち上がり、前者と同様に低い突帯によって３区画に分けられ、波状文が施文されている(第２図４②)。胴部は球形を呈し、上部には指頭圧痕とケズリの痕跡が、下部には格子目タタキが残る。色調は灰青色であり、胎土には砂粒が含まれている。器高は28.6cm、口縁部径は12.8cmである(4)。

月山里Ｍ１号墳(全羅北道南原市)は円墳(直径19m)で、中央に大型竪穴式石槨(Ｍ１－Ａ号石槨：長さ8.6m、幅1.36m、高さ1.85m)があり、その南側や西側に竪穴式石槨(Ｍ１－Ｅ・Ｇ号石槨)や石棺(Ｍ１－Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｆ号石棺)が配置されている。中央のＭ１－Ａ号石槨には、鉄製武器・武具・農工具類、馬具類、土器類などが副葬されていた(チョンヨンネ1983)。長頸壺は７点が出土し、そのうちの１点は有蓋長頸壺である。頸部がほぼ垂直に立ち上がり、口縁部が内傾する。頸部は突帯により４段に区分され、各区画に波状文を施文する(第２図５)。胴部は球形を呈し、表面には格子目タタキが残り、底部はくぼんでいる。色調は暗灰色を呈する。器高は43.8cm、口縁部径は14.5cmである。

斗洛里３号墳(全羅北道南原市)は竪穴式石槨墓(長さ5.1m、幅1.0m、深さ1.57m)であり、おもに土器類が副葬されていた(ユンドクヒャンほか1989)。長頸壺は４点が出土しており、いずれも蓋をもち、器台とセットをなしている。そのうちの１点は頸部がやや湾曲しながら垂直に立ち上がり、口縁部が内傾し、その下に受け部をもつ(第２図６)。頸部は突帯によって３区画に区分され、波状文が施文されている。胴部は扁球形を呈し、底部はややくぼんでいる。器高は28.2cm、口縁部径は13.7cmである。

以上、伝・将軍山古墳出土の長頸壺と形態的に類似するものをとりあげて、その特徴について整理してみた。このうち校洞３号墳出土のものについては、形態的な類似点もみられるが、突帯と波状文の精緻さや色調・焼成がまったく異なっている。昌寧系土器は洛東江東岸様式に属し、二段高坏は交互透孔をもつなど新羅土器との共通性がみられる。また、校洞３号墳の築造時期は５世紀中葉と推定され、将軍山古墳よりもかなり古いものであることから、直接的な関係を想定することは難しい。したがって、伝・将軍山古墳出土の長頸壺と関連性があると考えられるものは、雲坪里Ｍ１号墳、月山里Ｍ１号墳、斗洛里３号墳出土の長頸壺であり、つぎに検討するように時期的にも将軍山古墳の築造年代と比較的近い。

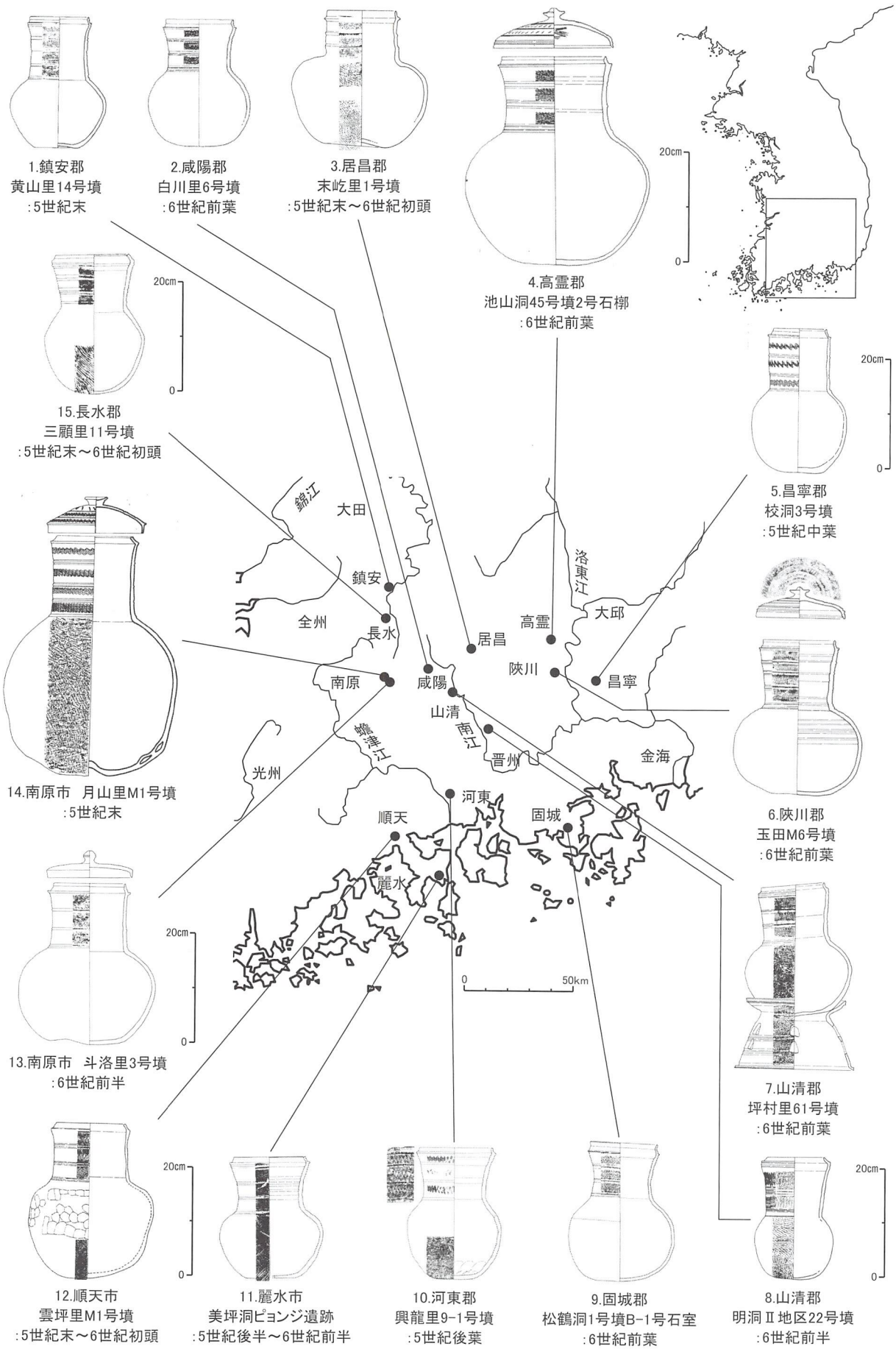
5　伝・将軍山古墳出土長頸壺の系譜と歴史的意義

大加耶系土器に関しては、これまで日韓において多くの研究の蓄積がある。とくに編年研究については、1980年代からおこなわれはじめ、中心地である高霊地域における土器編年（ウジナム1987、定森1987、郭鍾喆1988）、周辺地域における土器様式の地域色と高霊地域との併行関係などが明らかにされている（イヒジュン1994、パクチョンス1998、キムドゥチョル2001、パクスンギュ 2003・2010）。また、日本出土の大加耶系土器から日韓の古墳編年の併行関係についても検討されている（白井2003）。

これらの先行研究をもとに、まず伝・将軍山古墳出土長頸壺の系譜について考察してみる。大加耶の中心地である高霊地域の長頸壺は、池山洞45号墳出土品（第３図４）のように、頸部が湾曲して外反するものが一般的であり、胴部も球形ではなく、最大径が上位にあるものが多い。また、胴部に平行タタキが残るものも少ない。伝・将軍山古墳出土の長頸壺のように頸部が直線状を呈するものは、洛東江流域の高霊地域や黄江流域の陜川地域（第３図６）ではみられず、居昌郡末屹里古墳群（第３図３）、順天市雲坪里古墳群（第３図12）、南原市月山里古墳群（第３図14）、南原市斗洛里古墳群（第３図13）などのように高霊地域の南西側の地域で出土している。そのなかでもとくに南原・順天地域など蟾津江流域で出土している大加耶系土器と類似しているといえる。これらの地域では大加耶系土器と在地系土器が共伴して出土し、大加耶系土器も中心地である高霊地域のものとは異なり、変容した形態のものが存在する。

つぎに、伝・将軍山古墳出土長頸壺の年代的位置づけについて検討してみる。大加耶系土器に関するこれまでの編年研究をみると、大加耶の中心古墳群である池山洞古墳群の相対編年については、池山洞35号墳→池山洞32号墳→池山洞44号墳→池山洞45号墳という築造順序でほぼ意見が一致している。周辺地域との併行関係については、末屹里１号墳と月山里Ｍ１号墳が池山洞44号墳段階に、坪村里61号墳が池山洞45号墳段階に、雲坪里Ｍ１号墳が池山洞44～45号墳段階に、明洞Ⅱ地区22号墳と斗洛里3号墳が池山洞45号墳段階の次の段階にほぼ該当するものと考えられる。ちなみに、池山洞45号墳段階の次の段階とは水精峯２号墳・玉峯７号墳（慶尚南道晋州市）段階である（関野ほか1916、定森・吉井・内田1990）。

これに対し、絶対年代の比定については研究者ごとに違いがみられる。これまでの見解を整理すると、①池山洞35号墳段階を５世紀第１四半期、池山洞32号墳段階を５世紀第２四半期、池山洞44号墳段階を５世紀第４四半期、池山洞45号墳段階を６世紀第１四半期、水精峯２号墳・



第３図　大加耶系長頸壺の分布（５世紀後半～６世紀前半）

玉峯７号墳段階を６世紀第２四半期とする見解（イヒジュン1994、パクチョンス1998）、②池山洞35号墳段階を５世紀第２四半期、池山洞32号墳段階を５世紀第３四半期、池山洞44号墳段階を５世紀第４四半期、池山洞45号墳段階を６世紀第１四半期、水精峯２号墳・玉峯７号墳段階を６世紀第２四半期とする見解（パクスンギュ 2010）、③池山洞35号墳段階を５世紀第３四半期、池山洞32号墳段階を５世紀第４四半期、池山洞44号墳段階を６世紀第１四半期、池山洞45号墳段階を６世紀第２四半期、水精峯２号墳・玉峯７号墳段階を６世紀第３四半期とする見解（キムドゥチョル2001）に分かれる。①と③では最大で約50年の違いがみられるが、③は埼玉古墳群の稲荷山古墳の年代が「辛亥年」（471年）よりも大きく下るとする見解でもあり、池山洞44号墳段階がTK47型式、池山洞45号墳段階がMT15型式と併行するとみる日本の編年観とは大きく異なっている（白井2003）。したがって、①と②の見解に従うならば、末屹里１号墳と月山里Ｍ１号墳を５世紀第４四半期、坪村里61号墳を６世紀第１四半期、雲坪里Ｍ１号墳を５世紀第４四半期～６世紀第１四半期、明洞Ⅱ地区22号墳と斗洛里３号墳を６世紀第２四半期に比定することができる。つまり、伝・将軍山古墳出土の長頸壺の年代もおよそ５世紀第４四半期～６世紀第２四半期に位置づけることができるだろう。

最後に、伝・将軍山古墳出土長頸壺の歴史的意義について考察してみる。前述したように、残念ながら本資料は確実に将軍山古墳出土品であるとは断定できない遺物である。したがって、以下の考察は、あくまでも本資料が将軍山古墳出土品であると仮定した場合の解釈であることをことわっておく。前述したように将軍山古墳はTK10型式新段階(5)に築造された前方後円墳であり、三連三葉文環頭大刀、馬冑、蛇行状鉄器、鉄製輪鐙、銅製八角稜鈴、銅鋺など、多くの渡来系遺物が出土していることでも知られている。

高霊地域を中心に分布する大加耶系土器は、５世紀後半頃から居昌地域、咸陽地域、南原地域など、大加耶の西側へと広く拡散していく。さらに６世紀代になると、宜寧地域、晋州地域、固城地域、昌原地域、咸安地域、順天地域など加耶の南部地域にも広がっていく（第３図）（パクスンギュ 2010）。このうち蟾津江流域の南原地域には５世紀末頃から大加耶系土器が拡散していくが、在地系土器と共存しつつ、変容した大加耶系土器もみられる。前述したように、伝・将軍山古墳出土長頸壺は、蟾津江流域における５世紀第４四半期～６世紀第２四半期の大加耶系土器である可能性が高いことからみて、５世紀後半以降に高霊地域から西側や南側に拡散していった大加耶系土器であるといえる。５世紀後半から６世紀前半にかけて蟾津江流域で出土する大加耶系土器の背景については、大加耶との政治的関係とみる見解と交流関係とみる見解に分かれている(6)。日本列島においては、５世紀後半頃から大加耶系文物の流入が増加しており、ちょうど大加耶の蟾津江への進出時期と一致している(7)。『日本書紀』継体紀七～十年（513～516年）条に記された「己汶」と「帯沙」はいずれも蟾津江流域に比定されており、同じく継体紀二十三年（529年）条に記された「多沙津」は蟾津江の河口に位置する河東地域に当たる。６世紀前半には百済がこの地に進出してくるが、それまでは大加耶の対倭交易の重要な窓口であった（田中2009）。

一方、将軍山古墳出土の渡来系遺物をみると、一部に新羅系文物も含まれているが、その多くが加耶地域からもたらされたものではないかと考えられる。将軍山古墳の渡来系遺物のうち、

蛇行状鉄器については、６世紀前半の加耶古墳である水精峯２号墳で出土している。踏込部が幅広く滑り止めの突起をもつ鉄製輪鐙も６世紀前半の加耶古墳である景山里２号墳(慶尚南道宜寧郡)(チョヨンジェほか2004)や玉峯７号墳で出土しており、舶載品である可能性が高い。ちなみに景山里２号墳からは銅鋺も出土している。これらの加耶古墳からは大加耶系土器が出土しており、いずれも６世紀前半に大加耶系土器が拡散していく加耶西南部地域に当たることからみて、将軍山古墳の加耶系文物は大加耶との交流によってもたらされた可能性が高い。また、景山里２号墳では大加耶系土器とともに新羅系土器が共伴しており、６世紀前半に大加耶系土器が拡散していく地域では一定量の新羅系文物も出土している(8)。『三国史記』新羅本紀法興王九年(522年)条には大加耶王が新羅に使いを送り、婚姻関係を結んだことが記されており、６世紀前半に一時的にではあるが、大加耶と新羅が友好関係にあったことがわかる。このような関係を背景として、加耶地域に新羅系文物が多く流入してきたものと考えられる。したがって、将軍山古墳から出土している銅製八角稜鈴や棘葉形杏葉などの新羅系文物が加耶西南部地域からもたらされた可能性も否定できないだろう。このように考えると、伝・将軍山古墳出土長頸壺についても、これらの加耶系・新羅系文物とともに加耶西南部地域から日本列島にもたらされた可能性は十分にありうる。

おわりに

以上、伝・将軍山古墳出土の長頸壺を紹介するとともに、その系譜と年代、歴史的意義について考察した。その結果、伝・将軍山古墳出土長頸壺は大加耶系陶質土器であるが、大加耶の中心地である高霊地域ではなく、その南西側の地域、とくに蟾津江流域の大加耶系土器に系譜が求められることがわかった。また、その年代については５世紀第４四半期～６世紀第２四半期と推定され、大加耶系土器が拡散する時期に該当する。したがって、年代的には将軍山古墳の出土品であるとしても大きな矛盾はないといえる。仮に将軍山古墳出土品であるとすると、将軍山古墳で共伴している加耶系・新羅系文物とともに加耶西南部地域からもたらされた可能性が高いことを指摘した。

伝・将軍山古墳出土の長頸壺は入手経緯が不明であり、将軍山古墳から出土したものであるとは必ずしもいいきれない。しかし、将軍山古墳で出土している他の加耶系文物と合わせて考えると、将軍山古墳から出土した可能性も否定できない。なお、将軍山古墳の渡来系文物にみられる６世紀代の倭と加耶の交流関係については、『史跡埼玉古墳群総括報告書Ⅰ』で考察する予定である。

付記

本稿のうち、１～３は佐藤が、４・５は高久が執筆した。

本資料の紹介にあたり、明治大学博物館には資料調査、実測、撮影等、多大なるご協力をいただいたことを改めて感謝いたします。また、以下の方々にもご教示・ご協力をいただきました。文末ではありますが、記して感謝の意を表します。

李東熙、忽那敬三、申敬澈、崔景圭、朴升圭(五十音順、敬称略)

《註》

(1)発掘調査の書類は提出したが、記録によると石室石材を入手することが目的であったとされる。

(2)ただし下記論文(栗原1961)では「将軍塚」の名称が用いられている。

(3)末屹里１号墳例については、申敬澈氏のご教示による。

(4)雲坪里Ｍ１号墳例については、李東熙氏のご教示による。

(5)TK10型式新段階の年代については、６世紀中葉頃と推定されている(酒井2013)。

(6)パクチョンスは大加耶系土器の分布圏と領域が同一であるとし、蟾津江流域を大加耶領域であると主張する(朴天秀2007)。これに対し、パクスンギュは蟾津江下流域の順天・麗水地域については大加耶との交流圏ととらえ、領域ではないとする(パクスンギュ 2010)。

(7)白井克也は日本出土の大加耶系土器は、TK216～TK208型式期とMT15～MT85型式期の二時期に集中すると指摘する(白井2003)。いうまでもなく将軍山古墳の大加耶系文物は後者の時期に該当する。

(8)小加耶(古自、久嗟)の首長墳である松鶴洞１号墳(慶尚南道固城郡)の１Ｂ－１号横穴式石室(６世紀前半)では、在地系の土器とともに大加耶系の長頸壺、新羅系の台付長頸壺、百済系の蓋杯、倭系の須恵器が出土しており、１Ｃ号横穴式石室(６世紀中葉)では新羅系の棘葉形杏葉が出土している(シムボングンほか2005)。小加耶などの南海岸地域が東西南北交流の結節点として機能していた可能性が高い。

《図版出典》

第１図：明治大学博物館所蔵品
(埼玉県立さきたま史跡の博物館実測・撮影)
第２図１：シムボングンほか1992
第２図２：リュチャンファンほか2012
第２図３：イヨンジュほか2004
第２図４：イトンヒほか2008
第２図５：チョンヨンネ1983
第２図６：ユンドクヒャンほか1989
第２図７：パクサンオンほか2007
第３図１：カクチャングンほか2001
第３図２：パクスンホほか1998
第３図３：リュチャンファンほか2012
第３図４：ユンヨンジンほか1979
第３図５：シムボングンほか1992
第３図６：チョヨンジェほか1993
第３図７：パクサンオンほか2007
第３図８：イヨンジュほか2004
第３図９：シムボングンほか2005
第３図10：シンヨンミンほか2012
第３図11：イスンヨプ1999
第３図12：イトンヒほか2008
第３図13：ユンドクヒャンほか1989
第３図14：チョンヨンネ1983
第３図15：カクチャングンほか1998

《引用・参考文献(五十音順)》

【日本文】

郭鍾喆　1988「韓国慶尚道陶質土器の地域相研究－所謂高霊系土器を素材として－」『古代文化』第40巻第２号
栗原文藏　1961「蛇行状鉄器出土の武蔵将軍塚古墳」『埼玉研究』５　埼玉県地域研究会
埼玉県教育委員会　1997『将軍山古墳　確認調査編』史蹟埼玉古墳群整備事業報告書
酒井清治　2013『土器から見た古墳時代の日韓交流』同成社
酒井清治　2014「古墳と須恵器」『シンポジウム 埼玉古墳群の謎－東国を治めた古代豪族－』さきたま魅力アップ実行委員会
定森秀夫　1987「韓国慶尚北道高霊地域出土陶質土器の検討」『岡崎敬先生退官記念論集 東アジアの考古と歴史 上巻』同朋社
定森秀夫・吉井秀夫・内田好昭　1990「韓国慶尚南道晋州水精峯２号墳・玉峯７号墳出土遺物－東京大学工学部建築史研究室所蔵資料の紹介－」『朱雀』第３集
柴田常恵　1905「武蔵北埼玉郡埼玉村将軍塚」『東京人類學會雑誌』231 東京人類學會
白井克也　2003「日本における高霊地域加耶土器の出土傾向－日韓古墳編年の並行関係と暦年代－」『熊本古墳研究』創刊号

関野貞ほか　1916『朝鮮古蹟図譜』第三冊、朝鮮総督府
田中俊明　2009『古代の日本と加耶』日本史リブレット70、山川出版社
東京国立博物館　1986『東京国立博物館図版目録　古墳時代編(関東Ⅲ)』
藤野一之　2016「土器からみた埼玉古墳群の葬送儀礼とその特質」『埼玉考古』51埼玉考古学会
朴天秀　2007『加耶と倭－韓半島と日本列島の考古学－』講談社
森本尚子・忽那敬三・山路直充　2014『明治大学博物館所蔵　前場幸治コレクション資料目録』

【韓国文】

イドンヒ（이동희 李東熙）ほか 2008『順天　雲坪里　遺蹟Ⅰ』學術資料叢書第60冊, 順天大學校博物館
イスンヨプ（이순엽 李順葉）1999「麗水　美坪洞　평지　出土　土器類」『順天大博物館誌』創刊號
イヒジュン（이희준 李熙濬）1994「고령양식 토기 출토 고분의 편년」『嶺南考古學』第15號
イヨンジュ（이영주）ほか 2004『山淸 明洞遺蹟Ⅱ』調査研究報告書第23冊, 慶南發展研究院 歷史文化센터
ウジナム（우지남 禹枝南）1987「大伽倻古墳의　編年　－土器를　中心으로－」『三佛金元龍教授停年退任紀念論叢Ⅰ　－考古學篇－』三佛金元龍教授 停年退任紀念論叢刊行委員會
国立晋州博物館（국립진주박물관）1985『거창말흘리고분』국립진주박물관
カクチャングン（곽장근 郭長根）ほか 1998『長水 三顧里 古墳群』群山大學校 博物館
カクチャングン（곽장근 郭長根）ほか 2001『鎭安 龍潭댐 水沒地區內 文化遺蹟 發掘調査 報告書 Ⅳ』學術叢書23, 群山大學校博物館・韓國水資源公社
キムドゥチョル（김두철 金斗喆）2001「大加耶古墳의 編年 檢討」『韓國考古學報』45
シムボングン（심봉근 沈奉謹）ほか 1992『昌寧校洞古墳群』古蹟調査報告書 第21冊, 東亞大學校 博物館
シムボングン（심봉근 沈奉謹）ほか 2005『固城松鶴洞古墳群－第1號墳 發掘調査報告書－』古蹟調査報告書第37冊, 東亞大學校 博物館)
シンヨンミン（신용민 辛勇旻）ほか 2012『河東 花心里 旱田遺蹟 河東興龍里古墳群』發掘調査報告書第55・59輯,東亞細亞文化財研究院・부산지방국토관리청
チェインソン（최인선 崔仁善）ほか 2003『麗水　鼓樂山城　Ⅰ』地方文化叢書　第44, 順天大學校博物館・麗水市
チョヨンジェ（조영제 趙榮濟）ほか 1993『陜川 玉田古墳群Ⅳ－Ｍ４・Ｍ６・Ｍ７ 號墳－』調査報告第8輯, 慶尙大學校博物館
チョヨンジェ（조영제 趙榮濟）ほか 2004『宜寧 景山里古墳群』研究叢書 第28輯, 慶尙大學校博物館
チョンヨンネ（전영래 全榮來）1983『南原,月山里古墳群發掘調査報告』圓光大學校 馬韓・百濟文化研究所
パクサンオン（박상언）ほか 2006『山淸 坪村里遺蹟』調査研究報告書第48冊,慶南發展研究院歷史文化센터
パクサンオン（박상언）ほか 2007『山淸 坪村里遺蹟Ⅱ』調査研究報告書第54冊,慶南發展研究院 歷史文化센터
パクスンギュ（박승규 朴升圭）2003「大加耶土器의 擴散과 관계망」『韓國考古學報』49
パクスンギュ（박승규 朴升圭）2010『加耶土器 樣式 研究』東義大學校 大學院 史學科 文學博士學位論文, 東義大學校大學院
パクスンギュ（박승규 朴升圭）2012「'대가야토기'에 대한 연구현황과 과제」『대가야사연구의 현황과 과제』대가야박물관・계명대학교 한국학연구원
パクスンホ（박순호）ほか 1998『咸陽 白川里 遺蹟』研究叢書 第21輯, 釜山大學校博物館
パクチョンス（박천수 朴天秀）1998「大伽耶圈 墳墓의 編年」『韓國考古學報』39
パクチョンス（박천수 朴天秀）2010『가야토기 －가야의 역사와 문화－』진인진
ユンドクヒャン（윤덕향 尹德香）ほか 1989『斗洛里 發掘調査報告書』學術叢書2, 全北大學校 博物館
ユンヨンジン（윤용진 尹容鎭）ほか 1979『大伽倻古墳發掘調査報告書』高靈郡
リュチャンファン（류창환 柳昌煥）ほか 2012『거창 말흘리고분군』調査研究報告書第94冊, 慶南發展研究院歷史文化센터

カマドの支脚利用にみられる集落内のグループ

―古墳時代後期の埼玉県の遺跡を中心に―

末木啓介

はじめに

古墳時代の集落の姿はどのようなものだったか、この問いに対しては黒井峯遺跡など火山灰に埋もれた遺跡をもとに答えられることが多い。

黒井峯遺跡のもたらした情報量の多さは、それまでの集落研究方法に見直しを迫り、今なお多くの研究者により新たな研究手法の模索が続けられている。

こうした努力と黒井峯遺跡の膨大な情報が整理されてきたことにより遺跡の評価ついて考古分野だけではなく、文献史学や古代家族史からも積極的な問題提起が行われるようになってきた(高久2012)。このように再び活性化しつつある集落研究をより進めるためには、黒井峯遺跡だけではなく他の集落遺跡の検討も大切なのは言うまでもないであろう。

私もかつて埼玉県北部の城北遺跡を取り上げ、カマドに用いられた支脚の違いにより竪穴建物がグループ化できることなどを指摘した(末木2011)。しかし、その視点がどれだけ一般化できるのかについては述べることができなかった。そこで、本論では城北遺跡で確認できた要素が他の集落遺跡でどの程度観察できるかを検証し、竪穴建物群間の紐帯を検討する材料の一つになり得ることを提示しようとするものである。

1　なぜ支脚なのか

古墳時代の集落研究の一つとして人々の日常的な結びつきを検討するが、その材料に支脚を選んだ理由は２点ある。

①支脚の使用に政治的な関与がほとんど及ばないと考えられること。

これまで多くの遺物が“流通”という視点で取上げられてきた。考古学で述べられる流通とは、物を生産し最終使用者まで届ける一連の活動を指すことが多いが、その活動には最終使用者の存在を前提とした生産量の確保や、保管や輸送、そしてそれらに関わるさまざまな調整が必要となる。こうした流通に関わる調整こそが大小の首長層の役割であり、重要な政治活動であったといえるであろう。土師器を含め多くのものが政治活動の結果竪穴建物に暮らす人々にもたらされていたと考えられるのである。

カマドも先進文物の一つとして畿内(河内)を起源とする粘土を用いた脆弱な構造と支脚に高坏を利用するという形で政治的な背景をもって関東地方に導入されたと考えられている(杉井1993)。

しかし、その後カマドが普及していく中では、同じ集落内で支脚を使う竪穴建物もあれば使わない建物もあるし、同時期でも素材や形態が異なるものが使用されるなど、支脚利用形態は使用者の都合により変わっていったものと考えられる。つまり、カマドが普及していく際に支脚を使うか使わないか、使うとすればどのような支脚にするのかについては政治的な背景はなく、日常生活の中で生まれた慣習などによるところが大きいと推定される。このような政治的

な影響を受けない支脚の選択の中に集落内の日常的な関係が見て取れると考えた。
②カマドを中心とした厨房は女性の権限が強く及ぶ空間と考えられること。

カマドは厨房施設であることから、女性のエリアであったと考えられていることや(笹森1990、2007)、姑の世帯と嫁の世帯ではカマドを同じにすることを忌む、「カマド禁忌」の存在(高群逸枝1975)、さらに、日本書紀孝徳天皇大化二年三月条の記述などにみられるカマドや厨房道具に対する同火意識の強さから、厨房に関する道具が集落内における女性間の関係を示す可能性があると考えた。特に古代において土師器製作は女性の労働であったことを考慮すると、土製の専用支脚をつくる場合その製作者の性別は女性とほぼ特定できる。

以上の２点から支脚利用には、政治的な動態とは無関係に集落内の日常的な人々のつながりの一端、特に女性を中心とした紐帯が反映されていると推定したのである。

２　支脚の分類

支脚について分類し、用語についても解説を行っておく(第１図)。

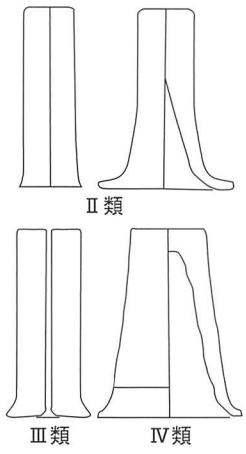
支脚には土器を転用して支脚にする場合、支脚専用品を粘土で製作する場合、礫を使用する場合の３種がある。このうち土器転用支脚については「高坏転用」「小型甕転用」などと呼ぶ。そして粘土により専用の支脚をつくる場合は「土製専用」とする。

土製専用支脚については、これまで、恋河内昭彦氏(2008)や福田信子氏(1998)などが分類を行っているので、それらを参考にしながら製作技法と形状などにより以下のように分類した。

Ⅰ類：報告書で地山掘り残しとか粘土塊などと表現されるもの。
Ⅱ類：棒状のもの
Ⅲ類：筒状のもの(細い棒のようなもので穿孔されているものや、孔部分に整形痕のないものも含む)
Ⅳ類：高坏の脚状のもの(頂部をふさぐものを１、あけるものを２)

また、ⅠからⅣ類すべてについて、シルエットが直線的なものをａ、山形なものをｂ、裾を屈曲してつくるものをｃとした。

なお、Ⅰ類とⅡ類の違いについては報告書に記載されている図、写真、文章だけでは判断がつかないものもあったが、基本的に粘土の塊にあまり整形を施していないと思われるものを含めⅠ類とした。



第１図　支脚分類

３　遺跡内における支脚利用

今回、埼玉県内で支脚利用が確認できた古墳時代の遺跡は235である。このうち県内９遺跡を選んで検討を行うほか、県外の１遺跡を参考として提示する(1)。

個々の遺跡の検討に当たって用いる時期区分は基本的に報告書に従っているが、一部私見による場合もある。

(１)城北遺跡(第２図)

深谷市の城北遺跡(92)(以下、遺跡名に続く(　)内の数字は第14

図に対応する)は県北部の妻沼低地にある遺跡で、隣接して砂田遺跡(90)、柳町遺跡(91)、居立遺跡(93)など古墳時代後期の集落が多く営まれる。図14の地域サに含まれる遺跡である。

城北遺跡からは５世紀後半から６世紀前半の竪穴建物が157軒検出されている。報告書ではⅠ期からⅣ期に分けられ、Ⅱ期はさらにⅡ1期とⅡ2期に細分されている。

本遺跡は私が支脚の検討を行うきっかけとなったもので、すでに別稿に詳述しているので(末木前提書)、ここでは支脚によるグルーピングが最も顕著となる時期を取り上げその他の遺跡を分析する際の視点を明らかにしておく。

まず図２左上の支脚別の分布を見てみよう。これは支脚利用の分布を時期に関係なく示した図である。なお、調査区は中央にある道路により南北に分かれている。

一見してわかるとおり北側の調査区では土製専用支脚を使用する住居が多く、南側では高坏や小型甕など土器の転用が目立ち、支脚利用の分布に偏りがあることが指摘できる。

この分布の偏りにはどのような意味があるのかを見るため時期別の支脚利用を示した。

Ⅱ1期は５世紀第４四半期前半とされている時期で、遺跡内には竪穴建物のまとまりがＡ～Ｅの５つある。Ａ、Ｂ、Ｃが土製専用支脚主体、Ｄ、Ｅは高坏転用が主体となっている。

Ⅱ2期にはＡで竪穴建物が姿を消し、ＢにはⅡ1期から継続してⅡ類を使用する竪穴建物ある。一方で小型甕転用が初めて出現し二つの支脚利用が混在する。小型甕転用の出現の仕方は、支脚利用を共通する竪穴建物がグループとなって移動する可能性を示している。

Ｃでは土製専用支脚の竪穴建物が新たみられその数も増加する。ＤはⅡ1期には高坏転用のグループであったが、Ⅱ2期にはⅡ類の支脚が１軒確認できるだけで高坏転用の竪穴建物は見られなくなる。Ｅでも竪穴建物が減少し高坏転用が姿を消している。

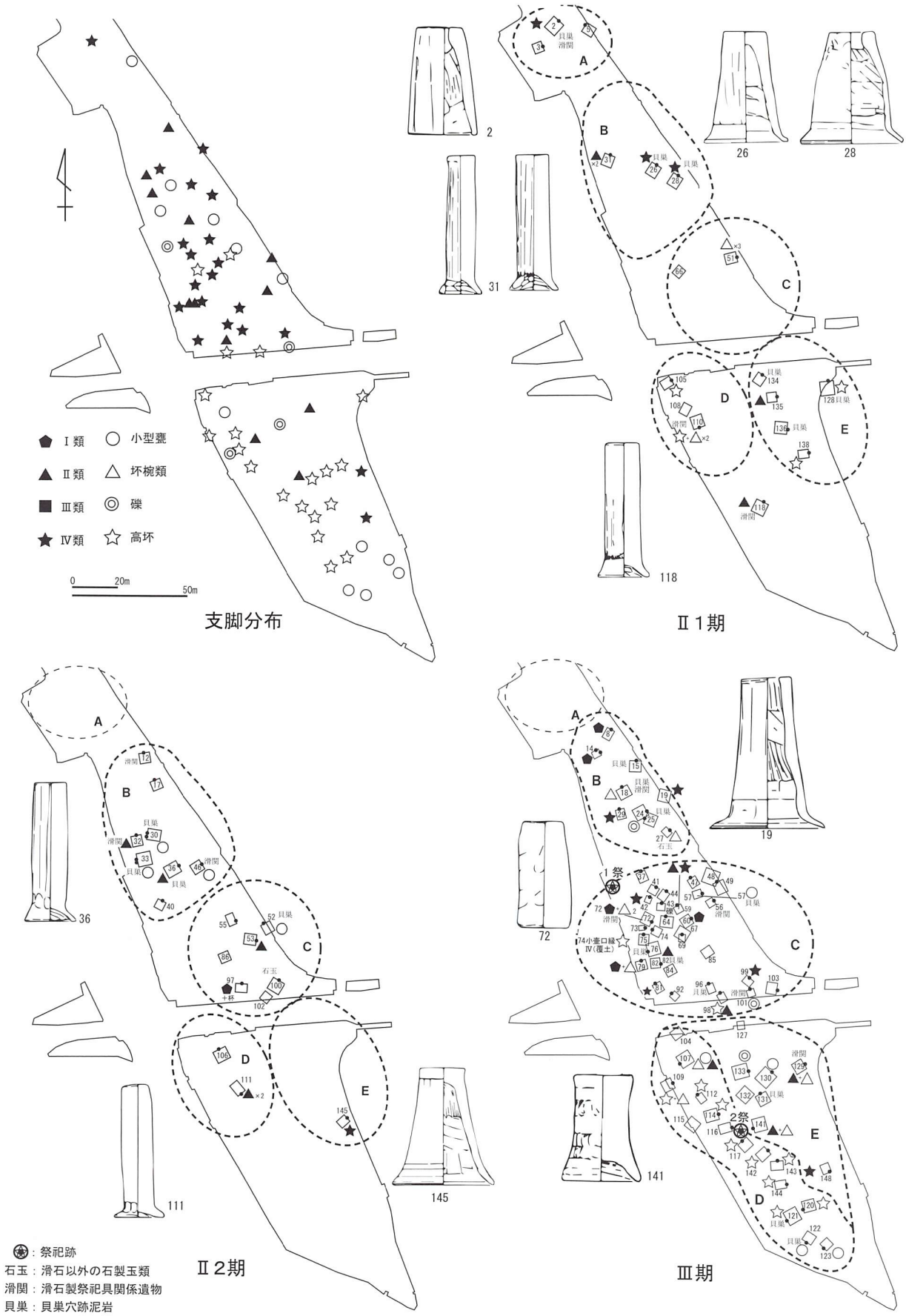
このほか、Ⅱ1期、Ⅱ2期を通じてよく似たⅡc類の支脚が使用されていることが分かる。Ⅱ1期ではBの31号で２個体、Dから南に離れた118号で１個体が出土している。そして、Ⅱ2期にはその位置を踏襲するように、Ｂの32、36号、Dの111号に分布する。同じ形態の支脚を利用する竪穴建物が遺跡内で位置関係を継続するように占地しているといえる。

Ⅲ期になると竪穴建物は大幅に増加し、支脚によるグルーピングも一層顕著となる。土製専用支脚はＢ、Ｃに、高坏や小型甕など土器転用はＤ、Ｅと一部の例外を除き明確に分かれる。ＢではⅠ類、Ⅳ類、礫、杯埦類とバラエティに富むが、Ⅰ類、Ⅳ類は２軒ずつのまとまっているようにみえる。

ＣはⅡ期の竪穴建物のまとまりがやや西にずれて拡大する。支脚利用はさまざまだがⅠ類の占める割合が高い。

南側の調査区は、Ⅱ期まで西にＤ、東にＥと別れて竪穴建物のまとまりがあったが、Ⅲ期には一つの大きなまとまりとなっている。しかし建物の分布に支脚利用を加えると、西側では圧倒的に高坏転用が多く次いで小型甕転用が南方にまとまっているのに対し、東側では土製専用支脚の利用が目立つという違いがある。ここでは、その違いによりＤとＥに分けた。

Ｄでは高坏転用の竪穴建物が圧倒的多数でⅡ1期の位置を踏襲するように再出現する。Ｄの中には小型甕転用やⅡ類など高坏転用以外の竪穴建物も存在するが、それらは高坏転用と混在しないようにその外縁に分布し、居住域が重ならないような意識が認められる。この高坏転用



第２図　城北遺跡の支脚利用

の建物の動態を見ると、集落の拡大は支脚利用が共通する集団が移動して行われる場合があることが見て取れる。

さらに、滑石製品や貝巣穴痕泥岩など石製の祭祀関連遺物の分布を重ねてみると、支脚利用でまとまるグループと関係があることがうかがえる。

石製の祭祀関連遺物は土製専用支脚を使用する北側の調査区からの出土が目立つ。そして高坏転用の竪穴建物で出土しているのはDの121号１軒だけである。

この高坏転用の竪穴建物と他の支脚を利用する竪穴建物との石製祭祀遺物の出土量の違いは集落内祭祀にも反映している点が注目される。

Ⅲ期には図で１祭、２祭と書いてある地点で集落内祭祀の跡がみつかっている。１号祭祀跡はCの北西に位置し、ブロックの境界を意識した祭祀と考えられるが、ここからは坏を中心とした多量の土器と、剣形、臼玉、有孔円板など多くの滑石製品、焼骨が出土している。

一方、２号祭祀跡は一見すると南側調査区の竪穴建物群の中にあるようにみえるが、この位置は高坏転用グループとそれ以外の支脚利用のグループの境界であることから、実はここも境界にかかわる祭祀と推測できる。この２号祭祀跡の出土遺物は数点の甕と刀子形、斧形の石製模造品だけで、１号祭祀跡よりはるかに出土遺物が少ない。報告書でも石製模造品の使い方が対照的であるとされている。そして、この違いはこれまで述べてきたとおり支脚利用に見られるグループ内の祭祀関連遺物の出土状況と重なる。つまり、祭祀関連遺物からは土製専用のグループと高坏転用グループとでは異なる祭祀形態を執っていたと考えられるのである。

ここまで述べてきた城北遺跡の例から集落の構成単位や移動について以下の点が指摘できる。

①集落内には支脚利用が共通する竪穴建物のグループが存在する(2)。

②支脚利用が共通するグループで移動する場合がある(3)。

③Dに見られる高坏転用グループの移動の姿から、支脚利用が共通するグループは一定期間集落内の同じ場所を占有する場合がある。

④支脚利用が共通するグループは同じ祭祀形態をとる可能性がある。

城北遺跡で見られたこれらの特徴が一般的なものであるのか、以下で県内の集落遺跡について支脚利用と祭祀関連遺物に注目し検討を加えていく。

(２)西富田遺跡群(第３図)

女堀川左岸の本庄台地上に立地している遺跡群で、二本松遺跡(13)、夏目遺跡(15)、夏目西遺跡(14)、弥藤次遺跡(12)、社具路遺跡(17)、薬師元屋舗遺跡(16)などの遺跡からなる。この遺跡群は昭和30年代や50年代後半から60年代初頭にかけて行われた発掘調査によって、関東地方の中でもいち早く５世紀中葉にカマドが導入された地域として著名となった。また、図版の都合上カットした夏目西遺跡などこの遺跡群内からは布留系の甕の出土が知られていて畿内との密接な関係を示す資料として注目されている。

本論では遺跡群の中心部に当たる夏目遺跡、社具路遺跡、薬師元屋舗遺跡について検討する。なお、時期区分については大谷徹氏が行ったものを参考にした(大谷2007)。Ⅰ期が５世紀前半から中葉、Ⅱ期が５世紀中葉、Ⅲ期が５世紀後葉、Ⅳ期が５世紀末、Ⅴ期が６世紀初頭から前葉、Ⅵ期は６世紀前葉から中葉、Ⅶ期は６世紀後葉から末、Ⅷ期は７世紀前半となっている。

カマドの導入期であるⅠ、Ⅱ期は高坏転用だけであるが各遺跡とも散漫な分布である。なお、Ⅰ期には炉とカマドの竪穴建物が混在し、炉を使用する県道調査区の23号からは五徳状土製品が出土している。

薬師元屋舗遺跡では12号でカマドの袖内から臼玉が出土しているが、以後、本遺跡では袖に臼玉や土玉をカマドの袖に埋める祭祀行為が継続する。

Ⅲ、Ⅳ期には夏目遺跡で竪穴建物が減少し薬師元屋舗遺跡で増加する。なお、夏目遺跡の国道調査区の西側では竪穴建物建物が分布しない空白域がある。

薬師元屋舗遺跡の竪穴建物分布は、西寄り、中央、東寄りの３つのまとまりがある。中央のグループはこの段階ですでに高坏転用は確認できない。また、袖内に祭祀関連遺物を埋める行為は、西寄りのグループのみで確認できる。しかし、竪穴建物の増加と支脚利用グループの関係ははっきりしない。

Ⅴ期は夏目遺跡の国道調査区でⅢ、Ⅳ期の空白地域に高坏転用の竪穴建物が複数出現する。支脚利用が共通するグループでの移動であった可能性がある。

薬師元屋舗遺跡では竪穴建物は減少傾向だがⅢ、Ⅳ期と同じように３つの地点に分かれて分布している。ただし支脚利用の継続性は明確ではない。

社具路遺跡はこの段階に再び竪穴建物が分布するようになる。分布は調査区の北寄り、中央、南寄りの３つに分かれる。グループ内には１軒ずつ支脚利用が分かる竪穴建物があり北寄りのグループでは小型甕を支脚としている。中央と南寄りからは高坏転用が認められるが、これだけではⅡ期の41号と結びつきがあるとは言えないであろう。

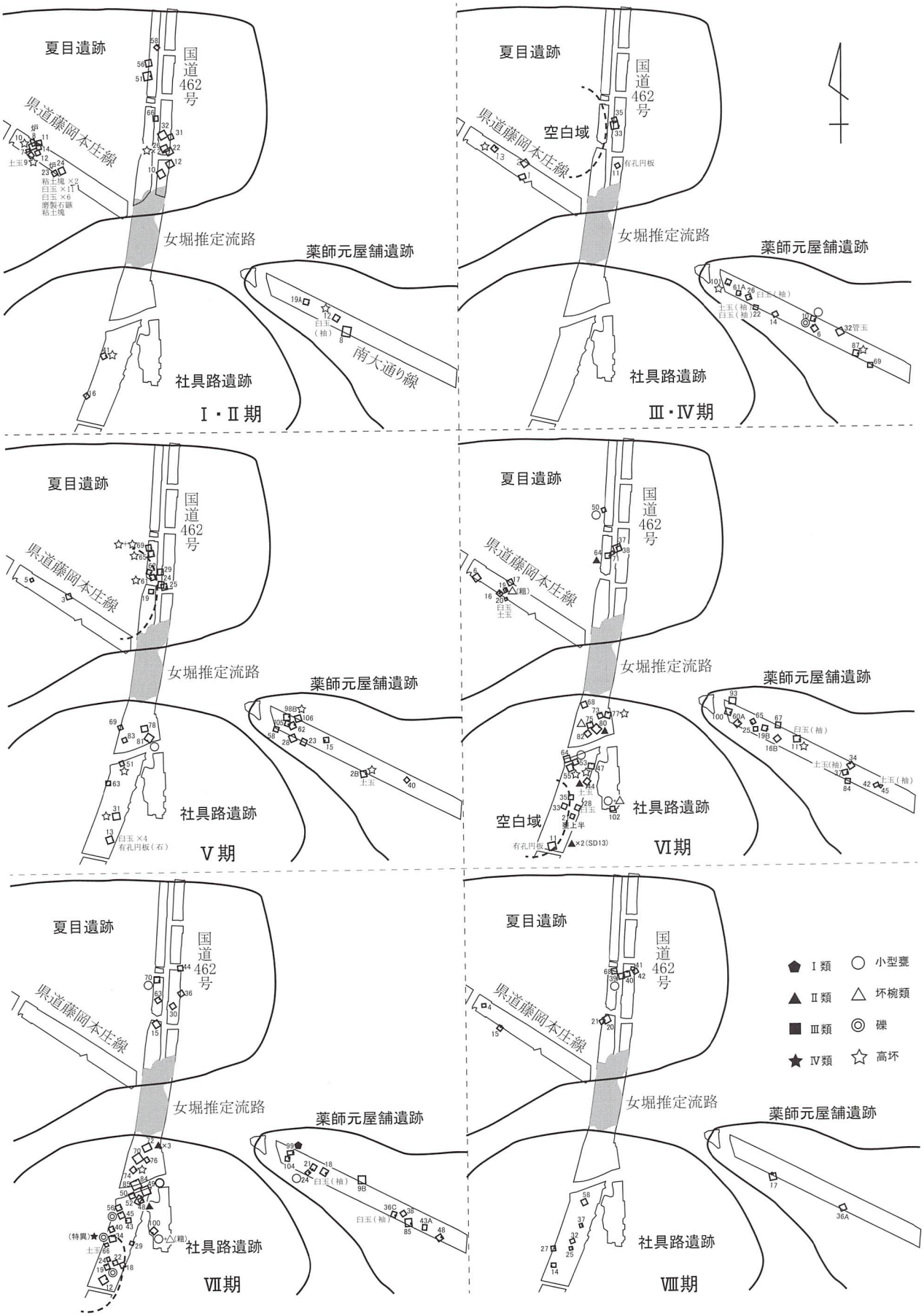
Ⅵ期になると夏目遺跡の高坏転用グループは姿を消してしまう。薬師元屋舗遺跡では支脚利用が確認できる竪穴建物が高坏転用の１軒だけとなる。社具路遺跡での支脚利用の割合が17軒中９軒と50％を超えることを考えると、薬師元屋舗遺跡は支脚を使用しないグループともいえる。

社具路遺跡の支脚利用は、高坏、小型甕、杯埦類、甕による転用支脚が主体となり一部でⅡ類の使用がみられる。Ⅴ期には転用支脚しか見られないことから支脚利用形態が継続したとも考えられる。なお、調査区の西側に竪穴建物の空白域が存在している。そして、Ⅶ期にはこの区域に礫利用のグループが分布する。このことから、支脚利用が共通するグループでの移動であった可能性がある。またⅥ期102号とⅦ期100号は小型甕転用支脚の上に杯埦類を重ねる点が共通していることから継続的な占地といえるかもしれない。

Ⅷ期には各遺跡とも竪穴建物は減少していき支脚利用状況も検討できなくなっている。つまり、Ⅶ期からの支脚利用の継続性は認められない。

滑石製品や土玉などの祭祀関連遺物については、薬師元屋舗遺跡で袖内に埋める行為が認められたが支脚利用との関係性を示す資料は得られなかった。

西富田遺跡群の検討からは、Ⅲ、Ⅳ期からⅤ期への夏目遺跡での高坏転用や、Ⅵ期からⅦ期にかけての社具路遺跡での礫利用が空白域へまとまって進出していると思われることから、城北遺跡で確認できた①支脚によるグループがあること、②グループ単位で移動していること当てはまるが、③は社具路遺跡の一部だけで、④は確認できなかった。



第３図　西富田遺跡群の支脚利用

（３）秋山遺跡群（第４図）

本庄市にある秋山大町遺跡(37)、秋山大町東遺跡(38)、秋山諏訪平遺跡(39)の３遺跡を仮に秋山遺跡群と呼ぶ。図14の地域オの中に含まれる遺跡群で、利根川水系の小山川上流右岸に位置し、松久丘陵の裾部から東に緩やかに傾斜する斜面に立地している。

遺跡群は５世紀末から古代まで継続する。ここでは支脚利用形態が比較的多く確認できるⅠ期（５世紀末）、Ⅱ期（６世紀前半）、Ⅲ期（６世紀中葉）を取り上げる。

Ⅰ期には秋山大町遺跡Ｂ地点で礫利用が２軒、秋山大町東遺跡で１軒だけだが高坏転用の竪穴建物の分布が認められる。わずかな利用状況だがこの様相が以降も継続していく点が注目できる。

Ⅱ期は大幅に竪穴建物が増加する。秋山大町東遺跡をみてみると、Ⅰ期に空白域Ａとした場所に礫利用がまとまって進出している。また、空白域Ｂには高坏転用が２軒まとまる。そして秋山諏訪平遺跡Ｆ地点の南側の空白域Ｃにも高坏転用が２軒出現する。

秋山大町遺跡では広く竪穴建物が分布するようになるが、Ｄ地点南側、Ｂ地点北側に礫転用がまとまっている。さらに礫利用のまとまりの南側には支脚利用がほとんど確認できない竪穴建物のまとまりがある。秋山遺跡群は小山川上流域に立地し支脚に利用可能な礫が容易に入手できることから礫利用が中心となることは当然であるが、分布に濃淡があることからは、支脚を利用しないというグループがあったことを想定させる。

Ⅲ期になっても支脚利用の分布に大きな変化はない。高坏転用の竪穴建物は秋山大町東遺跡の南側と秋山諏訪平遺跡Ｄ地点に分布するだけで秋山大町遺跡には認められない。

また、秋山大町遺跡内でもＢ地点南寄りに支脚を利用しない竪穴建物がまとまり、その西と北側に礫利用が分布するという状況はⅡ期と同様である。

このように秋山遺跡群では、集落の出現当初からⅢ期まで一貫して秋山大町東遺跡の南から秋山諏訪平遺跡にかけて高坏転用の竪穴建物が分布し、秋山大町東遺跡の北側から秋山大町遺跡にかけては礫利用が分布する。またⅡ期からⅢ期には支脚を利用しない竪穴建物のまとまりも立地が継続している。

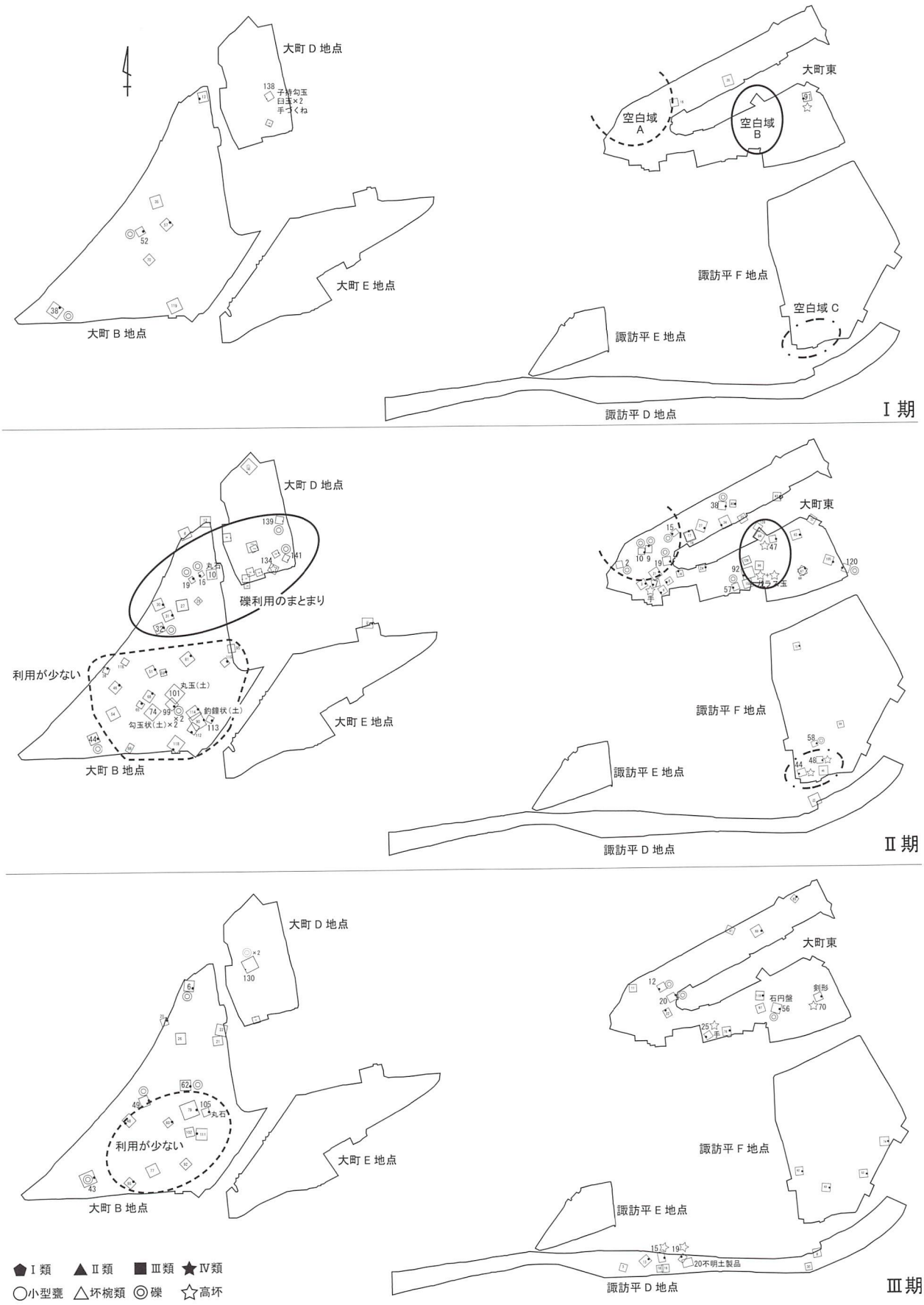
祭祀関連遺物では明確なまとまりを見ることはできないが、秋山大町遺跡のⅡ期に出現する支脚を利用しないグループに土製の祭祀関連遺物がまとまる傾向がある。ただし、Ⅲ期の同じグループには継続しない。

以上の検討結果から秋山遺跡群では①支脚利用ごとのグループと②Ⅱ期の礫利用からグループでの移動、③一定期間集落内の同じ場所を占有するという点が認められた。

（４）砂田前遺跡（第５図）

深谷市の砂田前遺跡(78)は福川源流から400ｍほど東の妻沼低地に位置し、図14の地域ケに含まれる。発掘調査は深谷バイパスと道の駅の建設に伴い行われ、古墳時代後期の竪穴建物跡が161軒検出されている。

集落は５世紀後半に１軒という小規模な構成からスタートし、その後一気に拡大していく。ここでは集落が拡大し支脚利用が多く認められる報告書のⅡ期、Ⅲ期古段階、Ⅲ期新段階を俎上に乗せる。時期区分はⅡ期が６世紀前半、Ⅲ期古段階６世紀中葉から後半、Ⅲ期新段階が６



第4図　秋山遺跡群の支脚利用

世紀末から７世紀前半に該当する。

砂田前遺跡における竪穴建物の分布は明確な境界を意識したまとまりは認められないが、深谷バイパス(以下、BP)調査区では東、中央、西それぞれに継続して竪穴建物群が営まれる。BP調査区SD１・２、道の駅地区SD６は両発掘調査区を分けるように続く溝である。この溝は古墳時代後期に存在したことは確認されていないが地形的に低くなっていたと思われ、BP調査区と道の駅調査区の竪穴建物群を分けている。

Ⅱ期は集落の拡大期である。BP調査区では２つのまとまりがあり、それぞれ高坏転用とⅣ類がセットのように見える。時期的に幅があるので高坏転用からⅣ類へと時期的な変化があった可能性もある。

道の駅調査区では高坏、Ⅳ類、Ⅱ類、小型甕などさまざまな支脚利用が混在する。しかし、調査区の中央付近に転用、Ⅱ類、Ⅳ類という土製の支脚がまとまりその周囲に礫利用が分布するという傾向がみられる。

Ⅲ期古段階になると支脚利用にあまりまとまりがなかった前期に比べて遺跡東側が礫、西側が土製専用支脚と明確に分かれ、土製専用もⅣ類とⅡ類で分かれる。つまり東から礫、Ⅳ類、Ⅱ類となる。礫利用は集落内を分けるSD６をはさんで両側にそれぞれまとまりをもつがBP調査区28号と道の駅調査区41号は礫を横に２個並べて支脚にするという点が共通している。なお、礫を２個並列して支脚にするものは次期の道の駅調査区25号に継続する。

Ⅲ期新段階にはSD６を境にする空間がより広くなり、BP調査区と道の駅調査区のブロック化が鮮明となる。BP調査区では支脚利用が極端に縮小している。道の駅調査区では支脚利用は前段階から継続して礫利用が調査区中央にまとまっている。前期に確認できた土製専用支脚のグループは姿を消して、そこには杯埦類や高坏転用などの土器転用が分布している。支脚利用が継続するグループと短期間で姿を消すグループがあることが分かる。

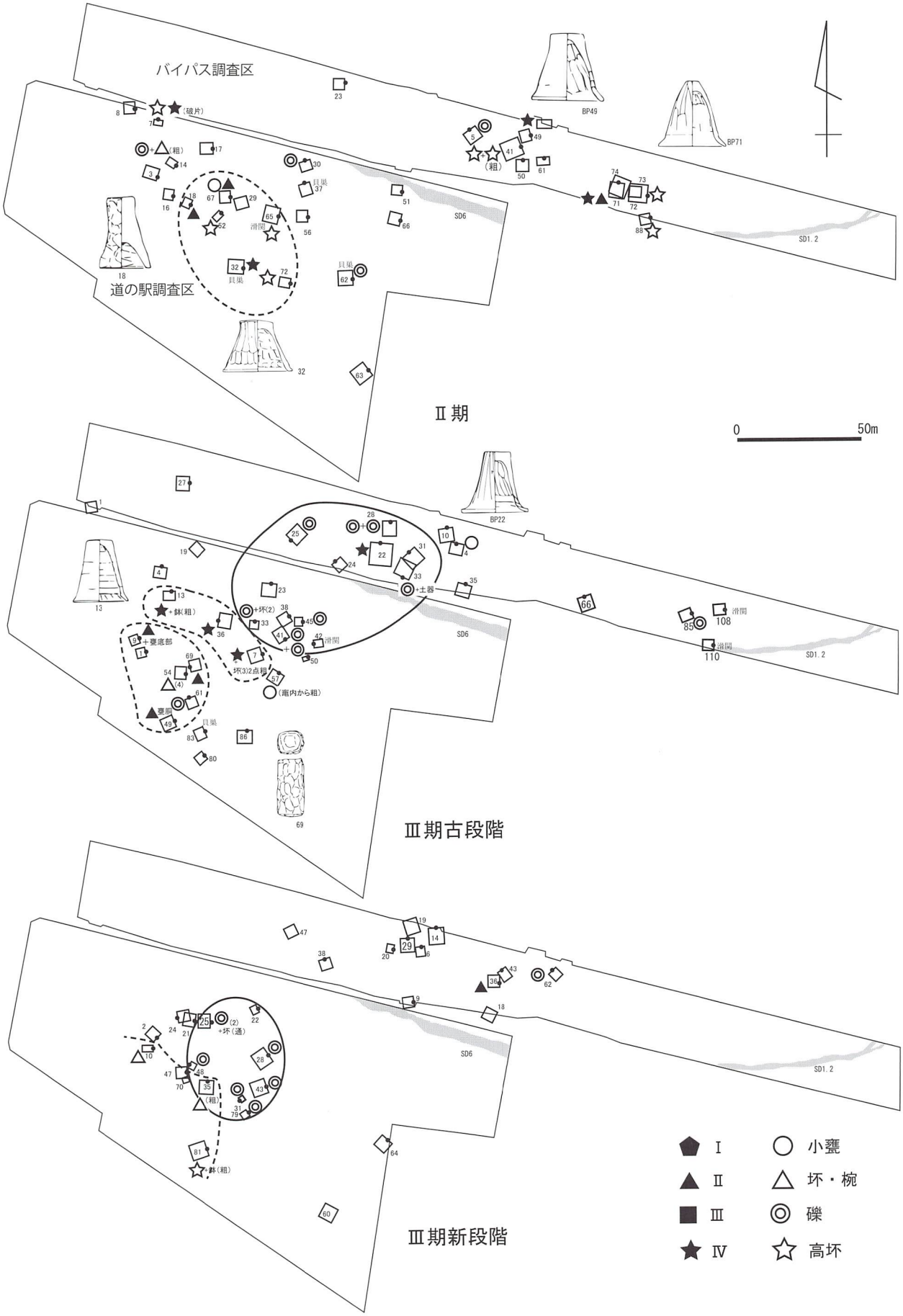
砂田前遺跡ではもう一つ支脚利用に特徴が認められる。それは、支脚に載せられた形で出土する供膳具に粗製のものが多い点である。図５に(粗)と記載しているものがそれで、Ⅱ期のBP調査区41号、道の駅調査区14号、Ⅲ期古段階の道の駅調査区13号、７号、54号そして、Ⅲ期新段階では道の駅調査区35号と81号である。25号のように仕上がりの良い杯を重ねることもあるが(図中に(通)と記載)、粗製の供膳具を明らかに意識して使用していると思われる。紙数の関係で詳述できないが、支脚の上に重ねられる供膳具が粗製のものである遺跡はこのほかにも確認できることからある程度の広がりを持つ行為であると考えられる。

祭祀関連遺物の分布をみてみるとⅡ期の道の駅調査区で滑石製品などの石製祭祀関連遺物が出土している。しかし、出土している竪穴建物の支脚利用はさまざまで、特定の支脚利用と祭祀関連遺物が結びつくということはない。これはⅢ期古段階でも同様である。

以上砂田前遺跡では①支脚利用ごとのグループと、③一定期間集落内の同じ場所を占有するという点が認められた。②の支脚利用が共通するグループでの移動については明確ではなく、④については確認できていない。

(５)上敷免遺跡(第６図)

深谷市上敷免遺跡(87)は福川の自然堤防状に形成された地域コに含まれる遺跡である。東に



第５図　砂田前遺跡の支脚利用

隣接して本郷前東遺跡(88)、新屋敷東遺跡(89)がある。

報告書によると調査区は１～６区に分けられているが、この区分けは地形的要因ではなはない。また近代以降に粘土採掘による削平を受けており、すでに消滅してしまった竪穴建物も多く、特に４区の西半分の削平が激しく本来は５区にかけて均一に建物が分布していたと推測されている。５区の中央には９世紀後半に埋没した谷の跡があり古墳時代には土器捨て場として利用されていた。なお紙幅の都合で６区を省略している。

時期区分は私見によるもので、Ⅰ1期が５世紀第３四半期、Ⅰ2期が５世紀第４四半期、Ⅱ期が６世紀前半、Ⅲ期が６世紀中葉、Ⅳ期が６世紀後半、Ⅴ期が７世紀前半である。

上敷免遺跡では５世紀中葉に４軒の竪穴建物が存在するが、確認できる火処はすべて炉でありカマドはない。

Ⅰ1期にはカマドを伴う竪穴建物が一気に進出する。これらの建物は１、２区に分布の中心があり、５世紀中葉に竪穴建物が存在していなかった空閑地に分布している。

確認できる支脚利用は、２区50号にⅣ類の小片が出土しているだけで、あとは高坏転用である。

祭祀関連遺物は１・２区で滑石製品(図中に滑関と記載)が出土していて高坏転用と関係があるように思える。３・４・５区での出土はない。

Ⅰ2期になると竪穴建物数はさらに増加する。分布の中心が１・２区にある点は前期と同じであるが、支脚利用は高坏転用が３軒だけとなり他の支脚利用が多くなる。

また、１区では南側に支脚を利用しない竪穴建物のまとまりがあり、それを囲むように高坏転用、小型甕転用、Ⅱ類、Ⅳ類の竪穴建物が存在する。

１区での滑石製品の使用は継続するが高坏転用の住居からは出土せず、主に支脚を使用しないグループに集中する傾向がある。

２区はⅠ類とⅣ類、小型甕転用２軒の利用が確認できる。支脚利用が多様化するのは１区と同じだが、高坏転用が見られなくなること、滑石製品が出土しなくなり代わって土製品となる点が異なる。

３・４区は高坏転用１軒と支脚を使用しない建物数軒という組合せで、これはⅠ1期と同じである。滑石製品が出土しない点も継続している。

注目されるのはⅠ2期に竪穴遺物が増加する５区である。ここにはⅣ類を利用する竪穴建物が３軒、それに隣接して支脚利用のない竪穴建物がまとまって出現する(A)。そして、このグループからは滑石製品が出土している。Ⅳ類を利用する竪穴建物は２区にも分布しているが、滑石製品の出土はなくこの点に違いがある。

Ⅱ期になると１・２区の竪穴建物は減少しながらも高坏転用がⅠ期以来継続するほか、滑石製品が１区では出土するが２区からは出土しない点も継続する。

３・４区にはⅡ類とⅢ類の利用が確認されるようになるが、167号のⅢ類と183号のⅡ類は中央の孔が頂部まで突き抜けているかいないかの違いだけで、形態、整形とも類似品であり基本的にはⅡ類利用が主体となる場所といえよう。さらにこの調査区ではⅠ期以降滑石製品を使用しない点も継続している。また、Ⅰ2期には竪穴建物の分布が少なかった場所(B)であることから、共通した支脚利用をするまとまりが進出してきた可能性がある。

５区はⅣ類の使用が継続するが、支脚を利用しない竪穴建物のまとまりは姿を消してしまう。また滑石製品も出土しなくなるが、石玉が出土していて石製の祭祀関連遺物の利用という点で継続性があるとも言える。

Ⅲ期には竪穴建物の３・４区への集中化が進む。支脚利用の点からみると５区に近い方にⅣ類（Ａ）、その東側にⅡ類、Ⅲ類（Ｂ）というように遺跡内での竪穴建物の配置関係はⅡ期と同じである。祭祀関連遺物ではＡの193号と169号で石製祭祀関連遺物を伴い継続性が維持されている。しかし、169号では土玉も出土しているし、Ｂの105号では滑石製品が出土するなど祭祀関連遺物は支脚利用によるグループを越えて使用されるようになってくる。

Ⅳ期にはⅣ類を使うＡグループが縮小しながらも遺跡内で西端という位置に営まれ、滑石製品を伴出することも継続する。また３区の竪穴建物は減少し、２区に再び集中するようになるがⅡ類とⅢ類からなる集団でありＢグループが移動したように見える。

Ⅴ期には２・３区に竪穴建物が集中し、支脚利用はⅣ類とⅡ類だけとなる。祭祀関連遺物は両調査区から出土している。前期まで見られたＡＢ両グループについては、支脚利用からの継続性は確認できなくなる。

このように、上敷免遺跡では①支脚利用によるグループが存在し、②そのグループで移動をし、③一定定期間集落内の同じ場所（集落内で同じ配置も含め）を占有する場合がある。そして、城北遺跡ほど顕著ではないが④支脚利用と祭祀形態に関係があることが指摘できる。

（６）一本木前遺跡（第７・８図）

熊谷市の東別府にある一本木前遺跡（103）は、熊谷扇状地端部と妻沼低地が複雑に入り組む低地帯に立地している大規模な遺跡である。第14図の地域シに含まれている。

報告書による時期区分ではⅢ期から古墳時代後期とされている。本論では支脚利用の検討のためⅣ期からⅥ期までを対象とする。年代観はおおよそ６世紀代に該当する。

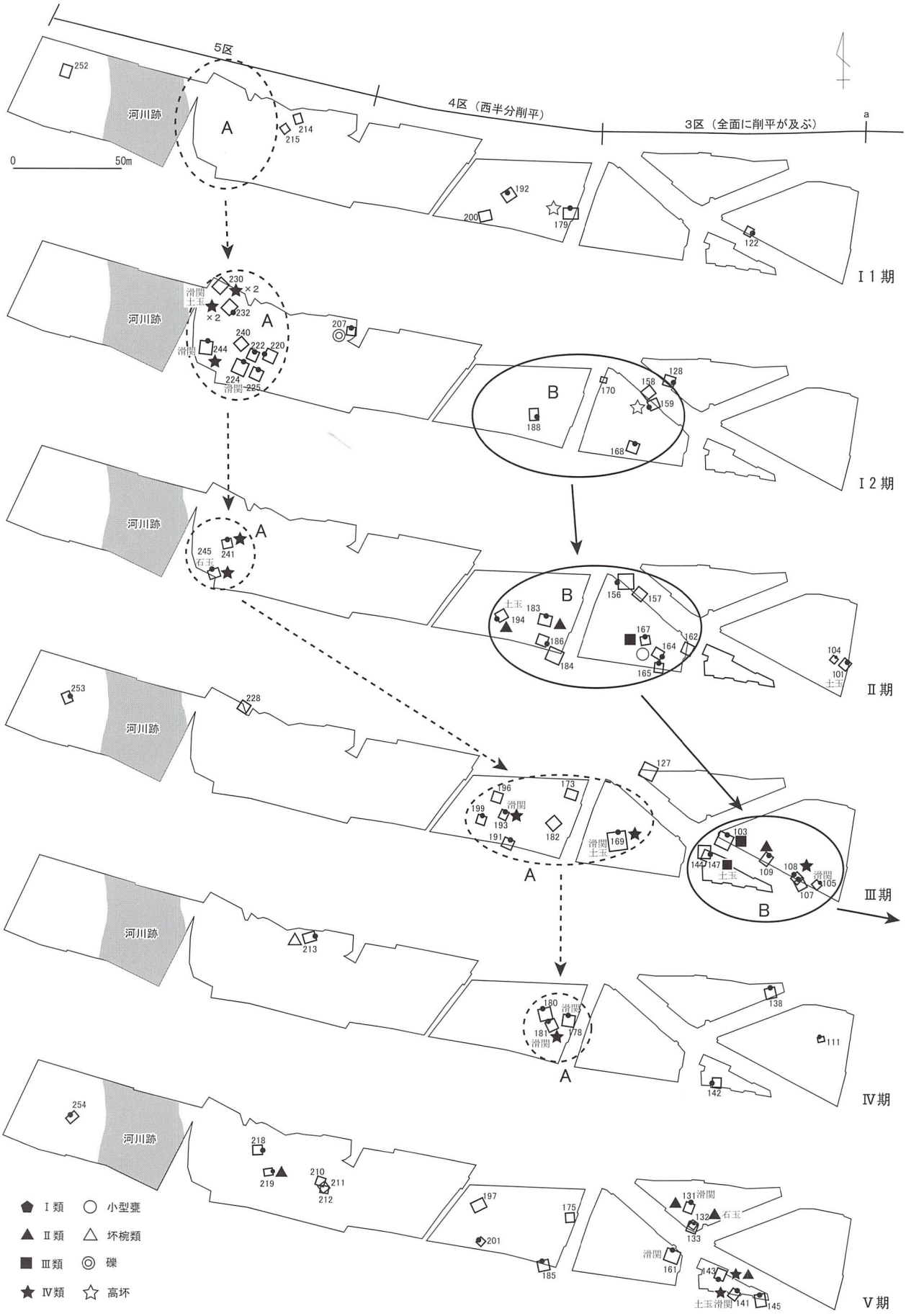
Ⅳ期以前のⅢ新期の状況は、Ｃ区北端に羽口を出土する竪穴建物がまとまりその中にⅠ類と礫利用が確認できる。また、その東のＢ区北端に坏椀類転用が認められるがこの段階では支脚利用によりグループ化はできない。

Ⅳ前期（第７図左上）には竪穴建物が散在する程度となる。支脚利用もＢ区24号の高坏、Ａ区21号の坏椀類、63号のⅣ類がそれぞれ１軒ずつと傾向をつかむことはできない。

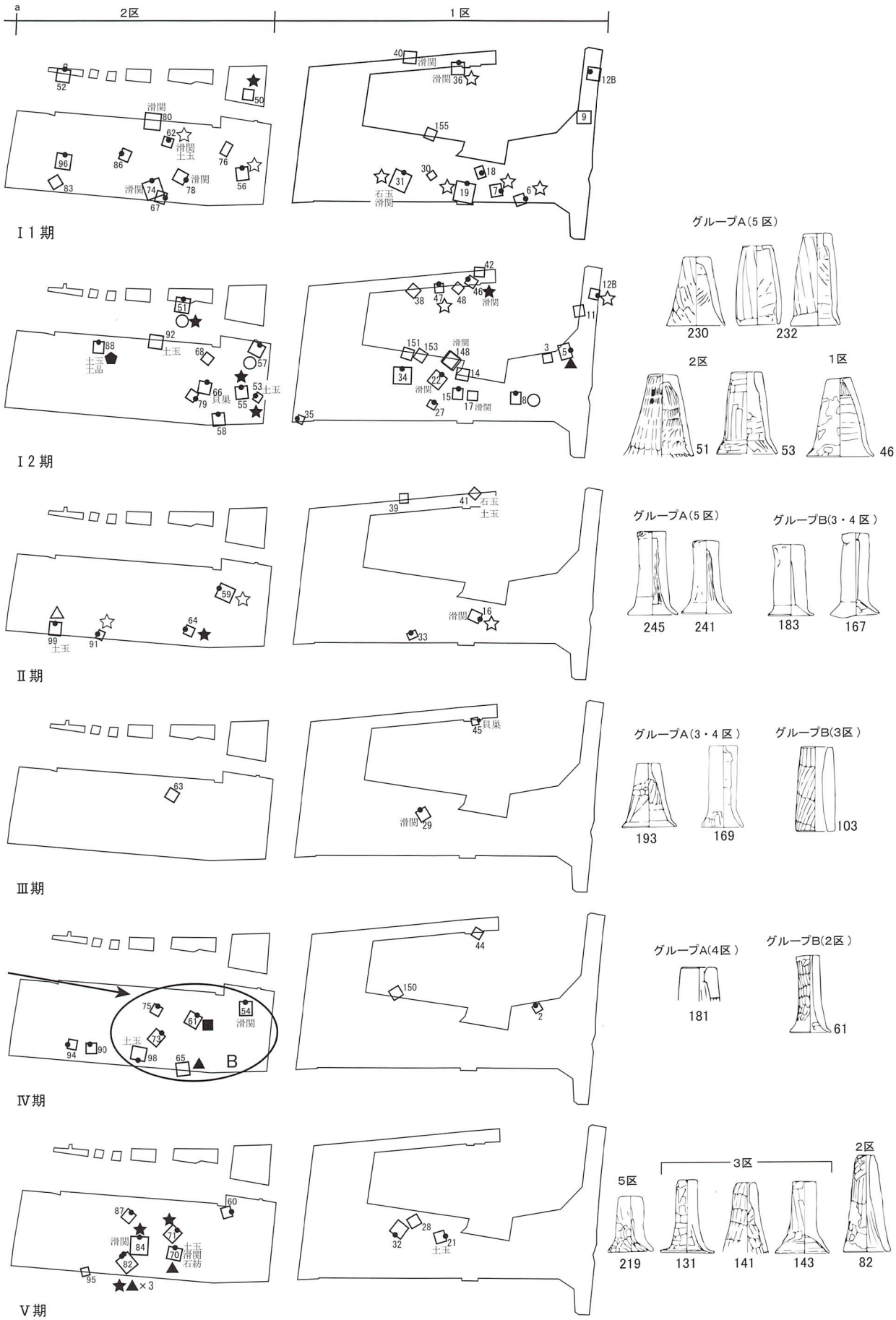
Ⅳ後期になると前期に竪穴建物が分布していなかったＦ区東側に建物が急増する。Ｆ区の建物群を支脚利用で見ると、北側が高坏転用、南側に坏椀転用と分けられる。また、両者とも祭祀関連遺物の出土が見られないという特徴がある。Ｂ区南端にも高坏転用のまとまりがあるがⅣ前期のＢ区24号からの継続性について判断はできない。

Ⅴ前期には再び竪穴建物は減少する。支脚利用も検討できるだけの材料はない。祭祀関連遺物についてはＦ区東側の建物から出土しない点が継続している。

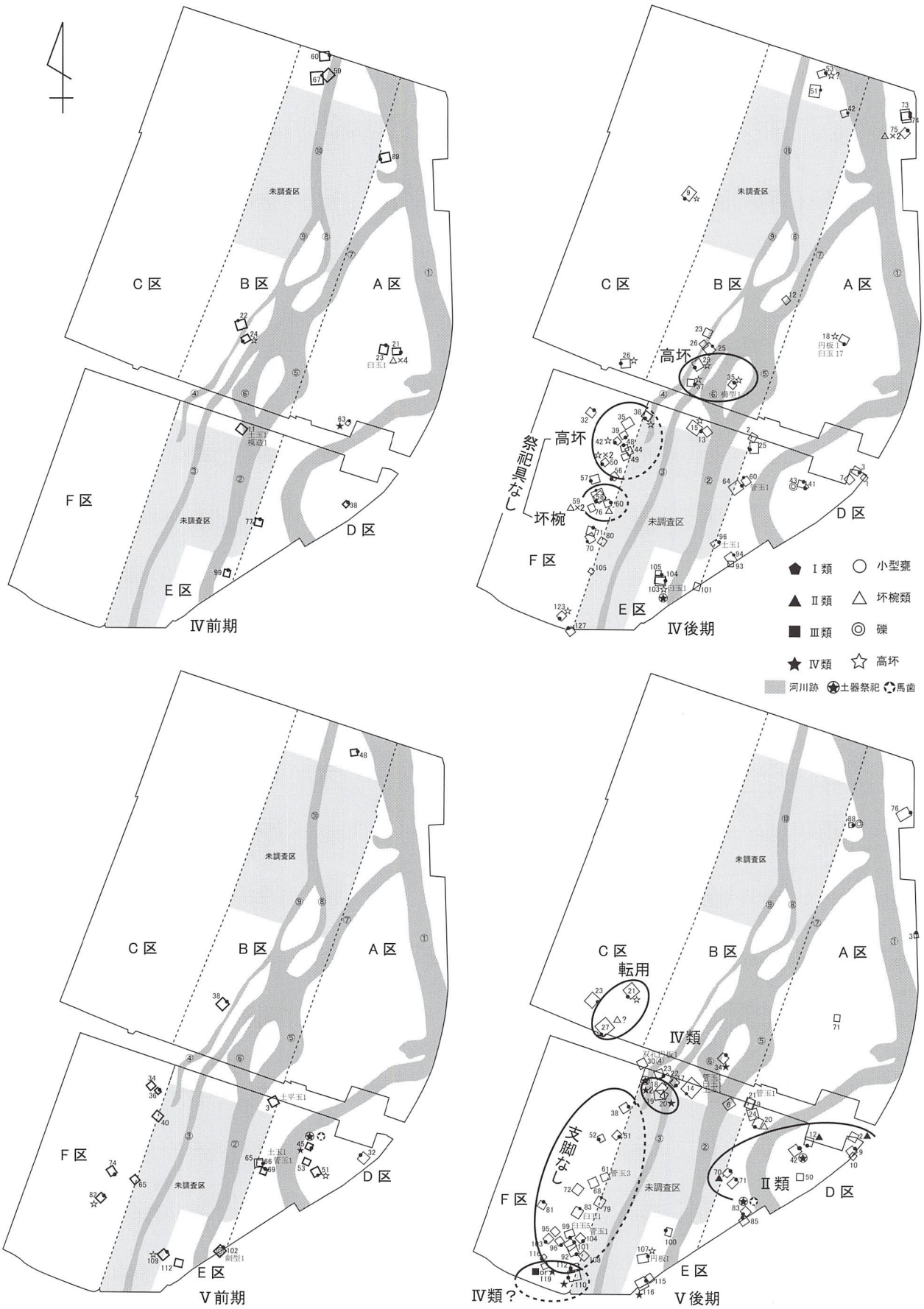
Ⅴ後期には再び竪穴建物が増加する。前期に竪穴建物の空白域であったＣ区南端には土器転用が、Ｅ区北端からＢ区南端にかけてはⅣ類がまとまる。また、Ⅱ類はＤ区でしか確認できない。Ｆ区東側には支脚を利用しない建物がまとまり、その南側にⅣ類を中心とする専用支脚の建物が２軒ある。このＦ区東側はⅣ後期には土器転用で祭祀関連遺物をもたないまとまりがあった


5区
4区（西半分削平）
3区（全面に削平が及ぶ）
a
0
50m
河川跡
A
B
滑関
土玉
石玉
礫
Ⅰ1期
Ⅰ2期
Ⅱ期
Ⅲ期
Ⅳ期
Ⅴ期
Ⅰ類
Ⅱ類
Ⅲ類
Ⅳ類
小型甕
坏椀類
礫
高坏

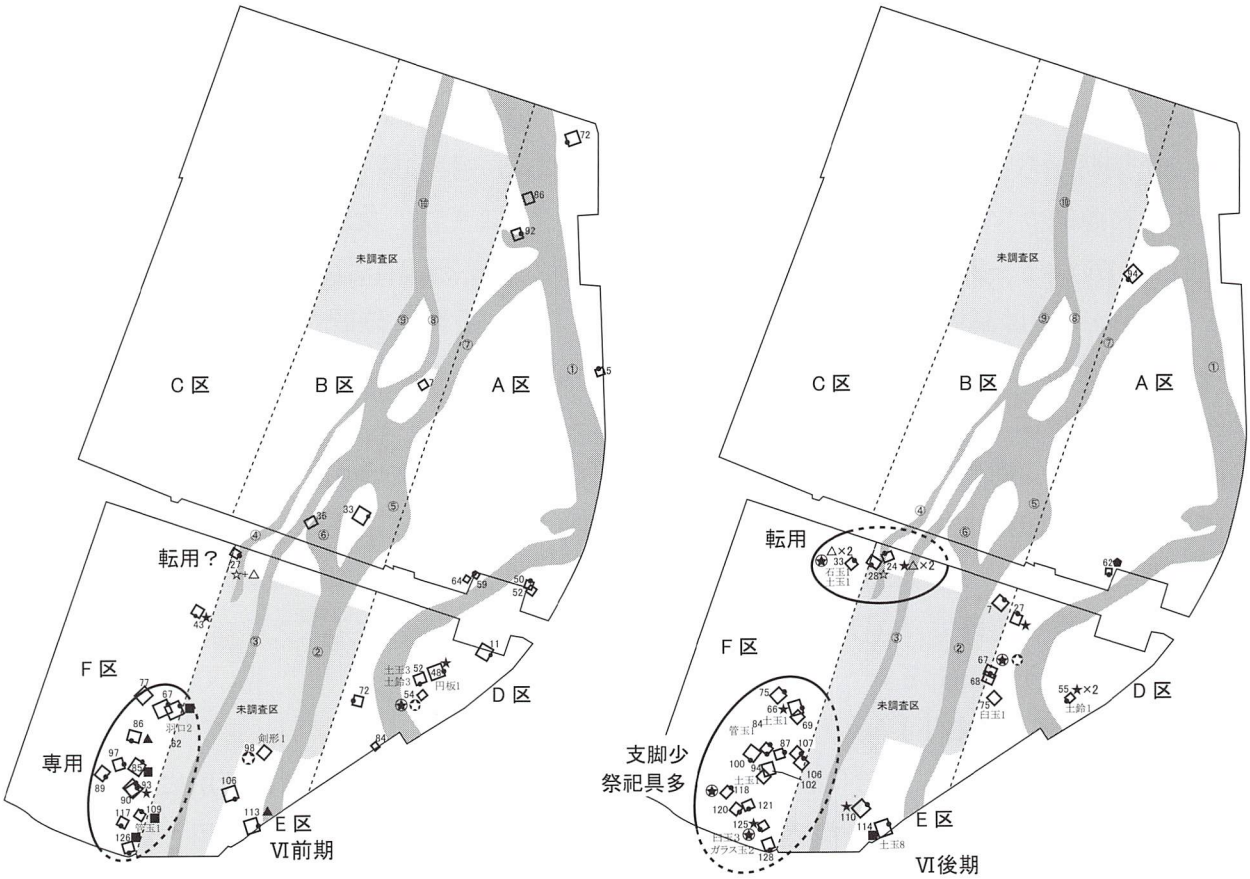
第6図　上敷免


a
2区
1区
Ⅰ1期
Ⅰ2期
Ⅱ期
Ⅲ期
Ⅳ期
Ⅴ期
B
グループA(5区)
グループB(3・4区)
グループA(3・4区)
グループB(3区)
グループA(4区)
グループB(2区)
3区
5区
2区
1区
230
232
51
53
46
245
241
183
167
193
169
103
181
61
219
131
141
143
82

遺跡の支脚利用



第７図　一本木前遺跡の支脚利用（1）



第８図　一本木前遺跡の支脚利用（2）

が、本期に進出してきた支脚を利用しない建物群には石製の祭祀関連遺物が多く伴う。ただし、専用支脚利用の建物からは出土していない。

Ⅵ前期には建物がやや減少する。Ｃ区南端にあった土器転用のまとまりは、Ｅ区北端の27号に移動したのであろうか。さらにＤ区のⅡ類も姿を消す。Ｆ区東側では支脚を利用しないグループが見られなくなり、Ⅴ後期にＦ区南端に２軒であった専用支脚のグループが拡大していると思われる。拡大した専用支脚のグループでは祭祀関連遺物の出土が109号の管玉１点であり、基本的には伴出しない建物群と考えられる。この点は前段階の専用支脚グループと同じである。

Ⅵ後期にはＥ区北端に土器転用の竪穴建物が２軒と増加する。ただし、前期には祭祀関連遺物を持たなかったが本期では祭祀遺構と祭祀関連遺物を伴う。

Ｆ区東側では土製専用支脚の利用が極端に減少し支脚利用が少なくなる。それに合わせるかのように祭祀関連遺物の出土が目立つようになる。つまり、Ｆ区東側ではⅤ後期以降、支脚利用なしで祭祀関連遺物あり→Ⅵ前期に土製専用支脚利用で祭祀関連遺物なし→Ⅵ後期に再び支脚利用なしで祭祀関連遺物ありというように建物群のまとまりが推移することがわかる。

このように一本木前遺跡では①支脚利用が共通する竪穴建物のグループが存在し、Ｆ区での支脚利用や祭祀関連遺物のあり方からは、②支脚利用が共通すグループで移動すること、そして、③一定期間集落内の同じ場所を占有する意識がうかがえる。さらに④支脚利用が共通するグループは同じ祭祀関連遺物を利用することが指摘できる。

(7)桑原遺跡(第9図)

桑原遺跡(148)は坂戸市北部の越辺川と高麗川に挟まれた毛呂台地北東部に立地する。地域テとしたエリアには足洗遺跡(146)、金井遺跡(147)、稲荷前遺跡(150)、塚の越遺跡(151)など古墳時代後期から古代まで継続する大規模な集落がある。特に隣接する棚田遺跡(149)からはいわゆる初源的カマドが検出されていて注目される。ここでは、桑原遺跡の報告書に従い、Ⅰ－1期(TK47)、Ⅰ－2期(MT15)、Ⅰ－3期(6世紀第2、第3四半期)を対象とする。

Ⅰ－1期の支脚は高坏転用を中心に台付甕転用、Ⅰ類、Ⅱ類と確認されているが、高坏転用以外の竪穴建物は北側に集中する。そして、この傾向はⅠ－2期まで継続する。なお、桑原遺跡のⅡ類とⅢ類は穿孔の有無以外は整形、焼成とも類似する。そして、Ⅰ－3期には支脚利用の南北が逆転し、南側に専用支脚を伴う建物が多くなるが、そのうち94号と95号は高坏転用のカマドでありⅡ類はカマド以外から出土している点は注意が必要である。

祭祀関連遺物はⅠ－1期とⅠ－2期に見られるが特徴的な分布とはならない。

このように桑原遺跡では①支脚利用が共通するグループが存在すること、③そして一定期間占地することがうかがえる。

(8)打越遺跡(第9図右下)

富士見市にある打越遺跡(165)は、南北に長い台地上に立地し遺跡の西側は江川に区画される。笹森健一氏が貯蔵穴、入り口、カマドの配置から嫁取り、婿取りの検証にも使用されている(笹森前提書)。

ここで検出された竪穴建物は5世紀末から6世紀初頭のものである。支脚利用の観点で見ると遺跡の西側では支脚利用がなく、中央部分では土器転用、東側ではⅡ類がまとまるという傾向がうかがえる。祭祀関連遺物については出土がほとんどなく検討できる材料がない。なお、図中のL、Rは笹森氏の分析で使用された区分である。笹森氏はR、つまり右カマドを夫方居住とされている。支脚利用のⅡ類とRが重なる部分があり支脚利用と建物構造とに関係性がある可能性が指摘できる。ただし、私は支脚利用の共通性は女性的な結びつきを示すと考えていることから夫方居住とは考えていない。

以上、打越遺跡の検討からは①の支脚利用を共通する竪穴建物のまとまりが存在することが確認できた。

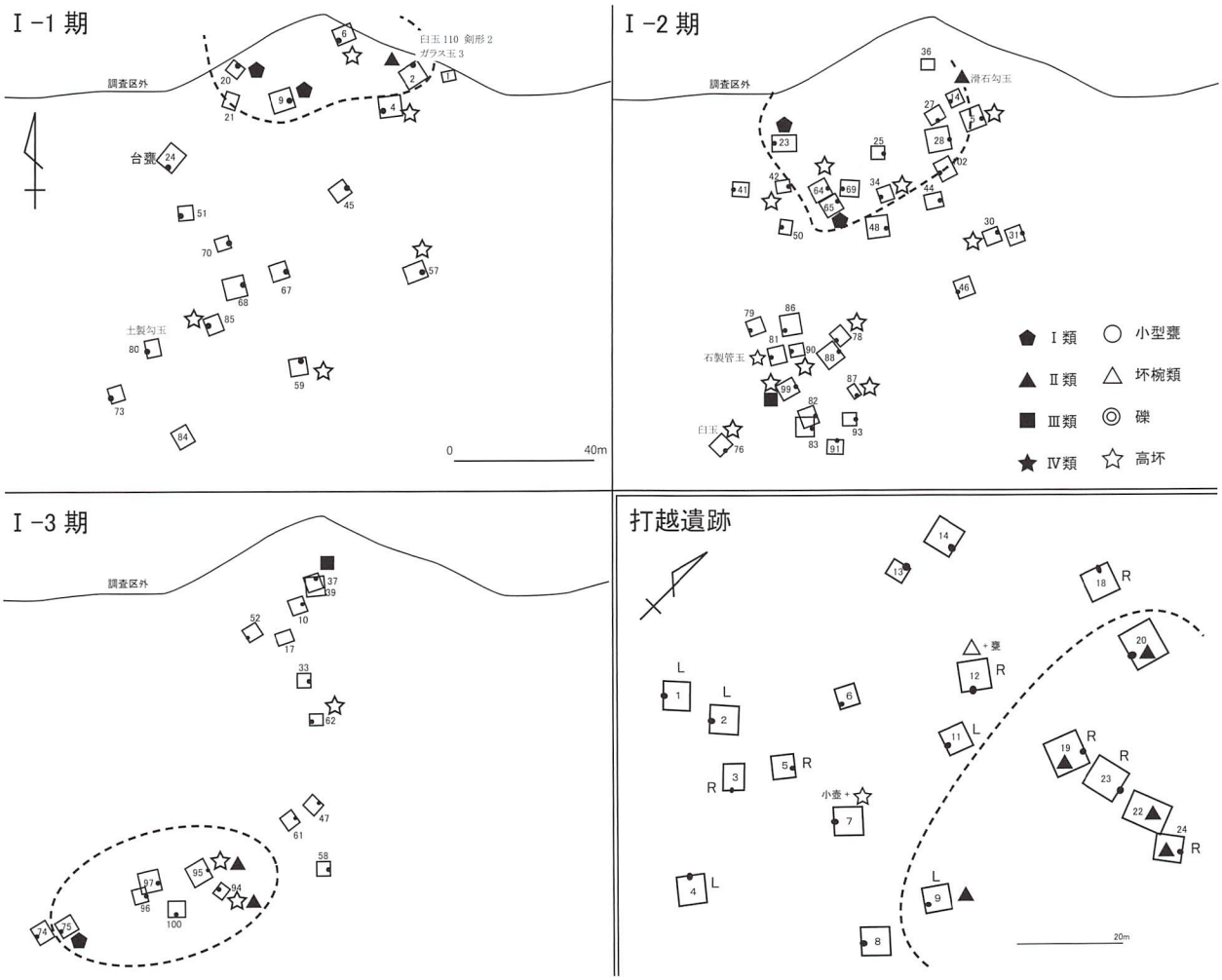
(9)城山遺跡(第10・11図)

埼玉県南部の志木市城山遺跡(212)は、柳瀬川右岸の台地縁辺部に立地している。これまで70地点以上に及ぶ調査が行われていて、古墳時代だけで200軒を超える竪穴建物が検出されている。

竪穴建物は遺跡全体に分布しているが、特に南側で密度濃く検出されていることからここではこの部分を中心に検討を行う。また、集落の形成は5世紀代に遡るが、支脚利用の様相が顕著となるⅢ期(6世紀中葉)からⅥ期(7世紀中葉)について述べる。

時期区分については城山遺跡を中心に土器の研究を積極的に行っている尾形則敏氏の編年観(尾形2012)を参考に一部私見を加えた。

Ⅲ期以前の竪穴建物は主に第58・60地点に分布している。5世紀後半にはカマドが導入され、



第９図　桑原遺跡・打越遺跡の支脚利用

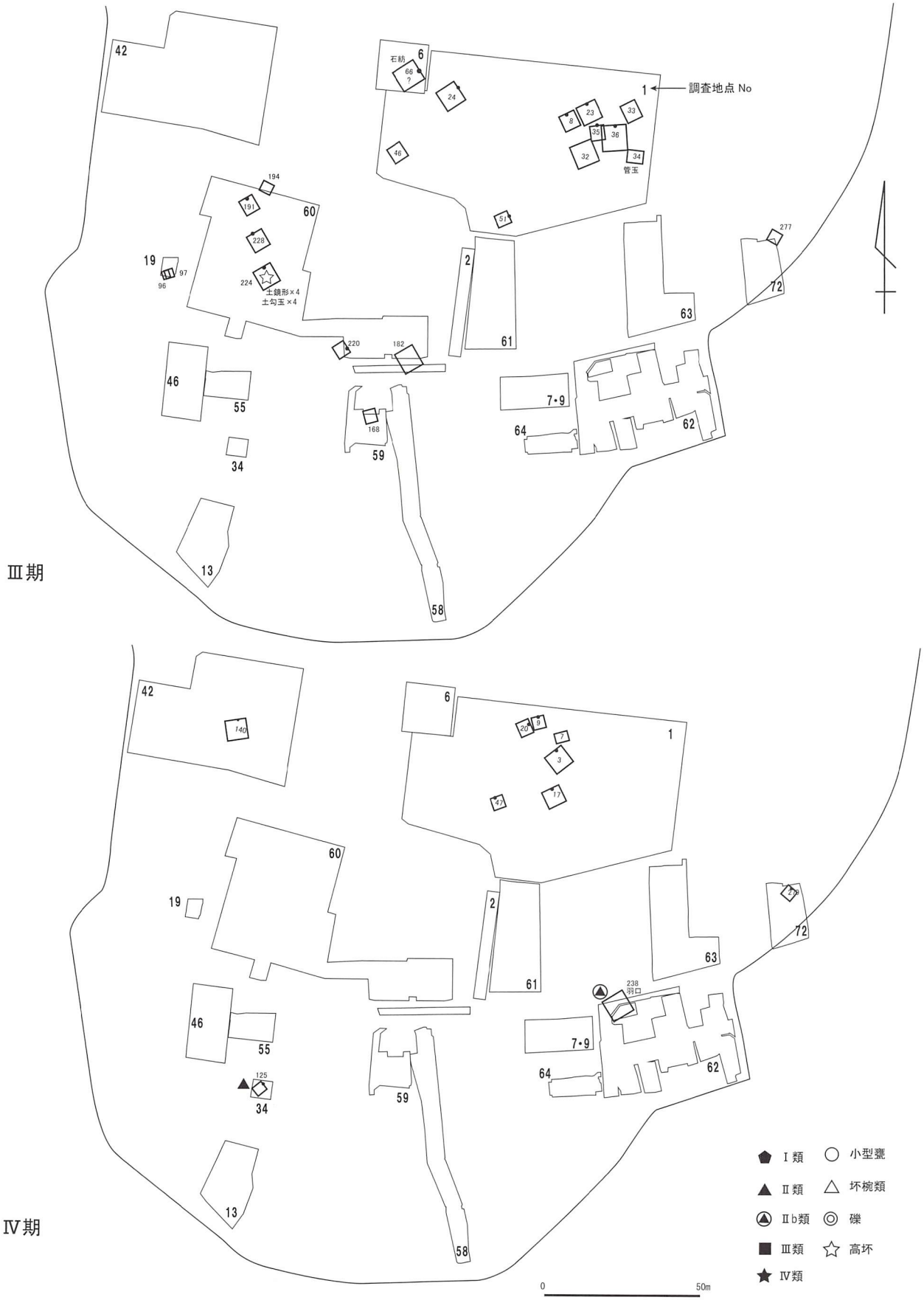
支脚利用は高坏転用が最も多くほかにⅡ類が確認できる。６世紀前葉には第１地点に建物の分布が多くなるが支脚利用はⅠ類が１軒だけという状況である。

Ⅲ期(第10図上)には前段階から引き続き第１地点に竪穴建物が分布するが支脚利用が確認できるものはない。第１地点の北西に接する第６地点66号は、図示されていないものの報告書に支脚についての記述がある。また、第60地点には高坏転用の224号があり土製の祭祀関連遺物を伴うがこの段階では支脚利用のまとまりは確認できない。

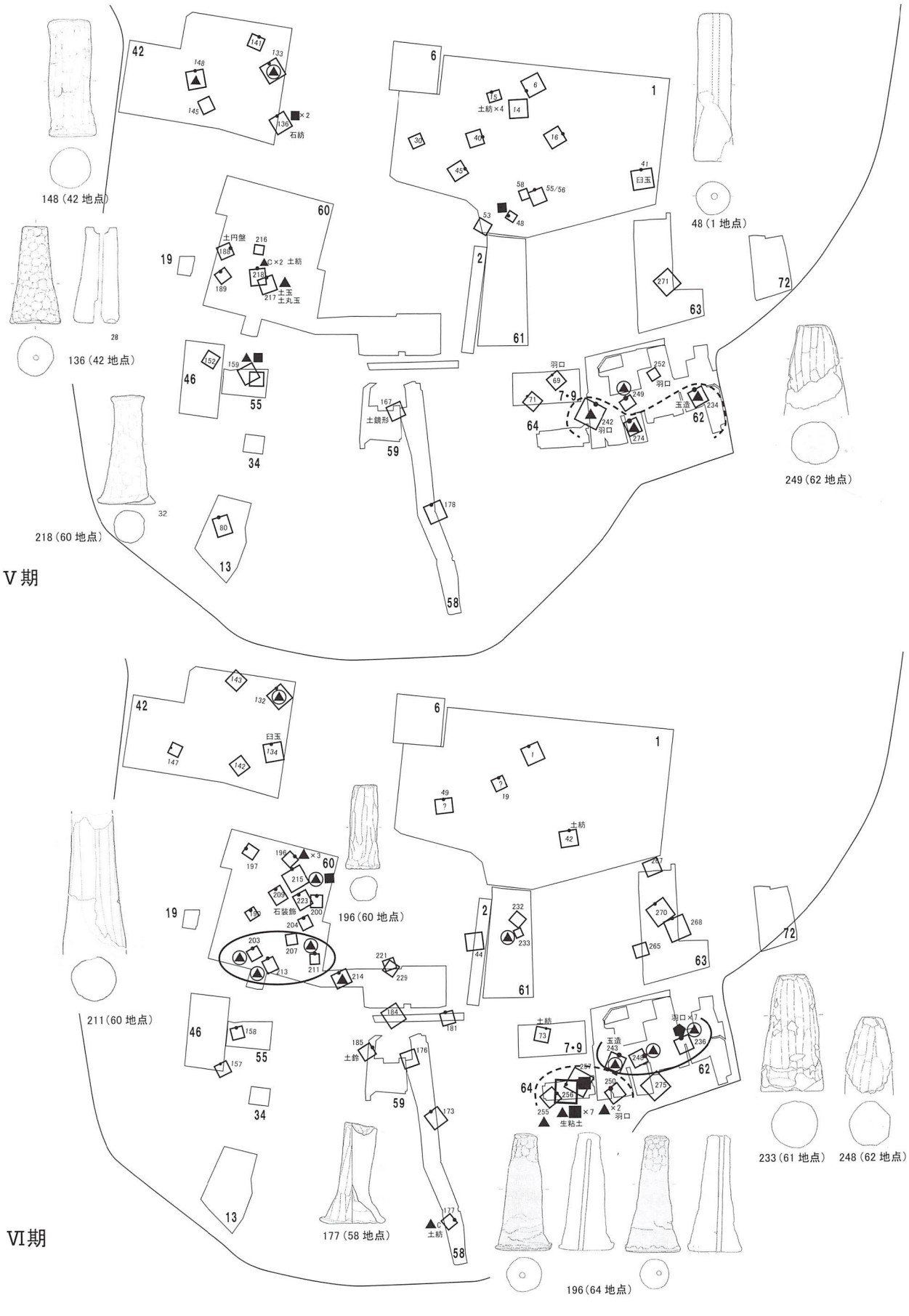
Ⅳ期の集落はやや縮小傾向にある。第１地点の建物はⅢ期の空白域にまとまって分布するが支脚利用は認められない。第62地点に１軒(238号)ではあるがⅡ類の利用が認められる。このⅡ類は形状が山形となるⅡb類で、面取りするように縦方向の整形痕が明瞭に残る特徴があり次期以降一定のまとまりを見せることから他のⅡ類と区別して図示した(図中の▲)。なお238号からは羽口が出土しているがこれもⅤ期、Ⅵ期に継続する。

Ⅴ期は竪穴建物が急増し、支脚利用も各地点に見られる。この段階でⅢ類の支脚が出現するが、まとまりをもたずに第１・42・55地点に散在する。第１地点では48号でⅢ類が１軒だけと支脚利用が低調な傾向が継続する。

第62地点では羽口が出土する竪穴建物がまとまるほか、玉造関連の建物も検出されていて手



第10図　城山遺跡の支脚利用（1）



第11図　城山遺跡の支脚利用（2）

工業のエリアとなっている。支脚利用ではⅣ期に建物が分布していない調査区南側にⅡ類がまとまり(破線)、Ⅳ期から継続するように１軒だけだがⅡb類が分布する(249号)。

第60地点では再び竪穴建物が分布するようになり支脚利用はⅡ類である。この地点では土製祭祀関連遺物が出土しているが、Ⅲ期の224号との関連については不明である。

Ⅵ期には第60地点の竪穴建物が増加するが、その主体は新たに進出してきたⅡb類を利用するグループであることが分かる(実線)。Ⅴ期に主体であったⅡ類を利用する建物は、Ⅱb類の建物を避けるような配置となっている。なお、土製の祭祀関連遺物は出土が見られなくなっている。

第62、64地点では引き続き鍛冶と玉造が行われていたようである。支脚利用の分布は前段階の位置関係を踏襲して北側にⅡb類、南側にⅡ、Ⅲ類がそれぞれまとまる(4)。

また第１地点ではこれまで支脚利用が少なかったが、報告書によると19号と49号の２軒から土製専用支脚が出土したことが記述されている。

城山遺跡の支脚利用からは、①支脚利用が共通する竪穴建物がまとまること、そしてⅥ期の第60地点で見られたⅡb類の出現は、②支脚利用が共通するグループでの移動を示す可能性がある。また、第62地点のように支脚利用が共通するグループが竪穴建物の位置関係を保つことから③一定期間の占地が確認できる。ただし④祭祀関連遺物と支脚利用に有意な関係性は認められなかった。

(10)中田遺跡(第12図)

これまで埼玉県内の遺跡について述べてきたが、ここで１例だけ県外の八王子市中田遺跡を取り上げてみたい。これは、多摩西部地域も支脚利用率が高い集落が多いと思われることや、中田遺跡が古墳時代の集落研究で取り上げられる機会が多く検討材料を追加することに意味があると考えたことによる。

なお、中田遺跡については1989年房総風土記の丘で行われたシンポジウムで土居義夫氏が、発掘当時の調査手法の限界として未調査エリアがあることを指摘しているが(土居他1989)、それを踏まえてもある程度の傾向は示していると考える。時期区分はＦ地区の調査報告書をもとにする。年代観はⅢa期が６世紀後半から末、Ⅲb期は７世紀初頭から前半、そして古墳時代後期後半が７世紀中葉から後半である。

Ⅲa期では一見してわかるとおりＥ地区に高坏転用、Ｃ、Ｆ 地区にⅡ類と明確な違いがある。Ｃ地区に１点ある14号のⅢ類の穿孔は細く、つくりはⅡ類と同じといえる。このⅢ類は次期Ｄ地区29号、次々期Ｄ地区20号と継続する。

祭祀関連遺物では土玉の出土がＣ地区、つまり土製専用支脚のエリアに集中する。

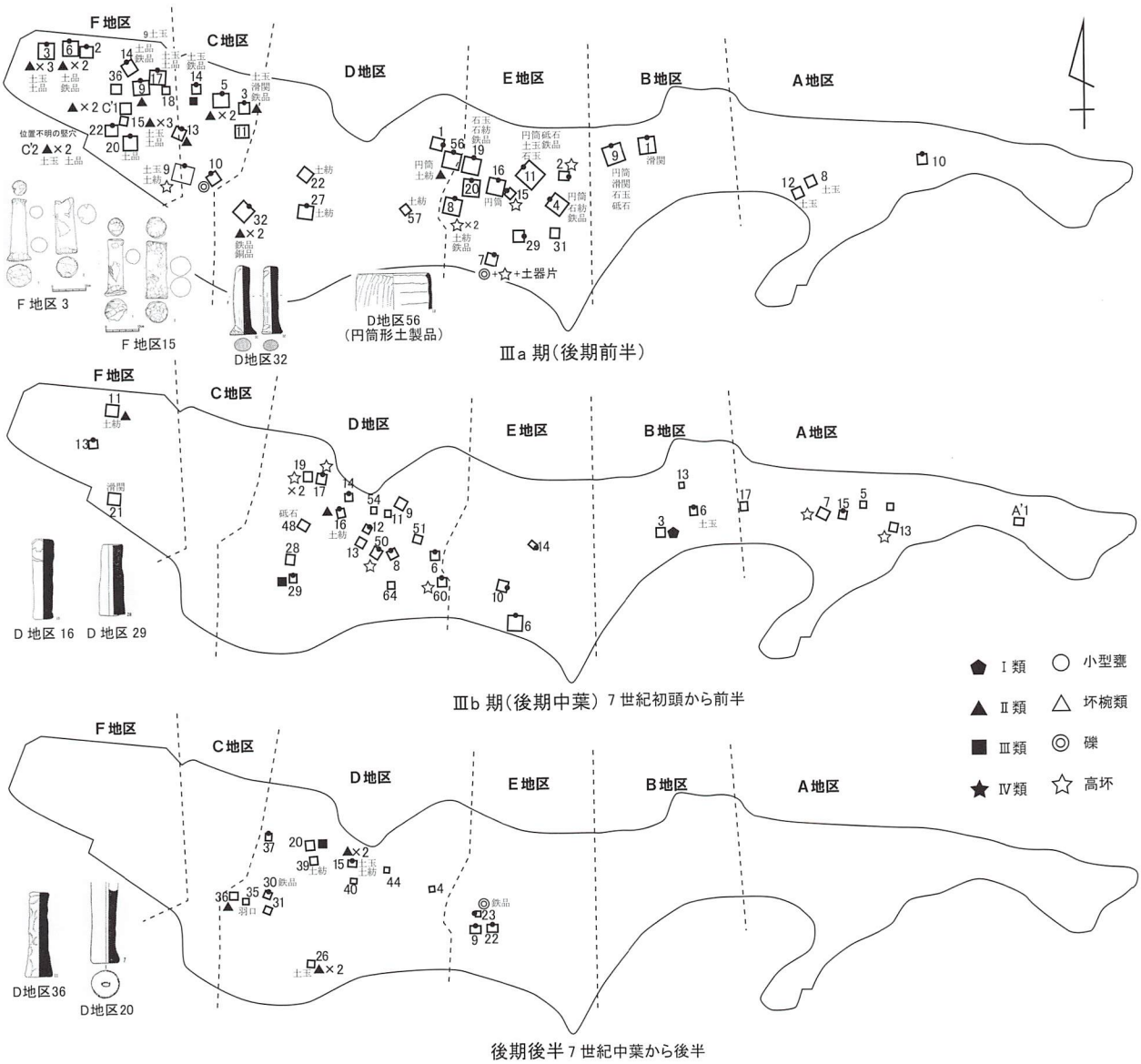
カマドの構築材ではないかとされる円筒形土器については、高坏転用エリアと分布が重なる。しかし、高坏転用の建物からは出土していないことから直接的な関係は導けない。

Ⅲb期になるとⅢa期に竪穴建物が少なかったＤ地区中央に建物が集中する。またＡ地区でも増加している。この変化について報告書では「強固な靭帯で結ばれていた各住居跡群が解体し、ムラ全体から住居跡群のあり方が規定されていった結果、Ⅲb期のような住居跡配置に変化」した結果と捉えている(鶴間2009)。

支脚利用から見てみると高坏転用が優勢だが、Ａ地区では高坏転用、Ｂ地区は土製専用、Ｄ地区では東側に高坏転用、西側に土製専用となる。そして、Ｆ地区は土製専用が継続するなどⅢa期の配置を意識している。集落規模が縮小する際に、土製専用と高坏転用のグループがまとまってⅢa期に建物が少なかったＤ地区に居住域を形成した結果と考えられる。

前期にⅡ類と関係の深かった祭祀関連遺物である土玉はＢ地区６号の１軒でしか出土していない。このことは、土玉を使用しない高坏転用グループが祭祀的には主導権を握ったことの現れかもしれない。

古墳時代後期後半には集落は衰退傾向にあるが、Ⅲb期から継続してＤ地区に竪穴建物が集中する。Ｄ地区では土製専用支脚のみが使われている。高坏そのものの生産が縮小した結果とも考えられるが、埼玉県北部の城北遺跡や上敷免遺跡では高坏転用から小型甕、杯椀類など他の土器を転用するようになるのに対して中田遺跡ではそうした傾向はつかめない。また、土玉



第12図　中田遺跡の支脚利用

	①共通したグループ	②グループでの移動	③一定期間の占地	④共通の祭祀
城北遺跡	○	○	○	○
西富田遺跡群	○	○	△	×
秋山遺跡群	○	○	○	×
砂田前遺跡	○	△	○	×
上敷免遺跡	○	○	○	△
一本木前遺跡	○	○	○	○
桑原遺跡	○	○	×	×
打越遺跡	○	×	×	×
城山遺跡	○	○	△	×
中田遺跡	○	○	○	○

表１　検討結果一覧

の使用が土製専用支脚に伴うという点からも、この時期には高坏転用で土玉・滑石を使わないという集団から、土製専用、土玉を使う集団が中心になったとも考えられる。また少し離れたＥ地区に礫利用の23号があることはグループの違いによる住み分けといえる。

このように中田遺跡では城北遺跡ほど顕著ではないが①～④すべての項目が確認できる。

(11)検討結果

ここでこれまで検討してきた各遺跡の状況を表にしてみよう(表１)。これを見ると、①支脚利用が共通するグループがあることと、②そのグループで移動することは一般的であるといえる。また、③移動に当たってはかつて竪穴建物を構えていた場所、あるいは集落内での建物配置を踏襲した場所を一定期間占地する場合が多いことも分かる。

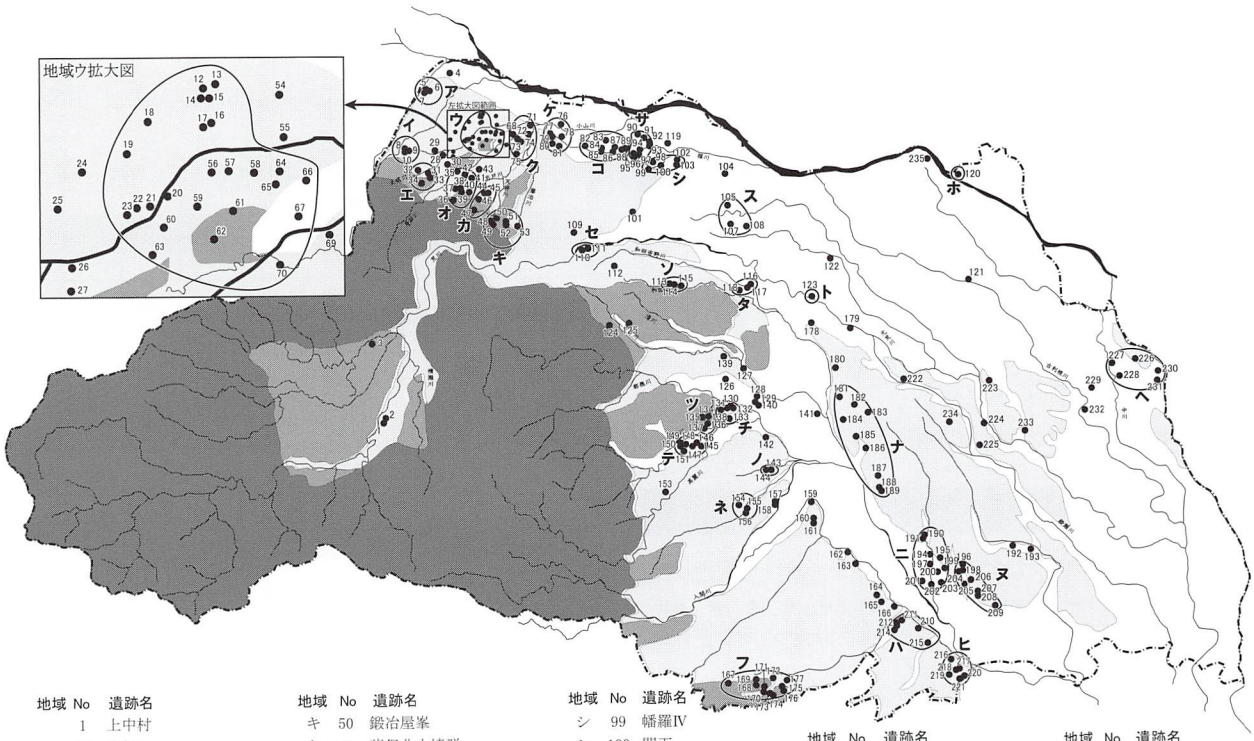
この結果から、支脚の利用が女性的な結びつきを示すものと考えるとすれば、少なくとも５世紀後半から７世紀中葉にかけての埼玉県を中心とした地域の集落では竪穴建物の居住者は母系的つながりを中心に暮らしていた可能性が高いことが推測できる。さらに、一定期間の占地を考えると、そのつながりは２世代から３世代程度は継続するものであった可能性がある。

一方、④祭祀については支脚利用と明確に関係性を持つ遺跡は少ない。このことは祭祀のあり方は支脚利用を越えたまとまり(いくつかの支脚利用グループをまとめた規模)が単位となっていた可能性を示している。この祭祀を共通するまとまりの中心に存在したのが男性か女性かは不明であるが、城北遺跡、一本木遺跡、中田遺跡のように一つの支脚利用と祭祀関連遺物に密接な関係が認められる例があることからは、女性が中心となっていた場合も想定すべきであろう。

4　支脚利用の地域性

各遺跡内では支脚利用をとおして女性的な結びつきを示すと考えられるまとまりが垣間見えたが、この紐帯はどの程度の面的な広がりがあるのかを検討するため今回集めることができた235遺跡のデータを集計した。

私が拾うことができた支脚利用は1530軒である(5)。このうち伴出遺物などから時期が把握できるものは1433軒で、これを分布図に表わしたものが第13図である。図をみると遺跡はある程度まとまって分布することがわかる。このまとまりをアからホの30地域に分けて検討を進める。



地域	No	遺跡名
	1	上中村
	2	中村
	3	銭本堂
	4	原
ア	5	臺
ア	6	若宮台
ア	7	高野谷戸
イ	8	中道
イ	9	西北原
イ	10	南塚原11号墳
	11	往来北
ウ	12	弥藤次
ウ	13	二本松
ウ	14	夏目西
ウ	15	夏目
ウ	16	薬師元屋舗
ウ	17	社具路
ウ	18	諏訪
ウ	19	今井原屋敷
ウ	20	川越田
ウ	21	今井川越田
ウ	22	前田甲
ウ	23	柿島
	24	将監塚・古井戸
	25	塚畠
	26	辻堂
	27	南街道
	28	金佐奈
	29	反り町
	30	女池
エ	31	塩谷下大塚
エ	32	ミカド
エ	33	倉林後
エ	34	高柳原
オ	35	児玉清水
オ	36	秋山東
オ	37	秋山大町
オ	38	秋山大町東
オ	39	秋山諏訪平
オ	40	甑か神社前
オ	41	後山王
オ	42	大久保
	43	樋之口
カ	44	北貝戸
カ	45	畑中
カ	46	宇佐久保
カ	47	白石古墳群
キ	48	川向
	49	森後

地域	No	遺跡名
キ	50	鍛冶屋峯
キ	51	猪俣北古墳群
キ	52	上野
キ	53	前峯
	54	雌濠
	55	笠ヶ谷戸
ウ	56	四方田
ウ	57	下田
ウ	58	七色塚
ウ	59	後張
ウ	60	東牧西分
ウ	61	大久保山
ウ	62	雷電下
ウ	63	浅見境北
ウ	64	久下東
ウ	65	久下前
ウ	66	北堀新田前
ウ	67	東谷
ク	68	西五十子古墳群
ウ	69	古川端
ウ	70	村後
ク	71	東五十子
ク	72	六反田
ク	73	大寄
ク	74	宮西
ク	75	地神祇A
ケ	76	町田西
ケ	77	上宿
ケ	78	砂田前
ケ	79	中宿
ケ	80	熊野
ケ	81	白山
コ	82	堀東
コ	83	高畠
コ	84	皿沼西
コ	85	戸森前
コ	86	八日市
コ	87	上敷免
コ	88	本郷前東
コ	89	新屋敷東
サ	90	砂田
サ	91	柳町
サ	92	城北
サ	93	居立
サ	94	原
サ	95	宮ヶ谷戸
サ	96	堀の内
サ	97	東川端
シ	98	清水上

地域	No	遺跡名
シ	99	幡羅Ⅳ
シ	100	関下
	101	三ヶ尻天王
シ	102	入川
シ	103	一本木前
	104	光屋敷
ス	105	北島
	106	古宮
ス	107	藤之宮
ス	108	小敷田
	109	宮林
セ	110	如意Ⅱ
セ	111	川端
	112	権現堂
ソ	113	本田東台Ⅱ
ソ	114	宮脇
ソ	115	元境内
タ	116	下田町
タ	117	成願
タ	118	箕輪
	119	飯塚南
ホ	120	飯積
	121	水深
	122	小針
ト	123	築道下
	124	越祢
	125	大木前
	126	篭田
	127	観音寺
	128	古凍根岸裏
	129	古吉海道
チ	130	銭塚
チ	131	城敷
チ	132	反町
チ	133	大西
ツ	134	舞台
ツ	135	緑山
ツ	136	大塚原
ツ	137	駒堀
チ	138	大門
	139	東耕地
	140	東町
	141	元宿
	142	附島
ノ	143	前林
ノ	144	上谷
テ	145	下田
テ	146	足洗
テ	147	金井

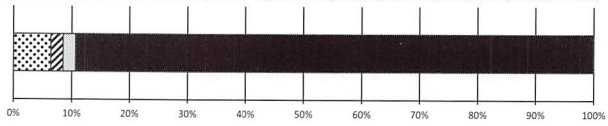
地域	No	遺跡名
テ	148	桑原
テ	149	棚田
テ	150	稲荷前
テ	151	塚の越
テ	152	長岡
	153	矢島
ネ	154	鶴ヶ丘
ネ	155	御伊勢原
ネ	156	上組
	157	山王久保
	158	天王第5
	159	川越城跡
	160	小仙波四丁目
	161	弁天西
	162	川崎
	163	滝
	164	宮脇
	165	打越
	166	氷川前
フ	167	日向
フ	168	海谷
フ	169	宮前
フ	170	山口城跡
フ	171	美園上
フ	172	六ツ家
フ	173	本村
フ	174	畦の前
フ	175	東内手
フ	176	北久米
フ	177	東の上
	178	宮前本田
	179	中三谷
	180	赤台
ナ	181	八重塚
ナ	182	諏訪野
ナ	183	愛宕耕地
ナ	184	東台Ⅰ
ナ	185	八幡耕地
ナ	186	領家・宮下
ナ	187	宿北Ⅱ
ナ	188	稲荷台
ナ	189	畔吉
ニ	190	水判土堀の内
ニ	191	B－105
	192	北宿
	193	馬場東
ニ	194	根切

地域	No	遺跡名
ニ	195	苗塚
ヌ	196	小井戸
ニ	197	宿宮前
ヌ	198	札之辻
ニ	199	上大久保新田
ニ	200	大久保領家片町
ニ	201	堤根
ニ	202	下大久保新田
ヌ	203	本村
ヌ	204	山久保
	205	日向
ヌ	206	大戸本村8号
ヌ	207	別所子野上
ヌ	208	別所西野台
ヌ	209	根岸
	210	大瀬戸東
ハ	211	中野
ハ	212	城山
ハ	213	中道
ハ	214	西原大塚
ハ	215	中道・中道下
ヒ	216	花ノ木
ヒ	217	牛王山
ヒ	218	四ツ木
ヒ	219	妙蓮寺
ヒ	220	吹上
ヒ	221	市場峡・市場上
	222	宮ノ脇
	223	中妻
	224	荒川附
	225	殿の下
ヘ	226	宮の腰
	227	上椿
ヘ	228	下椿
	229	大堀荒田
ヘ	230	貝の内
ヘ	231	陣屋
	232	小渕山下
	233	上野
	234	大山
	235	屋敷裏

第13図　支脚の分布

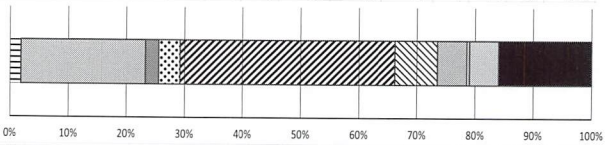
イ）中道地域

	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	高坏	小甕	坏椀	坩	甕	碟	総計
Ⅱ期										14	14
Ⅲ期				2						14	16
Ⅳ期					1					7	8
Ⅴ期				1					1	7	9
小計				3	1				1	42	47



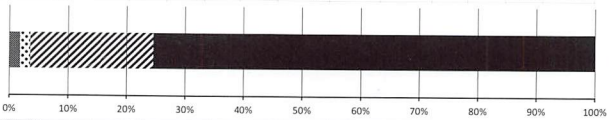
ウ）西富田・四方田地域

	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	高坏	小甕	坏椀	坩	甕	碟	総計
Ⅰ期	1	4	1		56	1	3	1		6	73
Ⅱ期	1	11	3	1	15	9	2		4	8	54
Ⅲ期		5	1	2	6	2	3			6	25
Ⅳ期	1	10		3	4	3			1	7	29
Ⅴ期	1	13				1	3		3	6	27
Ⅵ期		3		1					2	1	7
Ⅶ期		1		1					1	1	4
小計	4	47	5	8	81	16	11	1	11	35	219



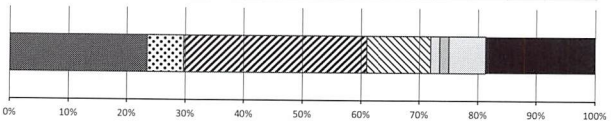
オ）秋山・広木地域

	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	高坏	小甕	坏椀	坩	甕	碟	総計
Ⅰ期					1					5	6
Ⅱ期		1		1	7					21	30
Ⅲ期					4					9	13
Ⅳ期										5	5
Ⅴ期										3	3
小計		1		1	12					43	57



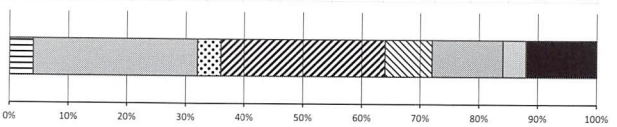
キ）猪俣地域

	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	高坏	小甕	坏椀	坩	甕	碟	総計
Ⅰ期					7				1		8
Ⅱ期		8		1	12	5	1	1		3	31
Ⅲ期		1		1	1				3	1	7
Ⅳ期		1		2		2				3	8
Ⅴ期		3								5	8
Ⅵ期		1									1
Ⅶ期		1									1
小計		15		4	20	7	1	1	4	12	64



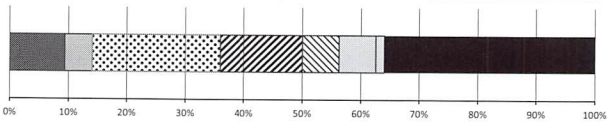
ク）榛沢地域

	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	高坏	小甕	坏椀	坩	甕	碟	総計
Ⅰ期		1			5						6
Ⅱ期	1	4			1	2				1	9
Ⅲ期							1				1
Ⅳ期		1									1
Ⅴ期				1	1						2
Ⅵ期							2		1		3
Ⅶ期		1								2	3
小計	1	7		1	7	2	3		1	3	25



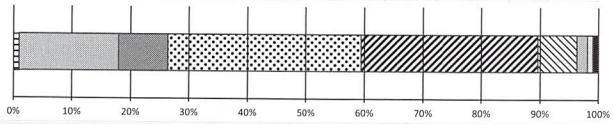
ケ）岡地域

	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	高坏	小甕	坏椀	坩	甕	碟	総計
Ⅱ期		1		3	8			1		1	14
Ⅲ期		3		1		1				7	12
Ⅳ期			1	5	1	2	2		1	9	21
Ⅴ期		1		2		1	1			3	8
Ⅵ期			2	1						1	4
Ⅶ期		1		2						2	5
小計		6	3	14	9	4	4		1	23	64



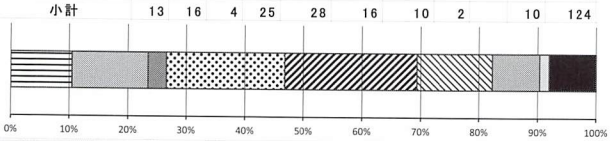
コ）上敷免地域

	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	高坏	小甕	坏椀	坩	甕	碟	総計
Ⅰ期				2	20	1					23
Ⅱ期	1	4	2	19	12	5		1		1	45
Ⅲ期		1	4	3							8
Ⅳ期		3	1	4			1				9
Ⅴ期		7	1	5							13
Ⅵ期		3	1	2		1	1				8
小計	1	18	9	35	32	7	2	1		1	106



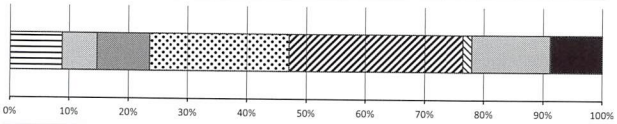
サ）上増田地域

	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	高坏	小甕	坏椀	坩	甕	碟	総計
Ⅰ期				1	7			1			9
Ⅱ期	10	9	1	9	18	11	8	1		6	73
Ⅲ期	3	5	1	9	1	4				1	24
Ⅳ期			1							2	3
Ⅴ期			1	3	1	1	2				8
Ⅵ期				1	1						2
Ⅶ期		2		2						1	5
小計	13	16	4	25	28	16	10	2		10	124



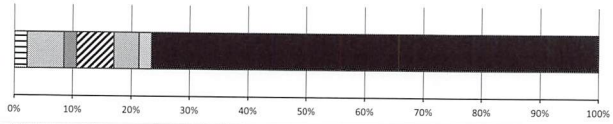
シ）別府地域

	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	高坏	小甕	坏椀	坩	甕	碟	総計
Ⅰ期	1					1	1			1	4
Ⅱ期		3	1	6	19		6			4	39
Ⅲ期	1	1	4	3	1						10
Ⅳ期	4		1	5			2				12
Ⅵ期				1						1	2
Ⅶ期				1							1
小計	6	4	6	16	20	1	9			6	68



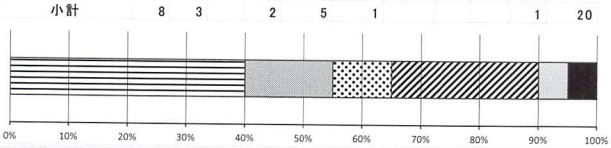
セ）如意地域

	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	高坏	小甕	坏椀	坩	甕	碟	総計
Ⅰ期										2	2
Ⅱ期		1				2				14	17
Ⅲ期			1						1	5	7
Ⅳ期		1				1		1		9	12
Ⅴ期	1	1						1		6	9
小計	1	3	1			3		2	1	36	47



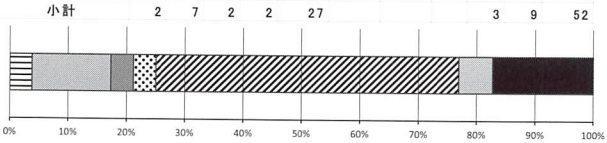
タ）下田町地域

	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	高坏	小甕	坏椀	坩	甕	碟	総計
Ⅰ期										1	1
Ⅱ期	1			1	4						6
Ⅲ期	1	1		1	1						4
Ⅳ期	3	1				1					5
Ⅴ期		1									1
Ⅵ期	2										2
Ⅶ期	1										1
小計	8	3		2	5	1				1	20

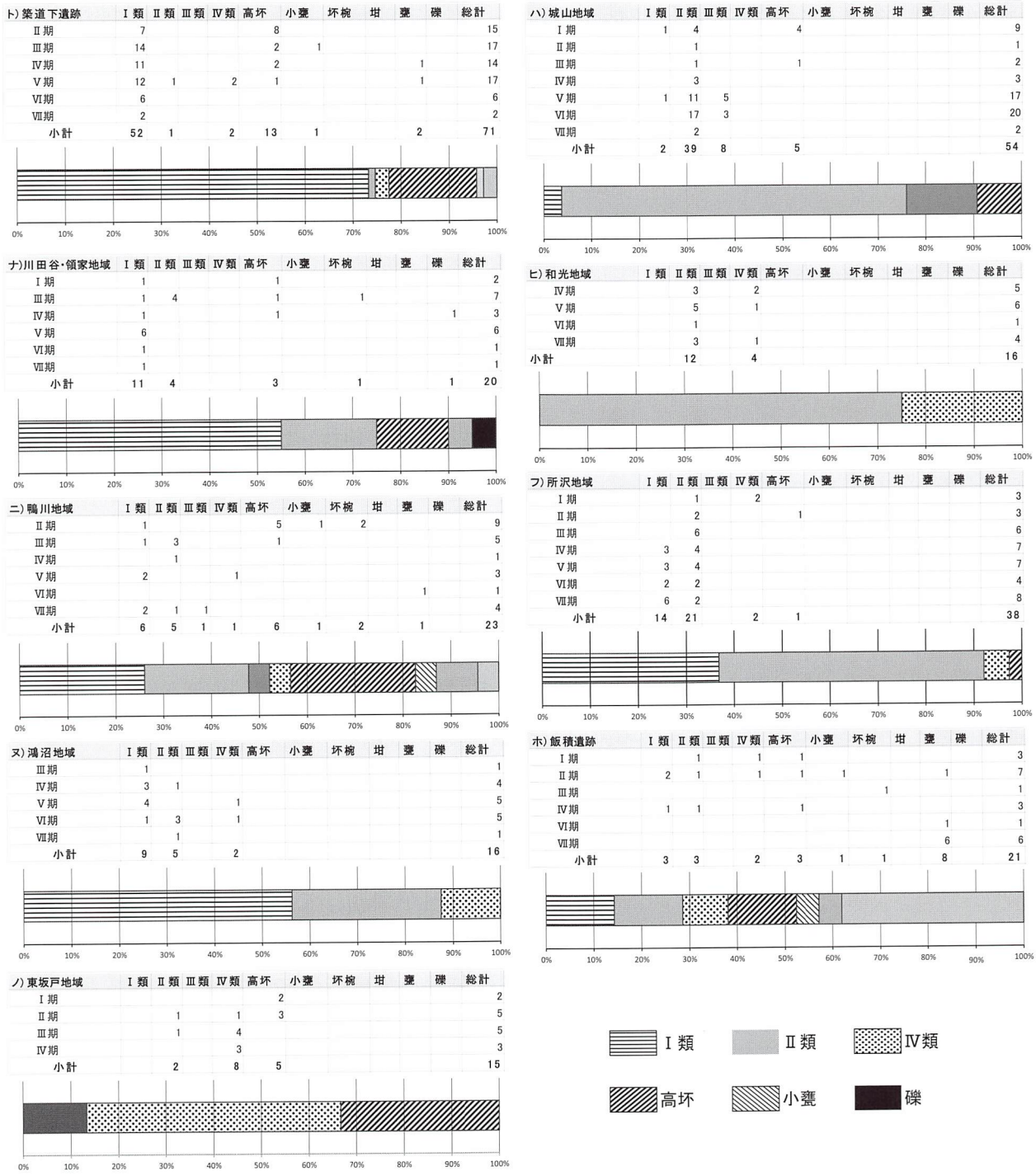


テ）入西地域

	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	高坏	小甕	坏椀	坩	甕	碟	総計
Ⅰ期	1	4			9				1	2	16
Ⅱ期	1	3	1		16						21
Ⅲ期					2						2
Ⅳ期		1		1						1	3
Ⅴ期			1						1	1	3
Ⅵ期										2	2
Ⅶ期				1					1	3	5
小計	2	7	2	2	27				3	9	52



第14図　地域別の支脚利用割合（1）



第15図　地域別の支脚利用割合（2）

地域の呼称は地名や地域内で代表する遺跡名を使用した。また、トの築道下遺跡やホの飯積遺跡は周辺に支脚利用が確認できる遺跡がなく１遺跡で１地域とした。

第14・15図は30の地域の中で支脚利用が15軒以上確認できるものを選んで時期別、利用支脚別に表にしたものである。各表の下にある棒グラフは、地域内の支脚すべてを時期に関係なく利用形態ごとに割合で示している。表に用いている時期の年代観は、Ⅰ期が５世紀中葉から後半、Ⅱ期が５世紀末から６世紀前半、Ⅲ期が６世紀中葉、Ⅳ期が６世紀後半、Ⅴ期が７世紀前半、Ⅵ期が７世紀中葉、Ⅶ期が７世紀後半である。

第14・15図をみると支脚利用に地域性があることが指摘できる。Ⅰ類を最も多く使用する地域は、タ(下田町地域)、ト(築道下遺跡)、ナ(川田谷・領家地域)、ニ(鴨川地域)、ヌ(鴻沼地域)で、これらの地域は元荒川や入間川流域(現荒川)に沿うように分布していることが分かる。特に築道下遺跡では70%以上の割合でⅠ類を使用している。なお、築道下遺跡の下流にある中三谷遺跡(179)や宮前本田遺跡(178)、赤台遺跡(180)では出土数は少ないものの確認できる支脚利用はⅠ類だけである。また、フ(所沢地域)でもⅠ類の出土が多いが、粘土塊をブロック状に積上げるなど入間川流域のⅠ類とは若干様相が異なるものである。

次にⅡ類であるが、土製専用の支脚の中では最も簡単にできることから多くの地域で利用されている。その中で特にⅡ類の占める割合が高いのは、ハ(城山地域)、ヒ(和光地域)、フ(所沢地域)など柳瀬川や新河岸川流域となっている。

Ⅳ類も地域性がある。Ⅳ類は高坏の脚部と同じ技法で製作され、土師器と変わらない仕上がりであるものが多いことから土師器製作技術を持つ者が作り使用していたと考えられる。使用割合が高い地域は、ケ(岡地域)、コ(上敷免地域)、サ(上増田地域)、シ(別府地域)、ノ(東坂戸地域)となる。ケ～シは福川流域の集落群で、この地域は6世紀中葉以降に広域流通品となる有段口縁坏の故地である。またノの東坂戸地域も広域流通品である赤い胎土で赤彩される土器群の生産拠点と考えられる地域である(尾形2008)。ヒの和光地域のようにⅣ類が少数だが出土する地域は、在地色の強い土師器生産が行われていた可能性がある。

転用支脚では小型甕の利用に地域差が認められる。小型甕転用が1軒以下しかない地域は、イ(中道地域)、オ(秋山・広木地域)、セ(如意地域)、タ(下田町地域)、テ(入西地域)、ト(築道下遺跡)、ナ(川田谷・領家地域)、ニ(鴨川地域)、ノ(東坂戸地域)、ヌ(鴻沼地域)、ハ(城山地域)、ヒ(和光地域)、フ(所沢地域)、ホ(飯積遺跡)である。このうちイ、オ、セの地域は周辺から手ごろな礫が入手可能なであることから礫の使用が卓越していて、小型甕に限らず礫以外の支脚利用が極端に少ない地域である。それ以外はホの飯積遺跡を除いて県中央部から南部にかけて分布する地域である。また、この地域の遺跡は小型甕転用に限らず土器を支脚に転用すること自体が県北部の地域に比べて少ないことが分かる。

このように、支脚には年代別にみれば遺跡内でさまざまな種類の利用があるが、古墳時代後期を通してみると小地域を越えた一定のエリア内で共通する傾向があることが分かる。

支脚利用に政治的な背景がないとすればこのエリアは、人々の日常的な営みの中で培われていた民俗文化を共通する範囲であったと推測できる。このように文化を共有するエリアの存在について尾形氏は、土師器の分析を行う中で、遺跡が集中するエリアが多数存在することを示し「こうした地域は、古くから1つの文化を共有するまとまりがあったと考えることができる」と述べている(尾形2008)。尾形氏の示した範囲と支脚利用でくくられる地域は必ずしも一致しないが、古くから文化を共有するまとまりがさまざまなレベルで形成されていたことをうかがわせる。そして古墳時代に政治的な背景をもって"流通"したモノは、すでに存在していたこうした民俗文化的まとまりを利用して供給されていったと推測されるのである(6)。

おわりに

県内の集落遺跡を支脚利用から検討を加え、その共通性を集落内における母系的なつながりと想定したが、実際に竪穴建物内にはどのような構成の人々が暮らしていたのかということを述べるには支脚だけでは難しい。

古代の家族については文献史学に多く研究の蓄積がある(田中禎昭2016)。これらの研究によれば、古代の家族の基本形態は母系的な結びつきからなる対偶婚的小家族とされ、その場合においては、たびたび離婚、再婚を繰り返すことが指摘されている。つまり奈良時代以降の古代においては、妻方居住が一般的であったとの考えが一定の支持を得ているのである。

これに対して考古学では近年、古墳や横穴墓から出土した人骨の分析から親族構造に踏み込む研究が注目されてきた(田中良之2008、清家2010)。特に田中氏の５世紀後半を境に農民層も家父長的原理に変化していくという主張は広く受け入れられつつあるように思える。しかし、古墳などに葬られた人々のまとまりを、簡単に集落内でのまとまりに置き換えることは慎重に行うべきであろう。やはり、人々の日常的な紐帯を検討するのであれば、集落遺跡にも目を向けて検討を加えることが重要と考える。

また、支脚利用でまとまる竪穴建物群が世帯共同体といわれるような経済的な単位であったのかどうかという点も考察を進めるべきところであるが、これについては他の出土遺物や周辺の古墳群との関係など、より多角的な視点からの検討が必要となると考えている。

以上、長々と文を進めてきたが冒頭にも述べたように、これからも古墳時代の集落研究では黒井峯遺跡のような遺跡に注目するのは大切である。しかし、火山灰に埋もれた遺跡が地域的に限定されることや、大多数の集落遺跡の調査では検出不可能な遺構の存在など通常の集落遺跡との比較検討は難しいと言わざるを得ない。やはり毎年数多く調査されている集落遺跡を細かく、そしてさまざまな視点から検討を加えることにもっと傾注すべきではないかと感じている。本論でその一つの可能性を示すことができていれば幸いである。

なお、紙数の関係で参考文献を十分に提示できなかった。ご容赦いただきたい。

《註》

(１)本論で検討した遺跡以上に大規模で支脚利用が多く確認できた遺跡もあるが、遺構間の重複が激しく時期の特定ができない建物や、遺物の帰属が明確でない建物が多い遺跡は検討対象としなかった。

(２)竪穴建物が２、３軒であるものや重複関係にある場合も一つのまとまりとして扱っている。本論で使用している各遺跡の時期区分の幅は15年から30年程度あり、グループとした竪穴遺物すべてが同時存在とは断定できない。提示した建物のまとまりが建替えの結果みえているものであることも十分想定できる。しかし、城北遺跡や中田遺跡のように数軒以上のまとまりを見せる場合もあることや、調査区外の建物の存在を考慮して一つのまとまりとした。なお同時存在で支脚利用が共通する建物は、２軒から多くても５軒以下であろう。

(３)竪穴遺物が同じ場所で継続していなくても、遺跡内での建物の配置関係が踏襲されている場合も含めて占有意識が継続していると考えている。

(４)62地点や64地点は鍛冶や玉造など手工業生産に関わる竪穴建物群であるが、こうした場所でも支脚利用にまとまりが見られることは、手工業生産における男女の役割分担等を考えるきっかけにもなると思われる。

(５)集計に当たって１軒の竪穴建物から複数の支脚が出土している場合は、カマドから出土している支脚利

用を優先し、覆土から複数の支脚が出土した場合は残存率の高い方を集計対象とした。

（6）ここで示したエリアの中には、田中広明氏が土器の供給パターンで第１次再分配や第１次供給集落とした範囲（田中広明1991、1992）や、埴輪の供給域などと整合する可能性があると考えている。

≪参考文献≫

明石一紀　2002　「古代・中世の家族と親族」『日本家族史論集２』吉川弘文館

恋河内昭彦　2008　「第Ⅴ章児玉地方の土製支脚について－第79号住居跡出土の土製専用支脚とその周辺－」『塚畠遺跡Ⅱ－F地点の調査－』本庄市遺跡調査会報告書第22集　本庄市遺跡調査会

大谷　徹　2007　「Ⅶ調査のまとめ　１夏目遺跡群の土器用様相」『夏目／夏目西／弥藤次』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第346集

大村　直　1989　「考古学における家族論の方向」『史館第21号』

大村　直　1989　「集落研究の今後の方向」『シンポジウム房総の古墳文化－古代集落研究の現状－　千葉県立房総風土記の丘年報13』千葉県立房総風土記の丘

大村　直　1990　「古墳時代のムラと家族はどのようなものか」『争点日本の歴史第２巻古代編Ⅰ』

大村　直　1992　「５古代東国社会の基盤」『新版[古代の日本]』第八巻関東

大村　直　1993　「ムラの廃絶・断続・継続」『市原市文化財センター紀要Ⅱ』

小笠原好彦　1989　「古墳時代の竪穴住居集落にみる単位集団の移動」『国立歴史民俗博物館研究報告第22集』

尾形則敏　2008　「古墳時代後期の土師器研究の再認識－（仮称）「入間系土師器の実態と生産地推定を例にして－」『埼玉考古43』　埼玉考古学会

尾形則敏　2012　「第４章調査のまとめ　第１節古墳時代中・後期」『城山遺跡第62地点』志木市の文化財第48集

笹森健一　1990　「竪穴住居の使い方」『古墳時代の研究２　集落と豪族居館』雄山閣

笹森健一　2007　「４古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居」『住まいの考古学』学生社

末木啓介　2011　「集落における集合原理の一視点－埼玉県深谷市城北遺跡のカマド支脚利用の検討から－」『土曜考古第34号』　土曜考古学研究会

杉井　健　1993　「竈の地域性とその背景」『考古学研究第40巻第１号』考古学研究会

杉本一樹　2002　「日本古代家族研究の原状と課題－関口裕子・吉田孝・明石一紀説を中心に－」『日本家族史論集２　家族史の展望』吉川弘文館

清家　章　2010　『古墳時代の埋葬原理と親族構造』大阪大学出版会

関口裕子　2004　『日本古代家族史の研究（上下）』塙書房

高久健二　2012　「Ⅰ集落」『古墳時代研究の現状と課題　下　社会・政治・構造及び生産流通研究』同成社

高群逸枝　1975　『招婿婚の研究１・２』理論社

田中広明　1991　「古墳時代後期の土器生産と集落への供給－有段口縁坏の展開と在地社会の動態－」『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団

田中広明　1992　「Ⅴ考察－古墳時代後期の北武蔵と新屋敷東遺跡」『新屋敷東・本郷前東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第111集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

田中禎昭　2016　「古代家族論の現状と課題」『月刊考古学ジャーナルNo.691』ニューサイエンス社

田中良之　2008　『骨が語る古代の家族　親族と社会』吉川弘文館

都出比呂志　1982　「原始土器と女性－弥生時代の性別分業と婚姻居住規定－」『日本女性史１原始・古代』

都出比呂志　1989　「大開拓と階層差の増大」『古代史復原６古墳時代の王と民衆』講談社

鶴間正昭　2009　「Ⅴ成果と課題２）弥生時代・古墳時代・奈良・平安時代」『中田遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告　第231集　東京都埋蔵文化財センター

土居義夫他　1989　「シンポジウム房総の古墳文化－古代集落研究の現状－」『千葉県立房総風土記の丘年報13』

野村育世　2005　「『日本霊異記』の女と男」『歴史評論No.668』

広瀬和雄　1994　「考古学から見た古代の村落」『岩波講座日本通史３巻　古代２』

平川　南　1996　「里刀自小論－いわき市荒田目条里遺跡第二号木簡から－」『国立歴史民俗博物館研究報告

第66集』
福田信子　1998　「５土製支脚について」『三吉野遺跡群』東京都埋蔵文化財センター調査報告第60集　東京都埋蔵文化財センター
服藤早苗　1996　「６古代の母と子」『日本の古代12　女性の力』中央公論社
三浦佑之　2010　『平城京の家族たち』角川学芸出版
森　浩一　1996　「３古墳にみる女性の社会的地位」『日本の古代12　女性の力』中央公論社

第２図から第13図に使用した遺跡の調査報告書

城北遺跡
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1995　『城北遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第150集
西富田遺跡群
本庄市教育委員会　1985　『夏目遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告書第５集第２分冊
本庄市教育委員会　1987　『社具路遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告書第５集３分冊
本庄市教育委員会　1987　『南大通り線内遺跡発掘調査報告書　本庄市埋蔵文化財調査報告書第９集１分冊
本庄市教育委員会　1989　『南大通り線内遺跡発掘調査報告書　本庄市埋蔵文化財調査報告書第９集２分冊
本庄市教育委員会　1991　『南大通り線内遺跡発掘調査報告書　本庄市埋蔵文化財調査報告書第９集３分冊
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　2007　『夏目／夏目西／弥藤次』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第346集
秋山遺跡群
本庄市遺跡調査会　2010　『秋山大町遺跡-B・C・D・E地点の調査-』本庄市遺跡調査会報告書第36集
本庄市遺跡調査会　2010　『秋山大町東遺跡／秋山諏訪平遺跡-D・E・F地点の調査-』本庄市遺跡調査会報告書第37集
砂田前遺跡
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1991　『樋詰・砂田前』埼玉県埋蔵文化財調査事業団第102集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1998　『砂田前遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団198集
岡部町教育委員会　1998　『岡部条里遺跡』埼玉県大里郡岡部町埋蔵文化財調査報告書第３集
上敷免遺跡
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1993　『上敷免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団第128集
一本木前遺跡
熊谷市教育委員会　2000　『一本木前遺跡』
熊谷市教育委員会　2001　『一本木前遺跡Ⅱ』
熊谷市教育委員会　2002　『一本木前遺跡Ⅲ』
熊谷市教育委員会　2003　『一本木前遺跡Ⅳ』
熊谷市教育委員会　2004　『一本木前遺跡Ⅴ』
桑原遺跡
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1992　『桑原遺跡』）埼玉県埋蔵文化財調査事業団121集
打越遺跡
富士見市教育委員会　1978　『打越遺跡』富士見市文化財調査報告第14集
富士見市教育委員会　1983　『打越遺跡』富士見市文化財調査報告第26集
城山遺跡（図示した範囲内の支脚が出土した地点に限る）
埼玉県志木市遺跡調査会　1988　『城山遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第４集　※第１地点
埼玉県志木市遺跡調査会　2005　『城山遺跡第42地点』志木市遺跡調査会第10集
埼玉県志木市遺跡調査会　2008　『城山遺跡第61地点』志木市遺跡調査会第16集
埼玉県志木市遺跡調査会　2008　『城山遺跡第58・60地点』志木市遺跡調査会第17集
志木市教育委員会　1991　『志木市遺跡群Ⅲ』　志木市の文化財第16集　※第7・9地点
志木市教育委員会　1999　『志木市遺跡群９』　志木市の文化財第27集　※第34地点

志木市教育委員会　2008　『志木市遺跡群16』　志木市の文化財第38集　※第46・55地点
志木市教育委員会　2011　『志木市遺跡群19』　志木市の文化財第45集　※第59地点
志木市教育委員会　2012　『城山遺跡第62地点』志木市の文化財第48集
志木市教育委員会　2013　『城山遺跡第64地点』志木市の文化財第53集
志木市教育委員会　2014　『志木市遺跡群21』志木市の文化財第58集　※第62地点

中田遺跡

八王子市中田遺跡調査会　1966　『中田遺跡　資料編１』
八王子市中田遺跡調査会　1967　『中田遺跡　資料編Ⅱ』
八王子市中田遺跡調査会　1968　『中田遺跡　資料編Ⅲ』
東京都埋蔵文化財センター　2009　『中田遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告　第231集

《事業報告》

企画展「埼玉の古墳１－比企・入間－」の開催について

鈴木秀雄

企画展の開催計画

当館の前身である埼玉県立さきたま資料館は、平成元年度から５年計画で県内に所在する古墳の詳細分布調査を行った。その成果は、平成６年に『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』(1)としてまとめられ、その時の古墳の総数は4,693基であった。その後20年余りの間に分布調査ではよく分からなかった地域でも、発掘調査等により新たな古墳が見つかり、今では5,000基に迫る古墳の存在が明らかになっている。

当館では、こうした調査の蓄積とともに古墳時代研究の進展を受けて、埼玉県内の古墳を紹介する展覧会を計画した。これは資料館時代に行われた詳細分布調査の成果が基本にあって、はじめて出来る当館ならではの企画であると考える。ただし全県的に扱うには施設や予算規模の制約があって難しいので、県内を３つの地域に分け、平成28年度から３年計画で開催することとした。地域分けは、詳細分布調査時の古墳の分布状況から①比企・入間地域、②大里・児玉・秩父地域、③北足立・旧北埼玉・南埼玉・北葛飾地域とした。

そして初年度である今回は、比企・入間地域を取り上げた。この地域は、埼玉県の古墳時代の始まりを語る上で欠かせない古墳や遺跡が複数確認されており、この企画の初回を飾るのに相応しいと考えた。また、県内では最初の発見となった玉作遺跡や、他地域には見られない凝灰岩の丘陵に営まれた大規模な横穴墓群など、この地域の特徴的なところを捉えて紹介する展示とした。

５つのコーナーによる展示構成

比企･入間地域の特徴をわかりやすく紹介するために、展示は次の５つのコーナーで構成した。

１　古墳の出現－前方後方墳から始まった－

最初にこの地域に出現する古墳として前方後方墳を取り上げた。比企地域東部の低地帯には、西側の丘陵部から流れ込む河川により形成された、自然堤防地形が発達している。近年の発掘調査により、そこに古墳時代前期の大規模集落遺跡が見つかり、こうした拠点的な集落の形成を背景として、その周辺の台地とその直下の微高地上に確認される、西暦３・４世紀代に遡る出現期の古墳に焦点を当てた。



展示風景１　古墳の出現－前方後方墳から始まった－

それらはいずれも前方後方墳であり、最古級とみられる東松山市根岸神社裏古墳では、弥生時代後期「吉ケ谷式」系の姿をとどめた壺が出土している。また吉見町三ノ耕地遺跡１～３号墳と東松山市山の根

古墳は、遺構の配置や出土遺物から連続的に築かれたと推定され、墳墓造営の動きを具体的に伝えている。丘陵部に近い台地縁辺には東松山市諏訪山29号墳があり、静岡県駿河地域の古墳時代前期「大廓式」系の壺が出土している。

入間地域では、方墳11基と前方後方墳１基で構成されるふじみ野市権現山古墳群（県史跡）と、時間的にやや遅れるものの、川越市三変稲荷神社古墳から出土した埴輪壺を展示した。

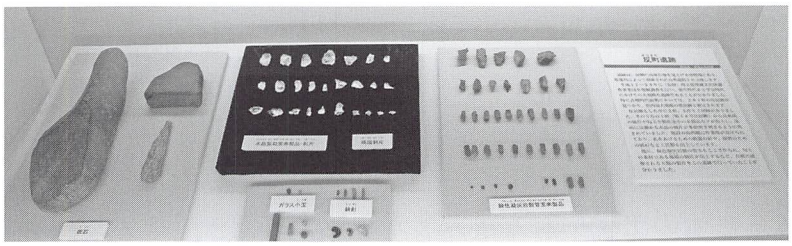
＜展示資料＞

・東松山市根岸稲荷神社古墳出土土師器（吉ヶ谷式系壺・土師器壺）
・吉見町三ノ耕地遺跡１・２号墳出土土師器（有段口縁壺・高坏・小型壺）
・東松山市山の根古墳出土土師器（高坏）
・東松山市諏訪山29号墳出土土師器（有段口縁壺・大郭式系壺・高坏・器台）
・ふじみ野市権現山古墳群２号墳出土土師器（壺・高坏）
・川越市三変稲荷神社古墳出土土師器（有段口縁壺・単口縁壺）

2　玉作りのムラ

玉は鏡や剣と共に、代表的な古墳への副葬品である。首長が民を治める上で欠かせない政治的、宗教的なシンボルとされてきた。

高坂台地の北側、都幾川によって形成された自然堤防上に立地する古墳時代前期の大規模集落跡で見つかった玉作りの工房跡からは、施設の南西隅に作業場が設けられ、玉の材料となる原石やその破片、孔をあけるための鉄製の針や、研磨のための砥石など工具類が出土した。ここでは緑色凝灰岩製の管玉に加えて、水晶製、瑪瑙製の勾玉も製作していたことが確認されている。こうした遺物、遺構の状況を調べると、集落の中でわずかな人だけが玉作りに携わっていたこと、そうした人達は短期間だけ玉作りを行った後、突如として姿を消してしまったことが窺え、集団内の手工業生産のあり方に貴重な資料を提供している。さらに当該遺跡から東へ約２キロメートル離れた地点で見つかった川島町正直遺跡からの出土品を比較資料として展示した。



展示風景２　玉作りのムラ

＜展示資料＞

・東松山市反町遺跡48号住居跡出土勾玉未製品・管玉未製品・砥石・鉄針・勾玉・管玉
・川島町正直遺跡出土釧未製品・管玉未製品

3　鏡と埴輪

祭祀が政治の中で特に重要視されていた古墳時代前期には、畿内王権にとって鏡を入手・生産し、各地の首長層に分配することは地方支配に欠かせないものであり、また地域の首長層にとっても、鏡は畿内王権との結びつきを地域社会に示すものとして特別な意味をもっていた。

前期古墳が多い比企・入間地域からは、高坂古墳群の三角縁神獣鏡など複数の鏡が出土しており、この地域の首長層が畿内王権との関係を背景に地域支配を進めていったことがわかる。

古墳に円筒埴輪を立てることも、畿内から地方に伝わってきた。東松山市雷電山古墳からは

県内で最も古い５世紀初頭の円筒埴輪が出土しており、この埴輪は在地性の強い特異な形態で、土師器の製作技法によりつくられている。

鏡や特異な形の埴輪からは、地域の首長層が畿内の先進的な文物を積極的に取り入れようとしていた姿がみえてくる。加えて今回は、この地域に目立って出土する鳥形埴輪を集め、岩鼻１号墳出土の「水鳥を冠した人物埴輪」を象徴的に展示した。



展示風景３　鏡と埴輪

＜展示資料＞

・東松山市高坂古墳群出土三角縁神獣鏡
・東松山市高坂８号墳出土捩文鏡・水晶製勾玉・管玉
・東松山市伝柏崎天神山古墳出土内行花文鏡
・川越市三変稲荷神社古墳出土鼉龍鏡
・東松山市雷電山古墳出土円筒埴輪
・東松山市岩鼻１号墳出土水鳥を冠した人物埴輪
・東松山市柏崎権現塚古墳出土水鳥形埴輪
・東松山市下道添１号噴出度鳥形埴輪
・滑川町月輪古墳群５号墳出土鶏形埴輪

4　群集墳に葬られた人々ー武器と馬具ー

古墳時代後期の変化について、群集墳が築造され始めたことを取り上げた。

地域開発の進行により、集落の数が急増し、経済的・政治的に成長した新たな勢力が台頭してくる。こうした社会の変化は古墳の築造にも影響し、直径10m～20m程度の小規模な円墳が密集してつくられるようになる。

比企・入間地域では、比企丘陵や越辺川流域などに数多くの群集墳が営まれるようになり、そうした群集墳を構成する古墳からは、大刀・鏃・耳飾り・玉類を中心とした副葬品が出土している。新町９号墳や川角15号墳は、昭和30年代に一度調査が行われた古墳で、平成になってからの再調査で多量の鉄鏃が新たに出土したり、墳丘の葺石や周溝が再確認された。



展示風景４　群集墳に葬られた人々ー武器と馬具ー

また、古凍古墳群では古墳に近接して馬が埋葬された土坑が見つかっており、馬具(県指定)がまとまって出土した。被葬者が所有した馬の殉葬墓であり、馬を飼育・管理していた集団の存在を示す貴重な資料である。

＜展示資料＞

・東松山市古凍古墳群内土坑 出土鉄製壺鐙・馬具
・坂戸市新町９号墳出土鉄鏃・直刀

・毛呂山町川角15号墳出土大刀・鉄鏃・漆塗土玉・耳環・長頸壺

5　古墳の終末と横穴墓群

７世紀になると各地の首長墓は前方後円墳から方墳や大型の円墳へと変わって行く。比企地方の小川町穴八幡古墳は、このころの代表的な方墳である。さらに７世紀の後半には、上円下方墳や八角形墳など新たな形の首長墓が出現する。川越市山王塚古墳は、県内でも数少ない上円下方墳の一つである。

ちょうど同じころ、新たな墓制である横穴墓の造営が比企・入間地域で盛行する。

横穴墓は丘陵や台地の斜面などに横穴を掘り墓とするもので、県内では15箇所確認されているが、そのうち12箇所が比企･入間地域に分布する。

横穴墓の被葬者と古墳に埋葬された人の違いについてはよくわかっていないが、横穴墓の副葬品は同時期の古墳と同等なものであることから、その被葬者も地域の有力者層であると考えられている。

県内の古墳や横穴墓は７世紀代でほぼ築造が終わり、仏教が信仰の基軸となる新しい時代へ移って行く。



展示風景５　古墳の終末と横穴墓群

＜展示資料＞

・所沢市滝之城横穴墓群出土平瓶・小玉・耳環

・吉見町吉見百穴出土大刀・鉄鏃・耳環・勾玉・管玉・須恵器

【企画展開催データ】

名　　称：平成28年度企画展「埼玉の古墳１－比企・入間－」

会　　場：さきたま史跡の博物館企画展示室

開催期間：平成28年９月17日(土)～11月14日(月)

会期日数：53日間(休館日９月26日，10月３・17・24・31日，11月７日)

入館者数：15,636人

資料点数：138点

関連事業：(1)さきたま講座

①10月８日(土)　13時30分から15時30分

演題：「東松山市高坂の三角縁神獣鏡と埼玉の鏡」

講師：上野祥史氏(国立歴史民俗博物館准教授)

②11月５日(土)　13時30分から15時30分

演題：東松山市権現塚古墳の水鳥埴輪－埴輪祭祀体系の中の『水鳥』－」

講師：利根川章彦氏(日本考古学協会会員)

(2)学芸員による展示解説

毎週日曜日14時から　実施日数：８日間　参加者数：89人

《註》

(1)埼玉県立さきたま資料館　1994　『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』埼玉県教育委員会

中学校社会科歴史的分野の学習におけるさきたま史跡の博物館の役割

向井隆盛

1　問題の所在

毎年、さきたま史跡の博物館には多くの義務教育段階の子供たちが訪れる。これは、小学校の第６学年の教科書に、当館に展示してある国宝「金錯銘鉄剣」が掲載されていることによる。また、第４学年における埼玉県の特色の学習においても、埼玉古墳群が事例地として選択されることが多いこともある。一方、当館を訪れる中学生の数は小学生と比べて圧倒的に少ない(1)。

学習指導要領の小学校社会科の学習内容と中学校社会科歴史的分野の学習内容を比較してみると、どちらも優れた文化遺産を教材として取り上げるようになっている。異なる点は、小学校では優れた文化遺産について興味・関心と理解を深めることを目標としているのに対して、中学校では、「我が国の歴史の大きな流れ」を「各時代の特色を踏まえて理解させる」ことが目標となっている。優れた文化遺産は、その具体的な理解のための教材として扱われている。

本年度、県内の中学校では、生徒が夏休みなどを利用して当館を訪れ、学習内容のより具体的な理解を図る取り組みがなされていた。また、近隣の中学校からは、中学生向けの出前授業も充実させて欲しいという要望が出されるようになってきている。中学校の教科書にも埼玉古墳群や金錯銘鉄剣は取り上げられており、当館は、中学校社会科の学習においても、一層重要な役割を果たすことができるはずである。これまで、当館においては、博学連携を教育普及の１つの柱に据えて、学校向け学習プログラムの開発に力を注いできた。しかし、小学校と中学校の学習内容や学習方法の違いに着目するという視点からの開発は、まだ不十分である。そこで本稿では、昨年の小学校社会科の教科書分析に続き、中学校社会科歴史的分野の教科書分析を行うこととした。当館が、中学生の学習においても十分に教育力を発揮できるよう、教育普及事業改善の糸口をつかむことが目的である。

2　さきたま史跡の博物館の課題

中学校向けの学習プログラムを開発するためには、まず、主たる教材である教科書の掲載内容を知ることである。私は、３年間当館に勤務する中で、「学校では、歴史をどう教えているのか」「今の教科書には何が載っているのか」という問いかけを学芸員の方から受けることが多かった。博学連携の事業を今後一層推進していくためには、学校教育の教科書の記述内容を熟知することが前提となる。教科書は、目的をもって児童・生徒に内容の理解を求めるものであり、ストーリー性をもっている。例えば、当館で展示している金錯銘鉄剣は、大和政権の勢力の拡大というストーリー性のもとに掲載されている。そうしたストーリー性を読み取ることを試みながら、本稿では教科書掲載の資料と文言をつぎのように抽出し整理した。

3　中学校社会科歴史分野における教科書掲載内容の分析

中学校社会科歴史的分野の学習内容の構成は、小学校における学習内容を踏まえて、時代区分や時代の移り変わりを理解することを大きな柱としている。また、現行の中学校学習指導要領においては、歴史について考察する力や説明する力を育てるために、各時代の特色や時代の転換に関わる内容の定着が重視されている。教科書に掲載される学習内容は、この方針のもとに作成される教育課程に対応するものであることが前提となっている。また、当館の研究対象と最もかかわりの深い学習内容「大和朝廷による統一と東アジアのかかわり」においては、「古墳の広まりに触れる」ことと、「大陸から移住してきた人々の我が国の社会に果たした役割に気付かせる」ことが条件として示されている。

(1)教科書掲載資料の抽出と分類

東京書籍、帝国書院、清水書院、教育出版、日本文教出版の教科書の古代を扱った部分より、資料を抽出した(2)。その後、5社の掲載資料を「代表的な古墳やつくり」「東アジア情勢」「大和政権の広がり」「鉄の普及」「渡来人」の5つに分類し、表1に示した。この分類の枠組みは先行研究による根拠に基づいたものではないが、この内容を基に時代の特色を掴むという意図を、私が教科書から読み取ったものである。

代表的な古墳として大仙古墳が取り上げられているのは、小学校の教科書と共通している。これは小学校の学習を想起させ、時代の特色を端的に捉えるための工夫である。また、古墳の建造当時の様子がわかるよう森将軍塚や五色塚、稲荷山などの古墳を合わせて掲載している。

「東アジア情勢」は、どの教科書にも地図が掲載されている。鉄の普及や渡来人に関する資料と合わせて、東アジアの広がりの中で我が国の歴史を捉えられるよう配慮されている。「鉄の普及」については、東アジアのつながりの中で我が国の歴史を捉えるのに適した教材であることから、近年大きく取り上げられている。本年度も埼玉大学附属中学校で行われた授業に、佐々島担当課長が「鉄」の観点からゲストティーチャーとして招かれている。渡来人がもたらした技術として、須恵器を取り上げている点は、小学校と共通している。

前方後円墳の分布と銀象嵌銘太刀・金錯銘鉄剣の出土から大和政権の勢力の拡大を捉えさせる仕組みは、小学校と共通している。教科書によっては出雲や筑紫などの対抗勢力の存在に注目させることで、大和政権の拡大という事象を引きだそうという意図も見られる。唯一、前方後円墳の分布図を掲載していない帝国書院の教科書は、鉄の分布図を載せ、本文中で大和政権との結びつきによって地方の豪族が前方後円墳を造ることができるようになったり、鉄製品の製作技術を手に入れたりしたのではないかという説を紹介している。

中学校社会科歴史的分野の教科書は、その掲載資料の多くが小学校社会科の教科書と類似している。ただし、多面的な見方を一層重視する中学校段階ならではの特徴も見られる。例えば、大和政権の広がりは、技術の伝播という側面もある。鉄の普及を教材として取り上げていく意義は、そこにあると考えられる。

表1　中学校社会科歴史的分野教科書掲載の資料

	東京書籍	帝国書院	清水書院	教育出版	日本文教出版
代表的な古墳やつくり	写 大仙古墳 （仁徳陵古墳） 写 五色塚古墳 写 武人埴輪 写 古墳の石室の壁にえがかれた絵 （珍敷塚古墳）	写 大仙古墳 （仁徳陵古墳）	写 大山古墳 写 復元された古墳 （森将軍塚） 写 埴輪 家 子を背負う女性	写 大仙古墳 写つくられた当時のすがたに復元された五色塚古墳と，絵 前方後円墳のしくみ 写 古墳から出土した埴輪 武人	写 大仙(仁徳陵)古墳 写 稲荷山古墳 絵 前方後円墳の断面図 写 武人の埴輪 写 銅鏡 写 石室の壁画 （虎塚古墳）
東アジア情勢	図 5世紀の東アジア	図 5世紀の東アジア	図 5世紀の東アジア		図 5世紀ごろの東アジア
大和政権の広がり	図 前方後円墳の分布 文 倭王武の手紙 写 ワカタケル大王(武)の名を刻んだ鉄刀と鉄剣 銀象嵌銘太刀 金錯銘鉄剣	写 稲荷山古墳出土の鉄剣(金錯銘鉄剣) 江田船山古墳出土の鉄刀(銀象嵌銘太刀)	図 大型古墳の分布 写「ワカタケル」大王の名前が記された２つの刀 銀象嵌銘太刀 金錯銘鉄剣	図 主な前方後円墳の分布 写 稲荷山古墳出土の鉄剣 写 江田船山古墳出土の鉄刀	図 前方後円墳の分布 写 出土した鉄剣 金錯銘鉄剣

鉄の普及	写 日本の古墳から出土した鉄ののべ板	写 奈良県の古墳から出土した鉄ののべ板 鉄製のかぶととよろい		写 古墳から出土した鉄ののべ板 写 鉄製のよろい	絵 鉄製の刃をつけた農具の復元図
渡来人	写 須恵器	写 須恵器 絵 のぼりがま		写 須恵器 写 古墳から出土した冠 日本の冠 新羅の冠	写 須恵器
発展		古墳からわかる当時のようす		地域の遺跡や古墳を訪ねて	

（２）教科書掲載の太字語句の抽出

古墳時代の本文に示された学習内容を抽出し、大きく「大和政権の拡大」と「東アジアとのかかわり」の２つに分けて表２にまとめた。

「大和政権の拡大」においては、大和政権（ヤマト政権）、前方後円墳、古墳時代、大王などの基本的な語句は、５社とも共通である。大王の読みについては「だいおう」「おおきみ」と分かれたり、併記してあったりと統一されていない。東京書籍においては、「古墳文化」という記載があるが、これは伝統や文化の教育を重視する昨今の流れを受けたものであると考えられる。学習指導要領解説社会編においても、文化の具体的理解のために博物館を利用することを進めている(3)。

「東アジアとのかかわり」においては、「高句麗・百済・新羅・伽耶地域（任那）」などの地名と「渡来人」の語句はほぼ共通している。しかし、地名についての読みは統一されていない。

教科書に太字で示されている語句は、知識内容としての基礎的基本的な学習内容であって、全ての生徒が理解すべき言葉であると理解される。共通する言葉が多いのは、そのためである。掲載資料と比べると鉄の普及に関する語句が見られないのは、鉄の普及は教材の一つに過ぎないためである。つまり、鉄の普及の部分については当館独自の教材を用意し、特色を発揮することも可能だといえる。

表2　教科書本文中の太字語句

	東京書籍	帝国書院	清水書院	教育出版	日本文教出版
大和政権の拡大	**大和政権の発展** 大和政権 古墳 古墳時代 大王 **古墳文化**	**古墳の出現** 前方後円墳 豪族 古墳時代 **ヤマト王権の支配の拡大** 大王	**ヤマト王権の支配** 前方後円墳 古墳 ヤマト王権 大王 豪族	**古墳の出現** 古墳 豪族 埴輪 古墳時代 **大和政権の成立と豪族** 大王 大和政権	**巨大な墓とヤマト王権** 古墳 ヤマト王権 **大王・豪族と人々の生活** 大王 **古墳時代**
東アジアとのかかわり	**中国・朝鮮半島との交流** 百済　新羅　伽耶 地域(任那) **大陸文化を伝えた渡来人** 渡来人　朝廷	**倭国と朝鮮半島の関係** 高句麗　百済　新羅 ヤマト王権 **渡来人** 渡来人	**東アジアの動乱** 渡来人 漢字 仏教	**朝鮮半島・中国との交流** **渡来人の伝えた文化** 渡来人	**中国や朝鮮との交流と渡来人** 高句麗　百済　新羅 渡来人　須恵器

4　埼玉古墳群及びさきたま史跡の博物館展示資料と中学校社会科歴史的分野の接点

中学校社会科歴史的分野の教科書に掲載された学習内容を整理すると、埼玉古墳群や当館展示資料との接点が見えてくる。その中の幾つかをここで指摘しておく。

代表的な古墳や古墳のつくりについては、教科書にも掲載のある稲荷山古墳に加え、将軍山古墳を積極的に取り上げることが望ましい。古墳の仕組みを知るという点からも、将軍山古墳展示館を有効利用した中学生向けの学習プログラムが考えられる。稲荷山古墳との比較において、古墳の造形について積極的な思考を促す学習活動が想定される。

東アジアとのかかわりについては、特に馬冑や蛇行状鉄器、ガラス玉などを取り上げた学習プログラムが考えられる。鉄や馬などの視点からの教材開発はこれまでにもなされているが、ガラスというアプローチも有効である。幸い、埼玉県内の他の古墳からもガラス玉の出土は豊富にある。また、県北部では、完全な形でのガラス小玉の鋳型が出土している。これらも合わせて教材化し、当館の行っているガラス玉づくりの体験学習と合わせてパッケージ型の学習プログラムとすることも考えられる。

金錯銘鉄剣は、大和政権の拡大の証拠として取り上げられることが多い。実物を保管し、その研究を行っている当館だからこそ、そのストーリー性に対して、批判的なアプローチを行う学習プログラムを提供することができる。社会科においては、児童・生徒の批判的な思考を育てる場面を大切にすることがよく主張される。しかし、歴史的分野の学習においては、なかなかその機会をもつことは難しい。しかし、いろいろな可能性を有する金錯銘鉄剣は、そうした批判的思考を促す教材として適している。それこそ、考古学者の思考を追体験することであり、問題解決的な学習における児童・生徒の基本的な思考過程を経験させることとなる。

5　さきたま史跡の博物館の今後の課題

本年度は、中学校５年次研修を新たに受け入れ、中学校社会科の授業展開について考える場を設けることができた。来年度も中学校５年次研修が予定されており、そこでは、具体的な学習プログラムの提案ができるように準備を進めておくことが必要である。小中初任者研修、高校５年次研修とは異なり、中学校５年次研修は、当館が学校教育における歴史学習と積極的な関わりをもつ橋頭堡となり得る。また、教員向け研修「授業に使える考古学」においても、学習プログラムの開発が不可欠である。この２つの事業を車の両輪として、開発・提案のサイクルを確立することが、当館の課題である。

《註》

（１）平成27年度は小学生の利用者34,420人に対し中学生の利用者2,700人であった。

（２）平成28年度中学校教科書地区別採択一覧（埼玉県教科書供給所）からは、公立中学校においては東京書籍の教科書を採択するところが多いことがわかる。今回は分析していないが、私立の学校等においては、学び舎や育鵬社の教科書も採択されており、今後分析の対象とする。

（３）文部科学省『中学校学習指導要領解説社会編』pp90-91内容の取扱い３（１）カ

《引用文献》

文部科学省『中学校学習指導要領解説社会編』日本文教出版　平成20年９月25日
文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』東洋館出版社　平成20年８月31日
坂上康俊・戸波江二・矢ケ崎典隆他著『新編新しい社会　歴史』東京書籍　平成28年２月10日
深谷克己他『中学社会　歴史　未来をひらく』教育出版　平成28年１月20日
黒田日出男監修『社会科　中学生の歴史』帝国書院　平成28年１月20日
藤井譲治・林敏彦他著『中学社会　歴史的分野』日本文教出版　平成28年２月10日
三谷博他著『中学　歴史　日本の歴史と世界』清水書院　平成28年２月15日
堀内一男・大杉昭英・伊藤純郎編著『中学校教育課程講座　社会』ぎょうせい　平成21年１月10日

博物館における学芸員育成の実践

―博物館実習と子供講座からの考察―

石田智美・頓所詩織

はじめに

歴史・民俗系の博物館では、将来に渡って文化財保護・活用に取り組む学芸員を育てることに力を注いでいる。私たちが、過去から受け継いだ文化財を未来の人々に手渡すためには、それを担う学芸員を初めとする専門職員の存在が不可欠である。また、そうした文化財保護に興味関心をもつ子供たちの育成も、文化財保護・活用の土壌を育てる上で、大切なことである。このような、将来に渡る文化財の保護・活用を念頭に置きながら、本稿では、当館の博物館実習の取組と夏休み子供講座の取組を紹介する。

1　さきたま史跡の博物館における「博物館実習」の実践

多くの博物館では、学芸員資格の取得に向けて学ぶ学生を対象として、「博物館実習」を行っている。文部科学省が提示した「博物館実習ガイドライン」に、博物館実習のねらいが次のように示されている。

> ○博物館実習は、学芸員養成教育において学んだ知識・技術や理論を生かして、学内及び館園での実体験や実技を通して、学芸員として必要とされる知識・技術等の基礎･基本を修得することを目標とする。
> ○「館園実習」においては、学内実習で学んだ内容を博物館の現場で実際に経験することで、博物館の理念や設置目的、業務の流れ等に対する理解を深めると同時に、博物館資料の取り扱いや教育普及活動、来館者対応等実務の一端を担うことにより、学芸員としての責任感や社会意識を身に付け、博物館で働く心構えを涵養することを目的とする。

※その他、「学内実習」と「館園実習」の実務実習をとおして、早くから博物館の実務的業務に慣れておくことが望ましい旨が示されている。

「学芸員として必要とされる知識・技術等の基礎･基本」の修得、「博物館の理念や設置目的、業務の流れ等に対する理解」、「学芸員としての責任感や社会意識」「博物館で働く心構え」の涵養が博物館実習の柱である。

当館においても、毎年、実習を希望する学生を受け入れており、平成28年度は、９名の参加者があった。事前に館内で検討し、博物館実習７日間のカリキュラムを作成した(表１)。当館の組織は、総務・公園管理、史跡整備、資料展示、広報・学習支援の４担当から成り立っている。それぞれの担当が、カリキュラムを分担して指導を行うことで、実習生が博物館業務の全体像をつかめるように工夫してある(表２)。

また、全体をとおして、「学芸員としての責任感や社会意識」「博物館で働く心構え」の涵養を図ることとしている。涵養とは、岩に水が染み込むようなことであって、責任感、社会意識、心構えは、「これがそうなんですよ」といって実習生に手渡せる類のものではない。しかし、これは博物館実習に参加することでしか身に着けることが難しい内容であり、受け入れる当館としては、意識的にかつ計画的に実習生の内面も育てることができるよう指導してきた。

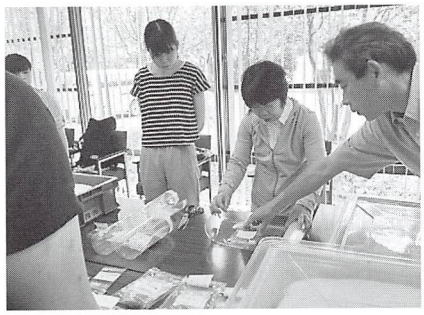
表1　平成28年度さきたま史跡の博物館実習日程(全7日間)

	午前(9：00～12：00)	午後(13：00～16：00)
1日目 (7/20)	○オリエンテーション・館内見学 ○開講式 ○博物館の管理運営に関する講義 内容：博物館の運営について【総務】 内容：公園の管理について【公園】	○教育普及事業に関する講義と実習① 内容：博物館の教育普及事業の意義 さきたま古代体験事業への参加 (まが玉づくり)【学習】
2日目 (7/21)	○教育普及事業に関する実習② 内容：夏休み子供体験事業への参加 (縄文土器づくり)【学習】	○教育普及事業に関する実習③ 内容：夏休み子供体験事業への参加 (縄文土器づくり)【学習】
3日目 (7/22)	○史跡整備事業に関する実習① 内容：国指定史跡埼玉古墳群の現状と 整備の課題研究【史跡】	○教育普及事業に関する実習④ 内容：夏休み子供体験事業への参加 (土偶づくり)【学習】
4日目 (8/3)	○資料保存展示事業に関する実習① 内容：資料の保存展示に関する講義 収蔵庫の整理作業【資料】	○教育普及事業に関する実習⑤ 内容：夏休み子供体験事業への参加 (土鈴・土笛づくり)【学習】
5日目 (8/4)	○史跡整備事業に関する実習② 内容：出土遺物の取扱いについて 【史跡】	○史跡整備事業に関する実習③ 内容：出土遺物の取扱いについて【史跡】 ○教育普及事業に関する実習⑥ 内容：夏休み子供体験事業への参加 (貝輪)【学習】
6日目 (8/5)	○資料保存展示事業に関する実習② 内容：遺物の保存・管理について 【資料】	○資料保存展示事業に関する実習③ 内容：遺物の保存・管理について【資料】 ○実習の振り返り
7日目 (8/20)	○資料保存展示事業に関する実習④ 内容：遺物の保存・管理について 【資料】	○教育普及事業に関する実習⑦ 内容：夏休み子供講座運営補助【学習】 ○閉講式

※【　】は担当を示している。【総務】・【公園】総務・公園管理担当【史跡】史跡整備担当
【資料】資料展示担当【学習】広報・学習支援担当

表２　担当別指導の概要

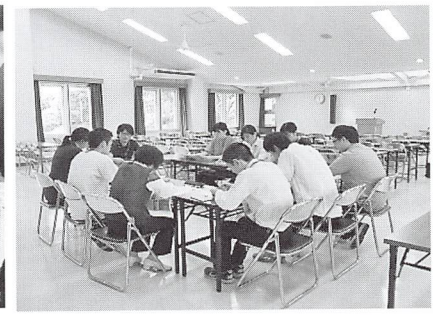
(1)史跡整備事業に関すること 史跡整備担当	国指定史跡埼玉古墳群の調査と整備について講義・実習を行った。特に、実習では、史跡を歩き、その課題を捉えて研究、発表を行う実践的な指導をした。
(2)資料保存展示事業に関すること 資料展示担当	博物館で資料を保存・管理する方法と実際について講義・実習を行った。埴輪の梱包の仕方や展示室の展示の仕方など技術修得も含め実践的な指導をした。
(3)教育普及事業に関すること 広報・学習支援担当	博物館の教育普及事業の理念と実際について指導した。実習においては、さきたま古代体験「まが玉づくり」や夏休み子供体験の補助として、利用者に接した。
(4)博物館の運営に関すること 総務・公園管理担当	博物館施設の管理と諸業務の運営について、人事、予算などの面も含め、日々の業務に即した指導を行った。
(5)公園管理に関すること 総務・公園管理担当	さきたま古墳公園の管理・活用について講義を行った。実際に公園内を視察するなど、現場での指導も行った。



遺物の保存作業



体験事業の補助



博物館の管理運営の講義

各日の実習終了時に、その日一日の実習内容を振り返ってノートに記録する時間を設けた。ノートは、毎日回収し、それぞれの指導を担当した職員から個別の指導を記して返却した。この毎日の振り返りと指導は、実習生それぞれの内面を育てる貴重な機会である。例えば、実習生の記述には「文化財をつぎの世代に引き継ぐことの大切さがわかった」「史跡は調査するだけでなく、活用の観点から整備することも必要なのだと実感した」などの感想がみられた。「博物館利用者への接し方が段々わかってきた」「利用者の笑顔が見られて、感動した」という感想に対しては、「博物館職員としての自覚が持てましたね」「今後の業務にもぜひ生かしてください」などの励ましの言葉をかけた。

２　博物館実習における学芸員の育成

博物館実習の６日目には、実習全体を振り返る場を設けた。実習生一人ひとりに博物館実習を振り返らせることで、その内面をしっかりと育てることがねらいである。実習生は、自分と真摯に向き合い、つぎのような感想が挙げられた。

・地道な活動が多く驚いた。そうした活動が博物館の運営を支えていることを強く感じた。
・子ども達の笑顔であふれ、社会教育の場として地域に貢献していることを改めて感じた。
・授業を受けただけでは分からない実際の仕事を目にし、様々なものを学ぶことができた。
・資料を後世に残すのに、ここまで慎重に作業を行っていると知り、驚いた。
・古墳時代のことに興味を持ってもらうためには、事業の準備からしっかりと行っていくことが大切だと知った。

これらの感想からは、「学芸員としての責任感や社会意識」が芽生え、「博物館で働く心構え」ができつつあることがうかがわれる。当館のカリキュラムは、博物館全体の業務を捉えられるように工夫したが、多岐にわたる実習生の感想がその成果をよく表している。将来を担う実習生の内面を育てることは、容易なことではない。しかし、博物館実習をとおして、その一端に寄与することができたのではないかと自負している。

3　さきたま史跡の博物館における「夏休み子供講座」の実践

本年度、さきたま史跡の博物館で行った夏休み子供講座の概要は、別表の通りである(表3)。本講座は小学生を対象としているため、小学生が理解しやすい言葉選び・簡潔で分かりやすいポイントを絞った説明・博物館での鑑賞における視点提示・活動意欲がわく課題設定を行った。

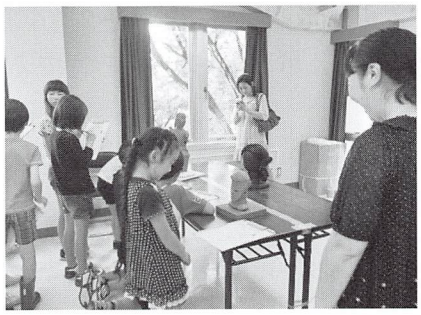
表3　子供講座の概要

名称	夏休み子供講座「学芸員のお仕事　キミも古墳博士」
開催趣旨	夏休みの子供向け講座として、小学生を対象に、学芸員の仕事を実際に体験する事業を実施し、考古学への理解と関心を深める機会とする。
講師	史跡整備担当　中井学芸員
開催日時	平成28年　8月20日(土)　13：30～15：30
内容	(1)学芸員による埼玉古墳群及び金錯銘鉄剣の説明 (2)埴輪や土器に触れてもらう体験(埴輪や土器の拓本等) (3)埼玉古墳群の見学
対象	小学生

当日は、当館講堂をメイン会場とした。まず、内容(1)学芸員による埼玉古墳群及び金錯銘鉄剣の説明を行った。その後、内容(3)埼玉古墳群の見学を雨天のため変更し、館内での活動を行った。館内活動は「雨の日特別ミッション」と題して、①国宝展示室の見学(ラリー形式の「国宝展示室クイズにチャレンジ!」を実施)②埴輪のスケッチや観察を行った。最後に、内容(2)埴輪や土器に触れてもらう体験として、拓本とりを行った。

受講者に配る資料は、書き込み式の冊子とした。その最後のページには、「さきたま古墳博士認定書」が付く。講座終了後、受講者は認定書に名前を書き込み、一人ずつ講師の中井学芸員に記念スタンプを押してもらいながら、直接言葉を交わす時間を設けた。

夏休み子供講座の様子


埴輪のスケッチ・観察


国宝展示室の見学


拓本とり体験

本講座の運営は、広報・学習支援担当の向井担当課長と頓所が担当した。また、運営・指導の補助として、当館ボランティアスタッフと博物館実習生も参加した。

講座受講者総数は、26名であった。内訳は、小学校１年生４名(全体の15%)・２年生２名(８%)・３年生４名(15%)・４年生３名(12%)・５年生５名(19%)・６年生８名(31%)である。

4　夏休み子供講座における文化財保護の土壌づくり

実践内容をふまえ、夏休み子供講座が社会全体の学芸員育成の土壌を育てると考える理由について整理する。

受講者の内訳で、小学６年生が全体の31%と多いのは、概ねの小学校で“夏休み前に社会科の授業で、古墳について学習(1)している”ということが考えられる。そこから、夏休み子供講座開催時に埼玉古墳群を有する当館の事業に関心が高いと推測される。また、夏休み子供講座は、小学６年生の社会科の教科書の内容を発展させた体験学習として位置付けられる(向井2016)。向井氏は、夏休み子供講座について以下のように述べている。

> 能動的な学びとして期待されるアクティブラーニングの主な学習方法として、問題解決的な学習が挙げられる。その学習デザインの根幹となる考え方の一つは、学習者に専門分野の研究者の思考を追体験をさせるということである。(中略)本物に触れ、古代の人々の活動の痕跡をよく見て考えるという方法を追体験することは、児童にとって『物を見て考える』とはどういうことなのかを考える機会となる。(中略)考古学の研究方法の追体験は、学習者の思考方法を広げるという意味において発展的な学習であるといえる。

ここから、夏休み子供講座の受講者は、教科書での学習や博物館を訪れた経験から、考古学もしくは学芸員の仕事に自ら興味・関心を持ち、能動的に参加していると考えられる。

夏休み子供講座での追体験は、“学芸員が大事にしている価値”の追体験である。この学芸員が大事にしている価値とは、向井氏の言葉を借りると「本物に触れ、古代の人々の活動の痕跡をよく見て考える」ということである。この価値の追体験は、子供に文化財への興味を抱かせる。この文化財への興味こそ、学芸員育成の土壌を育てる為に必要なものである。そして、この学芸員育成の土壌を育てるとは、“「学芸員になりたい」という気持ちを抱かせること”でもあると

考える。夏休み子供講座は、子供にこの気持ちを抱かせる機会にもなり得る。子供にこの気持ちを抱かせた証拠として、受講者アンケートの感想には「夢は、考古学者だ。また来年も来る。楽しかった。」というものがあった。夏休み子供講座は、社会全体の学芸員育成の土壌を育てるという意味で、学芸員育成の一端を担っていると考える。

おわりに

本稿では、本年度のさきたま史跡の博物館で行われた博物館実習における学芸員の育成や夏休み子供講座をとおした文化財保護の土壌づくりについて述べてきた。

まず、博物館実習の実践においては、博物館職員として備えるべき内面の充実をいかに図るべきかを考えた。大切なことは、実習生を指導する博物館が、内面を育てる意識をもって日々の指導を行うことである。カリキュラムの構成においては、実習生に博物館職員の業務の多様性に気付かせ、意図的に博物館全体を捉えさせていくことが重要であると考える。そうした観点から考えると、当館の各担当と連携して進めた今年度の実習は、大きな成果をあげたといえるのではないか。

夏休み子供講座は、広く考えれば、社会全体の学芸員育成の土壌を育てるという意味で学芸員育成の一端を担っているともいえる。この学芸員育成の土壌を育てるとは、「学芸員になりたい」という気持ちを抱かせることのみではなく、広く社会に文化財保護の意識を広めることでもある。夏休み子供講座など、子供を対象とした教育普及事業では、職員がそうした思いをもって臨むことが大切である。

最後に、本年度、学芸員として１年を勤務し、さまざまな事業に携わることができた。埼玉古墳群や考古学についての知見が大きく広がったことに加え、自分自身の学芸員としての内面も充実したように思う。事業を開催することで、私たち自身が学芸員として育成され、成長していくのであると実感した。

《註》

（１）社会科の小学校学習指導要領において、第６学年の内容で（１）「ア　狩猟・採集や農耕の生活、古墳について調べ、大和朝廷による国土の統一の様子が分かること。その際、神話・伝承を調べ、国の形成に関する考え方などに関心をもつこと。」というものがある。

《引用・参考文献》

大堀　哲・水嶋英治　2013　『新博物館学教科書　博物館学Ⅳ－博物館資料保存論＊博物館実習論』学文社
向井隆盛　2016　「小学校社会科第６学年の学習におけるさきたま史跡の博物館の役割」
『埼玉県立史跡の博物館紀要　第９号』
文部科学省　2009　「博物館実習ガイドライン」
文部科学省　2015　『小学校学習指導要領解説　社会編』　東洋館出版社

武士の本拠の成立について

―考古学的資料をとおして―

浅野晴樹

はじめに

北武蔵の古代の集落は、その規模の違いはあれ、台地や低地のみならず丘陵など、各地で確認することができた。しかし、それが10世紀の後半から11世紀に至ると著しく減少し、わずかばかりの集落が児玉や比企などの内陸に確認されるのみとなった。このような集落の減少は、北武蔵に限ったことでなく、坂東全体にみられる姿なのである。

再び、集落遺跡が確認されるようになるのは、12世紀中葉のことであった。ただ、それは集落遺跡といっても古代にみられたような竪穴住居や掘立柱建物が集まったものではなく、掘立柱建物を中心とするものであった。

そして、その遺跡から出土する遺物には、11世紀までとは大きく異なる二つの特徴があった。一つが、新たに京都の影響を受けた手づくねかわらけの出土である。そして、二つ目が中国製の白磁碗・青磁碗・白磁水注、国産陶器の渥美や常滑の甕や片口鉢など搬入の陶磁器が増加することであった。

このように変化した遺跡とそこから出土する遺物をみる限り、古代とは明らかに異なるもので、いずれも支配層の住まいと考えられるのである。

そこには、①古代以来の坂東の荒廃への復興事業の担い手として、②京都系の手づくねかわらけに象徴される京都とのつながり、③中国陶磁などにみられる広域流通品を得ることのできる富の蓄積(流通とのかかわり)などを背景とした武士のすがたをみることができるのである。この三点を念頭に武士の本拠について考えてみることにしたい。

1　考古学からみた武士の本拠について

(1)秩父氏と嵐山町周辺

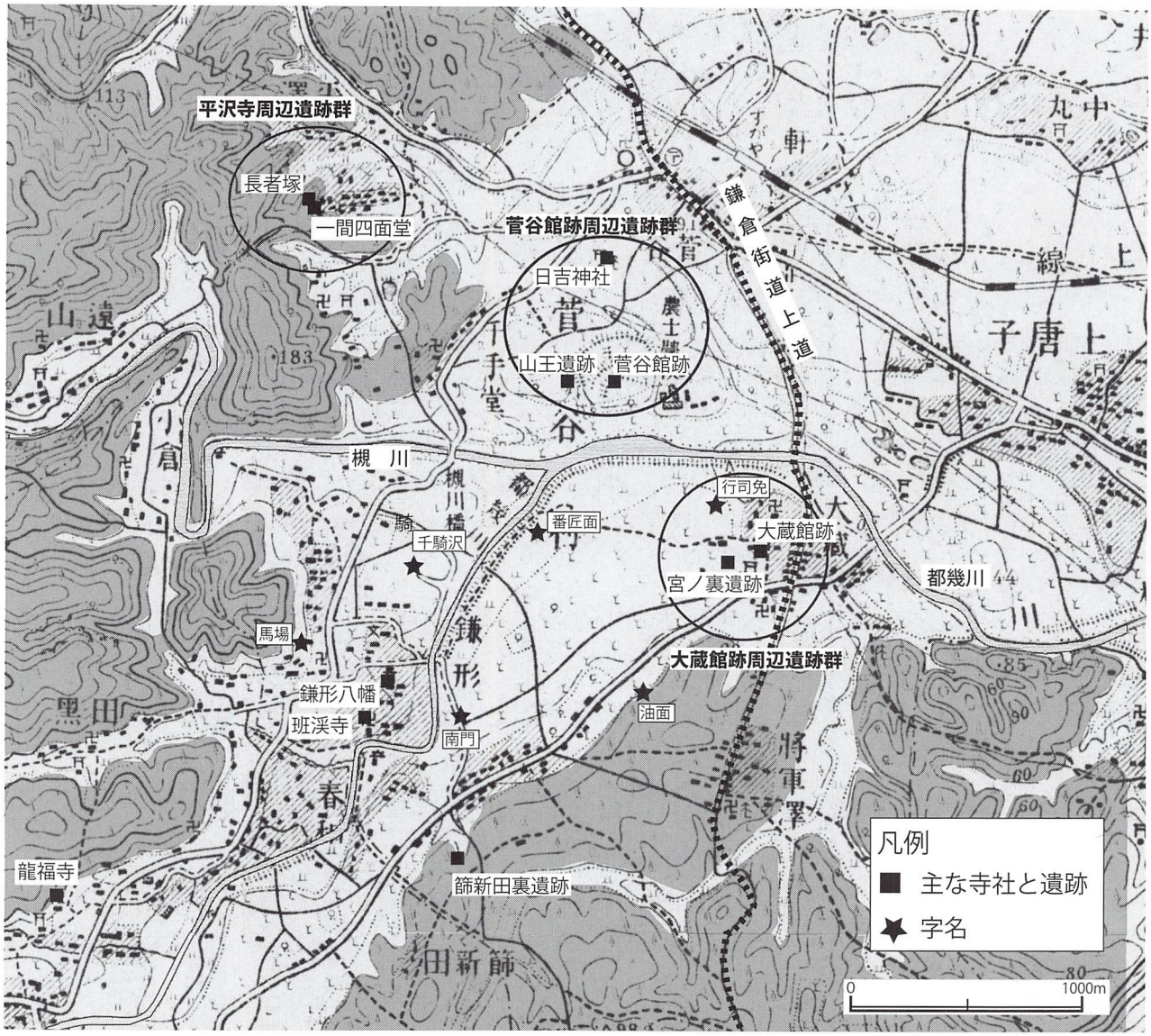
現在の比企郡嵐山町の平沢、菅谷、大蔵の地は、文献史学の研究を中心に秩父氏との関係が多く語られてきた。まず一番北に平沢寺があり、そこから南東方向1.6キロメートルに菅谷館跡を中心とする遺跡群があり、その菅谷館跡から南に１キロメートルに大蔵館跡を中心とする遺跡群がある。この三遺跡群の考古学的成果を簡単にまとめてみたい。

①　平沢寺遺跡群

秩父氏の聖地ともいわれるところである。

江戸時代に確認された長者塚から久安４年(1148)銘の経筒が出土したことが考古学的な資料の最初であろう。

そしてこの20年ほどの間に、数度にわたり発掘調査が実施され、遺構では現平沢寺の南の谷から一間四面堂跡が確認され、その一間四面堂跡から柱状高台と手づくねかわらけ、ロクロかわらけが、平沢寺の墓地造成では大形の手づくねかわらけの出土が確認されている。



第１図　秩父氏と本拠空間

発掘調査された一間四面堂跡の造営年代についてであるが、出土した柱状高台、手づくねかわらけ、ロクロかわらけなどが12世紀中葉のものであることから、一間四面堂の造営もその年代ないしはそれ以降のものと推測されている。

一間四面堂跡の東には池があったと伝えられることから臨池伽藍の存在を想像させる。さらに池跡の北側、白山神社の参道脇には、周囲の水田から掘り出された礎石として使われた大石が集められており、周辺に大規模な礎石建物があったことを推測させる。そして、周辺の丘陵などには比丘尼屋敷、御山坊、大日山、出城坊などの字名を確認することができ、時代が下がるとともに、周辺地域に堂などが広がっていったことをものがたっている。

②　菅谷館跡周辺遺跡群

畠山重忠が、武蔵国菅谷館に引きこもって、反乱しようと考えていると噂があることが、吾妻鏡文治３年(1187)11月15日条に記されている。これが菅谷館の初見である。現在みられる菅谷館跡は戦国時代のもので、重忠の頃の館に重複するようにつくられたものといわれている。

菅谷館跡の西側に隣接する山王遺跡には平坦に造成された面があり、道路工事に伴う発掘調査では12世紀中葉の手づくねかわらけ、常滑鉢が出土した(村上2008)。さらに、その北側の鎌倉街道跡の調査では街道跡と伝えられた遺構が堀であることがわかり(埼玉県立歴史資料館1983)、その堀は山王遺跡の構堀のようである。このような調査成果から菅谷館跡の西に堀に囲まれた館があったことは間違いなく、吾妻鏡の文治３年の記事の「菅谷館」は、菅谷館跡からこの山王遺跡周辺に比定することで問題はないであろう。

菅谷館跡の北側には菅谷神社(日吉神社)があり、菅谷館跡の東には「元宿」という字名が残っていることから、館とそれを取り巻くように宗教施設や集落のある空間をそこにみいだすことができるのである(水口2016)。

③　大蔵館跡周辺遺跡群

菅谷館跡の南、都幾川を挟んで１キロメートルには、大蔵の集落がある。この大蔵は、秩父重隆が館を構えたと伝えられるところである。

その集落内での発掘調査では、方形の溝に囲まれた区画が確認され、その中から常滑甕、渥美甕、ロクロかわらけなど12世紀中葉から13世紀にかけての遺物が確認された。

この大蔵館跡の西隣に宮之裏遺跡がある。この遺跡からは、柱状高台や瓦が出土している。瓦は当時、寺院以外には使用されることはまずないことから、この遺跡は寺院跡である。柱状高台は、平沢寺遺跡の一間四面堂から出土したものと同時期で12世紀中葉のものである。

大蔵館跡の西方、約２キロメートルにときがわ町篠新田遺跡が所在する。この遺跡の調査では、溝跡からわずかな手づくねかわらけが確認されたのみであるが、その手づくねかわらけは、先に説明した菅谷館跡に隣接する山王遺跡とほぼ同じころの12世紀中葉のものであった。このような手づくねかわらけが確認できたことは、この付近に12世紀中葉に遡る館があった可能性が高いことをものがたっている(石川2016)。

④　三遺跡群のまとめ

以上の三か所の遺跡群の考古学的な事実について確認を行った。それでは、この三か所をどのように関連付けて考えたらよいであろうか。成立の変遷であるが、それぞれに関連する人物から考えてみよう。平沢寺遺跡群は経筒の銘から秩父重綱、菅谷館跡周辺遺跡群は吾妻鏡の記事から畠山重忠、大蔵館周辺遺跡群は大蔵合戦の背景から秩父重隆、源義賢と関連づけられ、単純にその生存時期を考えれば、平沢寺周辺遺跡群→大蔵館跡周辺遺跡群→菅谷館跡周辺遺跡群となるであろうか。

しかし出土遺物の中の手づくねかわらけと柱状高台をみると、三か所とも12世紀中葉に位置づけられ、遺物からは前後関係を明らかにすることはできない。さらに平沢寺の久安4年銘の経筒の存在、大蔵合戦という歴史事象などから考え、三か所とも12世紀中葉には居館や寺社が成立していたと考えても問題はない。

落合義明は、重隆が大蔵に館を構えた理由として平沢寺の経塚との位置関係を挙げている。経塚の埋納される場所は、霊地や聖地とされるところであり、大蔵館は平沢寺のある丘陵部より台地におりてくる南東の方角に築かれているので、まさに館側から見れば西方浄土の方角である。そのような意識を持った秩父重綱の方縁、重隆の母は重綱の威徳を偲びつつ、聖地の近

くに大蔵館を築いたと考えられるという(落合2012)。

このような落合の考えは賛同できなくもない。しかし、最初に述べたように、平沢寺と大蔵館の距離は2.6キロメートルを測り、大蔵館跡からは菅谷館跡は臨めても、平沢寺はまったくみることはできない位置関係にあり、落合のいうような考えをすべて首肯はできない気もするのである。それならば、なにゆえに、このような広がりを持って三つの空間が成立したのだろうか。

平沢寺遺跡群と他の二つ空間とでは、成立の背景が異なることがまず挙げられるのではないだろうか。野口実を始めとして多くの研究者が主張するように、大蔵や菅谷が選ばれた理由としては第一に交通の要所であったことがあげられている(野口2003)。大蔵の直ぐ南の南比企窯跡群では、須恵器や瓦が生産され、その製品は国分寺に運ばれていた。そのような歴史的背景から、大蔵から国府方面に古代以来の街道があったことは疑いのないことである。加えて、入間川水系の一つである都幾川が大蔵の北に流れていることは、この地が街道と河川交通の交差する要所ともされるのである。このような交通上の利便性の基に大蔵館跡周辺遺跡群と菅谷館跡周辺遺跡群は、本拠空間の適地として選択されたと考えられるのである。ただ、一つ気にかかる点は、当時と状況が違うかもしれいなが、現在の大蔵辺りの都幾川は水量も少なく、河川交通を想像させるような状況ではないことである。

さらに峰岸は、秩父氏が古代国家の枠組みである国衙の役人となるとともに、牧を経営してその管理人となって馬を飼育し、馬の売買や輸送にかかわることによって富を蓄積してゆくという(峰岸2008)。その富の蓄積の過程でより活躍しやすい場所を探して、現在の嵐山の地に本拠が構えられたものであろう。

冗漫のそしりを免れないかもしれないが、峰岸の考えを受け、大蔵周辺の地形を思い浮かべてみると、大蔵の西側には耕地が広がり、さらにその西に都幾川が流れ、二瀬で東に方向を変え、大蔵の方に流れる。南は篠新田遺跡の所在する丘陵があり、これらに囲まれた空間が馬の放牧地ではないかと想像させるのである。

周辺に残る字などを調べると、都幾川と槻川の合流地点から南に500メートルで「千騎沢」、千騎沢の南西には「馬場」の地名もある。千騎沢の南には「南門」と言う地名がある。この「南門」が何を意味するのかはよく分からないが、牧に関係したものであろうか。そのほか、「行司免」「番匠面」「油面」などの中世に遡ると思われる字名が、先の空間を囲むようにあることも気にかかる。

いずれにしても、流通・交通を考えるうえで有利な場所であることが大蔵館周辺遺跡群、菅谷館跡周辺遺跡群に本拠が成立したと考えることが合理的であろう。そしてその時期は重綱段階のことであったかもしれない。

それならば平沢寺はなぜ選ばれたのか。12世紀中葉以降、関東各地に臨池伽藍をともなう館空間が造られており、平沢寺もその一つと言われている(齋藤2006、村上2008)。臨池伽藍を前提とするならば、谷戸(谷津)などの地形で湧水などがある地形が選ばれる。そのような類例を含め、武士の本拠空間の事例を二つほど紹介したい。

(2)児玉党庄氏と浅見氏の本拠について

武士の本拠の好例として、早稲田大学本庄キャンパスにある大久保山遺跡がある。この遺跡は庄氏の本拠と考えられている。

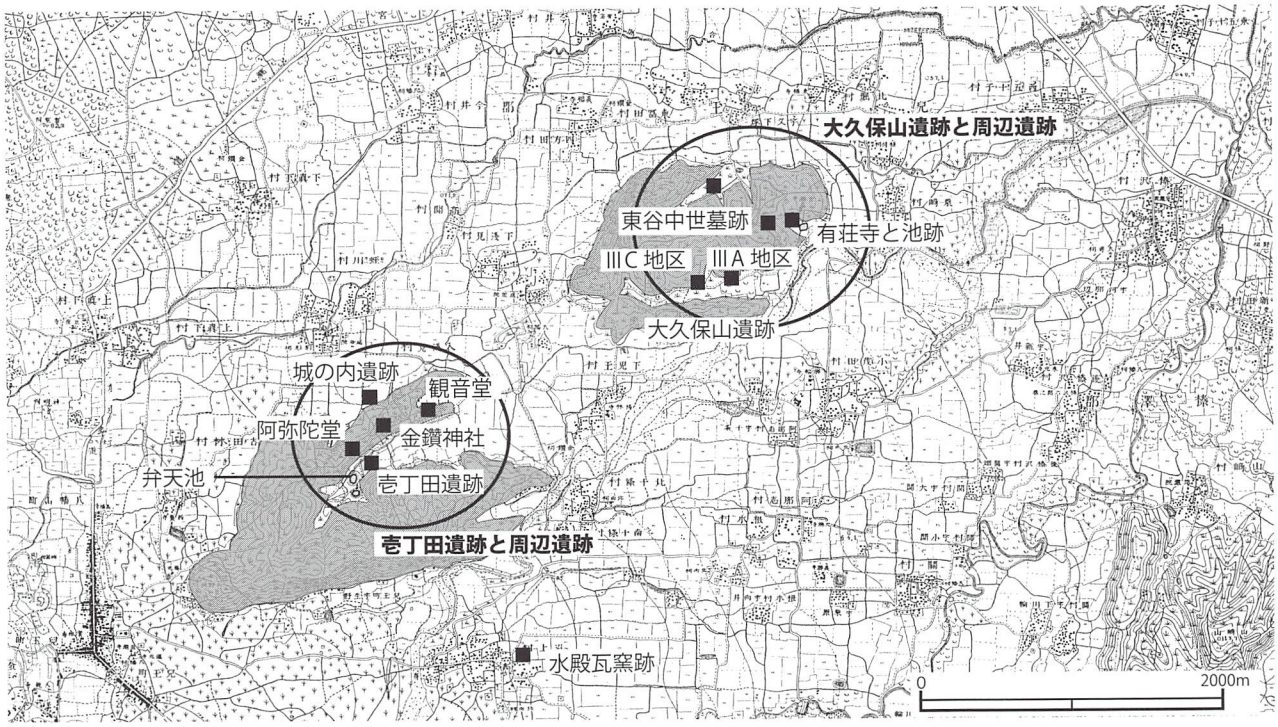
遺跡は、丘陵の中央部付近の東に開く谷津の北側と東側斜面を中心に展開していた。斜面には、浅い溝により方形に区画された屋敷(居館)がつくられ、その屋敷のなかには惣領の住まい、周囲には従者の住まいや厩と思われる建物が配置されていた。この屋敷の西奥には二間四方の仏堂か社を思わせる建物が確認されている。

そして、屋敷の北東の谷の入口には近年まで池があり、池の西の丘陵斜面は平坦に造成されており、ここに堂が建てられていたと推定される。その建物は園地とセットである阿弥陀堂である可能性が高い。さらに、西の丘陵斜面には中世墓があり、12世紀後半から14世紀にかけての常滑壺や古瀬戸瓶子などの蔵骨器が出土している。

このように大久保山遺跡は、屋敷が単独であるのではなく、周辺の寺院や墓地などと一体となって存在したことが明らかになったのである。そして、その本拠の屋敷は、出土陶磁器の年代などから推測して12世紀中葉には確実に成立して、幾度かの造成と移動を経ながら14世紀まで継続していたのである(荒川2003)。

大久保山遺跡の西の入浅見の生野山丘陵一帯は、庄氏一族である浅見氏の本拠と伝えられるところである。先の大久保山遺跡と類似した地形に、浅見氏の本拠の一つではないかと思われる壱丁田遺跡がある。遺跡の主体となる時期は出土遺物から13世紀以降であるが、12世紀に遡る常滑片口鉢、中国陶磁を含んでいる。

生野山丘陵の東に大きな谷が入り込んでおり、その谷の奥に弁天池と呼ばれるため池があり、その池の東側に確認された方形館が壱丁田遺跡である。この館の北側の丘陵には阿弥陀堂、観



第2図　児玉党庄氏と浅見氏の本拠空間

音堂、金鑽神社がある(恋河内1998)。

大久保山遺跡とは館や寺社の配置に異なりがあるが、館と信仰の対象である寺社、さらには弁天池が臨池伽藍の可能性もあり、大久保遺跡同様の武士の本拠空間をそこに見出すことができるのである。

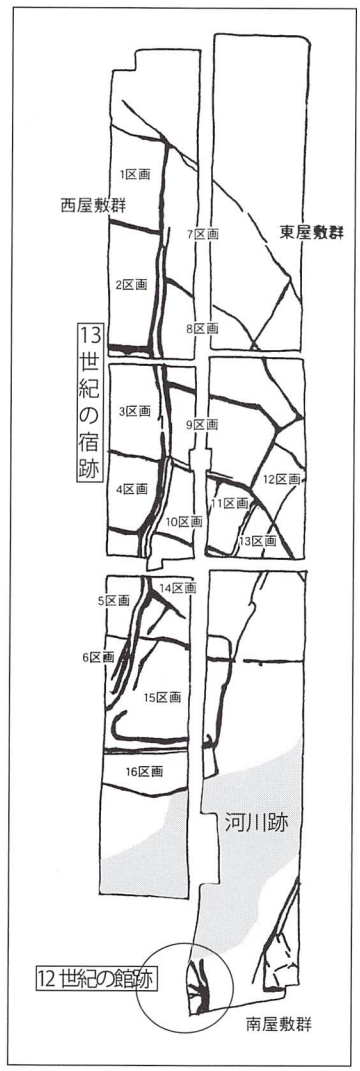
(3)熊谷市下田町遺跡

熊谷市津田にある下田町遺跡からは、和田吉野川の旧河道と思われる河川跡とともに、その河川跡の右岸(南)から12世紀中葉から後半に至る館跡が確認され、左岸(北)からは鎌倉時代から室町時代の宿(津)跡が確認された。

① 武士の本拠としての下田町遺跡

河川跡右岸からは堀や溝など屋敷を区画したと思われる遺構が確認されたが、それらの遺構はいずれも調査区外に延びており、どのような建物や施設があったかはわからなかった。ただ、その堀・溝から12世紀中葉から後半の土器・陶磁器が大量に出土したのである。なかでもかわらけは破片数で1,200点を超えていた。もう少しこの遺跡の性格について検討してみよう。

下田町遺跡は、古墳時代から平安時代においても継続的に集落が営まれており、各時代の竪穴建物や掘立柱建物などが確認され、それらの遺構からさまざまな遺物が検出されている。古代集落の溝跡からハマグリの貝殻が検出されていることは注目に値する。このような海産物があることは、とりもなおさず遺跡と東京湾の間に物流があり、その手段として和田吉野川を利用した河川交通がすでに古代にあったことをものがたっている。



第3図　下田町遺跡の模式図

さらに遺跡の南約5キロメートルの吉見町西吉見に東山道武蔵路と思われる遺構が確認されている。目を北に向けると現在の熊谷市上之から中条には古代の大集落が広がっている。吉見で確認された東山道武蔵路ないしはその支道が、下田町遺跡を通過して上之や中条の大集落につながっていた可能性は高い。この線上の荒川の南には、元徳3年(1331)7月12日付「武蔵国男衾郡小泉郷在家注文」にある小泉郷が位置する(1)。このような位置関係から下田町遺跡は、古代から河川交通と陸上交通の交差する交通の要所として発達したものと考えられるのである。

後に詳しく述べるが手づくねかわらけの出土は、武士の館であることをうかがわせる。以前、この遺跡については開発の拠点としての一面があることを述べたが(浅野2010)、それだけでは不十分であったことは訂正したい。

② 宿(津)としての下田町遺跡

鎌倉時代に至ると河川跡の北側には、街道に沿って連続する方形の区画が確認された。宿の規模は、北の区画から河川跡まで

270メートルほどの長さであった。調査区の中央付近に両面側溝をもつ幅1.5メートルの道路があり、その道の両側に溝で区画された屋敷が連続してつくられていた。大きなものは半町四方ほどの規模で、区画内には多数の井戸跡が検出し、そのなかから陶磁器類や漆器が確認された。その遺物内容から武士クラスの住まいであったことはまちがいない。そして屋敷は、北に行くほど遺構、遺物も少なくなる傾向にあり、宿内の屋敷に階層差があることがわかる。もう少しいえば北の区画は在家の集落の可能性も考えられる。

出土遺物の時期や量などから、この宿の最盛期は13世紀中葉から後半であり、その後しだいに衰退してゆき、15世紀前半ごろに消滅する。

下田町遺跡には、12世紀の武士の館と13世紀以降の宿(津)の二つの空間があることを紹介したが、このように街道沿いに連続する空間が確認された遺跡は、郡山市荒井猫田遺跡、下野市下古館遺跡、毛呂山町堂山下遺跡など各地に認められ、その多くが宿や市と考えられ、いずれも13世紀代に成立をみる。下田町遺跡の河川北側の連続空間もそのような遺跡と同様に宿と考えてよいであろう。

(4)本拠空間の成立への二つの可能性

近年の武士論研究は、中世成立期あるいはそれより以前から、武士が流通・交通に深く関与していた事実について、多くの実証的成果が得られている。そのため、武士の性格を農業経営者や開発領主に純化してとらえることはできないと高橋に厳しい批判を受けたことがある(高橋2014)。私自身、農業経営者や開発領主に純化して発言をしたつもりはないが、言葉が足りなかったようである(浅野2010)。高橋の批判は甘んじて受けるものである。

その高橋の批判に対して、すべて反論するような力を持ち得ていないので、今回の報告では、考古学的な武士の本拠のあり方を整理することで、高橋の批判の一部に答えたい。そしておりを見つけて批判には答えていきたいと思う。

本拠空間として、まず取り上げた菅谷館跡周辺遺跡群と大蔵館跡周辺遺跡群、下田町遺跡などは、古代以来の街道上に形成された点で共通することなどから流通・交通に深く関与したなかに本拠が成立していったことはまちがいないであろう。

大久保山遺跡群と壱丁田遺跡は、非常に類似した谷地形に館が成立していた。二つの遺跡の南側には水殿瓦窯、そのほか周囲には多くの中世遺跡が点在することから、周辺に街道が走っていたことは明らかである。ただ、大蔵館跡周辺遺跡群や下田町遺跡のように街道と推定されるルート上には両遺跡とも存在はしておらず、交通・流通にかかわる遺跡とは決めることはできない。

本拠空間をつくるためには、いずれの場合も第一に考えなければならないことは水源の確保である。齋藤も想定しているように大久保山遺跡の場合は谷の奥にため池が想定でき、壱丁田遺跡には今もため池がある。谷地形ではないが浅羽氏の場合は河川灌漑用水があり、小代の場合は本拠周辺の崖線に湧水を多数認めることができるのである(齋藤2006)。

この時代、北関東では浅間山の噴火による被災地の復興と再開発という大きな問題を抱えての荘園が形成されてゆくという特殊な状況にあった。特に、児玉地域の支配者であった児玉党

にとって本拠の復興は急務であった(鎌倉2016)。そのとき、古代以来の条里水田の再生には多くの労力と時間が必要であったことから、狭い谷間ではあるが、給排水の整備という点ひとつとっても谷津の開発は条里水田の復興よりもはるかに容易なことであったはずである。

東国における中世前期の館をめぐる景観を図式化すると、館＋寺院＋先祖墓＋氏神となる。これは京都の白河・鳥羽などの摂関家や院御所の構成であった御館＋御堂(浄土庭園付)＋先祖墓＋氏神の景観を引き継ぐものといわている(小野2004)。

このような小野の示した景観が、坂東において考古学的に証明された最初の例が、大久保山遺跡であった。その後、齋藤により、浅羽氏、小代氏など幾つかの武士の本拠において同様な景観が復元された(齋藤2006)。その後も各地で臨池伽藍をともなう武士の本拠が明らかにされてきた。しかし、水源確保は浄土庭園を造るためにあるのではない。取り分け、児玉党諸氏の開発にみられるように、まず復興のための拠点の確保が第一にあることである。

壱丁田遺跡などにみられた水田開発のための灌漑用ため池などは、その後の本拠の整備過程で、本拠の象徴として、臨池伽藍の造営が行われていったのではないだろうか。そして、時代とともに元の機能のみを保持したため池に姿を戻していったと思われる。

それでは、秩父氏の聖地とされる平沢寺遺跡群も、この庄氏や浅見氏の本拠同様に開発拠点として造られたのであろうか。

秩父氏の重要拠点である大蔵館跡には、隣りに寺院跡である宮ノ裏遺跡があり、周辺に宗教施設をつくることに何ら問題はない。平沢寺が聖地とされるが、先の説明で述べたようにあまりに離れすぎているのである。西方浄土の重要性は理解できるが、各地の本拠をみても、すべての本拠において、そのような宗教観が堅持されているわけではない。

それでは、大久保山遺跡などのように開発を前提に平沢寺の空間は成立したのであろうか。平泉では、藤原氏が信仰心と富を背景に、いくつもの臨池伽藍をつくっている。武蔵では最も力のある秩父氏ならば、藤原氏のように、宗教空間に特化した場所をつくることができたであろうか。現状では、どちらの可能性も否定できない。

2　手づくねかわらけについて

最近「中世武士とかわらけ」という本が刊行された。そのなかで、編者の八重樫忠郎と高橋一樹による対談が掲載されている(八重樫・高橋編2016)。その内容は少々強引なところもあるが、非常に面白い。考古学の八重樫は、平泉を中心とする東国全域の中世前半の土器、陶磁器研究を背景に、いっぽうの高橋一樹は最近の武士団研究などを踏まえ、討論が行われた。そのなかで交通体系や武士団研究を進めるうえで、手づくねかわらけの重要性が取り上げられている。

(1)かわらけの機能と用途

かわらけの機能や用途については、先行研究が極めて多い。そのような研究を少しまとめてみよう。

かわらけ自体にみられる特徴をみてみよう。

例えばかわらけに煤が付着していれば、灯明皿として使用されたことがわかる。また、かわらけに墨書で絵や文字が書かれた墨書土器がある。東松山市青鳥城跡からは輪宝の描かれたもの

が出土しているがこれは地鎮具と考えられ、建物を建てる前に柱の下などに埋めたものであろう。このように墨書土器には地鎮や祭祀に用いられるものが多い。

かわらけの出土状況からかわらけの機能や用途が推測されることがある。よく見られる例が土坑墓内からかわらけが出土する場合である。これは副葬品としてかわらけが使用されたのである。

次に、下田町遺跡のようにかわらけが集中して出土する場合である。平泉では、館を巡る堀の中から数トンという量のかわらけが検出されている。このように一か所に集中して検出された状況は、短期間に大量消費されたものが一気に廃棄されたものと考えられ、その原因は宴会儀礼である。

宴会儀礼は、参会者のなかで交わされる酒盃のやりとりをとおして、主従関係の確認、政治的な合意形成を行う場であり、そこで使用される儀礼の酒盃は一貫してかわらけであった。

このような宴会儀礼の結果として一括に大量廃棄されるものと異なり、他の陶器の擂鉢や甕などとともに、井戸や堀から一点、二点とかわらけが出土する遺跡も多い。このようなかわらけは、日常使いの食膳具として用いられたと思える。たとえば、絵巻などにも日常使いとしてかわらけが描かれた例もあり、京都を始めとする関西の研究者の多くは、かわらけを日常的な食膳具として位置づけてきた。

この例にあるようにかわらけのすべてが儀礼的なものと判断できない。しかし、初期の手づくねかわらけの出土状況などを考えれば、その導入は日常使いを前提としたものでないことは明らかである。

(2)寺社出土のかわらけ

溝や堀内に一括廃棄したものとは少し趣を異にする事例がある。それは、寺社に関連した遺跡からの出土である。下田町遺跡から西方2キロメートルほどいくと丘陵となり、その丘陵上に船木神社がある。この神社の移転のため発掘調査を行ったところ神社の下から、過去の拝殿と本殿と思われる建物跡が確認されたのである。そして、その神社遺構の北側を中心に12世紀後半と思われる手づくねかわらけとロクロかわらけが多数出土したのである。

このような神社遺構からかわらけの出土する例としては、諏訪大社上社に関連する磯並遺跡が思い浮かぶ(鵜飼1987)。基壇を伴う建物が確認され、その前のくぼ地がかわらけ溜まりで大量のかわらけが出土している。手づくねかわらけとロクロかわらけを含みその時期は13世紀中葉から後半のことである。詳細は報告書をご覧いただきたいが、大祝の即位などの際に磯並社でも儀式が行われたという。基本的には神と大祝との合意儀礼ともとれる。それと諏訪大社は軍神であり、古くから武家の信仰が篤いことも忘れられない。諏訪大社に関連する遺跡としては、磯並遺跡のほかに御社宮司遺跡、高部遺跡、また霧ヶ峰御射山遺跡などがある。

船木遺跡と諏訪大社を同列で議論することはできないが、この神社において祈願など神との交わりのための儀礼が行われ、そこで使用されたかわらけが神社周辺に廃棄されたのであろう。

そこで手づくねかわらけが使用されている事実からすれば、神社とこの付近の武士との密接な関係の基にこの神社が存在したことはまちがいない(2)。



第４図　北武蔵の手づくねかわらけ

（３）武蔵における出現期の手づくねかわらけの特徴

武蔵の出現期の手づくねかわらけについては、田中や石川などの論文がある。その論文を参考にして武蔵の出現期の手づくねかわらけの特徴についてまとめると次のようである（田中 2003、八重樫 2014、石川 2016、水口2016）。

①　かわらけの出土遺跡　出現期の手づくねかわらけは、第５図に示したように、入間川水系の都幾川流域の大蔵館跡や菅谷館跡など嵐山町周辺の遺跡、和田吉野川流域の下田町遺跡、船木遺跡、そして入間川本流域の河越館跡にほぼ限定される。南武蔵では、府中周辺の遺跡で確認されているが、入間川水系でみられる12世紀中葉にさかのぼる手づくねかわらけは発見されていない。

北武蔵の大久保山遺跡、壱丁田遺跡など児玉党に関連する遺跡は、かなり広範囲の発掘調査が実施されているにもかかわらず、手づくねかわらけの出土量はきわめて少ないことがわかっている。

②　かわらけの出土状況　大量に集中出土した例は下田町遺跡のみであった。河越館跡の遺構でも比較的まとまった量が出土したようであるが、未確認である。それ以外の遺跡では、あまりまとまりをもった出土状況ではない。

③　出現期のかわらけの特徴　篠新田遺跡、平沢寺、山王遺跡などの出土品には、手づくねかわらけとロクロかわらけの二形態があり、それぞれ大小二つの法量からなる。手づくねかわらけの大法量の製品をみると、いずれの遺跡のかわらけも体部は二段ナデ整形で、色調は遺跡によってことなるが、灰白色と赤褐色のものが主体である。法量をみると篠新田遺跡、平沢寺遺

跡、山王遺跡のものが15.5センチ前後と最も大きい。河越館跡、下田町遺跡の手づくねかわらけにも15センチ代のものがあるが、14.5センチ前後のものが主体であった。

④　**出現時期**　武蔵の手づくねかわらけの出現はいつのことであったか。最も古いものは、ときわが町篠新田遺跡出土のもので、それからあまり下らない時期に平沢寺、山王遺跡、河越館跡、下田町遺跡の製品が位置づけられると考えられている。絶対年代は、平泉の志羅山遺跡の手づくねかわらけや京都の手づくねかわらけとの比較からおよそ12世紀中葉（第３四半期）ごろのものと位置づけられている。口径の法量やそれぞれの遺跡成立の歴史的背景などを考えると河越館跡や下田町遺跡の製品はもう少し新しく12世紀後半代の第３四半期から第４四半期にかかる時期と幅をもって考えた方がよいような気もするが、どこまで下げられるのかは判断しかねる。

（４）手づくねかわらけ出現の背景

手づくねかわらけの機能のところでも述べたが、宴会儀礼は、参会者のなかで交わされる酒盃のやりとりをとおして、主君と家臣の主従関係の確認の場であり、政治的な合意形成の場であり、そこで使用される儀礼の酒盃は一貫してかわらけであった。

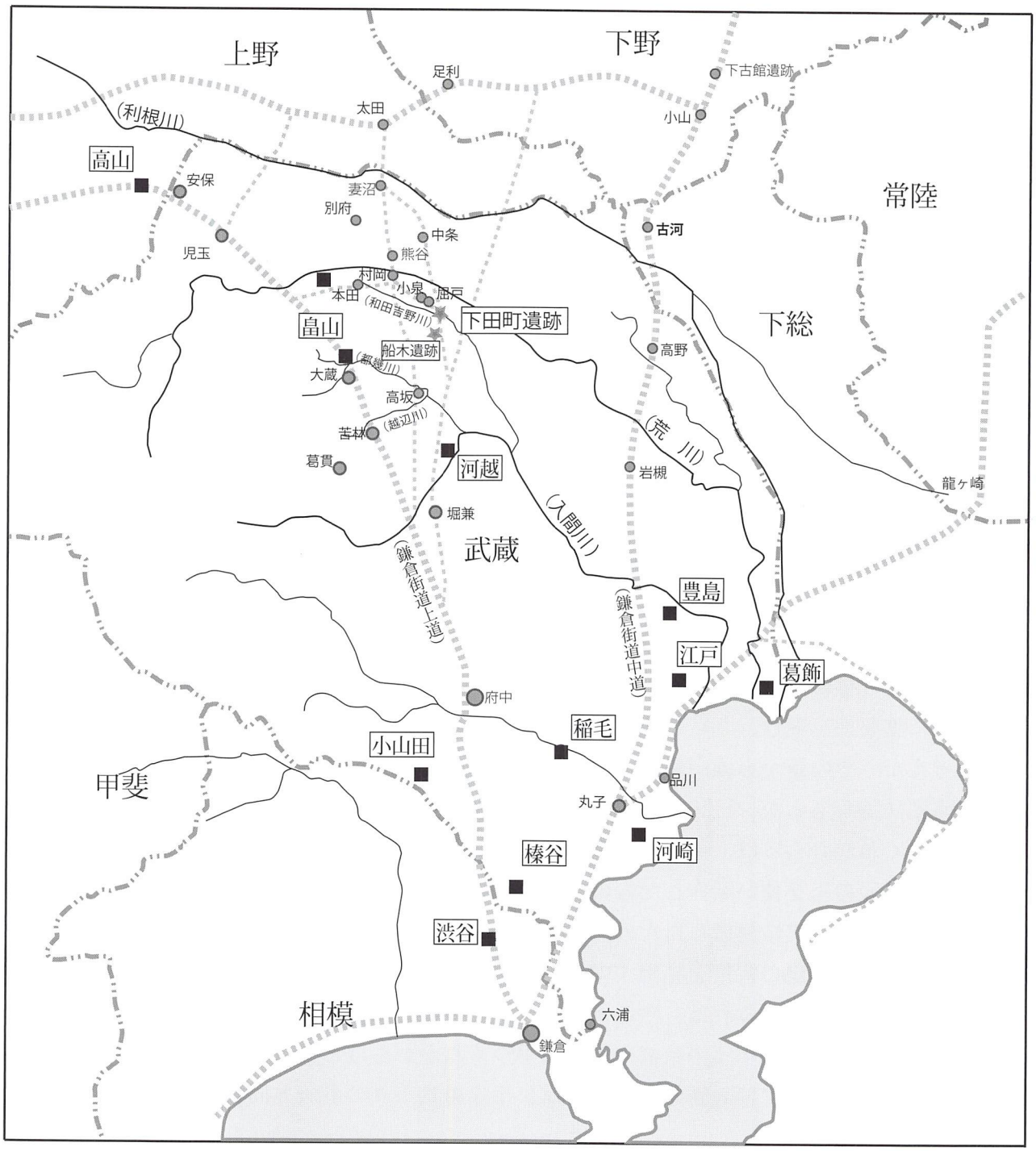
そのような儀礼において京都系の手づくねかわらけを使用するようになったのは、坂東以北では平泉が最も早い段階のことであった。八重樫は、京下りの貴族が、主従関係を結ぶ場における宴会に重要性を説き、さらには京都の手づくねかわらけをもたらし、それを使うことを勧めたと考えた。その証が志羅山遺跡出土のかわらけである。平泉での導入時期は、研究者により多少時期に差があるが、1150年前後でさかのぼっても1140年代のことであったという。この初期の手づくねかわらけは、基本的に京都から製品が大量にもたらされたのではなく、すべて地元工人が地元の土を使い製作したものである。モデルとなる少量のかわらけが京都からもたらされ、その形を忠実に模倣したため法量や二段ナデ整形が、当時の京都のかわらけと一致することから年代と出現の背景を見出すのである（八重樫2014）。

転じて北武蔵の遺跡をみれば、そこから出土する手づくねかわらけは口径の違いはあれ、二段ナデ整形など、12世紀中葉の京都や平泉の手づくねかわらけとほぼ同様な形態であることがわかる。そして大蔵館に源義賢が入ることは、平泉の京下りの貴族と同様な関係を見出すことができるのである。

３　秩父氏と手づくねかわらけ

手づくねかわらけ出現期の遺跡は、入間川水系の都幾川流域の大蔵館跡や菅谷館跡など嵐山町周辺の遺跡、和田吉野川流域の下田町遺跡、船木遺跡、そして入間川本流域の河越館跡にほぼ限定されることを述べた。それらの大半の遺跡が秩父氏の本拠とされる遺跡であることは、先行する手づくねかわらけ研究でも多く語られてきた。

その秩父氏に関連する遺跡と京都系かわらけの受容のルートについて、二人の研究者の見解があるので検討してみたい。



第５図　武蔵国の交通と秩父氏の分布（12世紀後半）

（１）手づくねかわらけ受容のルートについて

木村茂光は、大蔵館跡や平沢寺出土の出現期の手づくねかわらけは、南武蔵に出土していないことなどから判断して、東山道ルート、京都―東山道―奥大道ルートを想定せざるを得ないのではないかと述べている。さらに、このような推定が可能であれば、東山道の重要性とともに、源為義郎党と子義賢の北関東での動向、秩父氏と義賢との連携、その結果としての大蔵合戦なども関東における武士団の対立としてだけでなく、巨大都市平泉を含めた東国社会全体の中で評価できるというのである（木村2016）。

もう一人の研究者である高橋一樹は、12世紀後半の京都と平泉を結ぶルートとして、東海道を大磯まで来て、そこから相模川を北上して武蔵国府に向かい、さらに武蔵国府から下野小山方面に向かうルートを想定しており、そのルートを行くと、河越付近を通過することはまちがいない。そして、中世前期の東西交通にしろ、後期の南北交通にしろ、河越は武蔵のなかでも交通の要衝であり、秩父氏の嫡流である河越氏の本拠から手づくねかわらけが出土することは不思議でないと述べている(八重樫・高橋2016)。

武蔵国府から河越付近を通過するルートは、東山道武蔵路と共通するもので、北に向かうルートの一つが、先に紹介した下田町遺跡を経て、熊谷、妻沼とたどり東山道と合流するのである。

二人の研究者が考えたルートは、どちらも存在したであろう。ただ、手づくねかわらけが商業ベースにのるものでないことは前項の説明で明らかである。そして、先の児玉党の庄氏、浅見氏の本拠は相当な面積を掘っているが、ほとんど検出されていない。そのほか、北武蔵以外の坂東の武士の本拠をみても、12世紀中葉まで遡る手づくねかわらけの出土はほとんど確認されていないのである。そうなると流通のルートを考える上に手づくねかわらけがあるなしは、あまり意味のないことといえる。そして12世紀中葉段階では、むしろ受容する武士たちの儀礼に対する思いの強さであるのかもしれない。しかし、儀礼とは切れない空間である府中に発見されないことは不思議である。

(2)下田町遺跡の位置と役割

下田町遺跡は、従前からその存在は知られておらず、この遺跡の発見は意外であるとともにその内容には驚くことばかりであった。そのため、歴史的背景などはまったくわからない。そこで、ここではこの遺跡の中世前半の歴史的位置づけについて検討を試みたい。

河越氏の本拠から北上するルート上に下田町遺跡があることは先にも述べたが、この下田町遺跡について、その自然地理的な視点からまずみてみよう(第5図参照)。

この遺跡から確認された河川跡を和田吉野川と考えた。現在、この川は遺跡の下流で荒川と合流している。しかし、当時の荒川は、第5図に示したように、現在の埼玉県東部の元荒川の流れであった。

和田吉野川は、古代においては入間川水系である。この入間川水系は、ほぼ北武蔵の中央を南北に流れて、東京湾にそそいでいた。その和田吉野川は、入間川水系の最も北に位置する支流であり、さらにその源は、現在の深谷市本田付近であった。本田のすぐ西は、畠山氏の本拠の一つである畠山である。

畠山氏が、男衾郡畠山から府中方面に向かうには、鎌倉街道を菅谷・大蔵を経て南下するルートが一般的と考えられている。

それでは現在の熊谷市周辺の武士たちが南下する場合はどうだろう。先の下田町遺跡の説明で述べたように、下田町遺跡周辺を通過する東山道武蔵路の支道を使い、河越方面に南下するルートが一番近いのである。しかし、河川交通の利用を考えると、男衾郡畠山周辺や大里郡に分布する武士たちには、和田吉野川を利用する方法が極めて有効な手段ではなかったろうか。そのように考えると両方の交通手段が交差する下田町遺跡が、極めて重要な交通の要所とうか

びあがってくるのである。

畠山氏の本拠のある男衾郡から大里郡一帯は、畠山重能、重忠親子により、婚姻関係・水運支配を媒介とした広域的ネットワークを構築し、周辺の武士の統率を進めていたとされる(清水2012)。

畠山重忠の配下の軍団構成員については、青木文彦により詳しくまとめられている(青木2004)。長野、大串、本田、榛沢、柏原、横山、瀬山、津戸などの武士たちが荒川流域を中心に分布しており、その軍団のなかに屈戸の名をみることができる。屈戸は熊谷市屈戸郷と考えられ、下田町遺跡のすぐ北に位置している。

このような畠山氏の軍団の分布を考えると、下田町遺跡と船木遺跡も、畠山氏の勢力下にあったと考えることもさほど無理なことではない。

つまり下田町遺跡は、畠山氏に関連する武士の物流の拠点として設けられたのではないか。そして、大量に出土する手づくねかわらけの出土は、畠山氏に関連する武士の館が構えられていたことを想像させるのである。

おわりに

武士の本拠成立の背景について、幾つかの発掘調査事例を基に説明を行った。一つが街道上に沿う場所や街道と河川交通の交差する要所に成立した本拠である。もう一つが、大久保遺跡や壱町田遺跡の景観に見られるように谷津の開発を前提とした拠点である。

12世紀の本拠成立期において、下田町遺跡で確認された道路跡のような遺構があれば、確実に交通と流通にかかわる本拠を想定できよう。しかし、それ以外に二つの本拠を明確に峻別する特定の遺構・遺物はなかなかあるものではない。基本的に景観が一番有効なものである。水源と本拠のあり方など類例の集積を経て、分析を進めることが重要なことであろう。

武士本拠の発生期の出土遺物として、手づくねかわらけを取り上げた。手づくねかわらけは、武士たちにとって必要不可欠な道具であった。その手づくねかわらけを、北武蔵では秩父氏がいち早く取り入れた。その手づくねかわらけを大量に出土させた下田町遺跡について、秩父氏の一族である畠山氏とのかかわりについて述べた。この点は少し強引であったのかもしれないが、考古学的資料からみた武士の本拠のあり方について一歩踏み出した結果と思っている。

《注》

（1）小泉郷在家・田注文（『熊谷市史　資料編２　古代・中世　本編』）。大路をはさんで東に16宇、西に11宇の在家を確認できる。鎌倉街道上道の支道（旧東山道武蔵路、上道下野線）が南北に通る両側に在家が立ち並ぶ町場の景観を復元することができる、という。

落合義明などにより小泉の在家について分析が行われている（落合義明2012、藤原良章 2007）。

（2）船木神社に関しては、下記のような文書があることを重田正夫氏から御教示いただいた。

近藤圭造編『瓶城翁遺文』（1915年）。吉見村ができた明治22年頃のもので、船木神社のいわれが記されている。

武蔵国大里郡胄山鎮座船木神社華表柱記、代作

継絶興廃豈可止、況報告于本乎、武蔵国大里郡、有一古里、曰箕輪胄山、後分為二村、今又合為一村、改称曰吉見、箕輪之地、有一丘、曰船木山、船木、古曰之船来、蓋山下通舟楫也、古老相伝、上古无邪志国造兄多毛比命、始治足立之府、一葦而航于此、棄船登丘、俯瞰平原日、美哉邦土、因立祠祀所崇素盞嗚尊而去、船木神社是也、物換星移、祠又頽矣、明治維新、百廃倶挙、世世衣食于此土者、相議修焉、明神来格、霊威倍加、会堀（掘）丘麓、獲鏡玉瓶瓮、是古之地鎮祭器乎、或祠中宝器也、益信口碑之不可誣也、又議琢石立華表、旁起貞質鑱縁記云、

《引用・参考文献》

荒川正夫　2003　「中世城館の成立と地域性」浅野晴樹・齋藤慎一編『中世東国の世界１北関東』高志書院

青木文彦　2004　「江南町史　通史編　上巻」江南町

浅野晴樹　2010　「中世北武蔵の成立期から前期について」『歴史評論』727

浅野晴樹　2015　「下田町遺跡」熊谷市『熊谷市史　資料編一　考古』

飯村　均　2016　「奥羽からみた関東」埼玉県立嵐山史跡の博物館編『検証！古代から中世へ－東国の視点から－』

石川安司　1995　『篠新田遺跡Ⅱ』玉川村埋蔵文化財調査報告第９集

石川安司　2016　「12世紀後半の北武蔵の手づくねかわらけ」鎌倉かわらけ研究会『鎌倉かわらけの再検討』

鵜飼幸雄　1987　「磯並遺跡」茅野市教育委員会

岡陽一郎　1995　「中世居館再考－その性格をめぐって－」五味文彦編『中世の空間を読む』　吉川弘文館

小野正敏　2004　「中世武士の館、その建物系譜と景観」小野正敏・五味文彦・萩原三雄編『中世の系譜』高志書院

落合義明　2012　「秩父平氏の本拠を探る」『秩父平氏の盛衰』勉誠出版

落合義明　2012　「武蔵国と秩父平氏」清水亮編『シリーズ・中世関東武士の研究第７巻　畠山重忠』戎光祥出版

鎌倉佐保　2003　「浅間山大噴火と中世荘園の成立」浅野晴樹・齋藤慎一編『中世東国の世界１北関東』高志書院

鎌倉佐保　2016　「北武蔵の武士の本拠地の成立とその背景」埼玉県立嵐山史跡の博物館編『検証！古代から中世へ－東国の視点から－』

木村茂光　2016　「頼朝と街道」吉川弘文館

熊谷市教育委員会　2013　「熊谷市史　資料編２　古代・中世　本編」熊谷市

恋河内昭彦1998　「向田Ａ・向田Ｂ・壱丁田遺跡」『児玉町文化財調査報告書』第27巻

埼玉県立歴史資料館　1983　「歴史の道調査報告書鎌倉街道上道」

齋藤慎一　2006　「中世武士の城」吉川弘文館

清水　亮　2012　「武蔵国畠山氏論」清水亮編『シリーズ・中世関東武士の研究第７巻　畠山重忠』戎光祥出版

高橋　修　2003　「武蔵国における在地領主の成立とその基盤」浅野晴樹・齋藤慎一編『中世東国の世界１北関東』高志書院

高橋　修　2014　「熊谷氏と熊谷郷をめぐるいくつかの論点」『地方史研究』370号

田代　隆　1995　『下古館遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第166集

田中　信　2003　「武蔵の在地土器供膳具」『中世東国の世界１北関東』高志書院
田中大喜　2015　「新田氏一族の中世」吉川弘文館
野口　実　2002　「豪族武士団の成立」元木泰雄編『日本の時代史７　院政の展開と内乱』吉川弘文館
野口　実　2003　「中世成立期における武蔵国の武士について－秩父平氏を中心に－」岡田清一編『第二期関東武士研究叢書4　河越氏の研究』
林　宏一　1974　「藤原守道の経筒」埼玉県立博物館紀要１
藤原良章　2007　「中世の都市とみちをめぐって」藤原良章・飯村均編『中世の宿と町』高志書院
水口由紀子2016　「武蔵・下野の土器」八重樫忠郎・高橋一樹編『中世武士と土器』高志書院
峰岸純夫　2008　「大蔵合戦と武蔵武士」　埼玉県立嵐山史跡の博物館編『東国武士と中世寺院』高志書院
峰岸純夫・能登健編　1989　「浅間山火山灰と中世の東国」『よみがえる中世５』平凡社
村上伸二　2008　「嵐山町平沢寺と周辺遺跡」峰岸純夫監修『東国武士と中世寺院』高志書院
八重樫忠郎　2014　「平泉と鎌倉の手づくねかわらけ」藤原良章編『中世人の軌跡を歩く』高志書院
八重樫忠郎　2016a　「平泉と鎌倉のかわらけ」鎌倉かわらけ研究会『鎌倉かわらけの再検討』
八重樫忠郎・高橋一樹編　2016b　「中世武士と土器」高志書院

平沢寺跡出土経筒の銘文について

水口由紀子

はじめに

埼玉県内でこれまでに発見された中世成立期の経塚は10例を超えず、本稿で取り上げる平沢寺跡出土経筒のように人名や埋納年月日等がわかるものは数例のみである。また、この経筒に彫られた久安４年(1148)は武蔵国内で確認されている経塚の中では最も古い年号である。その点からも本経筒は貴重な資料といえる。筆者は平成28年１月に嵐山史跡の博物館主催のシンポジウムで「経塚からみた中世成立期」と題する発表の機会を得たが、その準備の過程で平沢寺跡出土経筒の銘文を再度観察する必要性を感じた。本稿ではその銘文について、問題点を整理し、若干の検討を加えてみたい。

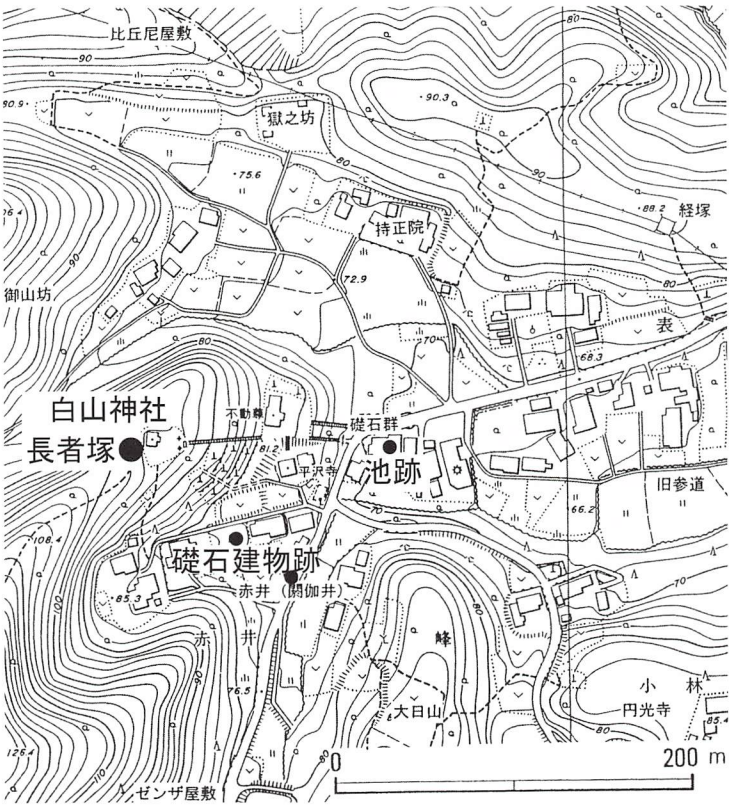
1　平沢寺経塚について

埼玉県比企郡嵐山町平沢に所在する平沢寺境内の白山神社脇にある長者塚から江戸時代の享保年間に１点の経筒が出土したと伝わっている(蘆田編1985)。ここを現在平沢寺経塚と呼んでいる(第１図)。

平沢寺は天台宗の古刹で、『吾妻鏡』に源頼朝によって院主職が安堵された記事がみられる(文治４年(1188)７月条)。『吾妻鏡』全体の中で院主職に関する記事は５か所しかないことから、大澤伸啓氏はこの院主の任命は平沢寺再興のための特別なものではないかと推定している(大澤2008)。

考古学的な調査では、平成８年度に実施された確認調査で、大型の礎石建物(四面堂・阿弥陀堂か)が検出され、翌年の調査では礎石建物の前面で池跡が確認された。これらの調査から平沢寺は浄土式庭園を備えた寺院であったことが判明した(第１図)。

創建時期は不明であるが、大型の礎石建物の一角から柱状高台などの遺物が出土していること、今回検討する久安４年(1148)銘の経筒が出土していることから、12世紀中頃には堂宇の整った寺院であったと推定されている。



第１図　平沢寺跡の概略図（村上2008 より）

2　平沢寺跡出土経筒について

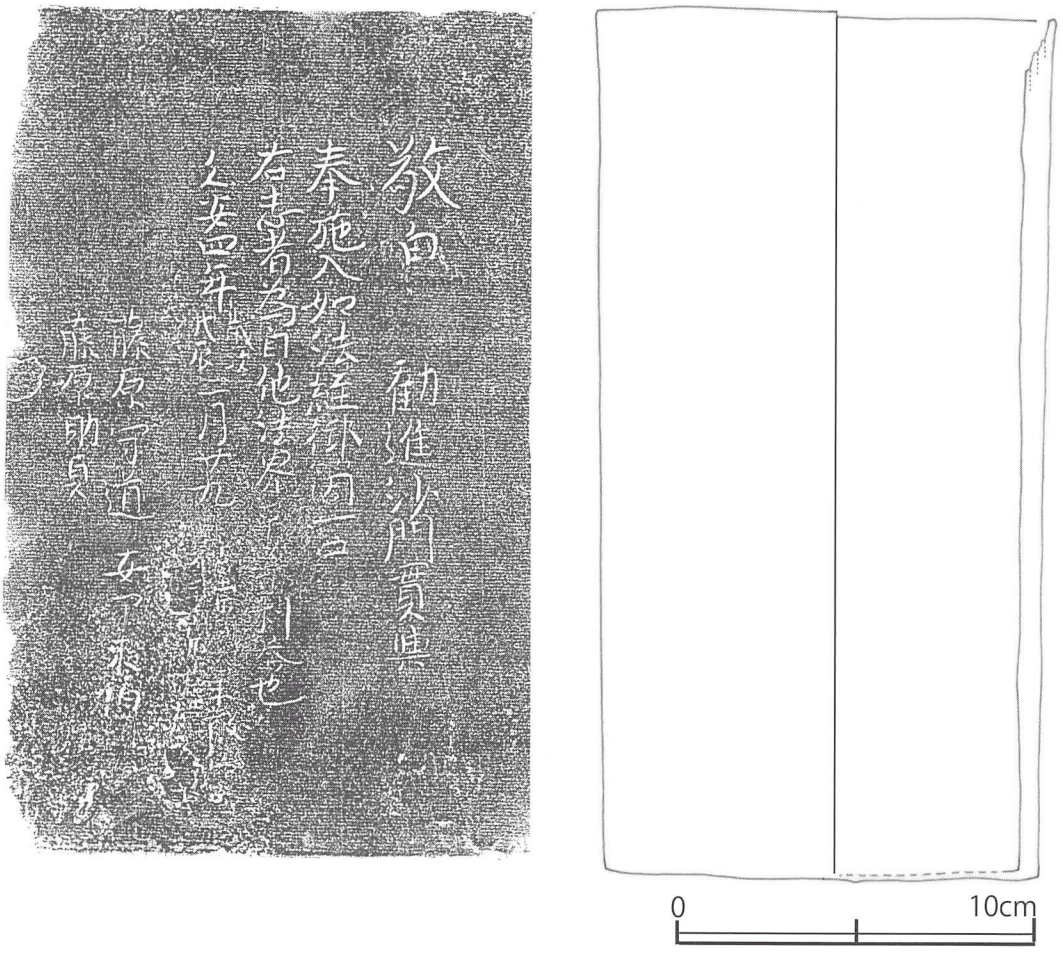
この経筒は鋳銅製で、底から筒身まで一鋳造りである。

底部外面のほぼ中央に湯口(一文字)が残り、ヤスリをかけて整形されているが、凸部として残っているため、底部の安定はやや悪い(写真１)。

大きさは筒身高約24センチ、口径(外径)約12.2センチあり、蓋は失われている。

筒身外面は艶のある青みがかった黒色で、丁寧にミガキ仕上げがなされている。銘文はタガネで陰刻されているが、年月日の下に刻まれた２行書の付近は表面が荒れているため他の文字に比べると判読が困難である(第３図)。この部分は「腐蝕のため不鮮明」とされることが多いが、今回観察し直してみたところ、元々鋳上がりが悪く、ミガキ調整をしても艶が出るほどには仕上げることができなかった部分と考えた方が良いように感じた。

筒身内面は何かをかき出そうしたのか、部分的に削痕が著しい(写真１)。底面に経巻の痕跡等は観察できない。また、口縁部付近(内側)は当初の器表面が失われている部分が多い。経筒の表面に比べると、内面の状況はあまり良くない。



第２図　平沢寺跡出土経筒の拓本・実測図

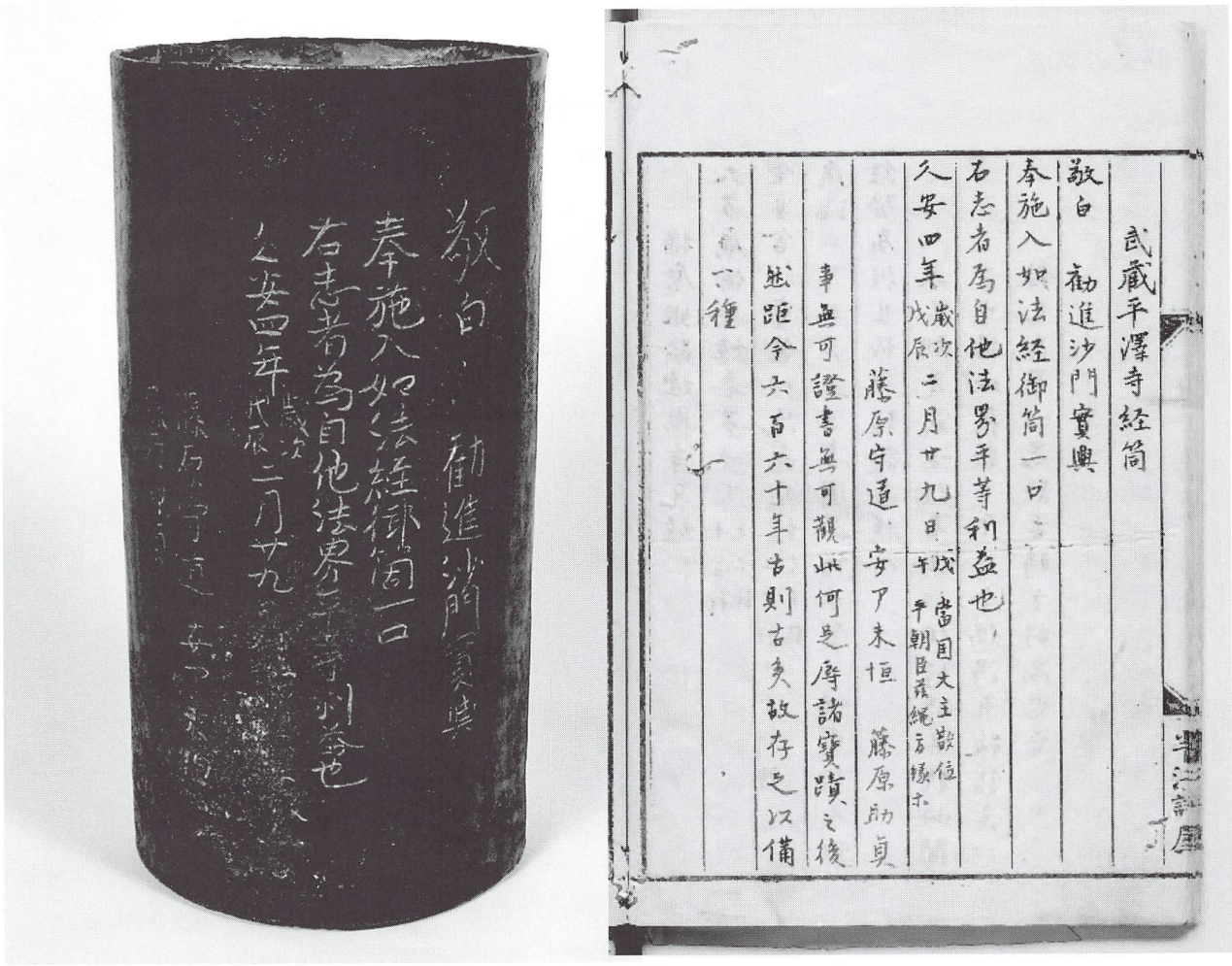


写真１　平沢寺跡出土経筒・『金石私志』武蔵平澤寺経筒部分

3　平沢寺跡出土経筒の銘文について

(1)銘文の構成

銘文は筒身表面に大きく、はっきりとタガネで彫られている。ただし、年月日の下に刻まれた2行は、他の文字が一目で判読できるのとは対照的に、懐中電灯等で光をあてるなどして凝視しないと読むことができない。

はっきりと読める銘文部分には下記の3点が刻まれている。

①この埋経を取り仕切った勧進僧が実與であること

②埋経を行った年月日は久安4年2月29日であること

③経筒製作には藤原守道・安部末恆・藤原助貞の3人の工人が関わったこと

久安4年(1148)は埼玉県内で確認されている経筒の中では最も古い年号である。

文末に並ぶ3人のうち、藤原守道は5口の経筒に名を刻んでいることが知られ、名前の上に「工匠」「大工」と冠する経筒があることから、林宏一氏は経筒製作に関わった工人であると指摘している(林1975)。

上記の①から③については大方の認める、周知の内容となっている。

(2)年月日の下の人名

年月日の下に刻まれた人名については読み、この埋経における役割等について統一した見解には至っていないと考える。本稿をまとめるきっかけは、「なぜ、この部分だけが2行書きなのか」、「年月日の下に刻まれた人物はこの埋経にどう関わったのか」「施主なのか願主なのか」「追刻の可能性はないのか」といういくつかの疑問を抱いたことにあった。

まず、これまでにこの2行の読みを掲載した主要な書籍を年代順に書き出してみたい。

【江戸時代後期】

①『金石私志』(写真2)(文政元年/1818頃)市川寛斎著

當国大主散位

平朝臣茲縄方縁ホ

②『新編武蔵風土記稿』(文化・文政期/1804年～1829年)昌平坂学問所地理局編

當國大主散位

平朝臣茲縄方縁等

【昭和時代】

③『埼玉縣史』埼玉県(昭和6年 1931)

當國大(カカ)主散位

平朝臣茲(カ)縄方縁等

④『埼玉県指定文化財調査報告書　第1集　鋳銅経筒』山口平八(昭和37年 1962)

当国大(カ)主(カ)散位　平朝臣茲縄(カ)方縁等

⑤『武蔵史料銘記集』(昭和41年 1966)稲村坦元編

當國大主散位　平朝臣茲縄芳縁等

⑥「藤原守道の経筒」林宏一（昭和50年 1975）埼玉県立博物館『紀要』１号

當國大主散位

平朝臣茲縄方縁等

⑥『經塚遺文』関秀夫編（昭和60年 1985）

（※凡例中に原文の異体字・俗字は原則として正字に改めたとあり）

当国大主散位

平朝臣茲縄方縁等

⑦『経塚—関東とその周辺—』関秀夫　東京国立博物館（昭和63年 1988）

当国大主散位

平朝臣茲縄方円等

【平成時代】

⑧『新編　埼玉県史　資料編９　中世５ 金石文・奥書』埼玉県（平成元年 1989）

当国大主散位

平朝臣茲縄方縁等

⑨『戦い・祈り・人々のくらし：嵐山町の中世』嵐山町博物誌第５巻　嵐山町（平成９年 1997）

當國大主散位

平朝臣茲縄方縁等

この２行については概ね江戸時代に読まれた文字が今日まで踏襲されてきたようである。

①の『金石私志』（写真２）は市川寛斎によってまとめられたものである。市川寛斎（寛延２年/1749年～文政３年/1820）は群馬県出身の儒学者で、高橋道斎（漢学者・俳人）を義父に持ち、江戸末期の三筆の一人、市川米庵は長男である。『金石私志』は５冊からなり、東日本を中心とした石碑・梵鐘などの銘文を124件納め、考察が加えられている。完成時期ははっきりしないが、狩谷棭斎の『古京遺文』（文政元年/1818）と同じ頃と推定されている。

②の『新編武蔵風土記稿』は昌平坂学問所地理局によって、文化・文政期（1804年から1829年）に編まれた武蔵国の地誌である。

江戸時代中頃の寛政期頃から、金石文の研究が盛んになり、好事家の間で金石文の拓本の収集や交換が行われたようである。その頃には、好事家の間でこの経筒はよく知られたものとなっていたのであろう。

④はこの経筒が県指定文化財になった時の報告書であるが、その中で、当時の埼玉県文化財専門調査委員である山口平八は以下のように述べている。

「銘文のうち、三字は腐蝕して判読し得ないが新編武蔵風土記稿には前記のとおり記されている。当時は判読できたのかもしれない。」

「大」、「主」、「縄」の右横に（カ）と付けられているので、判読できない三字はこれらを指していると考えられる。

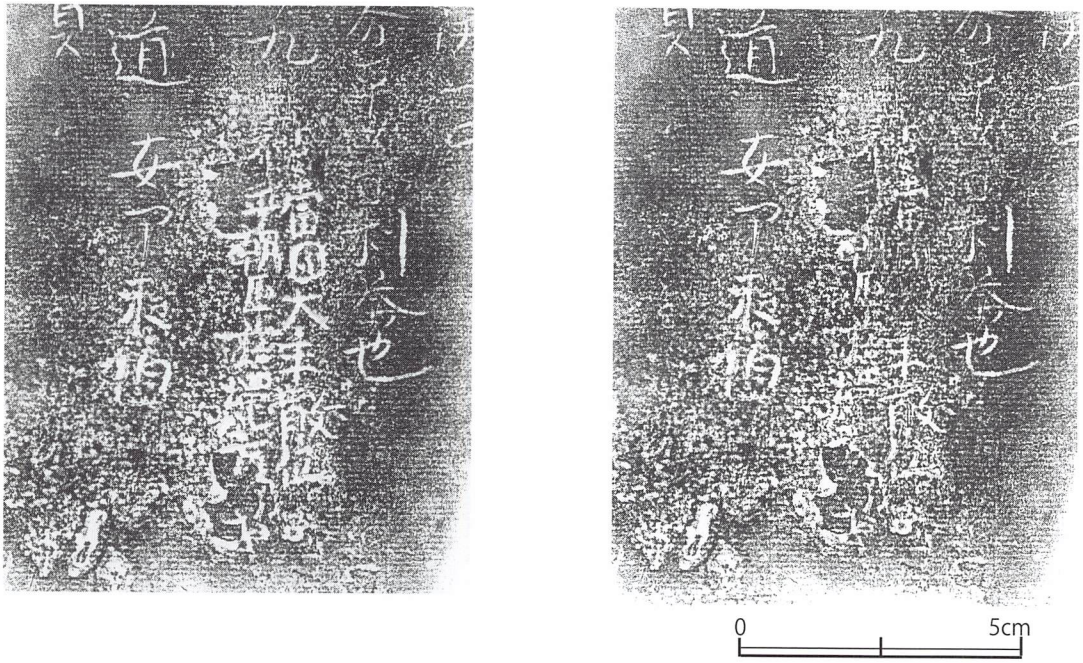
この経筒は昭和29年10月23日に埼玉県指定文化財に指定されているが、その段階ですでにこの２行書きの部分は判読が難しかったことがわかる。

（３）判読が難しい３文字について

今回、銘文を再度観察したところ、字の判読が困難なのは「縄」と「縁」と「等」であった。その部分の拓本を切り取り、図を作成してみた（第３図）。

まず、「縄」であるが、へんの「糸」とつくりの上半の「罒」は見えるが、つくりの下半分がはっきりしない。「縄」とも読めるし、綱の異体字である「緪」、「緪」とも読める。

次の「縁」であるが、部分的にタガネは観察できるが、多くの画数が彫られていたようには思えない。先にあげた⑦の関秀夫氏は「えん」という音を示す、「円」の字をあてている。



第３図　平沢寺跡出土経筒拓本（部分）右：未調整　左：字を強調

敬白　勧進沙門実與
奉施入如法経御筒一口
右志者為自他法界平等利益也
久安四年歳次戊辰二月廿九日戊午　當国大主散位（等）平朝臣茲□方□ホ
藤原守道　安ア未（部）（未？）恆
藤原助貞

第４図　平沢寺跡出土経筒銘文

後で「方縁」についてはくわしく触れるが、古代から中世の文書や金石文に使われる「芳縁」・「方縁」という言葉を知っていた市川寛斎など江戸時代の学者は判読が難しい一字を「えん」と読んだ可能性を指摘しておきたい。

最後の「等」は、①の市川が筆写しているように異体字の「ホ」であろう。

以上のことを踏まえ、本稿では第４図のように銘文を活字化した。

この２行書きの部分は他の文字に比べて、文字の彫り方や書体が安定していない。「国」と「大」の文字は線彫にとどまり、幅を広く、深く彫っていない。次の行の「安部末恆」は「安部」の部分は器表面が平滑に仕上げられているので、文字がきれいに彫られているが、「末恆」の部分は器表面が荒れているため、タガネの入れ方がなめらかでない。タガネの点(打点)の集まりが観察できる。「末」なのか、「未」なのかも判読しがたい。しかし、「散位」や「縄」の部分では他の行と同じ筆跡を観察できるので、追刻ではなく、器面の荒れが彫りや書体の不安定を招いているものと考えたい。

(４)年月日下の内容

次にこの２行書きの部分の内容に入っていきたい。

２行書きの右側は「當国大主散位」とあり、人物の肩書部分にあたる。

「當国」は武蔵国のことである。

「大主」は国司の役職にはみえない言葉であるが、次の「散位」の上に書かれているので、林宏一氏が指摘したように「武蔵国でも相当重要な政治的地位を現すもの」と解釈するのが妥当であろう(林1975)。

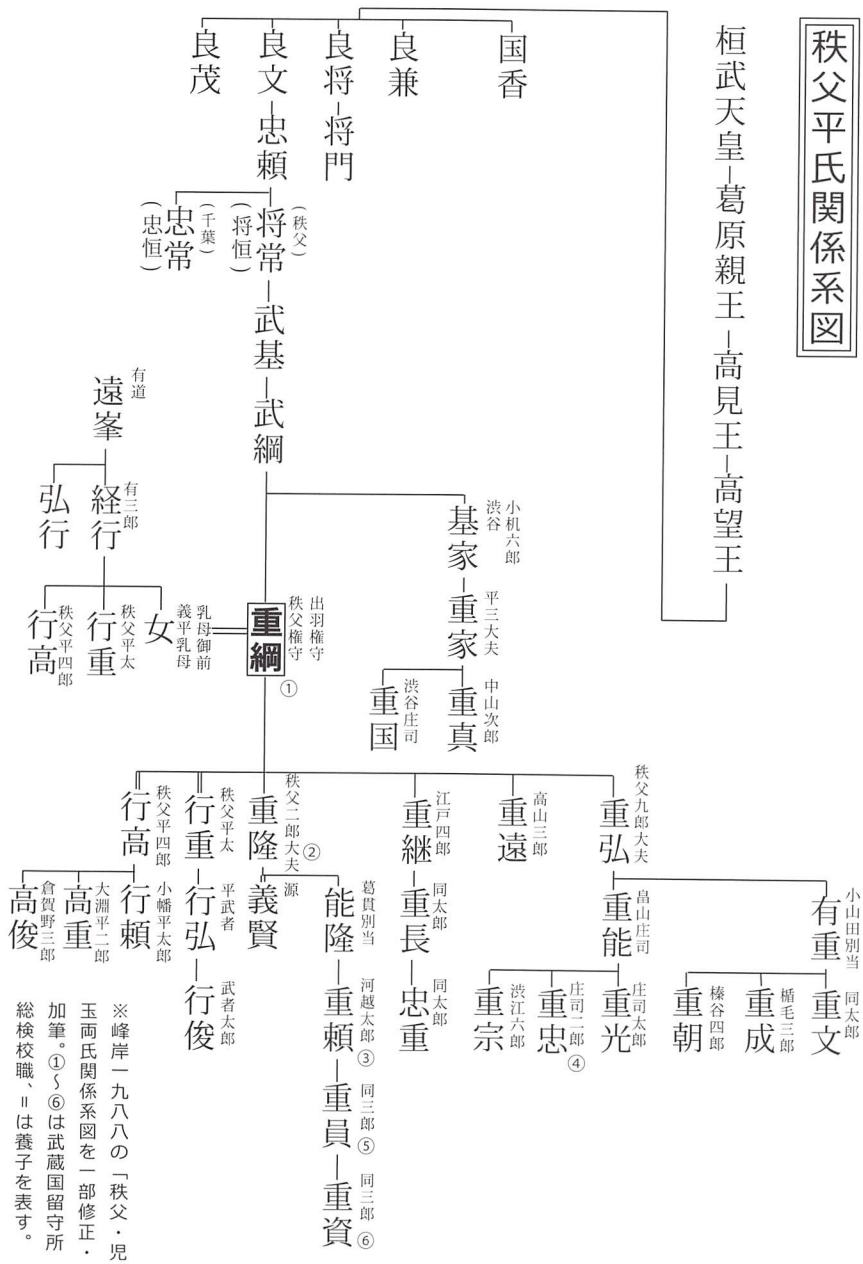
「散位」はとは、令制において、官職についていないが、位階を持つ者のことである。令制の官職の数は限られているため、位階だけを持つ者がどうしても生まれた。ただし、無職ではなく、在京の者は散位寮に常勤で務める(長上)場合や非常勤で交替勤務(番上)にあたったりした。また、地方に在住する者は国衙に番上し、国司の目代(任国に赴かない国司が私的に代官を雇い、実務にあたらせた者)や在庁官人、雑任に任命されたりし、国衙の雑務に従事した。

以上のようにみてくると「當国大主散位」は国衙との関わりが深い人物であったことを示唆していると言えよう。

次に２行書きの左側は「平朝臣茲縄(縄・縄)方縁等」とある。「朝臣」は八色の姓が制定された当初は皇族以外の氏の中では最高位であったが、平安時代には序列の意味はなくなり、公式文書で使用する形式的な表記となった。「平朝臣」はこの人物が平氏の系統の一族であることを示している。

「茲縄」については林宏一氏が「しげつな」と読み、「秩父重綱」の可能性を指摘した(林1975)。桓武平氏の系図によると秩父氏は平良文の流れをくみ、その三代目の武基が秩父別当と称した(第５図)。その孫である「重綱」は秩父権守や出羽権守と称し、『吾妻鏡』では初代の武蔵国留守所総検校職として２か所に登場する(表１)。

残念ながら、重綱は系図や『吾妻鏡』など後世の記録にしか登場せず、重綱の生没年も不明である。系図に登場する子や孫の活動期間から推定すると、11世紀末から12世紀前半に活躍した人物であると考えられる。この経筒が埋納された久安４年の７年後にここから約４km離れた地



第５図　秩父平氏関係系図

で起こった大蔵合戦（久寿２年/1155）に関する記録に重綱は登場しないので、この合戦時には亡くなっていたのであろう。

系図は後世の加筆も多く、どこまでが史実なのかは、慎重に検討を加えなければならない。

例えば、重綱が登場する資料を一覧にしてみたが、愛甲内記大夫殺害事件に関しては貴族の日記と系図の注記が異なっていた。この事件は天永４年（1113）に起きた横山党による相模国代官である愛甲内記大夫の殺害で、横山党の系図では犯人逮捕の宣旨が下っても横山隆兼らは３年間抵抗し、秩父権守重綱・三浦平太郎為次・鎌倉権五郎景政らの責めによってようやく上京したとある。しかし、同時代の複数の貴族の日記には１か月後には犯人が逮捕されたと記されていた。また、犯人逮捕の宣旨は武蔵を除く５か国（常陸・相模・上野・下総・上総）に出されているのに、武蔵国に本拠を構える重綱が名前を連ねているなど、系図の注記が史実と異なる

年　代	西暦	文　献	内　容	詳細
天永３年	1112	中右記（12月23日条）	相模国守藤原宗佐が任国で死亡	
天永４年	1113	長秋記（３月４日条）	内記太郎殺害事件	源為義の代官愛甲内記大夫を殺害した横山党 20 余人に対して「常陸・相模・上野・下総・上総５か国司」に追討宣旨が下される。
永久元年	1113	殿暦（４月４日条）	内記太郎殺害事件（犯人が白河院に引き渡された）	別当為院使来、大衆幷犯人事等也、大夫尉忠盛請取犯人渡院北門云々、件犯人相模守故宗佐目代殺害者云々。
天永４年	1113	長秋記（４月12日条）	内記太郎殺害事件	犯人が追捕された。
		小野氏系図（横山隆兼の注記）	内記太郎殺害事件に際し、秩父権守重綱・三浦平太郎為次・鎌倉権五郎景政らの責めによってようやく上京した。	犯人逮捕の宣旨が下っても横山隆兼らは３年間抵抗。
		桓武平氏系図（重綱の注記）	秩父権守	
		秩父氏系図・豊島氏系図（重綱の注記）	出羽権守、秩父権守	
		中条文書・桓武平氏諸流系図（重綱の注記）	下野権守	
		小野氏系図（横山経兼の娘の注記）	秩父重綱の妻	横山経兼の娘は秩父太郎大夫（重弘）の母でもある。
永治元年	1141	小代代系図（児玉系図）（経行の娘の注記）	乳母母御前 秩父権守平重綱妻也 彼重綱者高望王五男村岡五郎義文五代後胤秩父十郎平武綱嫡男也	秩父重綱の妻・有道経行の娘は源義平の乳母であった。義平は永治元年生まれ
		国史大系尊卑分脈・大田氏系図（大田行方の注記）	母秩父太郎重綱女	
久安４年	1148	平沢寺跡出土経筒	當国大主散位平朝臣茲縄方縁等	
		法然上人伝記	秩父重綱の娘と菅原姓津戸氏の間に生まれたのが津戸三郎為広である	法然上人の弟子として著名な津戸三郎為守（為広の息子）は重綱の孫
嘉禄２年	1226	吾妻鏡（４月10日条）	秩父重綱が初代「武蔵国留守所総検校職」であった	河越重員が先祖秩父出羽守以来代々就いた武蔵国留守所総検校職に補任
寛喜３年	1231	吾妻鏡（４月20日条）	秩父権守重綱の時より、留守所であった	
久寿２年	1155	百練抄	大蔵合戦	８月16日、秩父二郎大夫重隆と源義賢が源義平（義朝の長男）に討たれる。
久寿２年	1155	台記	大蔵合戦	源義賢が兄義朝の子に武蔵国で殺害

表１　秩父重綱関係資料一覧

可能性が高いことを指摘できる。

「方縁」は「芳縁」とも書く。「よい因縁。めでたい縁。」という意味の言葉であるが、経筒や仏像などの銘文に使われる事例からは、「妻」を指す場合が多い。鎌倉時代の事例になるが神奈川県横須賀市浄楽寺の不動明王像と毘沙門天像の像内に納入された月輪形銘札の裏面の銘が参考となるので紹介する。両者の像の納入品の裏面には同じ文が書かれていた。

文治五年己酉三月廿日庚戌　大願主平義盛芳縁小野氏
大仏師興福寺内相応院勾当運慶小仏師十人
執筆金剛仏子尋西浄花房

この年月日の下の一行目はこれらの像の願主が書かれており、「平義盛」は「和田義盛」、「芳縁小野氏」は「小野氏から嫁いだ妻」を意味する。平安から鎌倉時代にかけての女性は名を銘には記さず、このように「○○氏」と出身の氏族名や「△△女」と表記されることが多い。

この銘文について考察した田中義恭氏と副島弘道氏は、像の願主は和田義盛と小野氏出身の妻であるとされた(田中1971・副島2003)。この「小野氏」は横山党小野姓横山氏のことで、現存する三系統の系図(「小野系図」、「横山系図」、「武蔵七党系図」)には横山時重の娘の一人が「和田義盛妻」であったことが記されている(川合2007)。

毘沙門天像内の納入品は昭和34年に久野健らの調査によって発見され、造像時の納入品とされている。文治５年(1189)は奥州合戦(７月～９月)が行われた年で、この像は合戦が始まる前の３月に造立されたものである。

経塚関係での使用例を『經塚遺文』(関1985)に収録された長徳４年(998)から至徳２年(1385)までの470例で探したが、本例の他には下記の一例のみであった。

兵庫県多可郡黒田庄町(現西脇市)石原出土紙本経
(奥書)(墨書)□□□華経第七
承安　年　九月十六日
願主信心大施主散位藤原清包
芳縁日下部氏

「芳縁」と同じく「妻」を表す「縁友」という語もあり、一例収録されていたので紹介する。

静岡県沼津市岡一色三明寺出土(４号経筒)
(筒身)(刻)(双鈎体)
奉施入如法銅筒一
大施主散位藤原貞宗
縁友藤原氏
建久□二日

上記三例とも「芳縁」「縁友」の下に「○○氏」という氏族名が表記されている。

経塚関係で「芳縁」「縁友」の用例が少ないからといって、埋経に関わった女性が少ないということではない。「女施主」「△△氏女」という表記は多く見受けられる。

この経筒の場合は、これら三例と異なり、「方縁」の下に氏族名は表記されず、「等」となっている。「茲縄(綱)」が「秩父重綱」であった場合、その妻は誰であろうか。系図の注記からは「横山経

兼の娘」と「有道経行の娘」の２人の女性が確認できる（表１）。しかし、この銘文には「方縁」の下に氏族名がないので、残念ながら特定できない。

さて、最後に検討しなければならないのは、この年月日下の「当国大主散位　平朝臣茲縄（綱）方縁等」がこの埋経の中でどのような役割だったのか、また、何人とみるかである。

これまでの研究の中でこの点について初めてふれたのは林宏一氏で「当国大主散位平朝臣茲縄とその芳縁の人々が施主となり」としている（林1975）。

年月日の下に人名が書かれる事例は散見され、その役割は勧進僧、願主、施主などさまざまである。この経筒については勧進僧を一行目に書いているので、願主か施主と考えるのが妥当であろう。

ところで、林氏は施主という役割で、さらに夫妻説をとっている。先に例としてあげた浄楽寺の不動明王像と毘沙門天像の像内に納入された月輪形銘札も田中義恭氏らは義盛とその妻という夫妻説をとっている。一行で書かれたこのような銘文は夫妻と解釈するのが通例なのであろうか。

筆者はこの点に疑問を感じている。銘文はその配置、字の大きさを予めきちんと決めて文字を彫っていると考えるからである。二人であれば、その間を一字あけるか、異なる行に記すのではないだろうか。例えば、先に紹介した兵庫県多可郡黒田庄町（現西脇市）石原出土紙本経の奥書は願主が夫婦で、夫である藤原清包が先に、改行して妻である日下部氏出身の女性が記されている。本経筒の末尾２行は三人の名前を列挙しているが、藤原守道と安部末恆
の間は一字あいている。

一行書きの下に二行書きで銘文を入れる事例について『經塚遺文』（関1985）に収録された長徳４年（998）から至徳２年（1385）までの470例の中には、紙本経を除くとわずかに５例しかなかった。

福岡市東区香椎出土銅経筒
（筒身）（刻）
・・・・願文６行省略・・・・
承暦三年歳次己未正
月廿七日香椎宮惣大検校僧
遍祐奉供養 女弟子酒井氏
橘成定

大分県豊後高田市加礼川出土銅箱板
（表）（刻）
・・・・前略・・・・
（准胝観音像）
□銅六百八十領石清水 惣別当
僧遁意

２例ここに書き出したが、香椎出土銅経筒は二名を改行して２行で書いており、加礼川出土銅箱板の方は１名を２行書きしており、１行目は役職、２行目は人名となっている。

清水亮氏は平沢寺経塚出土の経筒を紹介する際、「経筒には「当国大主散位平朝臣茲縄方縁等」（重綱妻・嫡男秩父重隆らであろうか）が願主として刻まれている」としている。さらに、「重綱の死没年は久安４年以前と一応考えられる。そして、横山隆兼が重綱とおおむね同世代であることからみて、重綱は11世紀後半の生まれで、1140年代まで存命していたと推定できる。」と述べている（清水2012）。

筆者は清水氏と同様に、銘文の書き方から、この２行書きの１行目は平朝臣茲縄（綱）にかかる役職部分、２行目は「平朝臣茲縄（綱）の妻等」と読む方の説をとりたい。

まとめにかえて

本稿は「なぜ、この部分だけが２行書きなのか」という素朴な疑問から出発した。

「茲縄(綱)の妻等」という読みにこだわる理由は、「茲縄(綱)」が「重綱」であるとすれば、秩父氏にとって重要な人物である「重綱」を単独の一行で書かず、あえて年月日の下に、他の文字よりも小さく、二行で書かなければならなかったのかという疑問が生じるからである。

限られた字数の銘文の解釈は複数考えられるかと思う。この２行書きを夫妻等とみるか、妻等とみるのかは、清水氏も触れているとおり、重綱の没年にも関わってくる重要な部分であると考える。

もし、「重綱の妻等」と読むことができるなら、２月は旧暦では春の彼岸の月にあたり、亡くなった重綱の法要を妻等が行い、それに付随した埋経と考えることもできる。想像しすぎであろうか。

《引用・参考文献》

蘆田伊人編1985　『新編武蔵風土記稿』雄山閣
大澤伸啓　2008　「武蔵武士と浄土庭園」『東国武士と中世寺院』高志書院
落合義明　2010　「武蔵国と秩父平氏」『実像の中世武士団』高志書院
川合　康　2007　「横山系図と源氏将軍伝承」『中世武家系図の史料論』高志書院
木村茂光　2015　「大蔵合戦前後の河越氏と河越荘」『河越館の会シンポジウム　報告書』
清水　亮　2012　「総論　武蔵国畠山氏論」『畠山重忠』シリーズ中世関東武士の研究第７巻 戎光祥出版
新編武蔵風土記稿刊行会　1957　『新編武蔵風土記稿』
関秀夫編　1985　『經塚遺文』東京堂出版
関　秀夫　1988　『経塚—関東とその周辺—』　東京国立博物館
副島弘道　2003　「浄楽寺　阿弥陀如来及び両脇侍像、不動明王像、毘沙門天」『日本彫刻史基礎資料集成　鎌倉時代　造像銘記編第一巻』中央公論美術出版
田中義恭　1971　「浄楽寺の諸像」『三浦古文化』第10号
野口　実　1997　「中世成立期における武蔵国の武士について」『古代文化論攷』第16号
林　宏一　1975　「藤原守道の経筒」埼玉県立博物館『紀要』１号
水口由紀子2008　「武蔵武士と経塚」『東国武士と中世寺院』高志書院
峰岸純夫　1988　「鎌倉悪源太と大蔵合戦」『三浦古文化』第43号
村上伸二　2008　「嵐山町平沢寺と周辺遺跡」『東国武士と中世寺院』高志書院
山口平八　1962　『埼玉県指定文化財調査報告書　第１集』　埼玉県教育委員会
嵐山町　　1997　『戦い・祈り・人々のくらし　嵐山町の中世』嵐山町博物誌第5巻

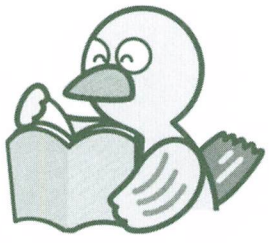
埼玉県立史跡の博物館紀要
第 10 号

平成29年３月24日　発行

発行　埼玉県立さきたま史跡の博物館
〒361-0025　埼玉県行田市大字埼玉4834
TEL048-559-1111

埼玉県立嵐山史跡の博物館
〒355-0221　埼玉県比企郡嵐山町大字菅谷757
TEL0493-62-5652

印刷　巧和工芸印刷株式会社
〒333-0842　埼玉県川口市前川3-25-3



埼玉県のマスコット
コバトン